
月神の祝祭～有明の使者～

悠月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月神の祝祭〜有明の使者〜

【Nコード】

N8358E

【作者名】

悠月

【あらすじ】

セイラとジルフォードの婚姻から数ヶ月、春を迎えるアリオスでは、春告げの祭りが行われる。そこにタハルの一の王子がやってくることになって……（初めてのの方は、月神の祝祭〜月神の娘と夜の王子〜の続編になりますので、そちらを先に読んでください）

時告げの物語

万の群集が頭を垂れる。

天に座す月さえも、揺らめく炎さえも息を止め、彼女を彩るためだけに存在した。

興奮と酩酊を呑みこんで、金色こんじきの眼は未来を垣間見る。

鋭い刃は影を裂き、勝利への道をつくりだす。

その姿を誰もが、眼に焼きつけ、畏怖と共に名を呼ぶだろう。

マルスの妻にして、雷いかずちを友にした娘。

戦女神のエイナと。

『アリオス記』

創の章 エイナの舞より

序章

春の気配が濃くなってきたても、まだ宵には体の縮むような寒さが残っており、暖炉には小さな炎が踊っていた。炎は向かいに座る老人の苦悩を浮き彫りにしようと、その面に深い影をつけた。

「タハルの若造が？」

老人の言葉に、それこそ全身、影のように黒い装束でまとめた男が、壁に体を預けたまま訪ねた。

「ああ、シルトの祭に来るそうだ。この間の式に出れなかったからと。国王の代理としてな」

老人の名はハマナ・ローランド。アリオスにとって最もすこしやしい時期が来るというのに、彼の表情は固い。ハマナは単眼鏡を外すと、目頭を押さえ、深く息をついた。

アリオスの城の中で、一番高齢なハマナには暇な時が無い。二人を忙しなく見ているモーズ・シェリンは着膨れして、普段の二倍ほどになっていた。骨と皮しかないような細い彼には、宵の寒さがこたえるのだ。

「代理ねえ。そろそろタハル王も危ないか」

黒い男―エンは軽い調子で言った。

数年前からタハル王の調子が悪いことは伝わってきていたのだ。今更、騒ぎ立てることでもない。

タハル王には二人の王子がいる。王子はあまり仲が良くないらしい。本人同士がというよりも、それぞれの後ろについているおえらいが

たが。

今回来るのは、一の王子。

名をナジュールというが、ここにいる誰も会ったことがない。

アリオスとタハルの間にあるローラ山脈は互いの行き来を困難にしているのだ。

「今のうちに、対外政策を固めておこうって魂胆か」

それとも、弟に対するけん制か。

どちらにしても面倒なことになりそうだと、三者それぞれのため息をついた。

アリオスに友好的な今の王が倒れるとなると、次の王は誰なのか見極める必要がある。

ササン大陸の歴史で見ると、両国が友好的な状態を保っていたのはごく僅かだ。

「最近、ジキルドのばあさまの話もほとんど聞かねえな。死んじまつたか」

魔女だとされているジキルドの女王も外に出てこなくなって久しい。もともと常宵の森にぐるりと周りを囲まれたジキルドは秘密主義の国だったか。

「うちの先代にタハル王、それにばあさま。……ピンシャンしてんのは、リユーデリスクだけか」

「リユーデリスクは元気そうだが、もともと政治に対する興味は薄いだろう？ 今、事実上エスタニアを仕切っているのは、宰相殿とユリザ王女じゃないのかい」

ぼそりというシェリンの言葉にハマナも頷いた。

「アキナスか」

その一言で、エンがエスタニアの宰相、アキナス・ユゴをどう思っているのか分るほど苦々しい声だった。

「エスタニアもそろそろ、新しい王を迎える時が来たんだろうよ」

一斉に代替わりが始まる。

「大陸に新しい時代が来るということか」

月のめぐるのはなんと早いことか。先ほどまで戦いあぐね、やっと新しいアリオスを築いたと思ったのに、手に入れた平穩は、さらに大きなうねりへと呑みこまれていく。

「せいぜい、取り残されんようにしたいものだな」

静まり返った部屋にドアを叩く音が響く。

「何だ」

誰も近づけるなと言っておいたので、自然と声が強くなる。瞳に浮かぶ陰は来訪者の姿を認めると、ふっと消えた。

薄暗い廊下でも、僅かな光を得てその人物の髪は輝いた。

銀の煌きは、この国の王のものだ。

「これは、これは、ルーファ王」

「よしてくれ。エン。貴方に頭を下げられるほど、偉くなったつもりは無いのでね」

慇懃な礼がわざとだと知っているので、ルーファの調子も軽い。

「どうか、なされましたか？」

立ち上がりかける、ハマナを制してルーファは封筒を三人の前に掲げると少々困ったように微笑んだ。

「このようなものが届いた」

その封筒には、これからのことを予見するかのように、不気味に笑う髑髏の横顔が刻印されていた。

序章 2

世界は夜に包まれていた。

月すら姿を隠した残酷な世界では、ただビョウビョウと吹きすさぶ風の音ばかりする。

夜の闇より、なお濃い影に包まれた絶壁の隙間に入り込んだ風が、亡者の鳴き声のごとく辺りに木霊した。

四方から迫り来る怖ろしげな声は旅人を恐怖へと誘い、本当に恐れるべき物を隠してしまう。

今宵の犠牲者は唯二人。

すでに、気でも振れたのか、この暗がりにも明かり一つ持っていない。風の音に紛れ、獣の音がする。

ぐるぐると喉を鳴らし、これから起こる宴に舌なめずりする音だ。合図が下るのを、今か今かと待ちわびる。

ぎりぎりまで、張り詰めた緊張は獲物によってぷつりと絶たれた。

「やあっと、会えるね」

闇夜を切り裂いて響くのは、明るく歓喜に満ちた声だった。

ちよっとばかりの舌足らずさが、その場に似合わぬ可愛らしさをもし出す。

けれど、血に飢えた獣にそんなものが通じるはずもなく、声が終わるのが合図とばかりに鋭い爪が地を削る。

五つの不吉な影が宙を飛ぶ。

剛毛におおわれた体は固く、むき出しの爪も牙も一掻きで人間を死に至らしめるのは簡単なほど鋭かった。

「ぼくらの、おひいさま。素敵な人だといいいねえ」

次の瞬間、いくつかの絶叫が響くと重たいものが地に落ちる音がした。

苦しげに砂をかく音と外に漏れない悲鳴が重なり合う。

片肺だけつぶされた獣たちが、逃げ去ることも出来ずにあえいでいるのだ。

「うふふ。思わず殺したくなるような素敵な人だったら、どうしよう。ああ、でもおそんな人ならぜひ会いたいしい。ねえ、困っちゃうね」

賛同は返ってこなかった。

もう一人の視線は、片肺を奪われた獣たちに向けられていた。互いの姿も確認できないような闇の中、視線は違うことなく獣の姿を舐めた後、今しがた一刀のもと五つの脅威を振り払った人物に向った。

「お前は、どうして無益なことを好むのか」

なぜ、わざと生かす必要があるのか。

揺るぐことなどなさそうな固い声は、そう言っている様にも聞こえた。

空気を裂く、小さな音が連続で響くとあえぎはぴたりと止んだ。

「だって、ぼくはユザだもん」

血の匂いを纏って闇が晒った。

「君だって、そうだろう?」

さくりと砂を踏みしめれば、簡単にくるぶしまで埋まってしまつた。

半時も放置していれば、すべての物が砂に覆われてしまうだろう。問いの答えも放置して先に進む相方に、慌てて駆け寄り追い越した。

「ねえ、どんな人だと思う？」

「計画に支障がなければどんな人物でも関係ない」

足の長さが全く違うので、小走りをしていないとあっという間に追いつかれてしまう。

後ろ向きで砂の上を走るといふ芸当を少年は、なんなくやってのけた。

「むう。前から思ってたんだけど、君って冷たいぞ。この冷酷人間め。薄情人間め！ ああ！ ユザにぴったりじゃないか……」

自分の言葉に落ち込んでしまった少年は、砂の上に膝をつく。さめざめと泣きまねまでしていたのだが、相方の足が自分の体を越えるところに来ると、立ち上がり走り出す。

「ぼくが先に会ったからね！」

どちらの脳裏にも、もはや息絶えた獣のことなど、一欠けらも残ってはいなかった。

第一章：見放された地より

優しい夢を見た。

母がいて、ハナがいて、ジニスの皆が周りを囲んで笑っている。きっと、アリオスの気候がジニスに近づいてきたからだろう。

最近は、雪もすっかり溶けてしまつて、残念に思っていたのだが、こんなに穏やかな気持ちで目覚めるのも悪くない。

長椅子から起き上がると、セイラは机の上におかれている小さな箱へと手を伸ばした。

セイラは宝物入れと言っているのだが、大概の人は中を見てガラクタいれだと言うだろう。

その中から、セイラがつまみ出したのは玉が五つ連なつた髪結い紐だ。

玉といっても、燻つた色の小さな石には大して価値がなさそうだが、価値は無くても、セイラにとっては母から貰つた大事なものだ。

よくこの紐で髪を結ってもらつたのだが、不器用な彼女に任せるといつも鳥の巣のよな頭にされたものだ。

奇跡的にハナのお許しが出たこともあつたが。

今ではセイラのほうが、格段にうまく結べる。

優しい夢の残滓と一緒に結び上げて、セイラは書庫へと足に向けた。

「シルトの祭？」

カナンの朝の挨拶に盛り込まれた、聞いた事のない単語を拾い上げて、セイラは首をかしげた。

最近、城内がほわほわと落ち着き無い空気に包まれているのは、どうやら間違いなかったようだ。

シルトとは確かアリオスに咲く花の名前ではなかったか。

「花のお祭りなの？」

「春告げの祭りですね。長い冬が終わって、春が来たことを祝うのですよ。シルトは雪が溶けて、一番に咲く花ですから、春告げの花として選ばれたのでしょね」

ゆっくりと流れる水のようなカナンの声は、耳障りがよい。

目じりに刻まれた皺が更に彼の微笑をやわらかく見せおり、こちらの頬もついつい緩む。

セイラとハナはカナンの部屋で彼の話を聞きながら、朝食を取るのが日課となっていた。

「祭りは七日続きます。最終日の夜には春乙女の舞が披露されるのですよ」

「春乙女の舞って？」

「選ばれた女性が、丘の上の石舞台で舞うのが慣例です。エイナの舞と言ったほうがいいでしょうか。去年はテラーナ様が舞われましたよ」

「へえ、今年は誰が選ばれるのかな？」

知っている女性の名を片っ端から上げていくセイラの隣で、ハナは小さくため息をつく。それに合わせ、ハナの黒髪が揺れる。セイラがお揃いにしようというので、今日は珍しく一本に結っている。今、アリオスの話題性一番の女性といえば、セイラしかない。

「私はハナを推すぞ！ 春告げなんてぴったり」

「推さないで下さい」

そうして、こうも自分のことを考えに入れないのだろうとぴしゃりと言い放ったハナに、セイラは肩を落とす。

本当にぴったりだと思っていた様子だ。
ふてくされて、行儀悪くお茶をすするセイラに、また強い言葉が降ってくる。

「最近、ハナはご機嫌斜めなんだよ。カナン、気の静まるお茶でも入れてあげて」

「別に機嫌が悪いわけではありませんけど」

言葉を切ったハナの視線を辿ると、扉があり、その向こうには書庫がある。

その書庫には珍しいことに、侍女が姿を現すようになった。
彼女たちは別に本を借りようとやってくるのではない。

お目当てはジルフォードだ。

カナンの部屋にも何度か「ジン様はおいですか？」と彼女たちが尋ねてきた。

セイラとハナの姿を見つけると、そそくさと去っていくのだが、立ち代りに別の侍女がやってくる。

式の一件より、ジルフォードの人氣が上がってきたのだ。

都でというよりも、地方、はたまた国外でその不思議な姿の噂が広まり、勝手に肖像画が作られる有様だ。

中には似ても似つかないものもあるが、式で顔を見せたほんの少しの間でよく描けたと思うほど素晴らしい出来のものもある。

ジヨゼが買ってきたものを、セイラもありがたく頂いた。

ジルフォードの出生を知っている古参のものは、やはり気味悪いといつて近づかないものもいるが、直接知らない若い娘には恐れが薄いらしい。

セイラがジンは神の名だと公言したものだから、彼女たちもそう呼ぶようになった。

「納得いきませんわ」

その様子をセイラは喜んでいたのだが、あまりの変わりようにハナは呆氣に取られた。態度の変わらないマキナたちを嬉しく思いながらも、苦笑しながら仕方ないといった彼女の態度は釈然としない。

「国外の人間から褒められれば、嬉しいもんだよ。すごい人なのね。仲良くしとこつて思っても仕方ないさ。それにね、ジルフォード殿には専属の侍女がいらないだろう。誰か付となると、待遇も世間の目もかわってくるものさ。ダリア様がセイラ殿が子供を生まない限り、残っている王族はジルフォード殿だけだからね。早いもの勝ちってことさ」

誰か専属になるのが特別だということは分るのだが、この手の平を返したような扱いはなんなのか。

あからさまに侍女にして欲しいと言ってくる者もいるし、それなり

に力のある後見人を持つているものは、その後見人からさりげなく圧力のこもった手紙が送られてくるのだ。

「ジンが気に入られてるのらしいんじゃない？」

「これは、気に入られているというか……」

「それにね、ジンの侍女になる子がいるとして、よっぽど理解してくれるんじゃないと続かないんじゃないかな」

「……まあ、そうかもしれないわね」

ハナの遠くなりかけた意識は、つい先日的光景へと続いていた。みつちりと物の詰まった、もはや部屋とはいえない様な空間に。

「あれには、私驚きましたわ。あまりにもギャップが……」

初めて訪れたジルフォードの部屋。

何も無いような殺風景なところを想像していたのだが……。

詰まっているのだ。物が積んであるなんて可愛いものじゃない。何が言われれば、もう全てがとしか言いようがない。

本はもちろんのこと、変なお面やら大量の椅子やら。

それを集めたのがカナンだと知って、彼の収集能力に驚かされた。

セイラとハナには知る由もないが、某単眼鏡のおえらいさんに有無を言わせず、優しくリストを渡したのだろう。

それ以上に驚いたのは、それだけ物があるのに、一切生活臭がないことだ。

「わたしはおもちゃ箱みたいで好きだけど」

楽しそうと取るか、奇妙と取るか個々の好みだろうが、午前中に掃除を終わらせなさいとも言われたら発狂しそうだ。

その状況で、何処に何があるのか把握出来ているようなのが、怖ろしい。

もう一つの、問題は彼の偏食なのだ。

今までお茶を飲むことはあっても、食事まで一緒にとっていなかったので分らなかったが、かなり偏食だ。と言うより生命維持に関わる食事に興味がなかったのだろう。カナンの豊富なレシピは涙ぐましい努力の結果なのだ。

朝食をカナンの部屋で取るようになったのは、朝ぐらいバランスの取れた食事をさせようとの魂胆なのだ。

「それそろ、下火になってくるのではないでしょうか」

二人のやり取りを苦笑しながら見ていたカナンの言葉に、顔をあげる。

「何かあるのですか？」

「祭りに合わせて、タハルから使者が来るので、そちらの対応に追われることになるでしょうから」

「タハル！」

「タハルですか？」

二人の驚きように微笑みながら、カナンはそうですよと付け加えた。タハルは近いようで、とても遠い国だ。地図上では隣なのに、情報が全く入ってこない。見放された地と呼ばれていることから、漠然と環境の厳しい場所どということぐらいしか知られていない。

勇猛果敢なエスタニアの商人たちも天を突くようなローラ山脈を越えるのは難しく、アリオスを迂回してタハルを目指していたのだが、その労力に見合ったものが無いと知ると、物流ルートの確保を諦めた。

タハルを訪れた冒険家も何故こんなところに国を興したのかと著書に記したほどだ。

「他国の使者ですか……」

ハナの重いため息の理由が分らない。

「グランさんに何を言われるか」

今まではしゃいでいたセイラの表情が音をたてて固まった。

テラーナの侍女頭であるグランは最年長の侍女だ。

七十近いとの噂だが、背筋はピンと伸び、無駄のない動きは侍女の鑑とも称えられているが、何しろ厳しい。

彼女は最近、セイラの礼儀作法の師として抜擢されたのだ。

「固まっている暇なんて、ありませんよ。セイラ様。今日は朝からグランさんとのアリオス王家にふさわしい女性になるための授業その27ですわ」

「……うん。その27ね……その何まであるのかな」

「たぶん、セイラ様がアリオス王家にふさわしい女性になるまでですわ」

「……そう」

ハナはふらりと立ち上がったセイラを気の毒に思いつつ、見送った。それほど嫌でも、セイラのためになることだ。行かなくていいとは言ってあげられない。

セイラはカナンの部屋をでると、体に力を込めた。

「ジンー！ちゃんと朝ごはん食べるんだよ」

今日は一緒に食べる事が出来ないのは残念だが、遅れていくとグラ
ンが怖い。

下に下りてきさえすれば、カナンが抗いようもない笑顔できっと朝
ごはんを食べさせてくれるだろう。

「よし」と頷いて書庫を出ようとすると、後ろで高い声がした。

「やはり、ジン様はここにいらっしゃるんですね」

侍女の服を纏った女性は、すらっとした肢体の美人だった。

きつちりと結われた黒髪は皇かで、彼女からはふわりと甘い香りが
する。

セイラより頭一個分ほど背の高い彼女は、挑戦的にセイラを見下ろ
した。

「うん。上にいるよ」

にっこりと微笑めば、彼女は少し驚いたようだ。

「……そう、ですか」

詰まりながら、そう言った時にはセイラはもう駆け出した後だった。

第一章：見放された地より2

毎度思うのだが、城というのはどうしてこう広いのだろう。すでに掃除の行き届いた廊下を走りながらセイラはふうとため息をつく。

遊んでいる時にはいいのだが、緊急事態のときなどこの広さはわずらわしいだけだろうと思うのだが。

質実堅固を信条とするアリオスの城がエスタニアに比べて、随分と質素で小さい事を知らないセイラは、そんなことを思いながら、足を速める。

あと、三分後には階段の傍を通り抜けなければならない。

時間に正確なケイトが調練から戻ってきて、スカートの裾も気にせず走る姿を見られたらきつとお小言が始まってしまうから。

予定通り階段を通り抜け、幾人かの侍女たちに驚かれながらも、どうにかグランの待つ部屋の前までたどり着いた。

指定された部屋は東の端にある。書庫とは真反対の場所だ。

「おはようございます！」

「5点の減点」

弾む息の勢いで元気に挨拶すると、固い声が振ってくる。

部屋の中央で陣取っている女性は、きらりと瞳を光らせた。

背筋はピンと伸び、侍女服には皺一つない。

年相応の皺が顔にあるものに、それさえも彼女の美しさだった。

けれど、凍えた湖のような色の瞳と引き結んだ薄い唇が彼女に厳しさを与えている。

「扉を開けるときは静かにと申し上げたはずです。ここは調練の場

ではありません」

「口の端を少し上げ、微笑みながら挨拶を」

変わらず言葉を重ねたセイラに更に冷たい色が突き刺さる。

「分かっているのならば、そうしてください」

分かっているのだが出来ないのだ。

どうして元気にはようございますではいけないのかさっぱり分からない。

「もうすぐお祭りがあるみたい……ですね」

「この間、申し上げたはずですが。まさか、聞いておられなかったのですか？このグランがアリオスの歴史と共に教えたはずです」

挨拶の話から逃げようと口にした話題は、明らかに選択ミスだった。たらりと冷や汗が垂れてくる。

「えーああ、うん。そうだった……かなあ」

確かにグランの授業で、アリオスの歴史について教えてもらったことがある。

最初こそ、面白がって聞いていたのだが、グランは古文書を読んでいるように小難しい話をするのだ。

そんな話を何時間もされれば、何時の間にか意識が飛んでいると言っ寸法だ。

「今年の春乙女はセイラ様ですから、それまでにみっちり仕込み

ます。覚悟なさってください」

「へっ？……ええ、ちょっと待ってよ。そんなの聞いてないよ！」

いくらなんでも、そんな重要なことを聞き逃す事なんてしないだろう。

それよりもみっちりって何だ。

今だって十分絞られているのに。

そんなセイラの心の声など聞こえないグランは、今日の教材を机の上に並べながら無情にも言った。

「今、申し上げました。言葉遣い10点減点」

いったい今、何点残っているのだろう。

いや、きっとグランのなかでセイラの評価は地を乗り越し、深く深く穴を掘って落ちていっているだろう。

「エイナの舞はテラーナ様に教えを請うのがよいでしょう」

「ああ、そっか。去年はテラーナが舞った、ん、ですね？」

「ええ、それは、もう美しく最高の舞でございました」

グランの瞳は急に孫を見る祖母の瞳のように優しくなった。

生まれたときか、ずっとテラーナ付きの彼女は、家族の誰よりも長い時間をテラーナと過ごしたに違いない。

「今日は、タハルの話をいたしましょう」

「祭りにはタハルの使者がくるんだっけ」

「ええ」

グランが取り出したのは、十分に凶器になりえるほど分厚い本だった。

全てが黒いその本は、不気味なものを閉じ込めた箱のようにも見える。

「どれほどタハルについてご存知ですか」

「うーん。ローラ山脈をはさんでアリオスともエスタニアとも隣国になるってことぐらいかな。砂漠があるって聞いた。見放された地って呼ばれてるらしいね」

砂だけしかない広い空間をセイラは思い浮かべることが出来ない。植物さえ生えない土地とはどんなところだろうか。

「そうです。かつて、ローラ山脈の向こうは流刑地でした。」

「流刑地？」

「罪を犯し、見放された人間が最後にたどり着く場所でした。」

「……国があるんだよね？」

「ええ、もともとあの地に住んでいたのか、何処から移り住んだのか、それとも遠い昔に罪人たちが興したのか分かりませんが」

グランが捲ったページも真黒だった。

「苛烈な環境の中、動物は強く、残虐に進化いたしました。それに打ち勝つことを覚えた人間もまた、限りなく残虐です。獣の皮をまとい、血を好む野蛮な民です。お心を許してはなりません」

まるで、仇のある相手の話をするようにグランの声は強かった。

「……今は仲が良いんじゃないの？　行き来が出来るんでしょう？」

「ここ数年は友好状態ですが、いつ攻められるか分かったものではありません」

飢えた土地からは、いつも肥沃な土地を寄越せと怨嗟の声が聞こえるのだという。

ローラ山脈さえなければ、もっと頻繁に攻め込まれていただろう。

「タハルの使者はどうやってアリオスまで来るのかな？　山脈越えてくるの？」

春といっても、高い山脈の上には雪が残っており、容易に越して行くことは出来ないだろう。

「ノースの道来るのでしょうか。ローラ山脈に開けられた坑道ですが、けして通いやすいものではありませんけれど」

ノースの道を抜けるには、日の差さない洞窟のような道を三日三晩進まなければならないという。

一度迷えば、死者の国。そんな言葉もあるそうだ。

「よいですか。セイラ様。彼らには礼儀正しく接しなさい。どんな

に、心地よい言葉を吐かれても必要以上に近づいてはいけません」

再三詰め寄られ、しぶしぶ頷いたものの、セイラには納得できなかった。

まだ会ってもいない相手を悪く思うことが出来ないのだ。

「その本には何が書いてあるの？」

グラン強いのは、黒い本から生まれるに違いない。
本を指差すと、グランは本と閉じ、表紙を撫でた。

「知らなければならぬことの全てです」

言い切ったグランにはどこか自慢げだった。

第一章：見放された地より3

「お茶がはいりましたわ」

ルーファがダリアの存在に気づいたのは、優しい声と共に、机の上にお茶の準備が出来てからだった。少々驚き気味の夫にふっと笑いかける。

「ルーファ様、いくら声をかけてもちつとも気づいてくれないのですもの」

わざと口を尖らせて見ても、ダリアの表情は柔らかで包みこむように広がった香りからは気遣いを感じ取れる。

「ああ、悪かった」

この香りは一番好むお茶の香りだ。微笑を返しペンを置く。

机の上の書類は増えるばかりで減りそうにもない。いつもの執務に加えて、タハルからの使者対策に追われていることだ。

「さあ、お茶にしましょう。国をより良くするのが貴方の務めでも、一日一回のお茶の時間を貰ったって悪くないはずだわ」

最近では息抜きだった調練にさえ出れない始末だ。

四六時中、部屋に籠っていれば疲れもたまってくるだろうに、ダリアに同意するように頷くルーファの顔からは疲労の影はみえない。それが、ダリアには少し悔しい。

「私、ここに居ますのよ」

いきなりの言葉にルーファは目を瞬いた。
まだ、部屋に入ってきたことに気づかなかったことを言っているの
だろうか。

「もう少し、弱音を吐いてくれても良いと思います」

ルーファは良くも悪くも、外から変化が見えない。
連れ添ってやっと分かるようになった小さな変化も、優しい笑みで
隠してしまうのだ。

「ダリアには感謝してるよ。こうしてお茶を忘れずに入れてくれて
いる」

「これは、私の趣味みたいなものですもの」

趣味にしては上出来すぎる。一緒に並べられた菓子は、専属の菓子
職人すら唸らせるほどの出来栄えだ。

「サンディア殿のことも任せきりだ」

前王妃でありジルフォードの母である彼女は、長い間城から遠く離
れた離宮に幽閉を余儀なくされていた。最近になって、ようやく城
近くに移されたが、新たな争いの種になることを恐れ、彼女のこと
は未だに伏されたままだ。

知っているのはルーファにダリア、そして元帥だけ。
自然にサンディアのことはダリアがするようになった。
今では、時々お忍びで出かけてお茶をしたりしている。

「私がそうしたいと言いましたの」

「お邪魔だったかな」

ひよこりと顔を出した男にルーファはため息一つ。

「ジョゼ、入るときはノックをしろと」

「いいところに来てくれました！」

ルーファとは反対に満面の笑みを浮かべたダリアは机の上の書類の半分を持ち上げると、ジョゼの腕へと押し付ける。とっさに出してしまった腕の上にはずっしりと重い紙の束。

「おい！何だよ」

「ルーファ様の仕事が多いのは兄様がサボっているせいもあるのよ。だからそれは兄様の仕事。今日中にお願いますわ」

「国王の仕事が俺に務まるわけないだろう」

「軍事のことなら兄様にも分かるはずです。最低限、ルーファ様しかできないものと、そうでないものを分けることくらい出来ますでしょう」

来るんじゃないかったと悔やんでみても後の祭り。

「こんなことになるなら、嬢ちゃんのところでも行けばよかったな」
がしがしと頭を掻くジョゼにもお茶を注ぎながら、ダリアが笑みを浮かべた。

「残念ですね。セイラはグランさんとの講義だから居ませんわ」

「聞いたかったんだが、何であのばあさんをつけたんだ？ あれグラド一族の出だろうが」

「優秀な一族だろう」

「……そりゃ、そうだな。」

グラド一族といえば、廃れた地方貴族だ。

けれど裏を知っているものには意味が違ってくる。

情報収集の能力に長けた彼らは、闇の仕事を主に行っているのだ。

釈然としないといった声を出しながらも、ジョゼはわざわざ書類をかき分けていく。

一見無造作に散らかしているように見えて、ちゃんと項目ごとに分かれていた。

「んなもん、下の連中で出来るだろうに」

悪態をつきながら弾かれた書類は、差し戻される事が現実となった。その書類の多いこと。

「頭の切れる奴が欲しいもんだな」

軍事強化で進んできたために、筋力は有り余っているのに、頭が追いつかない現状がある。

なまじハマナや少数の頭脳派がすごいだけに、そこに頼りきりで次代が育っていない。

アリオスにとっては頭の痛い問題だった。

「そうだな。体制の見直しも考えなくてはいけないな」

夫を休ませるための判断だったのに、雲行きが怪しくなってきた。先ほどまで和やかお茶会モードだったのに、今や深刻な顔をしたルーファの姿がある。

ほんの十分ほどでもいいのだ。

少しでも執務を忘れてくつろげる時間を作ってあげたいのにとダリアは窓の外に目をやった。

「もうすぐシルトの祭が始まりますわね」

窓の外に見える街は祭りを意識して装いを変え始めていた。

「今回は嬢ちゃんが大役務めるんだろ」

大役と言えば最終日の春乙女の舞だ。

「ええ、どんな舞になるか楽しみね」

いつのまにか和やかモードが帰ってきて、たつぷり注がれたお茶も冷める前に口をつけてもらえた。

「貴女……どうして出来ないの？」

震える声で問いかけるテラーナに自分こそ知りたいとセイラは深く深くため息をついた。

エイナの舞を覚えるべく、早々にグランに部屋を追い出されたセイラは、現在テラーナとマキナに囲まれて、床の上に伏せていた。

部屋を出る際に、それまでの言動を全て見ていたグランに二十点の減点を申し付けられた上に、テラーナからの手厳しい意見が押し掛かり、地面に埋まってしまいそうだ。

「まあ、まあ初めてなんだ。出来なくて当たり前さ」

生まれたときからエイナの舞が身近にあるアリオスの住人ではないのだから、仕方がない。

テラーナにもそれは理解できるのだが。

「それにしても……」

普段の手合わせで見せる優雅な動きがどうして、出来ないのだ。あれが出来るなら楽勝だろうと考えていたのに。

「まあ、これが基本の動きだから。後は好きに踊っていいから」

「……はい」

これまた悩みの種なのだ。

エイナの舞を基本として独自の舞を考えろなど、今の状態のセイラに出来るはずがない。

「いっておきますけど、舞にはそれなりの衣装がありますのよ。そ

「このところ、よく理解しておいてください」

「うゝ」

頭を抱えて唸り始めたセイラをマキナは気の毒そうに見つめたが、テラーナは容赦なかった。

「使者がつくと、そちらへの挨拶やら何やらで練習する時間なんてありませんからね。それまでに完璧になさってください」

今回、タハルの使者は式に出る事が出来なかった侘びも含めてやってくるのだ。

対応には当事者であるセイラも必ず狩り出される。

「……はい」

これからの日々を考えてセイラは長いため息をついた。

第一章：見放された地より4

もしたため息を具現化することができたとしたら、黒くてモヤモヤしたものがカナンの部屋の床一面に積もっているに違いない。

重いそれは、箒で掃いたところで部屋から軽快に出て行くことはないだろう。

そんな鬱々としたものの生産者である、セイラは机に額をつけぐりと伸びている。

光りの弾けていた亜麻色の髪も艶を失ったかのように沈んでいる。

「大丈夫ですか？」

「…うん」

カナンの心配げな声が振りそそぐと、優しさが沁みて涙が出てきそうだ。

グラン、テラーナ、マキナにみつちりしごかれ始めて、早数週間。体の節々も痛い、頭も痛い。なんとか基本の舞だけは合格をもらえたのがせめてもの救いだろうか。

「もうすぐ来るんだよね？」

「……ええ、二、三日中には到着されるとか」

「ふう」

嬉しいのだ。

間違いなくタハルの使者がやってくることは嬉しいのだ。どんな人物が来るのか楽しみでもあるし、向こうの生活はどうなのか等聞き

たいことは山ほどあるのだが、言葉を発そうとするたびにグランの顔がちらつくのだ。

ついでに減点という幻聴も聞こえてくる。

けれど、使者を目の前にしたらいつも通りの口の聞き方をして、怒られるんだろぅなと未来予想図でき上がった。

目を瞑っていると、頭の上を優しい感触が行き来する。

この感触がセイラは好きだ。

気遣うような優しい手つきは、どこか壊れ物を触るようにおっかなびっくりでくすぐったい。

「大丈夫だよ。ジン。怒られるの慣れてるし」

そんなことに慣れないで下さいとハナの視線を感じるが口は出してこなかった。

この四人で顔を合わせるのも久しぶりの事だった。

目を開けると、髪越しにオレンジ色が目に入る。

見る角度のよって色を変えるジルフォードの瞳が、今たたえているのは、消える前、一層輝く火の粉のような色。新しい瞳の色に鬱々したものなど吹き飛んでしまう。

「こんな角度で見上げる事なんてなかったもんね」

ジルフォードが体を引けば、すぐさま消えてしまう。ちょっともったいないようで、それがごく自然のようで。

「ありがとう。もう大丈夫」

頭を上げて、ちゃんと座りなおす。何とかなるものだ。げんきんなもので、嬉しい事があるとそう思えてしまう。

「ジンは大丈夫？」

環境が変化したのはジルフォードも同じ事だ。

今まで、政治の世界など関係ない場所にいたのに、否応がなくなりだされることになり、ジルフォードのことを邪険にしていた相手が手のひらを返したように近づいてくる。

最初はジルフォードが他人と関わりを持つ事はよいことだと思っていたけれど、ジルフォードの居場所を聞きに群がってこられると辟易するのだ。

彼らの顔に見えたのは、どうにか利用してやろうという思惑ばかりだったからだ。

「大丈夫」

「よかった」

最近のジルフォードは表情が豊かになってきたと思う。

薄い唇が僅かばかりの孤を描くことが多くなった。

初めて見る人物にとっては、とても笑顔と呼べるものではなかったが、カナンにとっては嬉しい変化だった。

一人の侍女がカナンの部屋の扉を見つめていた。

ジルフォードが入ってから一刻ほどの時が経っている。

中ではきつと馬鹿らしいほど和やかな空気が流れているのだろうと彼女は思った。

式の時の二人を見て、まるでおままごとみたいな夫婦だと苦笑が漏れた。

きつと夫婦と言う感覚も持ち合わせていないのではないだろうか。

「そんなこと関係ないわね」

ジルフォードの人気だって関係ない。

関係あるのは彼が王族である事だけ。

今まで、居ないように扱われながらも、その存在はひどく目立つものだった。

其処に近づけば、必ず怪しまれる。

けれど、今や目立つ存在でありながら、近づくのは前よりずっと容易になった。

一刻も早く、そんな焦りを笑顔でごまかして、彼女は自分の仕事に戻っていった。

第一章：見放された地より5

薄汚れた一団が王城へ続く大通りを進んでいく。

灰色のマントは叩けば、盛大に砂埃が上がりそうだ。

彼らが乗っている馬だけは、体格も良く美しい毛並みをしているので、余計に乗り手をみすばらしく見せている。

頭から足先まで、すっかり覆った姿では、相手がどんな人物なのか察する事ができずに、人々に不安を抱かせる。

蹄の轟きと嘶きに子どもたちは振るえ、母親の影に隠れていく。

大人たちは、何者なのか見極めようと視線を送るのだが、恐ろしいものと視線が交わってしまう前にと自然に瞼が下がってしまう。

時折、風に煽られてマントの裾が大きく揺らぐとその下には、見たことの無い獣の毛皮がのぞくのだ。

祭りに合わせて陽気な音楽が流れる中、それはとても異様な光景に思われた。

門番の誰何の声が上がった時、誰もがほっと息をついたと言うのに、頼みの綱の兵士はさっと慌てて頭を下げると門を開けてしまったのだ。

何故。

どうしてあんなものを通したのだ。

そんな声が聞こえてきそうだったが、まさか門番の年若い兵士も、目の前を通りすぎていく不気味な一団が自国の国王とタハルの国王の署名が入った手紙を持っているなどと思っていなかっただろう。バクバクと鳴る心臓は本当に通してよかったのだろうか、その手紙を見た後でも思っているからだ。

彼の心音が落ちついたのは、元帥であるハマナ・ローランドがその一団に深々と頭を下げてからだった。

「意外にこじんまりと来たんだね」

セイラがつい漏らしてしまった呟きは、広い空間に溶けて相手までは届かなかっただろう。

アリオスのお偉い方がひしめく広間に導かれてきたのはたったの五人だけだった。

隣国からの使者、しかも王子が来るとのことだったため、もっと仰々しく団体で来るのかと思っていたが違ったらしい。

まだ、誰もマントを脱いでいないのだ。

目深に被ったマントのせいで表情が読み取れない。

不敬であろう。

そんな想いが幾人もの内で燦ったが、それを声にすることはなかった。

この対面が重要な意味を持つ事を誰もが理解していたからだ。

王座から続く階段の前で足を止めると、先頭を歩いていた背の高い人物がフードを取り払った

現れたのは強い色をもつ青年だ。

彼の瞳とうねった髪は全ての光りを吸収しているかのような濃い黒。夜の深淵。

それが意思を持ち人の形を象る。

耳を彩る銀と胸の前に掲げられた手の甲に施された刺青の赤が異彩を放っていた。

「アロー」

伸びやかでいて、不思議な音を持つ声が広間の中を走った。

よく通る声は、部屋の隅に隠れるようにしている侍女の下にまで届いたであろう。

けれど誰も、言葉の意味を取りかねた。

「アロ？」

反応を返したのはセイラだけだ。

おそらくタハルの挨拶なのだろうと感じ取ったセイラは、同じように相手に手の甲を向けてみた。

青年はセイラを視界にいれると表情を緩めた。

「タハルの挨拶は通じないかと思いましたが、通じたようですね」

にかつと笑われると、口元から真白な歯がのぞき、小麦色肌とのコントラストが目には焼きついた。

はつきりとした目鼻立ちと強烈な色は、アリオスにはない美しさで見た目を引くのだが、柔らかな言葉が踏み込んでくる不快感を与えない。

青年の挨拶はタハルに悪いイメージしか持っていなかった人物に少なからず、そのイメージを緩和させる効果をもたらせた。

「お初にお目にかかります。アリオスの王よ。我が名はナジュール。この度はタハルの我侭をお聞き入れくださったこと感謝いたします」

「アリオスにとってもタハルとの友好が深まるのは歓迎すべきことです。祭が終わりまで、ゆるりとおくつろぎください」

「そうさせていただきます」

それぞれの口上を述べ終えた後に、ナジュールは先ほど挨拶を返してくれたセイラへと視線を向けた。

「そなたがセイラ殿？」

「うっ、はい」

頷こうとするとグランの顔が脳裏にちらつき、思わず言葉使いを正す。

もちろんグランのいう微笑も加えようとするのだが頬が引きつりそうだ。

「そして、ジルフォード殿」

セイラの隣に佇む青年の姿をみて、何故かナジュールは小さなため息をついた。

他国の王子を目の前にしてため息をつく理由など分からない。僅かに含まれた落胆が、広間の雰囲気微妙に変化させる。

「ジルフォード殿は隠された王子、しかも魔物だと聞いていたものだから」

今度は確実に空気が変化した。

疑心を含みながらも友好的だった場が、魔物の一言でぴりりと緊張した。

今まで和やかに微笑んでいた夫の雰囲気が僅かばかり揺らいだのをダリアは肌で感じていた。

ナジュールの付き人も場の雰囲気が変化したのを感じ取って、そつと彼の手を引いたが、彼には通じない。

「ウーフのような人物なのか、ホーンのような人物なのかと楽しみにしていたのですが」

数瞬、空気が弛緩した。

緊張が解けてというよりも、一瞬それを作り出していた人々のうちに空白が生じたのだ。

えっ？

何のことだ？

ウーフ？

誰それ？

誰一人として言葉には出さなかったが、同じような困惑が人々のうちに沸いたのを見ることが出来た。

「ホーンはさすがに無理だね」

やはり、ついていけたのはセイラだけだ。

隣のジルフォードを見上げると、そんな一言を漏らした。

「！ セイラ殿はヘインズの剣を知っているのですか？」

「もちろん」

ヘインズの剣は子供向けの冒険物語。

ウーフやホーンはその中に出てくる魔物の名前なのだ。

一度は読んだ事のある夢物語。しかし、誰もこんな場所で聞くとは思っていないため、その意味にたどり着けない。

ホーンは巨大な角を有した魔物のことだが、それを思い出せたのは幾人いたか。

「なんて素晴らしい！」

「うわっ！」

抱きつかれた。

あまつさえ、そのまま一回転させられたのだ。

長身のナジュールに抱きかかえられると当然、足は宙に浮き、振り回されれば遠心力でぴんと伸びる。

幸いな事に誰にもぶつからずにすんだのだが、突風のような抱擁が終わった後には、微妙な空気が流れていた。

「このようところでヘインズ談義が出来るなんて！」

しんと静まり返った広間にナジュールの嬉しそうな笑いだけが響いていた。

どうやら、この人物まわりの空気を読まないらしい。

おかしくなった場の雰囲気をおさめたのは賢明な国王だった。

「今日はお疲れでしょう。部屋に案内させます」

その一言に、救われたのはナジュールの背後でうろたえていた付き人ばかりではないだろう。

緩んだ雰囲気は元に戻ることはなく、人々は気の抜けたような足取りで広間を後にした。

第一章：見放された地より6

一旦はお開きになったものの、ナジュールはセイラについてきた。そこにお目付け役のケイトまで加わって、ぞろりぞろりと書庫までの道のりを歩く。

短い道中の話は、専らホーンやウーフなどの話だったが、ケイトには口を出す事ができなかった。

今や、書庫の中にはセイラ、ジルフォード、ハナ、カナンのいつもの四人に加え、ケイト、ナジュールと彼の連れてきた少年が席に着いていた。

さすがにこの人数で入るには、カナンの部屋は狭いが、身を寄せれば、全員が座ることが出来る。

カナンは隣国の王子が突然現れたことに驚いたようだったが、快く迎え入れ、お茶の準備をしている。

一人機嫌が悪いのは、先ほどの抱擁を見てしまったハナだ。

大きな瞳を怒らせてナジュールを睨んでいたのだが、「ハナ殿は情熱的ですな」と意味不明の言葉を吐かれたのでそっぽを向いた。

マントを取り払ったタハルの二人は、奇妙な格好だった。

彼らが腰に巻いているのは見たことの無い動物のもので、その毛並みは固い。

恐々と触るハナに矢ぐらいならば貫通しないと言ったナジュールの言葉は、あながち嘘ではなさそうだ。

少年のほうは色鮮やかな布を頭に幾重に巻いている。

その瞳の色からナジュールと同じような漆黒の髪だと思うのだが、布の下からその色がのぞく事はない。

やはり目を引くのは、手の甲にほど施された刺青と、耳から長く垂れる銀色の球体だ。

耳飾にしては長いそれは魔除けなのだと言った。

球体の中には香が入っており、その香りで悪しきものが近づくのを妨げるのだと。

「へえ」

確かに見せてもらえば、透かし彫りされた球体の中には何か入っており、不思議な香りがする。

エスタニアで魔除けと言えば玉の飾りだ。その輝きによって魔を祓う。

「国によって、いろいろ違うん、ですね」

先ほどから変なところで言葉を切るセイラにナジュールは笑った。

「話しやすい言葉でかまいませんよ。セイラ殿。ここにいる皆が内緒にしておけば、怖い師に怒られなくてよいでしょう?」

漆黒の瞳はお見通しとばかりに細められた。にわか仕込みでは鍍金がかがれるのは時間の問題だ。

「なら、普通に話すよ。だから、ナジュール殿も普通に話して」

「……普通にですか?」

「そう、タハルで話してるみたいに」

その言葉に、ナジュールは頬を掻いた。

「どこか不自然な点が?」

「うっん。完璧だったよ」

彼はセイラのように分かりやすい反応ではない。広間にいるときも、その態度はごく自然に見えた。完璧だからこそ、どこか違和感がついて回るのだ。

「でも、なんか似合わないなあと思って。だから、私なんかとは比べ物にならないくらい頑張って覚えこんだって感じがするのかなあって。それに、怖い師って言ったでしょう？ナジュール殿にもいたんじゃないかなと思ってね」

「これは、まいった」

敬語をなくすと、途端にイメージにあってくる。

「タハルは野蛮人という噂が広がっているから、少しでも払拭しようとして頑張ってみたんだが」

「挨拶できる人は野蛮人じゃないよ」

「ありがとう。セイラ殿。それでは、互いに師がいないところでは普段どおりにいこう」

セイラは同意するように微笑んだ。

「さっきのアロってやつがタハルの挨拶？」

「そうだよ」

ナジュールはさきほどやったように、胸の前で相手に手の甲が向く

ように掲げて見せた。

「こうやって、武器を何も持っていないことを相手に教え、自分が何者なのかを伝えるんだ」

「……何者って？」

「この刺青で分かる」

ナジユールの両の甲には同じ模様が彫られてある。

中央に二重の円があり、回りを不思議な文様が埋めていく。

「赤は一の者。二の者からは他の色を使う」

「一の者？」

「……ああ、そうだな一の者は、最初の子どもの事だ」

「第一子ということですか？」

ハナの言葉にナジユールが頷いた。

「周りの文様で族名を表し、真ん中の模様が己のことを示す。ナジユールは太陽という意味だ。だから、私のは太陽の印だ」

ナジユールは背後に控えていた少年をよんだ。

「ルルドだ。お前のも見せてあげるといい」

ルルドと呼ばれた少年は、しゅしゅながら、セイラの前に手の甲を

曝した。

彼は、どうやらナジュールほど、この空間に馴染んでいない。
彼の刺青は鮮やかな青だった。

「ルルドは慈しみの水だから、水の印だ」

中央の印は縦線が二本。

「へえー面白いな」

身の乗り出して目を輝かせるセイラに、くすりと笑う。

「そうだな。セイラ殿なら、何がよいか。そういえば、エスタニアの姫君は女神の名を貰うそうだな」

「そうだよ。私はリーズ。月の女神の名をもらったの」

「月か。月なら単の円だ」

其処まで言うと、何かを思い出したかのようにはっと顔を上げる。

「なんと、セイラ殿は月の女神か。わが国では、月は太陽と夫婦だ」

セイラの手を取り、白い歯を輝かすナジュールにハナはピクリと米神をひくつかせた。

結婚している女性の手を掴みーしかも目の前には夫がいるー自分たちは夫婦だと嬉々として言っているようなものだ。

あくまで神話上の話だが。

そして、へえーそうなんだと納得しているセイラにもちよつとばかり腹が立つ。

何度も言っているようだが、自覚というものを持って欲しい。

「月のセイラ殿、太陽の私。ぴったりだな」

飛びつかんばかりのナジジュールの前に割り込み、さっとセイラを横に押しやった。

「確か、タハルの神話では月は太陽の傲慢振りに愛想をつかして、いつも反対の世界にいたのでしたわよね？」

こうして昼と夜が出来たのだ。

これはカナンに教えてもらったことだ。

「……いや、ハナ殿は博識だな。このような女性がタハルにいくれると嬉しいんだが。なあルルド」

「嫌ですよ。こんな煩い女」

「うつうつるさい……」

ふるりと揺れるハナの肩を宥めながら、ケイトは口元を引きつらせながら、ようやく言葉を出した。

「おっ落ち着きましようね。ハナ殿」

「落ち着いていますわ」

そっついながらも、差し出す為に掲げたコップは怒りのためにゆらゆらと揺れている。

「とてもにぎやかですね」

無言でやりとりを見つけていたジルフォードはカナンの言葉に、やはり無言で頷いた。

第一章：見放された地より7

「ん〜うまあい」

たつぷりと蜜のかかったパンにかぶりつきながら、少年は至福のひと時を過ごしていた。

「そうだろ。そうだろう」

とろけそうな少年の笑顔に店主も笑みを浮かべた。

「お前さん、どこから来たんだい？ 見かけない格好だね」

少年が纏っているのは緻密な文様が織り込まれた布地のようだ。

袖口がでろんと広く、腰に巻いているひも状のもので結んでいるだけのように見えるのに、どれほどうまいと暴れても肌蹴てしまわないのが不思議だった。

「ずっとね、北からきたんだよう」

「ローラ山脈のあたりかい？」

「まあ、そんなところ」

少年は二つ目をかぶりつきながら気の無い返事をした。

口いっぱいに広がる幸せな甘さに夢中なのだ。

あの山脈の近くには少数民族が点在していると聞く。

アリオスが豊かになるに従っていろいろな場所から人が集まってくるようになった。

ここも随分とにぎやかに、そして色彩豊かになったと思う。

店主は感慨深げに見せの外に視線をやった。

特別に早く咲かせたシルトの花が街中を彩って陽気な歌が流れてくる。

戦ばかりだったころとは大違いだ。

このまま、この平穏がずっと続けばいいと思う。

「そっぴゃあ、変なのが城に入っぴゃあ」

小さな弦きを漏らして、店主は呼ぶ声に応じて奥へと引ッ込んでいく。

「変なのだッて」

きゃはりと少年は高い声で笑ッ。

口の端に蜜を垂らしながら、変なのが入ッていた城門を見つめていた。

おかしげに細まる瞳は、無邪気な残酷さを秘めていた。

「彼らも無事に着いたみたいだね。さあて、これからどうやって接触しようかな」

「時期が来れば、おのずと会えよう」

少年は先ほどからパンにも手をつけず、話にも乗ッてこない女にぶッと頬を膨らませて見せた。

「ぼくはねえ、早く会いたいんだよう。時期ッていつ来るのさ!」

「そのときになれば、分かる。勝手をして城に忍び込んだりするな」

「むっ！」

まさにやろつとしていたことを当てられてしまい、少年は口を引き結んだ。

駄々をこねる子どもの顔だ。

「必ず会える。それが運命だからな」

まだ納得しかねる少年を置いて、女は席をたった。

第二章：白き花の告げるもの

日差しは暖かく、眠気を誘うのに十分だった。

それに合わせてか、城が纏う空気も緊張を解き、どこかゆるりとした時間が流れていた。

静かな執務室に無遠慮に響いたのは、ジョゼ・アイベリーが盛大にもらったあくびの音だった。

水分の多くなった瞳を瞬くと、クッションに頭を沈ませる。

ここ数日、拍子抜けするほど何もない。

隣国からの使者はたった五人であるし、しかも一人は少年だ。

その人数で何かを起こすには、あまりにも無謀であり、またアリオスの軍は無能ではない。

そして彼らはタハルの印象を裏返すほど皆、礼儀正しく穏やかだ。

隣国の王子様はその物腰のせい、目を引く容貌のせい、侍女にも貴族にも受け入れられ、小競り合いさえない日々だ。

国境付近も小康状態が続き、今のところ早急な心配事はないと言えた。

キースは何があるか分からんと気を張り詰めているが、そういつことは必要になった時にすればよいというのがジョゼの考えだ。

従って、今現在、アリオスの片翼である月影の將軍は、とても暇だった。

「お前はいつたい何がしたいんだ？」

王の執務室の長椅子にでろんと伸びている將軍にルーファはため息をついた。

「いやあ、お疲れの国王様に癒しを贈ろうかと」

「お前の寝姿などで癒されるか」

軽い無駄口が張り詰めていたものをふっと和らげて良く。

ジョゼが、どうどうと居座るようになってから、仕事がいやしくなつたのは、上げられる書類がきちんと項目別に分かれているからだ。今も、寝転がりながらも、紙を仕分ける音がしている。

彼がここにいる分、將軍の仕事のしわ寄せがどこかに出ているような気がしてならないのだが、ルーファにとってはありがたい。

後で、月影の連中に労いを送っておこう。

「またか！」

ジョゼが投げつけた紙の束が床の上を這う。

庶民の一家族の生活を一ヶ月は優に支えられるほどの贅を詰め込んだ煌びやか紙に書かれた内容はどれもくだらないものばかりだ。

ご機嫌伺いに、やんわりとだが地位を上げるとの要求。

どうでもいいことなのに、高級な封筒とそれに施された印に圧倒され、おし抱くように恭しく届けられる。

「そう言うな」

ルーファは床に広がる手紙を拾い上げる。

どんなにくだらないご機嫌伺いにも目を通し、有力貴族との絆を保つのも彼の仕事なのだ。

「ジルフォードの侍女か」

手紙の内容は弟の侍女に自分の娘をつけろとのことだった。最近、こういった内容の手紙が多い。

「本人が望むならば、かまわないのだがな。」

それとなく聞いたこともあるのだが、「いらない」の一言で片付いてしまった。

今現在、侍女たちに追い回される状況も、表情にこそ出さないが好んではないようだ。

「ジルフォードで思い出した」

「何だ？」

「頭の切れるやつが少ないって話さ」

その言葉について片眉を上げ、席に着く。

ジヨゼの言いたいことはよく分かる。

ジルフォードを執政の場所に。

今まで此方の都合で、関わらせないように、それどころか存在しないものにしようとしていたのに、都合が悪くなると此方の世界に来いと。

国王としての立場ならば対応は決まっている。
けれど、兄としては？

「お前の言いたいことも分かるさ。けどな、アイツだっていつまでもふらふらしてるわけにはいかないだろう？ 月影に誘っていいって言うんならそうするぜ」

「……そうだな」

想うのは二人とも同じだ。

自分の望む道があるかせてやりたいと。

落ちた視線は、自然に手元にあつた手紙の文字を追った。

意味など頭には入ってこない。けれど、ある人物の名に目が釘付けとなった。

「……サンディア殿」

「ん？ 元王妃様がどうした？」

『最近サンディア様のご機嫌はどうでございましょう。』

優美な細い線が踊っている。

全てを知って嘲笑うかのように。

サンディアが西の離宮から離れたところは、ほとんどの人間が知らないはずなのに。

「そういや、ダリアはどうしたんだ」

いつもならば、必ず口を出してくるはずの妹がいないことを不思議に思つて視線を巡らせる。

「ヤガラへ」

「ヤガラ？ なんでまた、そんなところに」

大貴族でも気軽に立ち入ることの出来ない場所。

そこは、さらに秘密を飲み込んだ。

今、まさにそこへと向っている妻の身を案じて、ルーファは強くまぶたを閉じた。

第二章：白き花の告げるもの2

田畑は雪解け水によって潤い、新緑が大地を覆っていく。

その中を軽やかに駆けていく馬の乗り手が若い女性だとしても農作業に勤しむ人々を感嘆させることは出来なかった。

この辺りでは女性どころか小さな子どもまで馬を駆る事を知っているのだ。

もしも風にたなびく髪が見事な金色だと知れば、ほうとため息をつかすことが出来たかもしれないが、今はフードの下に隠されている。ここはタナトスから程近いヤガラと呼ばれる地域だ。

唯一民に自治が認められた特殊な場でもあった。

その環境を壊さないようにと極力貴族の介入を許さず、許可を取らねばいかなる大貴族も中に入ることが出来ない。

「なにやら騒がしいですね」

先を駆けていたマキナが馬を止め、前方を睨みつける。

ヤガラに入れる唯一の門の前には派手な馬車が止まっており、その従者と門番とか激しく言い争っているのだ。

「仲裁して来ましょう。ダリア様はここでお待ちください」

さほど珍しい光景でもない。

入れないとなるとどうしても入りたくなるようだ。

今や、ヤガラへ入る許可を持つ事が一種のステータスになりつつある。

私はどこそこの大貴族であるぞ。

さっさと許可をおろさんか。

そんな会話はよく聞かれることだ。

「何か？」

いきなり現れた女性に従者は、門番を罵倒するのを止めたが、何者か見極めようと無遠慮な視線がマキナを嘗め回す。

腰に帯びた剣に一瞬ひるむものの、相手の格好は平服だ。

己の主になど顔向けも出来ないほど下級のものだと認識すると、途端に嘲るような視線を送る。

「この愚か者が、私の主はヤガラに入ることが出来んなどと戯言をほざくのよ」

「許可はお持ちではないと」

マキナの言葉にぶんぶんと勢いよく門番は首を振る。

まだ年若い青年だ。

懸命に己の職務を全うしようとしたのだろう。

顔は真っ赤で、言い負かされそうだった悔しさが滲んでいる。

「許可？ そんなものこの馬車を見れば分かるだろう？ ほら、見る。お前らのような下級階層でも知っている紋章だろう。リグンプル様は大貴族様だぞ」

馬車に描かれた紋章は確かに有名なものだった。

「その大貴族様がヤガラに何用で？」

マキナの声は冷ややかだった。

ヤガラは長閑で美しい場所に違いはなかったが、それ以外に貴族の目を引きそつなものは無い。

「ここに居られる高貴な方とお話をなさるんだ」

「高貴？」

マキナは眉根を寄せる。

従者の言い方では、その相手が己の主と同等かそれ以上の位の人物だと言っているように聞こえるのだ。

確かにリグンブル家といえば名の通った貴族だ。

それ以上の貴族がヤガラの中に入れば、自ずと噂が立つだろうに、マキナの耳には入っていない。

「だから、言っているだろう！ 今日ヤガラの中に貴族は一人も居ないって！ あんたらの勘違いさ。さっさと帰っておくれよ」

「いいや、一人だけ居られるさ」

「お帰りください」

従者の言葉に重なるように、柔らかな声がした。

マキナの横にもう一頭、馬が並ぶ。

ダリアの顔は半ばフードに隠れていったため、何者かまで従者には分からなかった。

「大貴族と名乗るならば、それ相応の礼儀がありましょう」

声音は優しいながらも、凜とした強さがあり従者は思わず口を閉じ、馬車の中の人物を窺うように後方に目を向けると、馬車の天井が二度なった。出せとの合図だ。

従者は何か言いたげに二三度、口を開閉したが何も言わずに鞭を振

るった。

「顔も見せないとは」

もうもうと煙を上げて去っていく馬車に苦笑を一つ零し、門へと馬頭をめぐらせる。

先ほどの青年はどこかほっとした佇まいだ。

「ありがとうございます。ほんとにあいつ等、なかなか帰んなくて貴族だからっていばりくさって」

「ごめんなさいね」

沈む声に青年ははっと顔を上げた。
ダリアとて貴族の出だ。

「いえっダリア様が悪いんじゃないし、……貴族だって悪い人ばかりじゃないって知ってるけど」

同じくらい、それ以上にひどいことをする貴族も知っていると青年の顔は物語っていた。

青年は曇った表情を笑顔に変えると、さっと門を開けた。

「サンディア殿に会いにきたのでしょう。さあ、どうぞ」

ヤガラの人々には彼女の立場を伝えてはいなかった。

薄々感づいているものもいたようだが、彼女は好意的に受け入れられているようだ。

青年に礼を言いつつ、二人は馬を走らせた。

「情報が漏れてしまったみたいね」
「そのようですね」

従者の言う高貴な方とは、おそらくサンディアのことだ。
ヤガラの中にいる以上容易には接触することができないだろうが、
今日のように強引なものがくれば、どうなるかわからない。
それを防ごうと見張りを多くすれば、ここにいると宣言しているよ
うなものだ。

「対策を考えましょう」

「はい」

しばらく馬を走らせると、こじんまりとした造りの家が見えてくる。
低い塀で囲われた其処には子どもたちの笑い声が溢れていた。

「お邪魔するよ」

「マキナおねーちゃん!」

蔦草を絡ませたアーチを潜れば、子どもたちが歓声を上げてマキナ
に纏わりつく。

「一緒に遊ぼうよ」

「剣を覚えてくれる約束だよ」

「いいよ。じゃあこっちにおいで」

マキナは子どもたちをつまく家の外へと誘導していく。

残ったのはダリアとサンディアと、最期まで彼女に従ってきた老執事だけだ。

「にぎやかでしたね」

突風が過ぎ去った後のような静けさにダリアの笑い声が軽やかに響く。

「お久しぶりですね。サンディア様。貴女のお茶が恋しくなって遊びに来てしまいました」

「それでは、さっそく準備いたしましょう」

サンディアの顔は晴れやかだった。

平服に身を包み、皇かだった指先には無数の傷が出来た彼女に王妃だった頃の面影はなかったが、どんなときよりもその表情は慈愛に満ちていた。ここに来るたびにヤガラを選んだことは正解だったと思う。

「子どもたちがたくさんいましたね」

「今、文字の読み書きを教えています」

サンディアから全ての付属品を取り払うと、出来る事はごく僅かだった。

料理を作るも、田畑を耕す事もここに来てから初めてのことだ。

何も満足に出来ないくせに、かつてはふんぞり返って着飾っていたかと思うと顔から火が出そうだ。

何も出来ないサンディアに呆れつつ、ヤガラの間人は優しく彼女を受け入れ、なにくれと世話を焼いてくれるのだ。

唯一、与える事ができるものがあると気づいたときには、ひどく安堵したのを覚えている。

先生と呼ばれるのは、面映いが慕われるのは嬉しかった。

勉強の師であるだけでなく、サンディアは彼らの母の役割も果たしていた。

戦の時期が多かったアリオスには孤児が多く、ヤガラでも例外ではない。

小さな孤児院には、今もたくさんの孤児たちが暮らしているのだ。

「すばらしいことですわ」

「いいえ、あの子にしてやらなかったことを押し付けているだけかもしれません」

サンディアの表情が少し曇る。

あの子ージルフォードには何一つ教えてはあげなかった。

「そうだとすると、彼らは幸せなのでしょう」

でなければ、あんなに笑顔で集まったりしないだろう。

「もう少し、お待ちくださいね。準備が整えば、ジルフォードに会うことも出来ますわ」

それからでも、教えてあげるとは山ほどあるだろう。

ダリアの言葉に含まれたものを読み取って、サンディアは小さく頷いた。

キレイに整えられた庭には、シルトの薔がぷくりと膨らんでおり、数日中には白い花弁が天を向くだろう。

この前に来たときに、春乙女にセイラが選ばれたことは話した。

今日は何から話せばいいだろう。

「今、タハルの王子様がいるのですよ」

第二章：白き花の告げるもの3

ナジュールの付き人として訪れたルルドたちにも一人ずつ個室が与えられた。

最初は特別対応に面食らっていたのだが、アリオスにして見れば何十とつれてくると思っ用意していた部屋の一部分だ。

タハルでは焼しめたレンガ造りの家の外には荒涼とした砂漠が広がっている。

目覚めて一番に目にするものが四方を石の壁でぐるりと囲まれた空間であることに戸惑いを覚えることもなくなってきた。

けれど、窓の外には、木々が枝葉を伸ばし、ただ観賞用に池が作られているのが不思議で仕方ない。

タハルでは水の獲得は死活問題だ。

故郷を離れて数週間。

あの砂だらけのわびしい場所が懐かしい。

ここでは、夜中に大きな獣に襲われることを畏れ、煌煌と火をたくこともない。

武の国だと聞いたが、タハルに比べれば危険など微塵も感じなかった。

上げ連ねれば、他国の文句とは山のように出てくるものだ。

まず、このぬるりとした温度が嫌だ。

一番嫌な理由など分かりきっているのだが、言葉にすることなど出来ない。

「もう慣れましたか」

部屋の入ってきた老人はサクヤという。

ルルドと同じくナジュールの付き人としてアリオスにやってきた人物だ。

声音は優しいながらも、苛烈な環境で過ごしてきた事を物語るように細く見える体もたくましく、皺の刻まれた顔には厳しさが漂っていた。

「ああ」

ルルドは相手のほうを見もせずに頷いた。

彼の視線は窓の外に向けられたままだ。

そこに侍女と談笑するナジユールの姿があった。

ああ、まただ。

苛苛する。

馬鹿みたいに安全なこの場所で、眉間に皺を寄せる理由などないはずなのに、ルルドの眉間には最初から彫りこまれているかのように深く皺が出来ていた。

「どうして、あんな事をさせるんだよ」

いつもならば、けして齒向かわないのに、ついに口が出た。

「あんな事とは？」

ルルドはぐつと拳を握り締めた。

「あれでは軟弱者の道化じゃないか！ ナジユールは太陽の王なのに」

悔しくて仕方がない。

ナジユールがへらりと笑って、物腰の柔らかな言葉を選んでアリオスの連中の御機嫌取りをするなんて。

タハルでは苛烈な太陽そのままに、誰もが頭を垂れる男だったのに。

それでいて慕われる彼はルルドの憧れでもあった。

いつもは尊敬の対象でもあるサクヤも今ばかりは怒りの矛先だった。サクヤこそが、ナジュールにそう振舞えと助言したからだ。

「だからよいのです」

人当たりのよい言葉は野蛮な国というイメージを薄めさせる。

侮りたければ、そうすればよいのだ。

それが間違いだったと気づいたときには、こちらが相手を飲み込んだ後なのだから。

「サクヤの考えは分かん！」

ナジュールを慕いきっているルルドには、どうしてもサクヤのやり方は納得できないものだった。

「お前は、タハルの人間ではないから、」

そこまで言つて、はつと息を呑んだルルドに苦笑した。

ルルドが言つたようにサクヤは生まれながらのタハル人ではない。その証拠に、生まれたときに刻まれる甲の刺青が彼には無かった。

「思いついたことを考えもせず口に出してはいけません。今のよう
うに後悔することになりますから」

「……すまん」

サクヤがタハルのためにどれだけ尽力しているか、ルルドには身に沁みて分かっている。謝罪はすぐに零れ落ちた。

悪戯をした幼子を許すようにサクヤは、その頭を撫でた。

「これもタハルのためです」

いつだってサクヤの言ったことは正しかった。

もしも、ナジジュールが関わっていなければ素直に頷けたらうにと、ルルドは力なく頭を垂れた。

「今日は、書庫へは行かないので？」

「いや、行く」

ナジジュールはルルドを伴って毎日のように書庫へと足を向けるようになった。

お目当ては本ではなく、ヘインズ談義なのだ。

専らセイラとナジジュールが話していて面白くないのだが、あの空間は好きだ。

なにより、ナジジュールが普段通りに振舞っているのが嬉しい。

ハナという煩い侍女もいるけれど言いたい放題言える相手がいるのは気が楽だった。

「ジルフォード殿とは話をしましたか？」

「いや、……アイツは何を考えているのか」

会話にも殆ど入ってこないし、視線が合う事もない。

瞳の色が変わるなんて不思議だったが、その分人形のように表情が変わらない。

「十二分に仲良くなさい」

国王の弟だ。

仲良くしておいて損はないだろうが、果たして出来るかどうか。
ルルドはサクヤの言葉に曖昧に頷いた。

第二章：白き花の告げるもの 4

ここ数日観察していて分かったのだが、ジルフォードという人物は恐ろしく隠れるのがうまいのだ。

ふつと気を抜いた瞬間に、たちどころに姿を見失ってしまう。

足音もしないものだから余計に探し出すのが難しい。

それが必然的に身についたのだとしたら……そこまで考えてクロエは頭を振った。

こんな余計な事を考えていては、またもや対象を見失ってしまうと、廊下の先をぐつと睨みつけながら辛抱強く待った。

いつも、この辺で見えなくなってしまうのだ。

今日こそ接触を試みておかなければ。

彼に近づける状況で、尚且つ他の娘が近づけない時期はあまり長くない。

最早見慣れた色が視界に入ってきたとき、クロエは思わず身を引いた。

姿を隠す必要など無いのに、見つければうまく撒かれてしまうような気がしたのだ。

そつと後ろに続くのだが、声をかけるタイミングがつかめない。

向こうの足取りはゆっくりとしたものの、間にある距離はなかなか縮まらないのだ。

ジルフォードが角を曲がった後に、ふいに姿が見えなくなった。

また見失ったかと、大きな柱のある廊下で肩を落とす。

ふつと長いため息をつき壁に背を付くと、背後でカッンと響くものがあった。

そんなことはありえない。

後ろは真正銘の石壁なのだから。けれど、耳を寄せてみれば微かに音がし、壁に手を這わせば、僅かばかり違和感がある。

馬鹿なと思いつつ、力を込めれば石壁の一部がすつと沈んだのだ。

恐る恐る中を覗き込めば、人一人がやっと通れるほどの薄暗い通路が続いていた。

本当にこんな場所を通っているのかと疑問が湧き出てくるのだが、前方では微かな足音がしている。

クロエはいとばかりに通路に身を投げ入れた。

手を離すと自然と壁が閉まり、もう前方へと続くしか道はない。

恐怖心と使命感がせめぎあいながら、クロエを突き動かす。

ほんの少しの好奇心もあったのだろう。

通路が傾斜しているのが感じられ、地下にもぐっているのだと分かった。

どれほど進んだだろうか。

かなりの距離を歩いたと思うのだが、急にばかりと開けた空間に出たのだ。

全身を冷たい空気がそつと包み込む。

薄暗さに目が慣れてくると、ぼくと白いものがたくさんあるのが見て取れる。

それが全て棺だと気づいたときに、まさしくクロエは総毛だった。

恐怖ではなく、自分の浅はかさを呪って。

その棺の数に、この場所が何なのか気づいてしまったのだ。

今や、王族しか入ることの出来ない聖地。

そんな場所にふらふらと入ってしまったことがばれると身の破滅だ。見つかる前に引き返さなければ。

頭がその答えをはじき出す前に、足はもと来た道へと戻ろうとしたのだが、聞こえてきた声に身をびくつかせた。

「何か用？」

恐る恐る振り向けば、追いかけてきた人物が其処にいた。

シルフォードは棺と同じように微かに暗闇に白く浮いているように

思えた。

冥府の住人が問いかける。

「あの……」

感情の見えない声には疑念すら含まれていないようだった。

ジルフォードにとって見れば、後ろから追いかけてきた侍女はいつか諦めるだろうと思っていたのだ。

魔物と呼ばれる人物と不思議な通路。

引き返すには十分な材料が揃っていたのに、彼女は追いかけることを止めなかった。

何か言おうと口を開いたようだが、言葉は続かない。
用がないのならば、それもいい。

「私、クロエと申します」

どうやら相手には話す意志があるようだと思えると、ジルフォードはじつと相手を見つめた。

瞳の色が変わったが、クロエは視線を逸らす事などしなかった。
むしろ、その色に魅入られたように正面から向き合った。

「クロエです」

「……クロエ」

あまりに必死な形相で名を告げるから、その名を口にしてしまった。

「どうぞ、お見知りおき下さい」

それだけ言って逃げるように去っていく侍女に首を傾ける。

彼女が自分に何の用があったのかはさっぱり分からないが、その響きはいつまでも口の中に残っていた。

「可笑しな娘に目をつけられたねえ」

しんと静まった空間にヒョヒョと奇妙な笑い声をたてながら、小さな老人が影から抜け出るように現れた。

墓守と名乗る老人は口元をにひやりと面白げに歪めた。

「それにしても熱烈な告白だ」

「告白？」

彼女はただ名乗っただけだ。

「あの娘っことはお前さんに名を覚えろと言ったんだ。覚えろってことは名を呼べと言う事だよ。名はね、その人間を縛るもんだ。それと呼ぶ権利を与えるってのは、なかなか強烈じゃないかい？」

墓守の笑い声は高くなる。

「名がどんな意味を持つかなんて、お前さんが一番知っているだろうさ」

ジルフォードは魔物の名前。つい最近まで、誰もが恐れ口にしなかった。

ただの名前だと言い切るには、哀しい過去がある。

「あのお姫さんとは仲良くやってるのかい？」

墓守の白濁した眼には、城の中で起こっていることはつぶさに見て取れる。

セイラが、今憔悴してグランの部屋を出た事も、ナジュールが侍女たちと談笑している事もだ。

二人の仲にさほどの変化もなく、今は会う時間も少ないことを知っ
ての意地悪な質問だったが、ジルフォードの表情に変化はない。
そもそも仲良くの定義がよく分からないのだ。

「……つまらんのう」

四六時中幸せオーラを撒かれるのも少々うざったいが、何の変化もない関係を見ているのも面白い物ではない。

まだ、どちらかが焦っていれば見所はあるのだが、ジルフォードもセイラものほんとしているのだ。

けれど、そろそろ波風が立ちそうな気配がする。

「太陽か、ふむ中々面白い者が来たようだ」

隣国の王子はその名が示すとおりその強い光りで、こんな地下からでも何処に居るのかすぐに分かる。

太陽と夜。相反する性質を持ちながら、どちらも月を伴侶に持つと
言う。

「頑張りなよ。王子様」

何も波風が立とうとしているのは、この城という小さな世界だけではない。

この大陸は今、大きなうねりの中を行こうとしているのだ。

緩んだ螺子の歪は大きくなり、歯車はずれ始めた。

あの時感じたのは嘘ではないのだ。

予見していた未来は、大きく変わりつつある。

「ほれ、もうお行き」

今ならば、ちょうど地上に出た頃に、あの娘と出会っだろう。

何かを聞いたそうなジルフォードの背を押すと、墓守は現れたときと同じように、唐突に姿を消した。

「ジン！」

嬉しげな声が足音と共に近づいてくる。

振り向けば、声が示す感情そのままの笑みを浮かべてセイラが小走りにこちらへとやってきていた。

陽光を含んだ髪さえも跳ね回り、喜びを露にしているようだ。

「そう。アリオスの王家に相応しい女性になるための授業その29だった。『よいですか、セイラ様。王族とはいかなる時でも毅然と振舞わなければなりません』」

セイラはさつと前髪を上げると眉尻をきりりとあげ、グランの低く厳しい声音を真似して言った。

かなり似ていると評判だ。

テラーナの顔を微妙に歪ますことにも成功した。あれは、笑いを堪

えていたに違いない。

「疲れちゃった。カナンにお茶を入れてもらおうよ」

セイラは針金を入れたかのようにぴんとした姿勢から、くにやりと力を失くすと書庫に行こうと手招きをする。
なにやら鼻歌を口ずさみつつ二、三步先をゆっくりと歩く。

「セイ」

「ん？ 何？」

呼んだことに意味など無かった。
いつまで経っても呼びなれない。

彼女の名はいつも、いつも己の中に不思議な余韻を残していく。
わざわざ、振り向かせてしまった事にちょっとした罪悪感が積もる。
ただ、口を突いて出てしまったただけなのだ。

特に用事があったわけではないことを悟ると、セイラはふっと口元を緩めた。

「ジーン」

それは特別な響きを持って落ちてくる。

「呼んでみただけだよ」

悪戯が成功した子どもみたいな笑みを浮かべ、くるりとスカートを翻して前に向き直るとセイラはまた鼻歌を口ずさむ。

知らないはずの旋律は、なぜか耳に馴染み暖かな日差しに似合っていた。

第二章：白き花の告げるもの5

「結局、いつもと同じですね」

ハナはうんざりとはかりにため息をついた。

憔悴して帰ってくるであろうセイラのためにお茶を用意していたハナの耳に聞こえてきたのは、予想外に楽しげなセイラの鼻歌だった。セイラがジルフォードを呼ぶ声がしたため、久しぶりに四人でゆっくりとお茶を飲めると思っただけ扉を開けると、余分なものが二人付いて来ていたのだ。

廊下でナジュールに呼び止められ、そこにルルドが加わった結果のようだ。

ケイトの姿は見えなかったが、彼一人いなくても、部屋の騒がしさには変わらない。

むしろ見張り役もとい仲介役がない分、カナンの部屋はにぎやかだ。

「お前、愛想が無い上に口答えばかりだな」

深いため息を聞きつけたルルドが、ふんと鼻を鳴らして言ったが、ハナだとて負けてはいない。

きりりと眉尻をあげると、席に着いているために自分より低い位置にいるルルドを冷たい瞳で見下ろした。

「貴方に愛想を振りまく必要がありました？」

二対の黒い瞳がぶつかり合っただけ火花を散らす、今日は生憎間に入ってくれるケイトがいないのだ。

彼がいなくて、一番の問題はハナとルルドが陰悪さを増す事だ。

ぴりつと緊張した空気を一気に瓦解させたのはナジュールの感極まった声だった。

「すばらしい！」

また、セイラとの話で彼なりの素晴らしさを見出したのかとちらりと視線をやってハナは固まった。

「なっ！」

これでもかというほどハナの眉はつりあがり、口の端がひくりと揺れた。

その今にも爆発しそうなハナの様子にルルドも後ろを窺ってぴしりと止まった。

「！」

セイラが困り顔で黒い剛毛に埋もれている。

音がしそうな勢いで二人を引き剥がすと、ハナはセイラを背中へと隠した。

「夫ある女性になんてことなさるんですか！」

キンと高い声が木霊したが、ナジュールは不当な扱いに不平をもらした。

「喜びを共有していたのだ」

「だっ、抱きつくなんて。喜びの共有とやらは他の方法でなさってください！」

「ハナ殿は少々、神経質すぎるな。タハル人は感情の表現が大らかなのだ」

「貴方は無神経すぎます！」

最初こそ、隣国の王子だと慎ましく対処をしていたのだが、彼の奔放さにハナが業を煮やしたのは出会ってから、さほど時間が経っていないときだった。

外面と全く違うのも怒りをうむ。

侍女仲間が「ナジュール様素敵よね」そんな会話をするたびに絶叫したくなるものだ。

「お前こそ、ナジュールになんてことする！」

ルルドが無理やり引き離すと言う不敬を働いたハナに詰め寄って、毎度の事ながら事態は悪化するのだ。

ひとしきり、一步も引かない口喧嘩をした後には、二人の額にはうつすらと汗が滲んでいる。

不毛さに気づいて、身を引くのはいつもハナの方が先だ。

よくも口が回るものだと感じているセイラ見て、涙腺が緩むのもいつもの事。

「セイラ様もセイラ様ですわぁ……うう」

泣き絶るハナの背を撫でながら、肩をすくめて見せる。

夫がある女性云々の話が分からないわけではないのだが……なんとなく犬に懷かれているような感じがするのだ。

彼らが身にまとう毛皮のせいかもしれないが……

ルルドなど、母親を取られないようにキャンキャンと鳴く子犬のよ

うだ。

懸命なことに口には出さなかったが。

「ひどいと思わんか。ジルフォード殿。ハナ殿はあのように縋るくせに」

なんとも答えようの無い言葉を吐きつつ、ナジュールは子どものように頬を膨らます。

立派な青年でありながら、その動作が奇妙に映らないのは彼の魅力かもしれないが、外面を知っているものにとればハナと同じ言葉を吐くかもしれない。

「……絶対詐欺ですわ。騙されてはいけませんよ。セイラ様」

他の侍女たちに見せる姿とはあまりに違う姿にハナはじと目で睨みつける。

反撃しようとルルドが口を開ける瞬間をついて、セイラはナジュールが纏う毛皮を指差した。

二人の口喧嘩を止めさせようと気もあつたが、好奇心のほうが強かった。

「それって何の毛皮？」

狼のようにも見えるが、セイラが知っているものより随分と大きなものだ。

「ルーガと言う獣だ。此方にはいないようだが、そうだな狼の体格を三倍にして残酷さを十倍にした感じの獣だ」

あまりに大雑把な説明だがよく分かる。

「丈夫で暖かいし、矢ぐらいなら難なく防ぐ事が出来る」

気になっているのが、伝わったのかナジュールは毛皮を外すと、わさりとセイラの背にかける。

セイラにすがり付いているハナは勿論巻き込まれ、その重さにうめき声を上げる事になった。

その毛は固く、ずっしりと重い。

長身のナジュールの腰から下を覆うほどなので、セイラの体には大きすぎて、顔以外の全て覆われてしまう。

まるで大きな獣に食いつかれていたような哀れな姿にルルドからは憐憫の視線が送られ、ジルフォードからは珍しく苦笑を送られた。

毛皮の海から抜け出そうとハナが悲鳴をあげたので、ナジュールはゆっくりと毛皮を持ち上げる。

そのゆっくりさに先ほどの仕返しをされているのではないかと、視線をやれば、にっと笑われた。
絶対にそうだ。

「よく、そんな重いものを身につけていますわね」

「ハナ殿がひ弱なのだ」

先ほどと同じような口論が始まりそうなので、セイラが仲介に入ろうとすると、コンと小さく書庫へと続く扉がなった。

開けてみれば、瘦躯の老人が立っている。

見知らぬ顔ではあったが、纏う衣装は紛れもなくタハルのものだ。今話題になっている毛皮も彼の細い腰に回されていた。

「サクヤ」

ルルドが訪問者に目を丸くした。

サクヤがわざわざ出むくほどの何かが起こったのだろうか。

「何事だ？」

ナジユールが席を立ち、サクヤに近づき問うと、アリオスの貴族の誰かが挨拶をしたといっている旨が簡単に告げられた。

厳しく引き締まった表情が途端に崩れる。

その表情にはめんどくさいと大きくかいてある。

「そんなことしなくてもいいだろう？ 皆が皆同じようなことを述べていくくせに」

「遊びで来ているのではありませんから、仕事をしてください」

「少しでも有力者との繋がりを持つ事が貴方の仕事です。」

言葉に出さずとも、サクヤの思っていることは突き刺さるような視線が物語っている。

「……わかった」

細くなつた瞳で見つめられると頷くより他はない。

「気が向かないが、行かないとサクヤが怖いからな」

部屋にいる者たちに小さく告げた後、ナジユールは頭を一振りした。揺れた髪が元の位置に戻る頃には、侍女たちが素敵だと騒ぐ微笑が浮んでいた。

まるで仮面でも被ったかのような早業だ。

「それでは、また」

優雅な一礼を残して去っていくナジジュールに続きルルドが部屋を出て、サクヤが深々と頭を下げた。

彼が静かに扉を閉める瞬間、セイラを視界に入れ、その口の形を僅かに変えたが、誰にも見られることは無かった。

それは消え入りそうな笑みだったのかもしれない。

「ルーガだつて」

ナジジュールが置いていった毛皮を触りつつ、どんな姿だろうと思いをさせる。

この固さではご婦人たちを飾る装飾品としては使えないだろう。

「タハルには、こんなのがいっぱいいるのかな？」

「子どもほどもある大きな鳥がいるとは聞いたことがありますよ」

「本当！」

瞳を輝かすセイラにカナンはあえて伝えなかった。

その鳥もまた、凶暴で人を襲うと言われている事を。

ナジジュールがヘインズの話がことさら好きなのは、同じような環境で育ったからではないかと言う思いが頭をよぎる。

獣と呼ぶには、あまりにも強大な力を振るうものが跋扈する世界で、

タハルは真に欲しているのだ。

魔物殺しの英雄を。
ヘインズ

「リュウはいるのかな？」

「リュウですか？」

「ヘインズのお話に出て来るんだよ。綺麗なうろこに覆われて、世界の全てを知ってる偉い生き物なんだ。人間が嫌いなんだけど」

人とリュウは争うようになり、世界は暗黒時代に入る。

そんな冒頭で始まる物語は、ヘインズがリュウと対峙したところでぶつりと終わってしまうのだ。

「いるかもしれませんね」

「一緒に見に行きたいね」

カナンの言葉に嬉しくなってジルフォードを見上げ、にっと笑った。指折り数えれば、行きたい場所も見たいものもたくさんあるのだ。

「いつか、世界中を巡るぞー」

何気ない一言と突き上げられた拳に呪力があつたかは誰にも分からない。

第二章：白き花の告げるもの6

席に着いて一呼吸するとサクヤによって扉が開かれた。

期待はしていなかったが、現れたのはやはりいかにも貴族ですと言わんばかりに着飾った中年の男が二人。

痩せすぎの男は、室内を一瞥し、愛想笑いと一目で分かる笑みを浮かべ、小太りの男は鼻の下にちろりと生えた髭を一撫ですると、此方も何かを探るように視線を巡らせた。

用意されたままの状態の部屋には彼らの興味を惹くものは生憎となかった。

「アロー」

進み出た二人は両手を肩の位置で掲げてみせた。

タハル流の挨拶ですと自信満面の顔に違うと言ってやりたかったがサクヤが瞳を光らせていることもあって笑みを浮かべるに止めた。

手のひらを相手に見せての挨拶は挑発しているのと同じなのだ。

お前などに正体を教えるものかと。

ルルドがいたなら目をむいたであろうが、今は隣の部屋で待機を言い渡されている。

感情と言動が直結しているルルドは、こういった場所ではトラブルを巻き起こす事になりかねないからだ。

「お会いできて光栄です。私、ランゲルと申します」

体に似合って細い声が告げると、

「エリオと申します」

野太い声が続いた。

それぞれが、自分はこの地方を治めていて、どれほど素晴らしいもののかを声高に続けるのだが、もちろん耳には入ってきて頭にはさっぱりと入ってこない。

タハルならば楽なのに。

刺青を見れば何処のものなのかすぐに分かる。

話を聞いている限り同族でもないのに、どうして共に来たのだろうか。

その答えは、三度ほどあくびをかみ殺した後に訪れた。

「今日は、リブングル様の使いで参りました」

「なにぶん、忙しい方なので」

大げさなほど申し訳なさそうな顔をするエリオに、気にしないで下さいと微笑んだが、内心はこちらとて忙しいとふつりと怒りがわいていた。

「こんなおっさんのためにカナン殿のお茶を逃したのか

サクヤを見やると軽く首を振られた。

やはりリブングルとやらの覚えはない。

「これは、贈り物でございます」

恭しく掲げられてきたものは皇かな布がかけられている。

その一枚とてかなりの値があるものだろう。

いやらしいほどゆつくりと布を引かれ、目の前に現れたのは光り輝く金の杯だった。

細部にまで施された細工は美しく、見るものにため息を零させる。

ナジュールの口からも息が漏れた。

それが感嘆だと受け取った二人は、顔を見合わせにやりと微笑んだ。

「これは、素晴らしく……」

重そうだ

手にとって見ればずしりと思い。

実用より装飾性を取ったそれを日常で使うのは困難であろう。

アリオスの人間は、どうして自分たちが少数で、部屋を飾るほどのものも持たない軽装でやってきたのかは考えないようだとため息をついた。

どれほど大きく息をつこうとも、今は全て感激してのため息と取ってくれるだろうと遠慮はなかった。

ノースの道はとても厳しい。

無駄など命取りだ。

どうせなら、上にかかっていた布のほうが軽くてよいのに。

ちらちらと上目遣いが見え、内心げっそりとしながら笑みを浮かべた。

おっさんの上目遣いなど可愛いわけがない。

「リブングル殿の使いとおっしゃったが、一体どのような御用でしょう?」

何の下心もなく、貴族から贈り物をもらえるなどありえないことはよく知っている。

アリオスに比べようもないほど疲弊したタハルから得るものなど何も無い。

ならば、国内の権力争いの類だろう。

くだらない話が一刻も早く終わるように、ナジュールは贈り物に浮かれる馬鹿な王子の顔を貼り付けた。

第二章：白き花の告げるもの7

「先の話、どう思う？」

当たり前障りのない返事をして、二人の貴族を見送る頃には空は赤く変じていた。

その、どろんと重たげな色と同じように、ナジユールの声は重い。疲れ半分、怒り半分。

彼らがとうとうと語った内容は無駄を省けば、半日もかかるものではない。

「権利の回復という部分は同意いたしますが……」

話の間中、ぴくりとも表情を変えず、立ち続けていたサクヤは称賛に値する。

その姿に感心しながらも、サクヤがいなければ、どうにかして逃げ出したのに。

そんな思考を呼んだのが、疲れ知らずの厳しい瞳がナジユールを射ぬいた。

「そこは、私も納得するが……」

三流貴族にしては、話の出始めは良かった。

尊い身分の方ながら、不当な扱いを受けている女性がおりますと。どうもきな臭い話ではあったが、どうせなら話の中心はおっさんより、女性の方がいい。

しかも、相手は美人なようで、セイラにも関わりがあるらしい。

ちよっとばかり話を聞いてやってもいいかと思っていると、彼らのネタばらしは早かった。

その女性とは、元王妃のサンディアだった。

うっとおしい泣きまねまでしながら、どうかサンディア様が、もとのように暮らせるように力を貸してくださいと。

彼らの言う権利の回復すなわち、権力の回復ということだ。
争いを生むのは必然。

「結局は政権を握りたいから、力を貸せということだろう。サンディア殿下はおまけだ」

こんなにも苛立つのは、この状況を己と重ねているからか。

仲の良い兄弟の間に亀裂を生むのは、いつだって強欲なとりまきたちのせいだ。

サンディアを取り込めば、その魔の手はジルフォードへと伸ばされていくに違いない。

「どちらへ？」

すくりと立ち上がったナジュールにすぐさまサクヤが問いかける。

「散歩だ。付いて来るなよ。半日我慢したんだからな自由時間ぐらいくれてもいいだろう」

ナジュールが上面を貼り付けるのがうまいだけで、けして気が長いほうではないことを十分に知っているサクヤは静かに頭を下げた。

「あれが本当にタハルの王子かのう。」

「あれぐらいの贈り物で頭を地に着けんばかり」

ひげた忍び笑いが二人の男の口からもれ出て、不快に空気を振動させた。

二人は前方からやってくる二人連れを見つけ一瞬目を丸くすると、すぐさま笑みを貼り付けた。

「これは、これはキース將軍にアイベリー將軍。お二人揃ってなど珍しい」

肩を並べて現れたのは、月影、陽炎、両軍の將軍だ。

長身の二人に見下ろされて、彼らはへこりと頭を下げると逃げるように去っていった。

「誰だ、あいつら」

「ランゲル殿とエリオ殿だ」

二人はそれなりに名の通った貴族なのだが、ジョゼにはまったく覚えがない。

聞いておきながらどうでもいいような返事を返したジョゼを睨みつけるとラルドは軽く息を吐く。

逆に覚えていたら恐ろしい。

彼のお気に入りで無い限り、どうやってひどい目にあわせてやろうかと画策しているほど嫌な相手ということになる。

「数年前まで、アリオスも野蛮な国だと言われてたつてのに」

「うむ」

「これでは、どちらが礼儀も知らぬうつけだか」

誰が通るかも分からぬ廊下で隣国の王子の悪口をおおっぴらに口にするとは。

「もう少し、遅かったら戦争だったかもな」

貴族たちが歩いてきた方向からナジュールが姿を現したのだ。

「おや、両將軍。アロー」

二人は会釈で答えた。

とくに、話も無いのでそのまますれ違おうとすると、二人の目の前でナジュールが足を止めた。

二人に負けぬくらい、ナジュールも背が高い。

ちょうど向き合った強い色の瞳には、いつもの人当たりのよい笑みは無い。

「もしよければ伝えてくれないだろうか。賄賂は金の杯よりも食料がいいと。タハルでは万年食糧不足でね、金の杯など貰ったところで食べれないし、あんな浅いものでは水を汲む役にすらたたん。無下に断って心象が悪くなるのは困ると思って笑顔で貰っておいたが、はつきり言って邪魔だ。ああ、人材ならば大いに結構。」

頷く暇も与えず、まくし立て言いたいことが終わるとナジュールは去っていく。

言葉さえ飾る事を止めたナジュールに違和感はない。むしろ、これが素の彼なのだと妙に納得できる。やはり、最初に受けた強烈な印象こそが本質なのだ。

「本当にどちらがうつつか」

ラルドの顔に苦い笑みが浮んだ。完全に手のひらの上で転がされているのだ。きつと影で嘲っている事も知っているのだろう。

「あいつはルーフア型だな」

「ルーフア王？ ……なんのことだ？」

「俺流、人間観察。今のところ、ルーフア型と嬢ちゃん型とラルド型がある」

今のところと言うあたり、いい加減さが漂っている気がしないでもないのだが、知っている名が出てくると妙に気になるものだ。しかも、自分の名が在るのならばなお更。

「ルーフア型は裏表がある。完璧に使い分けるから性質が悪い」

「ルーファ王がか？」

「今度、休み時間の執務室に入ってみる。逃げ出したくなるさ」

心配していた妻がけろりとした顔で戻ってきたので、現在の執務室も逃げ出したくなる有様だろう。

ジョゼも、ダリアが席を立った瞬間について逃げ出してきたのだ。

「嬢ちゃんというのはセイラ様のことか？」

渋い表情が、その呼び名は相応しくないと云っているがジョゼの知った事ではない。

本人がいいと言ったのだからと肩をすくめ、ふつと笑う。

「能天気が好き勝手に突っ走るタイプだな。それでいて、確信に近いところにいるから怖い。それで、ラルド型はだな」

喜色満面。

「くそ真面目で一直線。信念を貫き通す姿勢は天晴れだが、時々うざい。」

「……」

どういう反応を返していいものかラルドは困った。
これは、褒められているのだろうか。

「……それは、褒められているのか？」

くそ真面目のラルドは直球勝負。
分からないのならば、聞いてしまうのがいい。

「そう聞こえたか？」

「いや、うざいとはどう考えても褒め言葉とは思えん」

「じゃあ、そうなんだろう」

口を引き結んだラルドの顔が面白くて、ついに噴出した。

「褒めてんだよ。そういう暑苦しい奴もたまには必要だ」

「誰が暑苦しいだと」

さすがに、これにはむっときた。

ぴりっとした気を感じ取ると、ジョゼはニツと口の端を上げた。

「最近、書類整理で体がなまってんだよ。」

ジョゼの思惑を正確に読んで、ラルドはしかめっ面で頷いた。

「望むところだ」

二人の足は、誰もいなくなった調練場へと向かっていた。

第二章：白き花の告げるもの 8

散歩と称して出てきたものの、特に当てがあるわけではなかった。他国の城を誰の案内も無しにふらつくのは好ましくないことだと分かっただけだったが、ささくれ立った気持ちのまま部屋に閉じこもっているのは嫌だった。

愛用の毛皮をカナンの部屋に置いてきたことを思い出したが、再びあそこを訪ねるのも気が進まない。

廊下には橙色の明かりが灯されはじめていたが、その光りさえ今では癪にさわる。

タハルではこんな気分の時、どうしていただろう。

―遠乗りか……

それこそ、許されることではない。

ふうとため息をついたとき、背後から名を呼ばれた。

振り向けば想像通りの人物が手を振りながら、近づいてくる場所だった。

「セイラ殿……どこかへ行くのかい？」

見回してみても、いつも煩いぐらいにひつついているハナの姿は見え、セイラの手にはバスケットが握られている。

「月の綺麗な夜だから秘密の場所にね」

セイラはこれから不思議な話を始める語り部のように、人の興味をそそるような笑みを浮かべ、そつと囁いた。
もちろん、秘密の場所という単語は気になる。

しかも月が綺麗だから？

「ついていても良いだろうか」

だめだと言われれば別の場所を探そう。

軽い気持ちで言ったナジュールに、セイラはにこりと笑みを浮かべた。

「もちろん」

日が暮れるのはあつと言う間で、空はすでに闇夜色。

何時の間にか月ものぼり、明かりが無くとも行動するには十分なほどの光りがあった。

セイラが向かったのはどうやら、庭園の一角らしい。金属の門をくぐり抜けると、わさりと四方から枝葉が伸びる。

アリオスで最初に咲く花はシルトの花だ。

その花もやっと咲き始めたばかり。

アリオスでは城であっても特別に時期をずらし、花を咲かしたりな

どはしない。

それなのに、そこには甘さを含んだ不思議な香りがあった。

「ここは？」

植木の塀に囲まれた通路は細く、外から中をうかがい知る事はできない上に、その塀は何重にもあるのか、何度か角を曲がったのだがセイラが足を止める事はない。

ずんずんと先に行くセイラの姿を見失わないように足を速めながら問うと、さっと視界が開けた。

「カナンの畑だよ」

そこには、きれいに区画わけされた畑があった。

「あっちからはお城の厨房で使うようだから入っちゃだめなの」

畑の先にはもう一つ、門があり厳重に鍵がかかっている。

あきらかに、カナンのと言った畑のほうが大きい気がするのだが。

城の一角に自分の畑を持つなど、いつもにこやかな優しい老人は何者だろうか。

「カナンのお茶の材料がいっぱいあるんだよ。この良いにおいは葉っぱから出てるんだ」

差し出された葉に鼻を寄せると確かに甘い香りがする。

「甘いよ？」

試すような物言いに半信半疑で口に含めば、青臭さと共に甘みが広

がった。

「驚いたな」

洗練された菓子しかない者にとれば、とても食べられたものではなかったがナジュールにとれば十分だ。

甘味の貴重であるタハルにどうにかして植えることができないだろうかと思案していると、目の前にカップが差し出された。湯気が立ち、一層甘い香りが広がる。

「それを乾燥させてお茶にしたらこうなるんだよ」

いつのまにか、敷物が引かれお茶と菓子が用意されていた。

「よく、ここに来るのかい？」

「なんだか好きなんだよ。どうしてかな？」

セイラが月が綺麗な夜だからといった意味がようやく分かった。強い光に照らされて木々の影がくつきりと浮かび上がっている。

風に揺れて、伸び上がり、踊るように動く。

その影を踏むようにセイラ周囲を回る。

月の光りに照らされたセイラだけの舞台。

「リュウはいるかな？」

一瞬、何を言われているのか分からなかった。目の前で起こる光景に魅入られていたのだ。

リュウが大好きな物語に出てくるものだったと思い出す頃には、セイラは跳ね回るのをやめバスケットの中から焼き菓子を摘むと口に

放り込んだ。いるかないかと問われれば、いないと答えるしかない。

少なくともタハルにはそんな素晴らしい生き物はいやしない。けれど、現実的な答えでこの世界を壊すのは憚られて

「セイラ殿はヘインズはリュウを倒したと思うかい？」

別の質問を返した。

終わりの無い物語。

ヘインズがリュウを倒して初めて終わるはずなのに、その部分だけが書かれていない。

「わかんない。でも、ヘインズはリュウが好きだったんだよ」

それこそが真実だと告げているような、きっぱりとした声。

「そんな馬鹿な。好きだったのに倒しに行ったというのか？」

まるで詰問めいた声を出してしまった事を恥じたが、セイラはふつと柔らかに笑った。

月光を纏った髪に彩られた笑みにどくりと心臓が音をたてる。

「私も受け売りなんだけどね。愛してたからこそ、自分が最期を与えてやるう、そう思ったんだって。他の誰にも譲ることはできなかったんだって」

大好きならば争わなければ良いのに。そう言ったセイラに母は「そうね」と悲しげに微笑んだ。

「でも、もしもリュウもヘインズを愛したら」

答えなど出るはずもなく、それぞれが望む未来を夢見るのだ。

愛しさゆえに終わらない物語。

ささくれ立った気持ちもいつの間に凧いでいた。

「セイラ殿は不思議な人だな」

「そ？」

変だとかつつしみが足りないとはよく言われているが、不思議は初めてかもしれない。

「タハルの連中もそう思うだろう」

その素直さに、朗らかさに、月光に愛されたかのような姿に驚き、そして受け入れられる。

そんな様子が容易に想像できる。

砂ばかりの世界を見ても、きっと第一声は否定の言葉ではない。そんな気がしてくると無性に見てみたくなった。

「セイラ殿、タハルに来るといい」

きよとりとした瞳が嬉しげに溶けていく瞬間、気づいてしまった。凧いだはずの気持ちがざわめく理由を。

「うん、行く！」

そこに生まれ温度差を埋めるように、まだ暖かいお茶を流し込んだ。

第二章：白き花の告げるもの9

秘密の場所とやらに出かけて行つたセイラがいつ帰ってきてもいいように、ハナの手によつて寝室は完璧に整えられていた。

秘密のといつても城の中のことだ。

ある程度予想はついているので、あまり心配してはいない。

もう帰ってくるだろうと思う頃には、必ずただいまと扉が開くのだ。

セイラは、今日も同じように満足げな顔をして帰ってきた。

一つ違うのは、バスケットの重さが予想以上に軽いことだ。

いつも、一人では食べきれないほどのお茶とお菓子を持っていくのだが、それが全く残っていない。

「セイラ様、誰かと一緒にでした？」

今までも道すがら知り合いに会えば分けていたようだから、何気ない一言だった。

ジョゼかケイトあたりの名が浮ぶと思つていたのに、予想外の名に飛び上がった。

「途中でナジジュール殿に会つてね。一緒に食べたんだよ」

ハナの予想ではセイラ出かけていくのはカナンの畑だ。

一度案内された時、ひどく気に入った様子だったので自由に入つていいというお許しを頂いたのだ。

周りから隔絶された場所は秘密というに相應しい。

けれど、そんな場所でナジジュールと二人きり。ハナはさつと青ざめた。

「セイラ様！ 何もされなかったでしょうね！ 抱きつかれたり、

抱きつかれたりなんて……」

「されてないよ。葉っぱ食べさせて、お茶飲んで、リュウの話をしてだけ」

気になる言葉が出てきたが、見事に聞き流した。

葉っぱを食べたぐらいで、お腹を壊すような軟弱さは持ち合わせていないだろう。

「気をつけてくださいませ。あんな、あんな方と二人きりなんて……」

ハナの中でナジールの評価は地の底のようだ。

目の据わったハナの迫力に押され、曖昧に頷くセイラにふうとため息一つ。

「変な噂でも立てられたら大変ですわ」

噂が立つのはあつと言う間。

事実には尾ひれ背びれがついて、世間を渡っていくのは目に見えている。

今は、皆もうすぐ始まる祭りに気を取られているところだが、二人きりの姿など見られてしまえば、関心は一気に切り替わる事だろう。

「ハナは心配性だなあ」

「心配にもなりますわ。……ジン様のことだって」

「ジンがどうかした？」

ハナはゆるく首を振った。

ハナとて侍女仲間の一人に聞いたに過ぎない。

「最近、ジルフォード様、クロエといえるのを見かけるけれど、あの人がジルフォード様付になるの？」

その娘は、ハナに事実を問うように尋ねたが、寝耳に水の話だった。

「最近、クロエという侍女といるところをよく見かけられるらしくて」

それ自体はたいして問題ではないのだ。

ジルフォードの理解者が増えるのは喜ばしい事に違いない。

けれど、そこに権力争いや貴族たちの思惑は絡んで、ジルフォードを利用しようと言う魂胆なら見過ごす事なんて出来ない。

「クロエって、すらつとした美人さんのことかな？」

「知っているんですか？」

「書庫で一回話したのと、何回か見かけてことがあるよ」

「……そうですか」

彼女が近づいた真意を探らなければ。

そう決意したハナの前で、セイラはくわつと猫がするようにあくびをし長椅子に倒れこむ。

緊張感のカケラもない姿が、「彼女のことは心配する事ないよ」そう言っているように見えた。

第二章：白き花の告げるもの10

「あの組み合わせ。最近良く目にするね」

ナジュールの視線の先にはジルフォードと一人の侍女の姿がある。ジルフォードが他人と話している場面が珍しいのと、相手が中々美人ということもあって名前は知らないものの、彼女の顔には覚えがあった。

内容までは分からないけれど、会話は途切れていないらしい。

廊下で立ち止まっているセイラを見つけ、その視線をたどると今の光景があったのだ。

「……セイラ殿は嬉しいのかい？」

ジルフォードを見るセイラの目はどこか嬉しげに細められて、口角もふつと柔らかな弧をかいてある。

こんな状況でなければ、その様子に表情を緩めたのだが。

「うん」

「……夫が別の女性と仲良くしていて嬉しいなんて、変わっていると思うが」

初めて此方を向いた瞳には、「何故？」そんな不思議な色が宿っていた。

よどみの無い答えに首を傾げなくなるのは此方だというのに。

「まったく」

苦笑のような小さな吐息が漏れる。

「あまりに幼い愛情なのか」

時に憎悪にも変わるほどの想いを知らぬがゆえか。

「それとも女神のように寛大な愛情なのか」

時に残酷なほど慈悲深い想いゆえか。

自分ならば、どちらも要らない。

同じ身の丈の愛情を返して欲しい。

そう思うのは傲慢だろうか。

この愛情を注がれる対象のジルフォードは、どう思うだろう。

ふと浮かんだ疑問の答えを探ろうと、その答えを持っているであろう人物に視線を移す。

目があったと思うのは、きっと錯覚に違いない。

一瞬だけ見えたような赤い色は白い髪に隠されて何処にもなかった。視線を戻せば、やはり疑問を宿した瞳がナジュールを見つめている。吐息がかかるほど近づいても、大きな瞳に揺るぎは無い。

まったく意識されていないのか、そういったことに鈍感なのか判断がつかない。

慌てた声を出したのは隣にいたルルドのほうだ。

「ただの阿呆です！」

「なんで、ジンが仲良くしてると嬉しいのが阿呆になるのさ」

むっとしたセイラがルルドの頬を抓って伸ばす。

ルルドの身長は低いのでセイラでも容易に手が届くのだ。

「にやにをふる！」

「変な顔！」

まるで仔犬のじゃれあいのような光景についつい頬も緩む。

ナジュールは二人の頭に手を置いて、ぐりんと方向を変えさせた。そのまま押せば、つられた様に二人とも付いて来る。

「どこに行くんだ？」

「街を案内してもらおうと思ってね」

シルトの祭りは明日から始まるのだが、すでに街には熱気が満ちお祭り状態。

城の中にも、熱気は十分に伝わってくる。

正式に祭りが始まれば、自由には動けまい。

タハルの客人たちは、その前に街の降りて楽しんでしまおうとの考えだ。

ずっと城の中にいた反動も大きく、サクヤの制止の声も聞こえない振りをした。

「どうかいたしました？」

会話が途切れた、といっても話すのはクロエばかりでシルフォードは頷きを返すばかりが多かったのだが、それすら返ってこないこと

に気づきクロエは視線を上げた。

長い睫に縁取られた瞳が話題の種から離れていることを知ると、何が彼の関心を引いたのか気になり、視線を追いかける。

ジルフォードの視線の先には、誰もいない廊下があった。

流れるような速さで連れて行かれたセイラが問題に気づいたのは城を出て、大通りを歩いている時だった。

「……私、あんまり道詳しくないんだけどな」

二、三度、街に下りたことはあるが、ケイトに連れられてきよろき

よると見回してばかりいたので、道順を詳しく覚えていないのことにやっと思い至ったのだ。

それに裏街に迷い込めば、地元の間人でも方向がつかめなくなるから、入ってはいけないと言われたような気がする。そんな場所に不慣れ三人が行って大丈夫だろうか。しかも、そのうち二人はまったくの初めてだ。セイラの心配をよそにナジュールはにっと笑った。

「迷子になってみるのもいいさ。新たな発見があるかもしれないだろう？」

ルルドの早くと訴える視線にも後押しされ、セイラ頷いてしまったのだ。

大通りばかりではなく、いつもは静かな細い路地ですら人が溢れ、騒がしい。

家々の窓に飾られたシルトの花は零れ落ちんばかりに咲き乱れ、時折吹く風が花弁を一枚、二枚と宙に舞わす。

広場では踊り子が喝采を浴び、子どもたちが語り部を追いかける。ふわんと甘い菓子の香りが四方からたちこめ、見たことの無い品物が露店に並んでいた。

売り子の声は高らかに、此方おいでと呼びたてる。

「ここはとても活気にみちているのだな」

街の喧騒に目を細めながら、ナジュールが呟いた。遠い何処かの景色と重ね合わせているような表情だ。

「そうだね。何も無い時だって、すっごくにぎやかだよ。タハルの都はどうなんだ？」

行ったことのないエスタニアの都も華やかで活気に満ちていると聞いてたので、都とはそういう場所なのだと思い込んでいたら、予想外にナジジュールは苦笑した。

彼には似合わぬような暗さがあつた。

「ここに比べたら、死んでいるのと同じだ」

「死んでる？」

「砂ばかりの侘しい場所だ。誰も彼もが疲れきっている。知っているか。セイラ殿。タハルの砂漠には雪が降る。荒涼とした乾ききつた世界をほんの一夜で白く変えるんだ。苦勞して苦勞して作った作物は砂嵐と雪が全部、奪っていく。大した産業のないわが国には致命的だ。都とて獣の跋扈する場所だ。都に明かりが絶えないのは、豊かだからではなく、そうせねば生きていけないからだ。大地と同じく、人の心も乾ききっている。」

知っているかと訪ねるナジジュールの声は知らないだろうと突き刺さすような鋭さがあつた。

ルルドの暗い表情は、それが事実だと告げており、陽気な曲が響く中、二人の周りだけがずんと重い。

「山脈を一つ挟んだだけなのに」

何も答えることが出来ないセイラの上に落ちてくるのは怨嗟にも似ていた。

グランの言葉が蘇る。

肥沃な大地を寄越せと彼らは、いつもアリオスを狙っているのだと。その言葉は、アリオスばかりにではなくエスタニアにも向けられて

いること容易に想像できた。

ローラ山脈をはさんで隣国となるエスタニアは大陸一の栄華を誇る。

「おおい、おにいさん方寄って行きなよ！！　なあに、辛気臭い顔してんだい。ほいさ、これなんてお似合いだろう」

事情など知らぬ露天商が三人を呼び止めた。

手に持った布をセイラに巻き付けると、こちらにも似合うと新たな布を出してきた。

「すまないな。セイラ殿。楽しむために来たのに、暗い話をしてしまった。おやじ、そっちのも見せてくれ」

「はいよ」

ナジュールの言葉に返事をする前に、セイラの頭にはぐりりと鮮やかな布が巻かれていく。

あまりの手際のよさに、何をされているのかセイラには分からなかった。

とりあえず、大人しくしていると、目の前にルルドの手が突きつけられる。

「此方のほうが似合う」

ルルドが差し出したのは、瑠璃のような青さを持った布だった。そつぽを向いた頬には僅かばかり赤みがさす。

「うん。そうだな。そちらのほうがいい」

ナジュールは布地を受け取ると、器用に他の布地とともに巻き込ん

でセイラの頭を覆っていく。

「あの、ナジジュール殿？……ルルド？」

セイラの困惑を他所に、ナジジュールは己の首から提げていた香入りの魔除けを飾りとして括りつけると満足げに頷いた。

「タハル美人の出来上がりだ」

鈍く光る鏡の前に立たされて、何をされていたのかは初めて分かった。

亜麻色の紙は一部を除き、幾重にも重ねられた美しい布で作られた被り物の中にきっちりとおさめられていたのだ。

ちようどルルドがしているのと同じような格好になる。

セイラ自身は何も変わっていないと言うのに、別人になったような奇妙な感覚に陥るのは何故だろう。

「おやじ、これをすべて貰おう」

気前のよいナジジュールの言葉に、「まいどあり」と露天商の声が続いた。

「ナジジュール殿、これは……」

「気分を沈ませてしまったお詫びだよ。なに、気にすることは無いよ。どこかの奇特な方々が素晴らしい贈り物してくれたからね。」

にこりと笑ったナジジュールには、思わず頷いてしまうような強さがあった。

助けを求めるようにルルドを見れば、

「贈り物を突き返して、ナジュールに恥をかかせるつもりか」

と、赤い顔をしたままあらぬ方向を向いてしまったのだ。

「ありがとう」

ルルドの言うとおり、せつかくの好意をつき返すのは憚られてありがたく受け取ることにしたのだ。

先ほど突き出された青い布はルルドからの詫びだったのだろう。そして、もう一つ言わなければならない言葉がある。

「君たちが謝る必要なんて無いよ。私は、もっとタハルのこと知りたいと思ってる」

ナジュールの語ったのは紛れもない事実。
知らなかった、知らなければならぬ事実。

「あんな話を聞いても、タハルに来たいと思うかい？」

「うん」

ナジュールはどこかで、ほんの少しでも迷ってくればいいのにと
思っている自分がいることに気がついた。

もし返答に躊躇いが含まれていたならば、きっと諦めもついたのに。

「やはり、セイラ殿は不思議な人だな」

「……ただの阿呆ですよ」

ぽつりと呟かれた言葉に、ルルドが聞き取れないほど小さな悪態が天に向かって零したが、陽気な歌にかき消されてどこにも届く事はなかった。

振り仰いだ視線の先で見たものにルルドが思考を停止している間に、違う露天商がセイラとナジュールを手招きしていた。

「なぜ？」

呆然と呟いた問いに答えてくれる者は生憎といなかった。

第二章：白き花の告げるもの 11

「うまくいつてるならいいんだけどねえ」

「それは、もう」

もみ手せんばかりの笑顔を振りまく男にげんなりしつつも、少年は「それはよかった」と心の籠っていない言葉を吐いた。正直どうでもいい。

彼らの素晴らしい計画とやらが成功しようが、しまいが関係ない。ちろりと視線を向けたが、相方も同じ想いなのだろう。もともと無表情な女だったが、今日は色さえないかのようだ。

「じゃあ、計画通りよろしくねえ」

へこりへこりと何度も頭を下げて去っていく男に薄い笑みを浮かべながら、ぬるくなってしまったお茶に口をつけ、べっと舌を出した。

「この店、はずれ」

先ほどの男は、それなりに名の通った貴族だと言うから期待していたのに、彼が用意した店は内装ばかりが美しく料理の味は大した事ない。

「それにしても、欲ってのは怖いもんだねえ。サキの力なんて関係ないじゃん」

相方の特殊な能力を使わずとも、権力と言う餌をちらつかせるとほいほいと寄って来る。

鉄仮面な女と少年。

そんな怪しげな二人連れに不信感すら抱かないなんて馬鹿な奴らだ。

「でも、正直言つて元王妃様なんて関係ないんだけどなあ。お城の中がごたごたしてるほうが動きやすいと言えば、そうだけど」

食べる事に飽きた少年は、砂糖を積み上げていく作業を開始した。ある程度まで積み上げては、突き壊し、積み上げての繰り返し。

「元王妃様に近づいて、王弟を取り込んで、正統な継承者を主張してにして権力を手に入れるの？ どう考えても馬鹿らしいけどねえ。」

彼らはもつともらしく語るのだが、彼らの根拠はジルフォードが王妃の産んだ王子だということだけだ。

「ねえ、ユザは王座の交代なんて望んでたっけ？」

「ユザが望むのは、ユザを捨てた全てのものが滅ぶ事だけだ」

サキの声には表情と同じく、変化がない。

少年は、声だけ聞けば女か男なのか分からないような不思議な音が嫌いではなかった。

「ふうん。じゃあ、やっぱり関係なんだ」

砂糖の積み木崩しにも飽きた少年は、立ち上がり窓辺へと近づいた。味は失敗だが、窓の外に広がる風景は悪くない。視界の半分を空の青が埋め、下半分は果物や布売りの露天商が色鮮やかに覆っていく。

「あつ……」

思わず出てしまった小さな声は、サキの表情を少しばかり変えることに成功した。

こんな場所で見つけてしまうとは。

しかも、向こうも此方に気がついたようだ。

黒い瞳が見開かれ、「なぜ？」と唇が動くのが確かに見えた。

「どうした、ヒイラギ」

「ごめん。見つかった」

謝りつつも、反省などしていないような明るい声でヒイラギと呼ばれた少年は笑った。

高い笑い声に混じって、足音が部屋へと向かってくることにサキもヒイラギもすでに気づいていた。

勢いよく個室へと続く扉を開けたのは、ヒイラギが今しがた露店の前で見かけた色彩だった。

「お前たち、何をやってるんだ！」

第一声も表情も想像通り。

「これは、これはルルダーシエ様。ぼくらを置いていくなんて、ひどいんじゃないませんかあ？」

慇懃に頭を下げるヒイラギの前で、眉尻をきつと上げたのは先ほどまでルルドと呼ばれていた少年だった。

「そのことについては、ちゃんと話したはずだぞ！」

「話は聞きましたよ。了承するとは言ってませんけどねえ。だって、ルルダーシェ様、サクヤ殿に苛められていないか、心配で心配で、来ちゃいました」

「誰が苛められるだー！」

「サクヤ殿は、あのナジュール様だって手のひらで転がせる人だからねえ、ルルダーシェ様なんてペッって感じですよ」

ヒイラギの虫でも払うかのような仕草に頬が瞬時に熱を持つ。

タハルに置いてきたはずの付き人たちが、どうしてこんなところにいるのか。

怒りと困惑とが渦巻いて、うまく言葉が出てこない。

「お、お前たちまでいなくなったら、騒ぎになるだろう！」

「それについては対応しておきましたから大丈夫ですよ。たぶんね。それに、仲の悪い兄弟と一緒にアリオスに行ったなんて考えませんって。もし、二の王子が付き人の格好させられて連れて行かれたなんて知った日には……ねえ」

物騒な笑みにぐっと口を噤む。

「今はルルドだ」

「そうでしたねえ」

につばと笑うヒイラギに脱力して、今のやり取りを何の感慨もなく見ていたサキに恨めしげな視線を送るが、返ってくるのは光りの差さない真黒の視線だけだ。

「……お前まで」

自由奔放なヒイラギはともかく、寡黙で職務に忠実なサキまでもがアリオスにすることが信じられなかった。

「それにしてもなんだ、その格好は」

二人の格好はタハルのものとは大分違う。
色彩だけはルルドが頭に巻いている被り物と同じく鮮やかだが、腰には毛皮ではなく細長い布が巻かれ、袖口は大きく開いていた。

「さすがにタハルの格好は目立ちますからね。これ、ローラ山脈の麓あたりに住む少数民族の格好なんですよ。なかなか似合うんですよ？」

その色彩の豊かさは、ヒイラギの性格によく似合っている。

「ところで、ルルド様はどうしてここに？ てっきりお城で閉じ込められてるかと思ってたのに。予想外なのは僕らも同じですよ。影ながらこっそり見守ろうとしてたのに」

「……兄上と一緒に出てきたのだ」

「ナジュール様？」

そのわりにはナジュールの姿は見えない。
上から見たときも、ヒイラギの位置からはルルドの姿しか見えていなかったのだ。

「他に誰か一緒で？」

「ああ、セイラっていうエスタニアから来た女だ」

「セイラ王女ですか」

「知っているのか？」

「そりゃ、エスタニアの王女が嫁ぐとなればちょっとした騒ぎでしからねえ」

ヒイラギはにいつと口の端を吊り上げた。

「美人でしたかあ？」

「いや」

ルルドの答えは殊更早く、短かった。

迷う素振りさえ見せない主に目を瞬かせると「そうですかあ」と残念そうに呟いた。

美人であろうと、なかりうと会えるわけでもないのにと呆れたルルドの横でサキが初めて口を開いた。

「お二人はどちらへ？」

階段を上がってくる気配もなく、窓から見える路地にそれらしき姿

も見えない。

ナジユールほどの長身ならば見つけることはそう難しい事ではないはずだ。

「ルルド様、置いていかれちゃったんですかあ？」

「置いていかれてない！」

噴出したヒイラギを射殺せそうな瞳で睨みつけると今しがた開けたばかりの扉をくぐりぬけた。

「お供しましょうか？」

駆けていく背中に笑いを含んだ声で問えば、「いらん！」と怒鳴り声が返ってくる。

「お前たちは、早くタハルに帰れ！！」

足音が遠ざかるほどヒイラギの笑い声は高くなり、終いには腹を抱えて床に倒れこんでしまった。

「怖い怖い。ルルド様は僕を笑い死させる気かもしれないねえ。兄上大好き！は健在だ。あは。今のうちに仲良くしておくといいよ」

仲が悪いと思われているのは、周りがそう振舞っているためだ。国では満足に言葉を交わすこともできない。

視線を合わすことすら困難かもしれない。

「……来てるんだ」

ぽつりと零された、小さな歓喜の声をサキは聞き逃さなかった。
路地の見つめていた視線が床に転がったヒイラギに移る。

「ヒイラギ」

その一言で何を言おうとしているのか理解できるのだが、彼女が言うように我慢してきたのだ。ご褒美を貰ったっていいはずだ。

「ちょっとだけだよ」

第二章：白き花の告げるもの12

「ルルド？」

呼びかけに答える声はなかった。

どうにか、その姿を見つけようと懸命に背伸びをしてみるのだが路地を行き交う人の壁によって、ほんの少し先すら満足に見ることが出来ない。

セイラの行動に気づき、ナジュールもあたりを見回すのだがルルドの姿は見つからない。

「さっきまでいたよね」

セイラの頭に巻かれた布を選ぶところまでは確かに一緒にいた。

視界の先で揺れる青はルルドが選んだものに違いないからだ。

今はその布を選んだ露店からさほど離れていない場所のいるのだが、どこではぐれてしまったのか。

「まあ、あいつも子どもではないし城までは無事に帰れるだろう」

まだ城はすぐそこに見えているし、大きな路地からはすぐの距離だ。天才的な方向音痴で無い限り、城まで行く事は容易なはずだ。

少なくとも、ルルドは何も無い砂漠を星を頼りに進むことが出来るので大丈夫。そう判断したナジュールをセイラは不思議そうに見上げた。

いつもより頭が重いので重心が揺らぎ、かくりと首が傾ぐ。

「探さないの？」

「大声で探し回れば、ルルドの自尊心を傷つくだろうし。せつかく街に下りてきたのに人探しで終わるなんて私は嫌だ」

力が入っているのは、どうやら後半のようだ。

「てつきり探そうって言うかと思ったのにな」

「私はそこまで過保護じゃないよ」

肩をすくめるナジュールにセイラは明るい笑い声を返した。

「そうかなあ」

「……なんだか含みのある言い方だな。セイラ殿」

ナジュールは気づいていないかもしれないが、よく世話をやいてくれるように見えるのだ。

アリオスに中々馴染めないルルドを連れ出しては書庫にやってくる。会話に入り込めないルルドを刺青の話で無理やり押し込んだのもナジュールだ。

見透かされたような優しい笑みを受け、頬が熱を持つ。

「ナジュール殿はいいお兄さんって感じだもの」

驚いたように開かれた瞳は背を向けているセイラには見ることが出来なかった。

「知っていたのか」

その言葉を飲み込むことが出来たのは、セイラが二人の血縁関係を知っているわけではなく、イメージだと気づいたからだ。

「いい兄などではないと思う」

しゃがみこんだセイラの目の前には奇怪な動物の形を象った装身具や彫り物がずらりと並んでいる。およそ年頃の少女が好むものでは無さそうなのに、目を輝かす様に張っていた気も抜けてしまう。

露天商も普段あまり見かけない客層に驚いているのか口数は少なく時折、ナジュールをちらりと見る。

「それはどうでもいいことだよ。決めるのは君の弟だもん」

お土産にどう？

差し出されたのは、鈍い銀色の腕輪だった。

浮彫にされた怪物たちの瞳には、くすんだ玉がはめ込まれている。

うめく様に怒る様に牙をむく怪物たちの細工は緻密ではあるが気味が悪い。

今まで買い手もつかなかったのだろう。

「これ買ったらね、おまけでつけてあげるよ」

露天商はそう言って、目の前にあった変な置物をセイラに押し付けると、金を払えとばかりに手のひらを出した。

「いい買い物をしたね」

銀の腕輪をナジュールの腕に嵌めながら嬉しげに微笑んだ。

タダ同然で貰ったものにしては腕にじっくりと嵌り、金具もしっかりとした作りで嵌める時にパチンと小気味よい音がした。

セイラが気に入っているようだったからあげようと思っていたのに、セイラはさっさとナジュールの腕に嵌めてしまったのだ。

「随分気に入っているようだから、セイラ殿にと思ったのに」

「それね、エスタニアのお守りなんだ」

セイラが頭を揺らすと、ナジュールのつけた魔除けの飾りが音を立てる。

まるで、これの代わりにと言っているように。

「ジニスで作ったんだよ」

ジニスの職人が貴族の婦人むけではなく、楽しみに作ったものだ。誰にも見向きもされないように、わざとくすませた玉は王冠を飾る玉も霞むほどのもの。気づくものだけ気づけばいい。そんな思いを込めて。

「セイラ殿の故郷か」

「そう」

セイラはそれがとても愛おしいものだといつように一度だけ腕輪の表面を優しく撫でた。

「では、私が身につけよう」

ナジュールは腕輪の表面に口をつけた。

まるで神聖な儀式のように。

まわりの喧騒がふと消えたような静けさだった。

「お守りを贈る意味を？」

問いかけは短く、悪戯を思いついたような笑みは魅力的だった。タハルでは己の作った守りを贈るのは求愛の印。

今回セイラに渡したものはナジユールの作ではなかったが、その気持が全くないといえは嘘になる。

そのことを告げれば、どんな表情をするだろう。

「あなたが愛しいのです」

息を止めたのはナジユールのほうだ。

その言葉が愛の告白ではないことは声の温度で分かったけれど。

「わたしがあなたの幸を望むにたる友人でありますように。この玉があなたの行く末を照らすように。エスタニアでは、そう思ってお守りを贈るんだ。タハルはどう？」

「同じようなものかな」

ただし友人ではない。

心に秘めた言葉が伝わる事はなかった。

「じゃあ親友だね」

「では、更に交友を深めるために探索を開始しよう」

「ルルド、本当にいいの？」

「大丈夫だよ。セイラ殿」

ナジユールの予定では元々途中で分かれるはずだったのだ。
ルルドには知らせていなかったため、自ずと置いていくという形になる
だろう。

「さあ、行こう」

目の端にルルドの姿を見つける前に。
耳朶に己の名を呼ぶ声が触れる前に。

そして

刃が愛しい弟の上に降りかかる前に。

第二章：白き花の告げるもの13

いくら人をかき分けても、望む人の姿は現れなかった。

人を押しどけ進むルルドに迷惑そうな顔が返ってくるけれど構ってなどいられない。

先ほどの店まで戻ったのにナジュールの姿もセイラの姿もなかった。「あっちに行ったよ」と言う露天商に従って進んできたものの目の前には知らぬ人間ばかりがひしめいている。

これだけ人が溢れているというのに、ルルドは初めて真の孤独を感じた気がした。

何もない砂漠にただ一人取り残されるより、なお強く。

立ち止まったルルドにぶつかり文句を言う男、見て行けと手を引く露天商。

確かに彼らの営みに自分は存在するというのに、世界でただ一人きり。

そんな馬鹿みたいな、恐ろしいほど巨大な恐怖が落ちてくる。

『ナジュール様は貴方様のことを邪険にしておられる』

『近づいてはなりませんぞ』

ふっと浮んだ、権力者たちの声に身が凍る。

そんなことはないと知っているはずなのに。

王子の不仲は作られた。

……本当に？

ルルドは勢いよく首を振った。

その勢いが強いほど止めなく立ち上がる不安を遠くに押しやれるというように。

帰ろう。

それが一番良いと思った。心当たりもないままに闇雲に探したところで見つかるわけがない。

何処に？

あの石造りの城は自分の居場所じゃないのに。

サクヤのところに？

彼はきつと向かえ入れてくれるけれど、決してルルダーシェの味方じゃない。

ぐるぐると回り始めた思考に出口は無い。

目の前を行き交う見慣れない色に眩暈が起こる。

「おい、お前」

大きな手がルルドの肩を叩くと、その衝撃で目尻にたまっていた液体が一粒だけポトリと落ちた。

石舞台の広場も人でごった返していた。広場の半分ほどを露店がうめ、石舞台の横には明日からの催しものなのか剣術大会と書かれた看板が置いてある。

それに便乗してか武器商人たちの店も多かった。

子どもたちが店の前を陣取って、真剣な顔をして剣を見ている。

商人たちは、子どもたちを追い払ったりはしない。

小さな頃から剣を振るう事を知っているアリオスの子どもたちは立派な客に違いなかった。

ふと剣から視線を上げた少年が、顔一面に喜色を浮かべた。

「おねーちゃん!!」

その声につられて子どもたちが一斉にセイラのほうを見た。

手を振る姿を見つけるとわらわらと近づいてきて、あっけにとられるナジュールなど知らぬ顔をでセイラを取り囲む。

「お話してよ」

「エスタニアのお話がいい」

「語り部のおじちゃん、向こうの広場にいるの」

それぞれが手を、服を掴んで引っ張り、目的の場所へと急かす。

セイラの話語り部に聞かせておけば、彼がいつでも好きなときに朗々と不思議な話をしてくれるのだ。

時折やってくるセイラを子どもたちはいつも心待ちにしていた。

「……すごい人気だな」

取り残されたナジュールがぽつりと呟くと、傍にいた老婆がほほと笑う。

「不思議なお嬢ちゃんでね。ふらりと来ては変わった話をしていくのさ。煩いばかりの子どもらもお嬢ちゃんの話の間だけは呼吸もしてないのかつてくらい静かだよ。おや、今日は勝気なお嬢ちゃんはいないんだね」

そう言うのと、私も聞こうかねえと老婆も子どもたちの後に続いた。自分も続こうと足を出したナジュールの背をぴりりとした気が打った。

瞬時の瞳を鋭くし、背後を振り向くと広場の陽気さに合わない沈んだ黒のマント姿の男たちが人の間を蛇のようにする抜けて此方へと向かってきていた。

「やはりな」

予想は当たっていた。

タハルを出て時から、後ろをついてくるものがいた。

彼らが消してしまいたいのはルルダーシェではなくナジュールだ。わざわざノースの道を越えてまで暗殺しに来るとはご苦勞な事だとほくそ笑む。

ひどい仕打ちと知りながらルルドを置いてきたのは正解だった。

「……さて、どうするか」

これだけの人を巻き込まずに戦うにはどうすればよいか。

街は何処へ行っても人の山。

目をつけたのはすぐそばにあった石舞台。明日のためにと磨かれている其処には幸いな事に人がいなかった。

ひよいと舞台上上がるナジュールにどよめきが上がる前に、5つのマントが忍び寄る。

舞台に上った青年と剣を抜き放つマントを被った男たち。

一触即発の気を出しながらも誰もとめようとはしなかった。それどころか、祭の余興かと拍手が沸き起こる。

青年の武器は小さな湾曲したナイフだけ。

あまりにも不利な状況も観客の熱を高めるばかりだ。

「よお、にいちちゃん！ 大分不利なんじゃないかい？ 貸してやるよ」

面白がった露天商が投げ入れた剣は綺麗な放物線を描いて、ナジュールの手元に落ちてくる。

「かり受ける」

受け取る瞬間に鞘から引き抜いて構えるとどっと歓声が上がった。男たちが一瞬ひるんだのは、その歓声ゆえか、不敵な笑みゆえか。

決着は早かった。

飛び掛ってきた男たちの半数は吹き飛ばされ、石畳の上でうめいていた。

ナジュールと体格はあまり変わらないと言うのに、男たちの体は一人を除いて宙をまっただ。

ただ一人残された男が躊躇したところに走りより、刃をあわす。そちらに気を取られている間に無防備な横腹に一撃。

くぐもった悲鳴を上げる男の獲物を弾き飛ばし、喉元に刃を突きつける。

あと一加減で肉に刃先が沈む。

その位置でナジュールはぴたりと剣を止め、息を呑む男の耳に口を寄せる。

「お前の主に伝えるがいい。愚かだと」

「ふつ。愚かなのはお前のほうだ。今夕ハルがどうなっているか」

男の言葉は完全に止まった。

呼吸さえ、額を伝う汗さえ時を止めたように。

「お前……」

やっと出た喘ぐような声には色はなかった。

笑みに射すくめられ男の思考も恐怖も驚愕さえも溶けた。

「知って」

返した刃で打たれた男はがくと膝を折り、意識を失い舞台の上に崩れ落ちた。

「知らないとも思ったのか」

歓声が吹き荒れてナジュールのため息はかき消された。

「オヤジ、助かった」

きちんと鞘に収めて投げ返すと、露天商は危なげなく受け取りにま

りと笑った。

「さあさあ、見てたかい。今の立回り！ ほうれ、うちの商品だよ。軽い上に切れ味抜群！ 大の男だって紙のように吹き飛ばせるよ」

商魂たくましい商人のもとに人々があつまり、舞台の上のナジュールへの感心は一気に下がった。

あきれつつも、そちらのほうが助かる。

大きな騒ぎになる前に早くセイラと合流をしよう。

確か此方のほうへ連れて行かれたはずと進むと、目の前には3本の路地の入り口がそれぞれにのたうちながらばかりと口を開けていた。

「これは、ルルドを置いていった報いかな？」

とりあえず真ん中へ進んでみよう。

その選択が正しかったかどうか、ナジュールが知るのは随分先のことだった。

第二章：白き花の告げるもの14

城の中は、未だセイラとナジュールたちの不在には気づいておらず、明日の祭を待ち望む平和な空気が流れていく。

けれど、一箇所だけぴりりと緊張している場所があった。

クロエは視線を感じて振り返った。

目の前の自分を何者なのか見定めようとする警戒心の強い猫のような瞳でじっと見つめている少女がいる。

確かめるまでもなく、セイラ王女が連れてきたハナという侍女だ。引き結んだ唇が開きやすいように先に口を開いてやる。

「何か？」

冷たい物言いに、開かせようとしたはずの唇が強く噛み締められた。完璧な侍女を演じようとすればするほど、クロエの声は色を失い冷たく聞こえてしまうのだ。また失敗した。

その後悔は決して面には出ず、もともときりつとした顔立ちは、冷たい声と相まって怒っているような印象を与えてしまう。

「貴女、何ですの？」

ハナの声は僅かばかり震えていた。

將軍にも他国の王子にも遠慮なく叱咤を飛ばす少女は、今、唯一人の侍女に対峙することに恐れを抱いていた。

最近、ジルフォードと共にいるところをたまに見かけるようになってた女性は、すらりと背が高く、美人だ。名はすぐに知れた。

彼女の後見人は昔は強い権力を持った貴族だったらしく侍女仲間たちが教えてくれたのだ。

貴族の後見人がついていようと、侍女には変わらない。

他国の王子より恐ろしく感じるのは、今口について出て行くのがハナ自身の思いだからだ。

セイラのためでもなく、ジルフォードのためでもない。

理由も分からず、平穩だった自分たちの世界に他人の影がチラチラするのがひどく不快だったのだ。

なんて我侷な想い。

もし、彼女が純粋にジルフォードへの好意で近づいてきたのならば、この気持ちはおさまるだろうか。

「何の目的ですか？」

「ハナさん、とお呼びしてもいいかしら。」

クロエは頷きを返したハナに笑いかける。

途端にたじろいでしまうほど印象が優しく変わった。

「私、王族付きの侍女になりたいの」

ハナの中で何かがカツと熱を持った。

くっつかかろうとする前にクロエが続けた。

「私も孤児だったの。そんな私が、今や侍女。手に入りそうな幸せに全力で縋る。貴女なら分からない？」

一度持った熱が急速に下がっていく。
分からない。

そう叫んでしまいたかった。

けれど、それが出来ない事を見越したようにクロエは小さく笑ったのだ。

「私は貴女の気持ちがよく分かるわ」

「何を……」

「一度手に入れてしまったものは、絶対に手放したくないの。だって他に何も持っていないから。取り上げられたら、もう一度あの場所に突き帰されたら……怖くて、怖くてしょうがない」

全身を冷たいものが撫でていく。

頭先从冷たさが浸透してくる。

紙のように色をなくしたハナを見て、クロエは哀しげに目を伏した。

「私も、とても怖いもの」

お前なんて拾うんじゃないかった

そういわれる日が何時か来るんじゃないかって

その言葉は言ってしまうえば本当になる気がして、口に出す事さえ出来なかった。

侍女頭になったら、

もう一度愛しい人たちの家名に栄光を取り戻すことが出来たらなら。

そんな恐怖から逃れることが出来るに違いない。

クロエの瞳には決然とした意志があった。

「貴女が快く思わないのは分かっているわ。でもね、どうか邪魔をしないで」

廊下に残されたハナはケイトが声をかけるまで動く事ができなかった。

第二章：白き花の告げるもの 15

ナジュールと完全にはぐれてしまった。

子どもたちにねだられるままに話をして、気づいたときにはナジュールの姿は何処にもなかった。

念のため、石舞台の広場まで戻ったのだがそこにも姿はない。

どうやら一騒動起こして、広場から伸びる真ん中の道を進んだと聞きつけるとセイラも後を追ったのだが、いつのまにか裏街に入ってしまったようだ。

それまで、それなりに整然としていた路地が、いきなり半分ほどの幅になり、ぐにやぐにやと曲がりくねり始めた。

どこか埃っぽくて、薄暗い。

ケイトが迷路のようなものだと言っていたが、本当に終わりのない迷路の中に迷い込んだようだ。

途中で引き返してみても、もう一度同じ場所に戻れない。

頭上を振り上げば、青い空が見えることだけが頼りだ。

何処までも続く茶の石畳。

視界を遮るように窓から窓へとかけられた洗濯物たちに思考能力を奪われる。

早くここから出なければと思うのに、どちらに行けばいいのか見当もつかない。生憎、ここは表街のように屋根から屋根へと通路が繋がっていないため上からと脱出口を探す事もできず、ひたすら歩き続けている。

ナジュールはどこへ行ってしまったのだろう。

今更ながら、迷子になったらそこを動かない事とハナの声が聞こえてくる。

思い出すのが遅すぎた。

生来楽天家のセイラは、こんな機会もうないかもと、ぐるりぐるり視線をめぐらせながら歩いていると、固くて大きなものにぶつか

った。

「ん？」

振り仰いで見ると小山のようなものに手足がついている。

なんだろうと思っているうちに、それはもそりと動き出したのだ。それは緩慢に起き上がると、小さな黒い瞳でセイラを探し出した。

セイラの2倍の身長がありそうな青年だ。

丈が足りなかったのだろう。つぎはぎだらけのズボンに覆われた足を伸ばして立ち上がると、見上げるのに首が痛いほどだ。

適当に切ったような髪は気ままに天を突き、さらに青年を大きく見せていた。

「おっ」

おっきいと思つたのだが、セイラが口を開いた瞬間、そこから恐ろしいものでも飛び出すと思つているのか、その人物は、大きな手のひらで顔を覆い、物陰へと隠れようとした。

しかし、大きな体はいくら縮こまっても丸見えだったし、積み上げられていた荷物が盛大な音を立てて崩れていった。

もうもうと立ち上る砂埃の向こうでも、その青年の影はしっかりと見える。

「何やってんだい！」

怒号が飛んだ。

音を聞きつけ、建物から出てきた老女がキンキンと響く声で怒鳴りつけ、その身を支える杖で叩きつける。

「何の役にも立たないくせに、仕事ばかり増やすんだね！ このク

ズは！」

煙の向こうで痛そうな音が二度響いた。

「わっ私が悪いんだ。驚かせたから」

その声に老女は初めて、セイラに気づいたようだ。じろりと睨み付けるとふんと鼻を鳴らす。

「お前さんみたいな娘っこに驚くなんて、やっぱり唯のクズじゃないか。ほれ、ちんたらすんじゃないよ。さっさと拾いな。このノロマ。あほたれ」

老女は思いつく限りの罵詈雑言を浴びせかけた。

大きな青年は母親から叱責におびえる子どものように小さく小さくならうと身を屈めていた。

「ちょっと待つてよ。そんな扱いひどいでしょ」

振り上げられた杖の切っ先を掴んでセイラは叫んだ。

「何が悪いのさ！ 悪さしたら殴られるもんさ。それともクズって呼ぶことかい？ クズをクズって言うて何が悪いのさ。もともとこいつに名前なんてないんだからね」

「彼は何も悪いことなんてしていないんだから、殴られるのはおかしいでしょ。彼はクズじゃないから、そう呼ぶのはおかしい」

騒ぎを聞きつけて近所の人たちがわらわらと建物から出てきたが騒ぎの元を知ると、ああまたか、そんな表情を浮かべて帰っていく。

老女もセイラの剣幕に押されたのか、もう一度鼻を鳴らすと「さつさと片付けな」と怒鳴って去っていく。

取り残されたセイラと青年の間には不思議な沈黙が居座った。こちらを窺うようにしているのが分かるのだが、そちらを向くと目を背けられてしまうのだ。

「私、セイラ」

青年はそわそわとしている。

もしかしたら本当に彼には告げる名がないのかもしれない。

「トツドっていうのは、大樹の神様なんだ。命を司る神様なんだよ。」

小さな目がきょろりとセイラみる。

「もし、君が嫌じゃなかったら、君の事トツドって呼ぶ」

「トツ……ド」

長らく声を出していなかったのかもしれない。

声はかすれ、聞き取りづらかったら確かにそう言ったのだ。

「そう。トツド」

「トツド」

青年の口元がふると揺れる。

笑みには遠く、けれど彼なりの精一杯の感情の表し方だったのかもしれない。

「セイラ」

大きな指がセイラを指差した。

「そう。セイラ」

トッドはとてもゆっくりと話した。

大樹の葉を風が揺らしたときのように心地よい音で。
話は尽きなかったが、路地を渡る風は少々冷たきになってきた。

「そうだ。お城まではどう行けばいいか教えてくれない？」

ナジュールはもう城に帰ってしまったかもしれないし、探すのなら
は人手が多いほうがいい。

セイラもとりあえず裏街からは出ておきたかった。

気づけばハナに何も言わずに出てきてしまったのだ。 搜索隊が編成
される前に帰らなくては。

「に、二本目の路地を右に曲がったら、大通りに出る……」

「なんだ。結構近いところにいたんだね」

表街にまで出る事が出来れば、なんとか城まではたどり着けるだろ
う。

崩してしまった荷物も綺麗に積み重ねたし、空は夕暮れの態をなし
つつある。

そろそろ帰ろう。

「ありがとう。トッド」

視線を彷徨わすトッドにまたねと手を振れば、おずおずと振り返してくれた。

新しい友人が出来た嬉しさに足取りは軽く、石畳を跳ねる音も楽しげだ。

そのままの勢いで、二本目の路地を曲がれば見知った顔がセイラを出迎えた。

切れ長の目は少々冷たさを与え、まっすぐの黒髪が鋭さを与えている。

今日は結われていない髪がセイラが飛び込んだ勢いで起こった風にふっと揺れて再び色のない頬を彩った。

「カイザー」

見上げた青年は二度ほど城の中で会った事がある。

「どうしてここにいるの？」

「貴女を探しに」

短い答えにはっとする。もう搜索隊が組織されてしまったのだろうか。

「ジョゼ將軍がルルド殿を見つけまして、貴女方が街に下りたことが分かりました。まだ城のほうへは伝わっていないでしょう」

時間の問題であることは伝えなかった。

「街に下りるなどとは言いませんが、誰かに一言伝えていただきたいものです」

「はい」

淡々と紡がれる苦情にセイラは神妙に頷いた。

「ルルドは見つかったんだね。よかった。……ナジュール殿ともはぐれちゃったんだけど」

「あの方ならば大丈夫でしょう」

中々に目立つ青年だ。見つけようとすればさほど難しい事ではない。石舞台の広場での大立ち回りの情報も得ているし、居るとするならば其処からそう遠くない場所に居るはずだ。

「とりあえず、ジョゼ將軍と合流しましょう」

ジョゼは表通りに面した店でルルドと共に待っていることになっている。

流れるように進むカイザーの後ろをひよこりとセイラが続く。色々気になるものが溢れてはいるのだが、カイザーを見失わないように歩くのは中々の重労働だった。

今日は前夜祭。

どの通日も昼間の賑わいを上回るほどの熱気が立ち込めており、遅くなればなるほど人も増え行動がしづらくなってくる。

大通りへと続く路地では一歩進むごとに人にぶつかってしまう有様だった。

「あっ！」

頭につけてもらっていた魔除けの守りがすれ違う人の服に引っか

り、カンツと高い音を立てて石畳の上に落ちた。

慌てて拾おうとしても人の流れに押され、中々手が届かない。

あとちょっと。懸命に伸ばした手の先で銀に輝く球体は誰かの指先に捕らえられた。

「はい。お守りは落としちゃダメだよ」

にこやかに落とし物を拾ってくれた少年はセイラに負けぬほど鮮やかな色彩を着込んでいた。

可愛らしい笑みにつられ、セイラもへろりと微笑んだ。

「ありがとう」

「どーいたしまして」

バイバイ。カイザーに急かされていくセイラに手を振りながら少年は笑みを深くした。

セイラの姿が人に紛れて見えなくなると、笑みは寧猛なものに変わった。

「うふふ。よかった。ルカにそっくり」

外見は合格だ。

後は力量と内面。

今確かめたくてうずうずするけれど、いっぺんに知ってしまうのも後が面白くない。

贈り物のリボンは一つずつゆっくり解くのが楽しいのだ。

「またね。ぼくらのおひいさま」

ヒイラギはそれは楽しげに微笑んだ。

第二章：白き花の告げるもの 16

ルルドは所在無さげにずっと下を向いたままだ。

その向かいではでんと座ったジョゼが、ルルドの頭を彩る布に施された円形の模様の数を数えていたのだが飽きてしまい、店の店主を呼びつけて新たな注文をしているところだった。

ルルドの前では手をつけられなかった料理が冷え固まっていた。

「ここの店は汚いが味はアリオス一だぞ。食っておけ」

「汚いは余計だよ」

店主とジョゼの軽い言い合いの間もルルドは下を向いたままだった。泣き顔を見られたことが情けないのと、あまり言葉を交わしたことがないジョゼとどう話していいのかも分からない。

しばらくルルドにとって居心地の悪い沈黙が続いた後、目の前に皿が置かれた。

それだけなら視線を上げなかっただろう。

けれど鼻孔に広がったのは懐かしい香りだった。

「タハルの料理だろう？」

反応を示したルルドに満足げに笑いながら、ジョゼは皿を押しやった。

ずっと闇雲に歩き回っていたために疲れと空腹は頂点に達しており、懐かしい香りは置いていかれたとの孤独感に忘れていたはずの空腹を思い出すには十分だった。

豆と少量の肉を煮込んで塩だけで味付けたシンプルなスープ。

恐る恐る口につければ記憶と違わぬ故郷の味がした。

「この店主はこの国の料理だろうと作れるぞ」

何故か自分ごとのように誇らしげに言うジョゼにちょっとした反発感が生まれた。

「こんなのタハルの料理じゃない。もっと、ずっとタハルのものはうまい」

美味しいと思った。じわりと広がった暖かさが心地よかったのに、口からは真逆の言葉が飛び出した。素直になれない自分が齒がゆい。そんなルルドの気持ちを知ってか知らずか、ジョゼはルルドの言葉に頷いた。

「そうだろうさ」

「タハルはいい国だ。こんな、こんな馬鹿みたいに生ぬるくなんかない！」

「だろうな」

ジョゼが賛同するたびに次から次へとアリオスを否定する言葉が出てくる。

自分は使者の一人として来ているのだ。目の前の男はアリオスを代表するものといってもいい。

止めるべきだ。分かっているのに言葉は止まらない。

「本当だ！」

最後の言葉は悲鳴にも似ていた。

きつと見上げた男の顔にはしょうがなく相槌を打っているような気配はなかった。

タハルが小国だとあざけている様子もない。

「自分の国つてのはそういうもんだ」

ぽかんと口を開けたルルドの様子に始めてジョゼは口の端を上げた。ジョゼにも覚えのある感情だ。どんな大国よりも自分の国が一番。今でもそう思っている。

エスタニアと比べればアリオスなど力だけの蛮国だ。

歴史も芸術も学問も何一つ追いつけない。けれど、どちらかの国を選べといわれれば迷うことなくアリオスと言っだろう。

「だが、どうせなら他国の良いところを認めたうえで自分の国が一番だと誇るといい。そのほうが角がたたんからな」

ジョゼは了解も取らずにルルドの皿にスプーンを突っ込むと料理を口へと運ぶ。

うまそうにその一口を嚥下すると、アリオスの料理も「食べる」とばかりにルルドに押し付けた。

「それで？　なんでお前は路地のだ真ん中で泣きべそかいてたんだ？」

「なっ泣いてなどおらん！」

頬を真っ赤に染めたルルドを見てジョゼは喉元で笑った。

確かに涙が落ちたのを見たのだ。見られたと思ってるからこそルルドの頬も赤い。

「号泣する手前だったか？」

「違う！ わっ私はそんなに弱くない」

弱くない。そういつつも語気が弱くなる。

「弱音も吐けず、泣くことも知らん。そんな奴が強いとは限らん」

「……」

ジョゼの言葉は柔らかかった。

はつきりと言って此処は都とは思えないほどの乱雑さだ。

アリオスの、しかも都に住んでいるものさえ迷わす路地。迷子になったところで仕方ない。

かくゆうジョゼも迷った事など数知れずだ。幼き日に初めてここで迷ったときのことを思い起こせばルルドの心情など手に取るように分かる。

心細くて、寂しくて、置いていかれたのだと思ってしまうことも。

「置いていかれたと思うなら気の済むまで追いかける。途中で疲れたんなら休むのも良いだろう。案外向こうから戻ってくるかもしれないしな」

確信めいた言葉にゆるゆると頭を上げジョゼの視線を追うと、人ごみの中にナジュールが見えた。

「これはこれは、將軍にルルド」

「あ、に」

つい出そうになった言葉をルルドは何とか飲み込むことに成功した。もしジョゼが目の前に居なかったら口にしてしまったに違いない。

「いきなり消えるから驚いたぞ」

ナジュールに苦笑されルルドは下を向いた。そもそも先にナジュールたちから離れたのは自分のほうなのだ。置いていかれたなど、身勝手な思いでしかない。

確かに最初の行動はルルドに非があるものの、ナジュールには彼の思惑があつたことを知らないルルド、正直に自分の行動を恥じた。弟の思考を正確に辿りながら、ナジュールは己の中だけで苦笑してルルドに手をのばす。

「無事なら、それでいい」

ぼんと頭に手を置かれ二三度軽く叩かれると寂しさなど吹き飛んで、今度は別の意味で涙腺が緩んでいく。

「嬢ちゃんは一緒じゃないのか？」

「セイラ殿とも途中ではぐれてしまつてね」

セイラ搜索にはカイザーを狩り出した。情報集め、人探しそれならカイザーの右に出るものなど居ない。ジョゼですら把握しきれない裏街も彼ならば縦横無尽に歩き回れる。

ジョゼの絶対的な自信を裏付けるように向こうからセイラとカイザーも加わった。

「さて、帰りますか」

ケイトから報告を受けたハナが城門で眉を怒らせて立っているなど知らぬ一行は、前夜祭の熱気を十分に楽しみながら城へと帰っていた。

第二章：白き花の告げるもの17

「おっ」

まずジョゼが気づき、立ち止まったジョゼにセイラがぶつかり、よろめいたセイラを助けるために手を伸ばしたナジュールに余所見をしていたルルドが横っ面をぶつけ、カイザーだけが涼しげに城門をくぐる。

其処には苦笑を浮かべた門番とど真ん中に陣取ったハナの姿があった。

思いつきり戦闘態勢の彼女は、まずジョゼをきつと睨み付けた。全く非が無いにも関わらず思わずきくりと身を強張らしてしまうほどの迫力があつた。

今回は迷子を見つけた功労者として褒めてもらってもいいはずなのに。

機転を利かせてカイザーに連絡を取らなければ日没までに3人が帰ってくることも出来なかったはずだ。

「ハナ嬢、怒ってるな」

後ろからひょこりと前を覗くセイラに言えば、セイラは不明瞭な声を出した。

肯定にも否定にも取りかねる。

「ただいま。ハナ殿」と場の雰囲気も考えず、にこやかに手を振るナジュールをにらみつけるハナはどうしても怒っているようにしか見えないのだけれど。

冷たい視線を降り注ぐハナの元へセイラは軽い足取りで近づいていく。

右手に揺れている袋にはハナやシルフォードへのお土産が入ってい

る。

屋台で売っていた安い菓子なのだが、アレぐらいで機嫌を取る事ができるだろうか。

「ただいま」

その言葉に、もともと吊り上っていた眉が更にきゅっと高くなった。ハナが口を開く前に消えてしまおうか。そんな思いがジョゼの脳裏を占めたが、彼の思い描いたような未来は訪れなかった。

ハナの口元が揺れるより先にセイラの指先がハナの眉間へと伸び、年頃の少女には似合わない眉間の皺を伸ばすように、くるりと円を描く。

「何かあった？」

ハナが本当に怒っているときは、その想いとは逆に怖いほどの笑みを浮かべるのだ。

吊り上った眉は怒りからではなく、懸命に何かを我慢している時の仕草だ。

痛みだったり、悲しみだったり。

「何も」

僅かに震える声に説得力などなかった。

その様子にセイラはくすりと笑う。

「ハナの眉間は正直なのに」

「セイラ様が何も言わずに街に下りてしまっからですわ。心配しましたのよ」

もっともらしい言葉ではあったけれど、セイラには違うと分かった。ここで問い詰めても良いけれど、ジョゼやナジュールが居る前では本当のことは言わないだろ。

「うん。ごめんね」

調子を合わせて、仲直りの印に額をあわす。後で聞かせてねと。

何も言わずに遅くまで出かけてしまったのは本当に悪かったと思っただから「ごめんね」にはたくさんの想いを込めて。

「ほう。やはりハナ嬢の扱いは嬢ちゃんが一番か」

ニイと笑うジョゼの姿を目にして、ハナは再びきつと視線を上げた。

「ジョゼ殿！ ナジュール殿！ 一言も告げずにセイラ様を連れ出すなんてどういう見なんですの」

予感していた嵐は一拍おきに吹き荒れた。

「俺関係ないんだが……」そんなジョゼの呟きなど綺麗に無視された。

何時の間にかカイザーの姿は無く、笑いを堪える門番の前で何故かジョゼまですみませんと頭を下げる羽目になった。

「ジンとカナンにもお土産渡しに行こうよ」

苦笑と共にセイラが言った時に、やっと解放されるとジョゼは小さくため息をついた。

「ええ、そうしましょう」

にこりと笑ったハナがセイラの背中を押して、一度振り返った。
一睨みでついてくるなと釘を刺して歩き出す。

「……今でも、あんなのがタハルに居ればいいと？」

將軍と他国の王子を一睨みで黙らすほどの侍女。
煩い女は撤回しようとするルルドは思った。

「一人ぐらいいてもいいのではないか？」

「嫌ですよ。あんな怖い女」

のほんと答えたナジュールにルルドは新たな見解を付け加えた。

城門から十分に距離をとってセイラは背後に問いかけた。

「本当は何があつたの？」

「何でもないですよ」

ジルフォードに近づいた侍女は自分と境遇が似ていて、恐怖を言い当れら他のが悔しかったり、彼女の存在が嫌なのに彼女の心情も分かっってしまう。

そんなどろどろとして不鮮明な己のうちを話して聞かせるなど無理だと思った。

こんな醜い心のうちを知られてしまったら、きっとセイラは呆れてしまうだろう。

それならば悟られないように完璧に表情を作れば良いのにそれすら出来なかった。

「ハナが何を怖がってるのか知らないけど、大丈夫だよ。」

それだけで心のうちのもやもやしたものが晴れてくる。

そうだ。怖がることなんてない。

クロエは邪魔をするなといったけれど、自分の大切なものを守るためならばハナの戦わなければならぬのだから。

「今度は一緒に街に行こうね。新しい友達が出来たんだよ」

「はい。……ところでその飾りどうしましたの？」

やつと見慣れない被り物をしていることに気が回るほど余裕が出てきた。

「ナジュール殿とルルドがやってくれたの。タハルではこうするみたいだよ。似合う？」

「ええ」

幾重にも巻いた布はセイラに似合うような色を選んでいるため違和感はない。

異国風の装いが少しばかり大人びて見せてよく似合っているといえた。

「ですが、私のほうがもっとセイラ様に似合うものを探せますわ！」

「……え？」

なんか次に街に下りた時着せ替え人形と化しそうなんだけど。セイラの心配を他所にハナはごうと闘士を燃やしていた。

城門が騒がしいその頃、書庫の中はひっそりとしていた。

カナンの部屋には二人の人物がいたがどちらも言葉を発してはいなかった。

湯気を立てるポットから湯を注ぎながらカナンはちらりとジルフォードを見た。

珍しい事に机の上に積まれた本は、ジルフォードが此処に来て一度も表紙を捲られていない。机にはしまった木目を追うように視線を下を向き、殆どあげられることは無い。

白い髪が表情を隠し、何を思っているのかも判断できなかった。

「何か考え事ですか？」

いつもなら邪魔をすることなどないのだけれど、あまりにそうしている時間が長いからカナンはお茶を差し出すついでに問うてみた。

「うん」

声は重いのにどこか上の空。

ジルフォードは考え事をするのが嫌いではない。

15年もの時間を一人で持て余してきたのだから。

けれどその考え事の中に自分の存在が入るとなるとひどく難しくめんどくさい事になってしまふのだ。

少し前からジルフォードの世界は変わっていった。

広くなったといっても良いかもしれない。

セイラが来たことによつて周りに居る人の数が格段に増えた。

ナジュールにルルド。そしてクロエと名乗った一人の侍女。

クロエとの会話はジルフォードに外の世界を示した。

文字だけで追うのではない、生きた外の世界を。

もし、彼女の語った言葉が真実ならばアリオスにとって重大な問題に違いなかった。

このままではいけないのだと思う。

ジルフォードにとっても王子という立場にとっても。

何故、彼女がその話を自分にしたのかは分からないけれど、これは与えられた機会なのかもしれない。けれど。

「やるべきことがあるのにどうして良いのか分からない」

それは初めて口に出されたジルフォードの弱音だったのかもしれない。

カナンは瞠目した後、ふっと目元を柔らかくした。

「順序だててやればいいですよ。あれやこれもなんて無理ですからね。出来る事から一つずつこなししていけば道は開けていくものです」

「出来る事を」

カナンの言葉を反芻するように、ジルフォードはゆっくりと呟いた。

「はい。行き止まりにぶつかったら誰かに教えを請うのもいいでしょう。セイラ様に聞いてみるのも良いかもしれませんね。きっと面白い打開策を教えてくださいますよ」

耳を澄ませば、扉の外からは明るい笑い声が響いてきた。

「ただいま」

暖かな春の風が吹いたかのように明るい声だった。

セイラがどこに行っていたのかなど知らない二人にとって可笑しな

挨拶ではあったのだけれど、ここが帰るべき場所だと認識されていることを知るとほっと心が温かくなる。

鮮やかな色彩を纏ったセイラは部屋の中に華を添えた。

「お土産があるんだよ」

「セイラ様ったら内緒で街に下りてしまったんですよ」

不平を言いながらもハナの表情も晴れやかで、勝手知ったる棚をあけると深い青で色づけされた大振りの皿を出した。

セイラが大事そうに掲げていた袋を傾けると、コロンコロンと花が落ちてきた。

白い花がいくつも落ちてきて、青い背景に美しく映える。

「綺麗ですね」

シルトの花を模した焼き菓子を真白な砂糖でコーティングしたものだ。

時折、本物のシルトの花びらを砂糖漬けにしたものが落ちてくる。祭の期間にだけ作られるお菓子でなかなか定評のあるものだとかナシも記憶している。

「ん？」

一粒菓子を摘んでいたセイラはシルフォードの視線に気づいた。

セイラ自身を見ているというよりも取れなかった魔除けのお守りを目で追っているようだった。

一度取れたそれを何とか元の位置に戻そうとしたのだが、ナジュールがやるようにはうまくいかなかったのだ。

僅かに引つかかっている紐に白い指先が伸びてきて、そっと取り上

げる。

見たことがあるものだと思っていたらナジュールの首元を飾っていたものだ。

「ナジュール殿からもらったんだ」

ジルフォードの考えを肯定するようにセイラが続けた。

「そう」

今度は落ちないように頭ではなく首へと掛けなおす。

胸元で揺れる輝きに、少しだけ胸のうちがざわついた気がした。

その意味など知らぬから暫く見つめていると、セイラが不思議そうに見上げてきた。

「ジンもお守り欲しい？」

見当違いな問いかけに、ジルフォードはそうなんだろうかと考えてしまった。

特に欲しいわけではないのだけれど、セイラは一人よいことをひらめいたと手を打った。

「そうだ。ジンも一緒に街に行こうよ。ジンに似合うお守り探しに行こう」

こともなげに15年ぶりに城の外に出ようと言う。

もしかしたら、これが今、ジルフォードに出来る事だろうか。

明るい声が背中を押して、考える時間は短かった。

「うん」

「約束だよ」

小さな頷きにぱつと光りが弾けた。

第二章：白き花の告げるもの 18

暗い世界を松明が照らしている。

煌煌と焚かれる炎も全てを照らす事はできず部屋には深い陰影がついていた。

半身を闇に吞まれた男は苦しげに呼吸をしていた。

岩に開いた隙間を風が走るようにヒューヒューとか細い息だった。

窓にかけられた布の向こうには荒涼とした砂の世界がどこまでも続いている。

男の濁り始めた瞳はどうにか星の動きを見ようと天を睨みつけた。

自分の息子たちの背負う宿命の星が滑り落ちる事のないように。

その窓の向こうで見知らぬ青年が嗤った。

闇を背負い、月明かりを浴びて。

吊り上った唇は今しがた血をすすったかのように赤かった。

笑みを作りながらも一切それを含まない冷たい瞳も同じような赤だった。

「アンタの舞台はもう終わり。星読みなんて無意味でしょう。どんなに頑張ったってもうアンタは関係ないんだから」

「この化け物め」

自分の命はそう長くはないと、諦めていたはずなのにかけ布を握り締める拳には力が入った。

「ああ、間違っちゃいけないよ。タハルの王様。そこはね、「この人間め」って言わなきゃ。人より怖い魔物なんていやしないよ」

暗い怒りを含んだ視線も青年は難なく受け止め、なお暗く深い憎し

みを宿した視線を返した。

「それにね、魔物は気の遠くなるほど昔の復讐なんてしやしないよ。ねえ裏切り者の王様。心配しなくて大丈夫だよ。あんたの息子には相応しい最期を与えてあげる。裏切りには、裏切りを。ね？」

男の瞳がくわつと開いた。

血走った瞳からは一粒だけ涙が零れた。

やせ細った手が空をかき、口が絶叫の形に開かれる。けれど音はなかった。

「アンタの亡骸はシルトで飾ってあげる。僕の一番好きな花だから。知ってる？ シルトの花言葉。未来をつなぐだよ。……ああ、もう聞こえてないか」

はっと空気の抜ける音がすると伸ばされていた手が、ぱたりと胸の上に落ちた。

ちょうど胸を飾っていた銀の魔除けの上に。

「残念だったね。それ、人間には効かないみたいだよ」

暗い忍び笑いを消すようにびょうと風が吹いた。

風に揺れた青年の髪は月明かりを受けて白銀のように輝いた。

タハルから遠い、遠いアリオスの城の明かりの消えた部屋で誰かが
そっと天に向かってため息をついた。
何とか天の端に縋っていた小さな光りが、流れ落ちていった後だっ
た。

第三章：夕闇に映う色

空は白み、やっと街も起きようかという時間帯。

静けさに満ちた空間を壊さぬように、音もなくジルフォードは進んだ。

石畳も廊下の床も彼の存在など知らぬといったようにわずかばかりの音も立てない。

その朝、ジルフォードの存在を示すために初めて鳴ったのは重厚な櫓の扉だった。

ゆっくりとしたノックの後「入れ」と普段どおりのルーファの声がした。

このような朝方でさえも誰かが訪ねてくる事になれているようだった。

白い指先が、銀で飾られたドアノブを握るのをしばし戸惑い、一拍の後、決意を示すように強く握られた。

扉を開ければ、すでに身支度を整えた王は机に着いて高く積まれた書類に目を通していているところだった。

いったい何時から仕事を始めているのか。

昨夜も随分と遅くまで執務室には明かりがついたままだった。

ふっと起こった風がルーファの前髪を揺らし、彼の視線を上げさせた。

ルーファの表情に疲れの色は微塵もない。

「ジルフォード」

部屋を訪ねてきた人物にルーファは驚きを露にしたが、すぐさま笑顔となり中へと導いた。

ジルフォードのほうから出むいてくるなど初めてのことだ。

再三呼びつけてやっと来るのが常だった。それも年に一、二度のことだ。

いつも扉をくぐるとき、見えない囲いでもあるかのようにジルフォードの足取りは不安定に見える。

本当に入っているのかと怖れを抱いているように。

それが少し寂しい。

部屋の中央で止まったジルフォードとルーファまでの距離は遠い。

もう少し前へ来いと手招きすれば、おずおずとほんの数歩だけジルフォードは前進した。

まるで臆病な野生動物を手なづけようとしているようだ。

「どうした。私に頼みごとでもあるのか？」

それは願望でもあった。

小さく頷く姿に更に驚きが募る。

頼みごとをされたことなど一度としてない。

「保管庫に入る許可が欲しい」

「保管庫？」

地方の台帳ばかりがあるそこに何の用があるのだろうか。

確かに其処を利用するものは厳しく管理されており、入るにはアリオスの紋章を持ったものに許可を貰う必要がある。

すなわち、王族や元帥、其処を管理する役職のものなのだ。

ジルフォードもマルスを表すカラスの彫り込まれた印章を持っているはずだった。

「私が許可を出さなくてもお前なら入れるはずだが。印章を失くし

たわけではないのだろうか？」

ジルフォードの手のひらの上で、一度も使われたことの無い印章がころりと転がった。

それはインクをつけた痕すらなく、美しい乳白色を保っている。それを見つめるジルフォードの瞳はその価値を全く認めていないようだった。

時に五元帥の決定さえ覆す事ができるほどの力を持つものだというのに、己の名前が彫りこまれているだけで路上の石ころほどの力も認めていない。

その様子に苦笑うと、一番上の引き出しに入っていた許可証を一枚取り出した。

「いいだろう。許可を出そう」

ルーファは右手の中指につけた指輪の表面にインクをつけると、紙に印を押し、署名をほどこした。

ジルフォードは差し出された許可証をしばし見つめながら、ゆっくりと取った。

「ありがとう」その言葉を聞いてルーファが浮かべたのは、優しい笑みだった。

「それで、何をしにいくんだ？」

「できる事をしに」

「そうか」

答えは抽象的で曖昧だったが、深くは問うまい。弟なりに掴んだ道を見守るのが一番良いと思うから。

「ジルフォード」

今日から始まる春告げの祭は、新しい季節を祝うのと同時に決意を立てる時でもある。

「今、やりたいことは何かあるのか？」

出来る事をしに行く弟のやりたいこととはなんだろうか。
国全体を揺るがす事もできるジルフォードの願いは。

「セイと街に行く」

「そうか」

なんて他愛のない願い。ただ伴って門を出ればいいだけの話しだ。
けれど、城に押し込められてから一度として外に出たことのないジルフォードにとっては途方もなく大きな願いに違いない。

「ナジュール殿に先を越されてしまったな」

昨日の一連の騒動はルーファの耳にも入っていた。
行き先も告げずに勝手に城を出るのはいただけないが、あまりにも
楽しそうに街の様子を語るセイラの姿を見てしまえばお小言を言う
気も消えてしまう。

「祭の二日目にはシルトの花を空からまくのだ。中には花卉が多い
ものが混じっていて、それを取る事ができれば、幸せでいれるら
しいぞ。セイラ殿と行くといい」

祭の一番の見せ場は最終日の春乙女の舞だが、一番人気といえば二日目の花流しの行事だろう。通常五枚の花弁を持つシルトだが、中には六枚のものもある。

ルーファもダリアにねだられていった事があるのだが、無数の花が舞い散る光景は圧巻だった。

ルーファは小さく頷いたジルフォードに特別な場所を教えると、笑みを浮かべながら明日一日ナジュールを城に足止めする計画をはじき出した。

第三章：夕闇に映う色2

クロエの足取りは軽かった。

城の中ならば絶対にしないのだが、大通りに位置する屋根へと続く階段を二段飛ばしで駆け上がり、一番高い位置までくると、くると一回転した。

今日から祭が始まる。

侍女たちも交代で休みを貰う事ができるのだ。

クロエは無理を言って初めの日に休みを貰った。祭の初日へ家に帰る事が出来るように。

侍女のそれぞれには城の中に部屋を与えられており、衣食も十分に与えられているので頻繁に街へ下りてくる事はない。

おおっぴらに街に下りる事が出来るのは年に数度の祭のときくらいだ。

窮屈な侍女服を脱ぎさって開放的な気分だった。

軽い足取りのまま屋根の上を伝って、居住区まで来て、家の前に立つと明るさは少し沈んだ。小さな小さな家だ。

キッチンと小さな部屋が2つあるだけの粗末な家だった。

表街で場所は悪くないけれど、地方領主だった頃の生活には程遠い。クロエは首を振った。

せつかく久しぶりに会えるというのに暗い顔を見せるわけにはいかないのだ。

扉を叩く時、いつも緊張する。

彼らは今も自分を歓迎してくれるだろうか。

「ただいま」

ドキドキしながら扉を開けると、柔らかな笑顔が出迎えてくれた。灰色になった髪を丁寧に撫で付けた老夫婦。

洗いざらしの服は清潔だけれど、随分昔の型だった。

「「お帰り。クロエ」」

「ただいま。父様。母様」

両側からぎゅっと抱きしめられてクロエは泣き出したいほど幸せだった。

同じほど強く抱きしめ返して何度もただいまと繰り返す。

泣くのは懸命に堪えた。きつととても心配してくれるから。

抱擁が終わると席へと招かれて、暖かいお茶が注がれた。家に似合わないほど高級なお茶だ。昔、値段も知らなかったクロエがおいしいといっってしまったから、クロエが帰ってくる日にあわせて彼らは用意してくれているのだ。

部屋の中はとても質素で人数分の食器と机と椅子。そんなものぐらいしかなかった。

「はい。お給料もらったの」

クロエは大事に持っていた皮袋を差し出した。半年分のお給料。さほど多くないけれど、この家にとっては唯一の収入源だ。

「クロエ、自分のために使ってもいいんだよ」

髪飾り一つつけていないクロエの姿を見てカーサは瞳を伏せた。クロエも年頃だというのに苦労ばかりかけてしまっている。

「気にしないで。母様」

城ではお腹いっぱいにご飯を食べる事ができるし、侍女服は支給さ

れるから困る事もない。

孤児だった頃を思えば、なんて幸せなことだろう。

今回渡したお金も最低限だけを残して、全て使われてしまうことも知っている。

年に一度の春告げの祭だ。

彼らは楽しみにしている子どもたちのために、おしげもなく使ってしまうに違いない。

アリオスには孤児が多い。このタナトスとて例外ではなかった。

裏街には孤児が溢れ陰惨な時代があった。

ルーフア王になってから公の孤児院もできたが、とてもではないが全てを補う事はできないのだ。

クロエの両親はあぶれた子どもたちに教育を衣服を食料を与えていた。

彼らのやることは地方領主であつたときから変わることがない。

けれど、権力を失ってから出来る事は格段に減つたと思う。

いくら頑張つてもクロエのわずかばかりの給料では、昔ほどたくさんの施しを与える事はできない。

正しい事をやっているのに、どうしてひどい目にあうのだろう。

孤児を救うことよりも戦果を立てるほうが重要なんだろうか。

彼らには養子に取つたクロエ以外子はおらず、年老いたマークは戦場に立てない。

戦果を立てなかった。それだけで領地を追われ、倒した敵の数ばかりを誇るブルングルと名乗る貴族に取つて代わられてしまったのだ。せつかくうまくいつていた孤児院も、潰されたと聞く。

もしも、自分が男で戦場に立つ事ができたら何か変わっていただろうか。

叶うはずのない“もしも”は今も増え続けている。

「クロエ？」

表情の沈んだ娘のことを気にしてカーサがクロエの顔を覗きこんだ。心配そうに揺れる瞳が嬉しくて、何も出来ない自分が悔しかった。

「子どもたちのお土産は何がいいかと思って。やっぱりシルトの砂糖菓子かな？」

「そうねえ。皆好きだものねえ」

ありえない奇跡を願うより、手の届きそうな“もしも”を選んだ。けれど、今やそれも気持ちが折れてしまいそうだ。

ジルフォードの付の侍女頭になれば、もっと生活は豊かになりクロエという人物の発言力も増してくる。

いつか、王にこの惨状を直接訴える事もできるだろう。

それなのに、あれほど固く決意したというのにジルフォードに近づくのが怖くなってきた。

利用するのが嫌なのだ。

「クロエ、侍女が嫌ならば止めても良いんだよ？ お前の好きな道を進めばいいのだから」

暖かく大きな手が背中を叩く。

彼らの前では今でも小さな子どものようにだとクロエは思う。

「うっん。侍女の仕事は好きよ」

「そうかい？」

「そうよ。お城の中はとても綺麗だし、侍女仲間たちは優しいし……お友達になりたい人も出来たわ」

「まあ、良かったわ」

カーサは、ふわりと綻んだ。

クロエは人に嫌われるような子ではなかったけれど、友の話は一度も聞いたことがなかったからだ。孤児だという負い目があるのか、どこか一線を引いて人と接する子だったから、彼女の言葉がとても嬉しかった。

「そろそろ行こうか。子どもたちが待ってるよ」

二人の後に続きながら、クロエは自分の言った言葉を反芻していた。友達。

ああ、そうか。自分はジルフォードと友達になりたいのだ。

利用するとか、されるとかそんな関係でなく話をしてみたかったのだ。

納得してしまえば、その事実はずっと自分の中に落ちてきて、ありえない“もしも”が増えたことに気がついた。

第三章：夕闇に映う色3

保管庫の受付に立っていた男はどうしたものかと途方にくれた。

ここで二十年も仕事をしているが、こんな困った事態になったのは初めてのことだ。

貸し出すものを聞き、裏方が用意した資料を渡すだけの簡単な仕事だったはずなのに、心臓はバクバクとなり、広い額にはびっしりと汗をかいていた。

元々狭い保管庫の中は、今や息苦しいほど狭く感じられた。

保管庫を利用するものは必ず管理せよとの規則はあったが、王族ならば引き止める事もせず、通してきた。

目の前の人物は素直に通してよいものか。

王族には違いないだろうが、後で問題になったりしないか。

ぐるぐると今まで使っていないかった脳みそがフル回転しているが、通すか通さないかの二者択一さえ出来ないでいる。

その間、目の前に立つ青年はぴくりとも表情を動かさないというのに、ちらりと見上げる角度を変えるたびに瞳の色が変わるのが恐ろしくて目を伏した。

早くしろと怒鳴られたほうが、どれほど楽か。

目の前に紛れもなく国王の署名の入った紙が出された時には、心底安堵した。

これならば通したところで問題が起こっても責任は国王にある。

男は手招きすると、棚のあるほうへ行けと身振り手振りで伝えた。

「ありがとう」

風のように短い謝罪が耳に届き、顔を上げた時には白い姿は書棚の向こうに消えた後だった。

「あれ、あれれれ？」

人がいるはずのない場所に誰がいる。

保管庫の中にいるのは受付の男と自分だけだ。

切るどころか梳かす事さえしていない艶のない髪の間から、ケネツトは見知らぬ来訪者を見つめた。

見慣れない容姿に連日の疲れで夢でも見ているのかもしれないと何度も瞬きを繰り返し、頬を抓っても変わりはないかった。

もしかしたら、夢ではなく幽霊だろうか。長い髪の毛も肌も怖いくらい白いからきつとそうなのだろう。

でも、保管庫に幽霊の気を引くものなんてあるだろうか。あるのは地方ごとの台帳ぐらいだ。

「なっ、何してるのかな」

物陰からこっそり覗いてみると、どうやら資料を片っ端から見ているようだ。

せつかく並んでいる台帳がバラバラになりはしないか。

そんな思いは杞憂で、取り出された台帳は前と同じ場所にきっちり戻されていく。

ページを捲る手つきは優しく、補修しようと思っていた古い台帳もカサリとも音を立てない。

貸し出した資料が折れたり、汚れて返ってくることを嘆いていたケネットには、とても好ましく思えた。

あんなに丁寧に扱ってくれるのだもの。幽霊だっていい幽霊に違いない。

そんな考えをはじめ出したケネットは、幽霊を手伝ってやろうと物陰から、のそりと這い出した。

「なっ何を探してるの？」

もし第三者がいたら、お前のほうがよほど幽霊のようだったかもしれない。

手足は枯れ木のように細く長く、長く絡まった髪の毛は顔を隠し膝下までたれている。

貸し出す資料は、受付の男が余所見をしている間にすっと置いてくるから、まともにケネットの姿を見たものはこの数年のうちには居ない。

久しぶりに姿を曝す気恥ずかしさが手伝ってか、言動がぎこちなく幽霊に拍車をかける。

そんな人物に幽霊呼ばわりしたジルフォードが顔を上げると、ケネットはびよんと飛びのいた。

足にバネでもついているのかと疑いたくなる跳躍だった。

「目めめめっ目が紫だった！ ん？ あれ？ 緑だった？ えっつと青いのも……」

ケネットは自分が何を言っているのか分からなくなってきた。

一回の跳躍で物陰に逃げ帰ったケネットは、もう一度幽霊を窺った。

「あつ緑だ。」

鮮烈に目を焼いた紫はなんだったんだろう。

ここには台帳と壁以外の色は無いから、どの色にしてもはっとするほど美しいけれど。

緑色の瞳が、こちらを見ていることに気づいてケネットはへらりと笑った。

「おっおいら、出納係なんだ。よっよかったら、探すので、手伝うよ？」

「紫！」

一歩近づくとたびに瞳の色が変化した。

やっぱり幽霊つてすごいんだ。その喜びを声に出して表してしまいたかったけれど、その前に幽霊が声を出したので止めておいた。

「ザクセン地方について知りたい」

久しぶりに聞く、受付の怒鳴りつけるような声以外の声は耳に心地よかった。

静かでとても澄んだ音だ。

「ザ、ザクセン地方のしつ資料なら、この段からここまでがそうだよ。あつあそこは最近領主様が変わっちゃったんだよね。前の領主様、とてもよい人だったのに……」

そっついながら、ケネットは棚の資料に手をかける。
ちゃんと年代ごとに分かれていて、色分けもされている。

「なぜ、変わった？」

「い、今の領主様はリグンブル様なんだけど……」

十年前の台帳を手に取った。
分厚くずっしりと重い。

貸し出しが多いせいか、補修箇所も多く変色もしている。
一番苦労したけれど、ケネットはこの台帳が一番好きだ。

「前の領主様は、メイヤー様っていうんだ」

差し出された台帳を受け取り、中を開くとびつちりと文字が書き込まれている。

足りなくなつたのか紙を足した跡もあり、他のものにはなかった手紙やメイヤーに贈られたお礼状といったものを含まれている。

「孤児院を立てたりね、民の生活向上のために尽力したり、とても素晴らしい人だったんだよ」

実際に会ったことはないけれど、その文字からは人柄が滲み出してくるようだった。

毎年かかれる台帳は一年も欠かすことなくマーク・メイヤー自身が

書いている。

ケネットには筆跡を見ればすぐに分かった。

伸びやかで優しいげで、けれど怒りを含んだ内容には相応に怒りを滲まして。

城に届く嘆願も彼の筆跡だった。

「でもね、メイヤー様はお年だし、子どもは女の子だけみたいだったから十年前の戦には出なかったんだよ。領地に居たのもほとんどが子どもとか、お年寄りだったみたいだし」

その年を境に台帳の厚さはめっきり減った。

十年分をあわせても、メイヤーの書いた一冊に及ばないだろう。淡々と感情の含まれない文字が作物の取れだが、人口の変動。そんなものだけを伝えていく。

「そのせいで、メイヤー様は軟弱者呼ばわりされたんだ。……戦果を立てたりグンブル様に領地を取られちゃったんだよ」

もともとザクセンは街道に沿った豊かな土地だった。

開発すれば、もっと豊かに主要な土地になると思っている貴族は一人ではなかった。

メイヤーも何度も打診を受けたが諾とは言わなかった。

弱者を放っておいて豊かさや富を追い求めた結果が、他ならぬ都だと知っていたからだ。

年老いて戦いに出れなくなったことをこれ幸いと、貴族たちは結託して叫んだ。領主の交代をと。

「……剣を振り回すだけが戦いじゃないのにね」

ケネットは労わるように背表紙を撫でた。それが、メイヤーの背中でもあるかのように優しく。

分厚い台帳はメイヤーの戦いの記録でもあった。

暴れ狂う川をどうにか治めようと奮闘し、凶作に流行り病。全てに尽力し、時に勝利をおさめ、涙を流したこともある。

「他に知りたいことがあったら、なんでも聞いて。此处にある資料にかいてある事なら教えて上げれるよ」

ここにいるようになって、一步も外の世界には出ていない。

けれどこの国のことを誰よりも知っている自信はあった。

王様だって五元帥だって、この台帳全てに目を通したことはないはずだから。

ケネットが知るの是一拍おきの歴史だけれど、組み立ててみれば未来のこともほんの少しだけ透かして見る事が出来る。

「ありがとう」

何を言われたのか分からなかった。

この薄暗い保管庫に住み着くようになって一度として聞いていない言葉。賛辞を受け取るのはいつも受付の役目だった。

出納係はもくもくと受付が頼まれたリストをもとに資料を出してく
るのが仕事だ。

いくら頑張っても、人前に顔を曝す事などない。だから言葉の意味が瞬時には伝わらなかった。

じわりと昔の記憶が蘇ってきて体が熱を持つ。心臓が必要以上に高くなり、頬が熱い。

耳までじわつと熱くなり、それが嬉しいという気持ちゆえだと気づいたときには同じ言葉を言っていた。

「ありがとう。お、おいらケネットって言うんだ」

もそもそと前髪をかき分けてケネットは顔を出した。

久しぶりに直接見る部屋の明かりは眩しくて細めた視線の先で、幽霊はちよつと困っていた。

ありがとうにありがとうを返すのは可笑しかっただろうか。

「“ありがとう”嬉しかったから」

嬉しげに口元を綻ばすとケネットは幼く見える。

「……ジルフォード」

小さく告げられたのが名前だと知って、ケネットは更に表情を緩めた。

なんてぴったりの名前だろう。

今は、月の姿はないけれど突然現れた彼は、“ありがとう”をくれたから。

「ジルフォード。優しい叶え人の名前だね」

びよんと跳ねると重たげな髪も浮き上がる。

彼は幽霊ではなくて、満月の晩に現れる夢幻の存在だったのだ。

「ありがとうのお礼にいい事を教えてあげる。メイヤー様はね今、タナトスに住んでいるんだよ。ザクセン地方のこと知りたいなら、メイヤー様に聞くのが一番良いかもしれないね」

お礼を言って帰っていくジルフォードに背に手を振って、ケネットは何度もその名を繰り返した。

「ジルフォード。ジルフォード。ジルフォード……ん？？ジルフォード？　確か王子様の名前もジルフォード……」

言葉少なに綴られた王子の誕生。

確か髪の色は白かった。瞳の色は……

「どうしよう！　おいら王子様に“ありがとう”って言われちゃった」

王族ならば保管庫には容易に入ることが出来る。

嬉しさと驚きとでケネットは暫く保管庫の中を飛び跳ねまわった。

第三章：夕闇に映う色 4

セイラは全速力で廊下を駆けていた。

グランに見つかればお小言くらいではすまないだろうが、そんなことを気にしている余裕はない。

ぱたぱたと可愛らしい足音が背後からしないように祈りつつ、懸命に駆けた。

春乙女の舞が一応完成した。

その安堵のせいで緩んだ思考のまま口を滑らしたのがいけなかった。どこからともなく現れた侍女たちが手に手に煌びやかな衣装を持つてにこりと微笑むのだ。

さあ相應しい衣装をあつらえましょう。

一瞬の間を突いて逃げたのはいいものの、掴まれば絶対に逃がしてもらえない。

細くて押せば倒れてしまいそうな彼女たちに乱暴を働くことは出来ないので掴まらないことが最重要課題なのだ。

実際の彼女たちは、そこらの暴漢を撃退できるぐらい強いのだだけだ。

「むゝこのままで良いのに」

本当にそういう気持ちで作ったのだ。

着飾って澄まして舞うためじゃない。

「うっ？」

唸りつつ走っていると、目の前を白い影が横切った。

今はもう懐かしい雪の色。

「ジン……っ！」

こちらに気づいて立ち止まったジルフォードの背に飛びつく勢いで身を隠す。

「う……」

そろりと窺った廊下の先を数人の侍女が駆けていった。

どの娘も瞳に使命感をたぎらせて、手には遠慮したいものを山のように積んで。

とっさにジルフォードの背に身を隠したものの彼女たちには目的地があるようで、ジルフォードの姿にも気づかなかった。

ほっと安堵しつつも彼女たちは進んだ方向を見て嫌な予感がした。向こうには書庫がある。

驍の行き届いた彼女たちが書庫の中で騒ぐことはないけれど、唯一の扉の前で目を輝かしているに違いない。

掴まれば、即連行されてしまう。

セイラの部屋は当然押さえられている。行く場所を失ってしまった。

「書庫に帰るとこ？」

「うん」

「そっか」

それならば此处で分かれたほうが良いだろう。

そう思つて「じゃあ、またね」と手を振り背を向けようとするとジルフォードが不思議そうに尋ねた。

「来ないの？」

二人が会えば、書庫に行くのが当たり前。
そんな常識が出来上がっているかのように。

「うん。行きたいのは山々なんだけどね。あんまり彼女たちに捕まりたくない気分なんだよ」

どうせ衣装を選ばなければならないと分かっているけれど、一息置いて欲しい。

ようよう形になったものが、しっかり自分のうちに根付くまで。

「……ジン？」

何を告げることも無く手を引かれると、びっくりしたのは一瞬で自然と足は導かれるままに進んでいく。

手をつなぐなんて可愛らしいものではなくて、袖を引っ張られているに過ぎないのだけれど何だかちよっとだけ嬉しくなる。

それも引っ張っているという事実を伝えるために最小限の力しか入っていない。

たぶん、重力に任せてセイラが手の力を抜いてしまえば、あっと言う間に離れてしまう。

ほんの少しもどかしいから、指先を上に向けてちゃんと触れると驚いた白い指先が袖を離してしまった。

完全に遠くに離れてしまう前にぎゅっと握り締める。

「何処行くの？」

「書庫に行きたいんじゃないの？」

二人して疑問符を浮かべて、セイラだけふっと笑った。

絶対に書庫に行きたいの。
そんな気持ちはなかったけれど、問われれば無性にあの空間が恋しくなった。

「うん！ 行きたい」

何か失敗しただろうか。曇るジルフォードの瞳にそう言えば、セイラの力だけで繋がっていた手にちよつとだけ力が入った。
歩調に合わせて振ったつてもう離れたりしない。

導かれるまま進み足を止めた先には、特に変わったところのない廊下があるだけだった。
壁も床も綺麗に磨きこまれて入るけれど、他の場所とも区別はつかなかった。

「ジン？」

柱の裏の皇かな面。指をそつと這わして、やっと分かるほどの小さな出っ張りを押すと

「わぁ」

壁に小さな入り口が出来た。

この城はいつたいていどうなっているのだろう。

探検しつくしたと思っていた城の中はまだ未知のものでいっぱいなのだと嬉しくなつてセイラは歓声を上げた。

中が薄暗く先が見えないほど、狭く窮屈なほど何かがあるような気がしてわくわくする。

待ちきれなくて通路に飛び込むと、ふつと頭上から笑いを含んだ吐息が漏れた気がする。

「だって秘密の通路だよ？」

気が急くのが当然とばかりに、セイラの足はパタパタと音を立てる。この通路が何処に続くのか知りたくて仕方ないのだ。

そんなセイラの様子を見て、ジルフォードは半身をずらした。その行為が先に行く栄誉を与えてくれたのだと気づいたけれど、やはり一緒にいい。隣にいるのだから。

うってつけなことに通路は狭いといっても二人並ぶくらい容易だ。

「一緒にね」

差し出した手の平にジルフォードの手が重なるのを待ってセイラは軽快に歩き出した。

道のりは割りと平坦で、ちょっとだけ期待していた落とし穴などの仕掛けはなかったけれど、所々で城の廊下を除き見ることが出来て中々楽しい。セイラを探し回る侍女に心の中で詫びつつ、この通路があつて本当によかつたと思う。

半身に伝わるぬくもりもその思いを強くした。

自然と口について出てきたのは式るとき広場で歌われたもの。

歌詞が終わるたびに調子を変えながら歌っていく。伸びやかに、楽しげに、ちよつとだけ重厚感を出して。

それが鼻歌に変わったとき、今まで静かに聴いていたジルフォードが口をはさんだ。

「明日、街で花流しがあるって聞いた」

「あつシルトの花を空に撒くんだよね。ハナが言ってたよ」

普通のシルトよりも花卉の多いものを見つけることが出来たら幸せ

になれるとか。

恋人同士で見るといいとか。
ハナも年頃の女の子だ。同世代の侍女仲間から情報を集めては楽しみに話していた。

「……一緒に」

行こう？ 見よう？

こういうときはどうやって誘えばいいのだろうか。

目を瞬いて見上げてくるセイラを見つめながら続きが出てこない。

誰かと何処かに行こうなんて考えた事もなかったから、そこまで言
って言葉が途切れてしまった。

視線をぐるりとまわして記憶を辿ってみても、いい言葉は浮ばない。
溶けてしまった言葉の語尾を続けたのはセイラのほうだった。

「一緒に行ってくれるの？」

大きな瞳が驚きと期待を込めて輝いた。

その輝きに目を奪われながら、言うべき言葉をやっと見つけること
が出来た。

「一緒に行って……欲しい」

「行くよ！ 絶対行く。私もジンと一緒にいきたいもん」

つないだ手をぶんぶんと振りまわして「約束ね」と念押しを。

ほっとしたようなジルフォードの顔が、ふいに真剣みを帯びた。

つないだ手とは逆の手がセイラの頬の横をそっと撫でる。

視線はセイラが首を傾けた拍子に揺れた月の雫のピアスを追いか
けた。

「どうしたの？」

「墓守が、これとは相性が悪いと言ってた」

白い指先がピアスの先端に触れる。その瞬間に青に緑にと色を変えていく。

「ああ、墓守さんのところへ行くんだ」

そういえば、この薄暗さも静けさも知っているような気がしてきた。あの不思議な場所に近いのだ。あの地下墓所からは確か書庫へと続く道があったような気がする。

「うーん。どうしょつか。引き返すにしても遠いよねえ」

その上、通路の中に入ると入り口は自然と閉じたのだ。

おそらく此方から同じ場所に出る事は出来ない。

それならば、進むしかないのだが相性が悪いとはどういうことだろうか。

暫く立ち尽くしていると、僅かな風が二人の髪を揺らし、問題の墓守の声を運んできた。

「そこまで来ちまったんだから、仕方ないだろう？ そのままおいで」

消え入りそうな声はやはり彼にとってよくないものなのだろうか。さっを行って、すぐに離れよう。

同じ意見に達したのか二人は同時に歩調を速めた。

先ほどの「約束」の余韻のせいか、つないだ手にこめる力は互いに

ちよっただけ強くなっていた。

第三章：夕闇に映う色5

ふいに天井が高くなり、冷たい空気が全身を包む。

ぼうとした明かりの向こうに無数の棺が静かに眠っていた。

「よくきたね」

まるで水に入った猫のようだ。

墓守の姿は半分ほどに減ってしまったかと思うほど悄然としている。いつもの不思議な響きを持つ笑い声も洞穴のような口からは漏れなかった。

「ごめんね。墓守さん。すぐに行くから」

「それよりもお姫さんが命じるほうが良いねえ」

「命じるって？」

しわくちゃの指先がセイラの耳元を指し示す。

揺れるその輝きを目に入れないように老人は僅かに視線を外していた。

「その主はお姫さんだ。お前さんが命じれば、その石はワシを跳ね飛ばそうとはしないよ」

本当にそんな力があるのだろうか。

セイラにははなはだ不思議でならない。

「そこいらのちんけな守りと一緒にするんじゃないよ。そいつはお

前さんのためだけに存在しているんだよ。お前さんのために深い地中から掘り出され、形を成し、磨かれたんだ。それ以上に強い呪いがあるもんかい。」

「そっか」

ジニスの皆の思いが詰まった月の雫。

墓守には悪いと思いつつ、耳元から全身が温かくなっていくようだった。

「でも、命じるってどうすればいいの？」

「ただ念じればいい。お前さんにとってわしは悪いものではないからね」

セイラは言われた通りを心の中で唱えた。

墓守さんは悪いものじゃない。友達だと。

それがうまく伝わったのか、閉じていた目を開くと墓守がほつと息をはいた。

「これで大丈夫？」

「まあね」

調子を取り戻したのか、若干質量も増えたような気がする。

声には張りが出で、ひょいと棺の上に腰を掛けた。

「それにしてもデートの場所に墓場を選ぶなんて、あまり感心しないね」

「デート？」

同じように首を傾けながらも離れる事のない二人の手に墓守は笑う。もう少しからかってやろうか。

にやりと意地悪げに口を歪めた墓守の耳に信じられない言葉が届いた。

「デートは明日だよ。一緒に街に行くんだ」

「へ？」

月の雫に苛まれていた墓守には先ほどの二人のやり取りは見えていない。

かろつじて、そのまま来いと伝える事ができたのは二人の気配が戸惑うように歩みを緩めたので地下に巡らす力を強くしたためだ。

「お、王子様も街に行くのかい？」

墓守の驚きを示すように白濁した瞳は限界まで開かれた。

ジルフォードが頷くのを見て、これ以上開かない瞳の変わりに、かくんと口が開く。

「花流しを見に行くんだよ」

開いたままの口からは盛大に笑い声が漏れた。

広い空間にわんと響いて、二人の上に落ちてくる。

「そいつはいい」

息も絶え絶えの墓守は、棺に手をつき二人を見やる。

先ほどの墓守のように驚いて目を丸くする二人の姿が、また笑いを誘う。

「楽しんでおいでよ」

どれほど策を巡らそうとも、こんなちっぽけな少女に誰も敵わないなんて笑うしかないだろう。

驚いて目をまん丸にしたのは此方のほうだ。

手をつなぐなんて誰がした。

一緒に街に行くなんて。

忌々しい守りを身につけた彼らを、招くなんて馬鹿なことをやってしまうなんて。

「うん！」

昨夜落ちた星の話も、城の端でこれから告げられる哀しい物語は二人には言うまい。

せめて、二人が白い花がつれてくる幸をを持って街から帰ってくるまで。

軽く慎ましいはずのノックの音がナジュールには重く押し掛かるように聞こえた。
窓の外の浮き足立つ街並を見下ろしながら、出来るならば言いたくない言葉を口にした。

「入れ」

振り向くまでも無く相手はサクヤだとわかる。

無駄の無い足さばき、そして星の告げた運命の代弁者として誰よりも相応しいに違いない。

一礼をして部屋に入ってきたサクヤは正装をしているナジュールの姿に彼がこれから告げることを知っていることに気づいた。

「ナジュール様。お父上が」

「逝ったか」

細めた視線の先の街並は、どこをどうみても故郷と重なる場所は無かった。

「ルルドにはまだ知らせるな」

「はい」

短い返事を残してサクヤは入ってきたときと同じように静かに部屋を出て行った。

一度も此方に向かない教え子が、どんな表情をしているかなど簡単に察しがついたから。

今はどんな慰めも必要ない。

必要なのは、その姿を隠してくれる優しい闇に違いない。

けれどサクヤには用意してやる事が出来ないのでせめても、ナジュールが一人きりになれる時間をつくるために。

第三章：夕闇に映う色 6

「セイラ様！」

「ハツハナ」

探していた人物がひょっこりと現れるなんて思っていなかったからハナは思わず声を上げ、セイラもまさか、いきなりハナに出くわすとは思っていたので素っ頓狂な声を上げる羽目になった。

先ほどまで外は厳戒態勢が引かれているというのにどうやって書庫の中に入ったのだろう。

一応、ぐるりと書庫内を一周してみたもののセイラの姿は無かったはずだ。

いぶかしむハナの前でセイラは冷や汗を垂らした。

「セイラ様、皆が探してましたわよ」

「……うん。知ってるけどさ」

地下墓所から秘密の通路を抜けると書庫の地下の本棚の後ろに出たのだ。

本棚の後ろは、全てどこかしかに繋がっているんだろうかとうきうきした気持ちがちよっとだけ沈んだ。

引き渡されたらどうしよう。

シルフォードの背中に隠たセイラにハナは小さな笑みをもらした。

「お茶にしましょうか？」

「うん！」

満面の笑みに皆には悪いがしょうがないと思う。

自分がセイラの一歩の理解者だという自負があるから。

時にせつつく事もあるけれど、逃げ道だってちゃんと用意する。
舞の日までには必ず。

そう言つて侍女仲間には先ほどお帰りいただいたのだ。

「いらっしやいませ」

にこりとカナンに招かれて、今までの嬉しさが一気に弾けた。

「明日ね、ジンと街に行くんだ」

カナンがお茶を淹れて席に着くまでが待ちきれなくて、思わず口に
してしまつと、珍しくもカナンはカップからお茶を溢れさせた。
黄金色の液体が机の上に広がっていくが、それを注意するものは居
なかった。

「本当でございますか？」

「まあ！」

カナンは未だに手元の惨事に気がつかず、ハナは常より大きい瞳を
更に大きく開いた。

「本当だよ。約束したもん」

同意を求めるようにジルフォードのほうをむくと、驚いている二人
の前でジルフォードは頷いた。
それを確かめてから己の失態に気づいたカナンは慌ててポットの傾

きを直す。

部屋中に花が咲いたような華やいだ香りが広がっていた。

「ハナも行こう」

その言葉を嬉しく思いながらもハナは首を横に振った。

「お二人で行ってきてくださいな」

「えゝ来ないの？」

シルフォードまでも首を傾けるのが可笑しくてハナはふっと笑った。

「せっかくですもの。お二人だけで行ってきてください」

「だけ」を幾分か強調して、カナンを見上げると、カナンの表情もゆるりと解け、いつも以上に柔らかな印象をもたらした。

「では、街のお勧めを紹介しましょうか」

部屋を満たす香りと同じく華やいだ話題は尽きることがなかった。

第三章：夕闇に映う色7

「サンディアさん、早く早く」

「こつちだよ」

子どもたちに手を引かれて、サンディアは小走りになりながら石畳の上を進む。

ヤガラの子供院の子どもたちもシルトの祭見たさにタナトスにやってきたのだ。

毎年祭りの時期にはタナトスにある孤児院に数日お世話になることになっている。

子供たちの引率にサンディアも選ばれた。

行き先を聞いて、遠慮していたのだがダリアも是非にと推したので今に至る。

子どもたちに手を引かれながら見る街に怖れていたようなところは何処にもなかった。

城に居た頃に街に下りたことのないサンディアにとって、懐かしくもなく、昔の記憶が蘇ってくる事もない。

あまりの熱気に圧倒されると、子どもたちの笑い声に心が揺ぐぐらいだ。

先頭を切っていくのは、何度かタナトスを訪れた事のある年長も子どもたち。

年に一度しか訪れないというのに道を覚えているようで、細い路地も怖れることなくすりりと入っていく。

広い路地から外れて、しばらく立つと雑多さが目立つ路地に入り、頭上に見える空の幅が急に減った。

「こんなところに孤児院があるのかしら」

ヤガラの孤児院とはまったく違う。

ヤガラは孤児院は日の燦爛とあたる丘の上に建っていて、頭上いっぱい広がる空がとても明るかった。

「メイヤーさん」

路地の突き当りには、細い入り口が開いていた。

薄汚れた建物の前には微笑む老人が居て、手を振る子どもたちに答えている。

「やあ、良く来たね」

彼の人格を示すように子どもたちが我先にと老人を取り囲む。

頭を撫でられた子どもたちは一様に笑顔となった。

「貴方は……」

顔を上げた老人と目があつたとき、サンディアは声を上げた。

見知った顔だった。

老人のほうもサンディアに気づいたようだったか驚きは半分ほど無かったようだ。

わが子を見るような優しい視線を送られて言葉に詰まる。

「メイヤー殿」

直接言葉を交わしたことは無かったけれど、陳情を言い城を訪れた彼の姿を何度か目にしたことがある。

その頃に比べて随分とほっそりとし、老いは外見に表れているけれど瞳に含まれる優しさは変わらなかった。

今でも、子どもたちのために、力ない者たちのために理解の無い貴族たちに熱弁を奮っているのだろうか。

昔は唯、愚かだと思った。

貴族たちの我が身可愛さは十二分に分かっており、どれほど叫ぼうともそよ風程度の力も持たないと知っていたから。
今では、ただただ頭が下がる。

この子達が生きてこれたのは彼がいたからだ。

「お久しぶりですね。サンディア殿」

あえて様とはつけなかった。

それを厭うていることを瞬時に見抜いたのだ。

「お久しぶりです。……メイヤー殿は。わざわざザクセンから？」

サンディアの時間は十数年前で止まっている。

ようよう動き出した時間も、未だ全てには追いついていない。

彼女の中では今もザクセンの領主はメイヤーなのだ。

「いいえ、私はもうザクセンの領主ではありません。今では、ただのアリオスの民ですよ」

「そんな……」

それならば、理解ある優しい領主を失ったザクセンはどうなったのだろう。

あそこにも大きな孤児院が建っていたはずだ。

「あの子はザクセンの孤児院にいたのですよ」

メイヤーの視線の先では青年が子どもたちに肩車をねだっていた。

「彼は商家に貰われていって、今では立派にお店を継いでいます」

店といっても大して裕福ではないけれど、孤児院に必要なものを寄付してくれている。

「皆強く育ちました」

メイヤーは持てるものすべてを与えてきた。

文字の読み書きは勿論のこと礼儀作法もメイヤーが今までに身につけた知識も。

子どもたちが何処へ行っても生きていけるように。

必要だと言ってもらえるように。

ザクセンの子どもたちの能力の高さは全国に知れわたっていた。

養子として引き取られていった子。修行して職人になる子。

たくさんの子どもたちが大きくなり院を出て行った。

そして必ず戻ってきては、他の子どもたちにたくさんのもを与えていく。

ザクセンに帰るべき場所がなくなっても、今も皆メイヤーの下へと帰ってくる。

その子どもたちが散り散りになった子どもたちの詳細をもたらしてくれるので、さほど悲観はしていなかった。

ザクセンであろうとタナトスであろうとやるべきことに変わりはない。

そう語るメイヤーの瞳に宿る強さは、さらに磨きがかかっているようだった。

子どもたちを見守るサンディアの表情にも同じ強さが宿っている事に彼女自身は気づいていない。

「ジルフォード殿下をお見かけしましたよ」

まだ雪深い季節の事だ。

あの頃もタナトスは浮き足立ち、そわそわと落ち着きがなかった。ほんの数分だけ顔を見せた王子はメイヤーがたった一度だけ城で見かけた少年の姿からは驚くほど成長していた。

見かけたのは10年も前か。そう思えば納得してしまえるのだが、瞳に浮ぶ心細さは色濃く残っていた。

頼るものとして誰もなく、たった一人路地裏をねぐらに暮らす子どもたち。

それによく似ていた。

哀しさ寂しさ狂おしさ。

そんなものを隠すために子どもたちは怒りか無を纏う。

ジルフォードが選んだのは無の方だとメイヤーに瞬時に分かった。

それがふつと和らいだのは隣に陽光を受けた少女がぴたりと寄り添って微笑んだ時だった。

「よい相手を見つけれましたね」

「ええ。私もそう思いますわ」

「すぐそこですよ」

押し付けでも問いかけてもなく、事実を告げるための言葉には優しさが含まれていた。

貴女の子どもはすぐ其処にいますよと。会いたいと思えば、すぐに会えるほど。

「私は……」

会いたい。会いたい。胸が切実な叫びを上げるのとは反対に、緩やかに誰かが首を振るのだ。今更、会ってどうするというのだ。重荷にしかないのに。

己のした仕打ちを忘れたのか。

「ただ名を呼んで抱きしめてあげればいいのですよ」

メイヤーは膝に縋りついてぐずり始めた少女を抱き上げた。

少女は少しでも温もりを得ようと小さな腕をメイヤーの首へと回す。到底届かない腕の代わりに大きな手のひらが少女の背中をやさしく叩く。

それにあわせて、うつらうつらと瞳を閉じていく少女に「おやすみ、レイ」と告げると少女はふわりと微笑んだ後、全身をメイヤーに預け夢の世界へと旅立った。

「昨夜は興奮しすぎて眠れなかったようですね」

まるで本当の親子のようだ。

その光景を見ながらサンディアのうちに暗い不安が頭をもたげた。自分は名前すら呼んであげていなかった。

メイヤーもジルフォードという名がどんな意味を持っているかは知っている。

サンディアが口を閉ざしているわけも。

「ただ見つめるだけでもいいのです。其処にいと認めてあげるだけでもいいのです」

無を纏う子どもたちは己の存在すらないものとしてしまつ。

全てないものとする。

痛みも苦しさも。

小さな体でできる最後の防衛術。

けれど見ないふりをしても全て消え去る事はないのだ。内に凝り固まったものはわが身にずっと降りかかる。

「大丈夫ですよ」

どんな時も譲歩をくれるのは子どもたちのほうだった。

「……そう、でしょうか」

「ええ」

一歩だけ踏み出そうかと勇気を振り絞るサンディアに微笑んで、背中をぽんと押す。

「サンディアさん。メイヤーさん。早く」

潤む視線の先では、傾きかけた太陽にこうしてはいられないと騒ぎ始めた子どもたちが大きく手を振っていた。

第三章：夕闇に映う色 8

空には穏やかな青が広がっていて、ほのかに風がそよぐ絶好の花流し日和。

良い天気恵まれたことに胸を撫で下ろしながらもハナの表情は次第に暗くなっていた。

二人のことが心配でならないけれど、ついていくのは憚られる。せつかく設けた二人だけの時間を邪魔するのは嫌だ。

ああ、でも突っ走るセイラと初めて街に下りるジルフォードのことだ。

何か問題に巻き込まれるんじゃないかと思うと気が気ではない。

荒事に巻き込まれたらハナにはどうしてやることも出来ないのは十分に分かつているけれど、無意味に部屋の中を歩き回ることを止める事ができなかった。「行って来ます」と元気に手を振るセイラとジルフォードを送り出してから、まだ数分と経たないのに不安はどんどん膨らんでいく。

気を落ち着かせるために朝からの出来事を思い出していく。

服装はばっちりだ。せつかくの「初めての街」だ。記憶に残るものにしないでとシルトにあわせ白く可愛いスカートと、不服顔のセイラを宥めすかして髪も巻いてみた。攫われたらどうしようかと思うほどの可愛らしさ。ナジュールたちがあつらえたものより数段似合うに違いない。

お小遣いもちゃんともたせた。

もし二人がはぐれた時のために集合場所も決めた。

何か遣り残した事はないだろうか、指折り数える様子に苦笑するカナンにも気づかない。

誰かが扉を叩いたのもカナンが応対に出るまで気づかなかった。

「おや、ケイト殿」

「おはようございます。カナン殿」

カナンの声に少々驚きが含まれていたのはケイトがいつもの兵士の格好ではなく、平服を着込んでいたでせいだろう。

年齢より幼く見える顔立ちが更に際立っているようだった。

「今日はお休みですか？」

「ええ、非番なのです」

何故か急遽昨夜決まったのだ。

上司の「お前、明日休みだからな」の一言で。

無論口答えした。

昨日から祭が始まったため、非常に忙しい。所構わず騒ぐ連中を取り締まるのも、他国から入ってくるものたちを見張るのもケイトたちの仕事になる。そんな時に休めだなんてと更に詰め寄ろうとしているとセイラとジルフォードが街に下りることが告げられたのだ。始めから心配だから見て来いといえは良いのに。

確かにジョゼはこっそり様子を見るのにはむかないだろう。

立派な体つきは何処に行こうと目に付くし、ジョゼ・アイベリーと言う男は有名すぎる。

あつと言う間に將軍が居るぞと話が広まってしまっただろう。そうなれば、こっそりなんて無理だ。

「ハナ殿は来てますか？」

「ええ」

カナンの苦笑の正体を目にして、「ああ、やはり。」と同じような

笑みを浮かべた。

うろつろと円形を描きながら百面相をしているハナの姿は予想通りだった。

「ハナ殿、おはようございます」

ようよう声が届いたのか、ハナは顔を上げ「ああ、ケイト殿」と気の無い声で言うと、再び百面相を開始した。

「一緒に行きませんか？ シルトの祭」

その言葉はハナに百面相を止めさせる効果があった。

ハナは困惑顔のまま、じつとケイトを見つめ、確かめるように己とケイトを交互に指差した。

「私が……貴方と？」

「ええ、心配なんでしょう？ 私もお二人のことが心配なので」

セイラとジルフォードが二人だけで街に下りると聞いてしまったら先日の迷子の件もあり、命令がなくても気になってしまう。

自分以上に気をもんでいるだろうハナを誘おうと思ったのは自然な成り行きだった。

「……とても心配ですわ」

見つからなければ邪魔することにはならないだろうか。そんな想いがハナの中にむくりと沸き起こる。

二人が帰ってくるまで、カナンの部屋で待っていよう。その決意はガラリと音を立てて傾いでいく。

「よい考えですね。ハナ殿も祭を楽しんでくればいいですよ。花流しは年に一度しかありませんしね」

絶妙なバランスで何とか持ちこたえていた決意は、優しい笑顔によって完全に崩れ別の決意へと生まれ変わる。

「行きましょう！」

ハナが宣言したちょうどその頃、セイラとジルフォードは強固な城壁にばかりと開いた門の前に居た。ここをくぐれば、街まではずぐの距離だ。

騒ぎになると困るでしょうからとハナが用意した色ガラスをはめ込んだメガネをかけているためジルフォードの表情は読み取れないけれど、つないだ手のひらからが負の感情は伝わってこない。

むしろ複雑な心境を抱いていたのは門番たちに違いない。どこか落ち着きが無く互いに目配せをしあう。

十数年ぶりに味わう外とはどのような感じなのか。誰も想像する事ができなかった。

「行こう」

セイラの言葉に頷いて一步を踏み出すジルフォードの背中に声がぶつかる。

「お気をつけて」

振りかえれば言葉を発したであろう青年がわたたと無意味に腕を動かしていた。

宙を彷徨った指先は頬に達し、赤みを隠すように頬をかいた。

「街はとても賑わっていますから」

「うん」

「行ってきます」

手を振り振り遠ざかっていくセイラとジルフォードの姿が見えなくなつて青年は、ほうとため息をついた。

すぐ近くにジルフォードがいた緊張もあるが、二人だけで大丈夫だろうかと心配だったり、仲睦まじい姿にほっとしたり、色々なものが入り混じつた長いため息だった。

わが子を初めて旅に出す時はこんな感じだろうか。

子どもどころか結婚もしていないのに、そんなことをふと思った。

どうか、彼らが今と同じように笑みを浮かべて帰ってきますように。青い青い空に青年は小さく呟いた。

第三章：夕闇に映う色9

セイラたちが城門をくぐる少し前のこと、ケネットは最後の食事をじっくりと味わって嚥下していた。

一週間前のパサパサしたパンは惜しむように口にも喉にも張り付きながら落ちていく。

最後に残しておいたチーズかけらを頬張り感謝を込めて飲み下す。昼食には、久しぶりに焼きたてのパンを食べる事ができるけれど、かぴかぴになったパンへの感謝も忘れはしなかった。

ケネットへの食料は一週間分が一度に届けられる。

ちゃんと計算して食べるため途中で無くなるなんてことはなかったが、いつまでも一番美味しい状態を保つのは無理なのだ。

「ごちそうさまでした」

しっかり手を合わせた後は、早めに下へと降りる。

秘密の階段をそろりとおろせば、保管庫の中に降りる事ができるのだ。

昨日ジルフォードに出会い、言葉を交わしてみたせいか、いつもならばしないことをやってみる気になったのだ。

顔も合わせなかった受付の男にお礼を言おうと。

一週間に一度の食料運搬は彼がしてくれるのだ。

保管庫に降りてくると嗅ぎなれた紙の匂いに、今日は香ばしい匂いが混じっていた。

大きな袋を抱えた男がふうと息を吐いた。

男が袋を受付として使っている机におろすと、カシャンとビンが触れ合う音が響いた。

「ありがとう」

「うわっ！」

突然声をかけたケネットに男は当然の反応を返した。
声を上げて、すっ転んで、心臓を高く鳴らす。

いきなり現れた人物が髪のお化けなら無理からぬ事だ。

「だ、大丈夫？」

その髪のお化けが、机の上から自分の顔を覗きこむものだから男は再び悲鳴をあげそうになった。

けれど、ちらりと見えた水色の瞳が、頭のどこかに引っかかった。

「おっおっおめえ、あのちっこかった坊主か？」

前の出納係が居た時には何度か会った事がある。

まだ男の膝くらいの少年で、もちろん髪のお化けなんかではなかった。

前の出納係は孫だと言った。

偏屈でへそ曲がりな老人だったが、その少年だけは「可愛いだろう」と世間一般の老人が我が孫を溺愛するように言ったものだ。

「うん。おいらのこと覚えてたの」

「おっおう、そんな様変わりしてるとは思ってなかったけどな」

「……そんなにかわったかなあ」

「最後に会ったのは、おめえがコンぐらいの時だぞ」

床に座り込んだ男は、自分の額くらいの高さを示した。

出納係が途中で変わったことは知っていたけれど、まさか彼の孫が仕事を継いでいるとは思ってみなかった。

いらぬ事は詮索せぬ事が一番だ。

城の中で仕事をしていれば、そんな処世術も身についていく。

深く考えずに与えられた仕事をこなしていれば、それなりの収入を得る事ができて、ぬくぬくと生活できる。

だから、一番大きな疑問も飲み込んだのだ。

保管庫に入るものを厳重に管理せよとの命令は、資料の不正流失を避けるためではなく、中にいる何者かとの接触を出来る限り抑えるためではないか。

現に身元は聞くが、資料の貸し出しは寛容だ。

前任者が死んで十年余り、否応無く想像は膨らみ中にいるのはとてもない化け物ではないかと思うこともあった。

何しろ顔を一切合わせていないのだから。

「ケネットだよ」

明るい声に拍子抜けする。

見た目こそ不気味だが、その声は、祖父に頭を撫でられて恥ずかしげに嬉しげに笑っていた少年のものだったから。

「ケネットか。おめえ、ちゃんと食ってんのか。がりがりじゃねえか」

風が吹けば倒れそうな細い体に申し訳程度の薄い衣一枚。

冷たい床の上を裸足でべたりと歩いている。脆弱さを際立たせるのは十分だった。

「もつと食え」

男は持ってきた袋をかき回す。

パンにハムにチーズ。ミルクにちよつとだけのお酒。なんだ。これは。これではチットも足りはしない。

そこではたと思い出した。

この内容は前任者のためのものと一切代わりが無い。今居るのは食の細い老人ではなく、青年だというのに。

「なんでえい、これ。こんなんじゃ力もでないだろうが」

「大丈夫だよ」

ずっとそれでやってきたのだ。不満なんて無かった。

「何か、欲しいものは無いのか。厨房の奴が知り合いだからな。何かとって来てやるよ」

「欲しいもの？……うん」

欲しいものってなんだろう。

破れない紙、虫の寄り付かない紙。それとも補修用の紙の色を増やせたら……

欲しいものはいっぱいあるけれど、食べ物でと言われると瞬時に思いつけない。

「うん」

「なっないのかよ」

うんうんと唸り続けるケネットに男は呆れ、同時に罪悪感が沸き起

こる。

こんなところに押し込んだのは自分ではなかったけれど、もう少し関心を持つべきではなかったかと。

せめて、目の前の青年が好物の名を上げる事ができるぐらいには。

「じゃあ、おいらシルトのお菓子欲しいよ。お祭の時にだけあるんでしょ？」

花を食べるのってどんな感じだろう。

シルトの花も挿絵でよく見かけるけれど、実物を見たことはあっただろうか。

どこかで、菓子の記述を見てからちよつとばかり気になっていたのだ。

「そんなのでいいのかよ？」

さすがに厨房に常備してあるものではないが、街に行けば容易に手にはいるものだ。

「うん。おいらシルトのお菓子食べた事無いもの」

今まで食べた事はないし、これから食べる機会があるかも分からない。

穏やかな世界は少しずつ変わり始めている。新しく届けられる台帳の端々に前兆は見えていた。

花を飾って甘い菓子を作って春が来るのを純粹に喜べるのはいつまでか。

「よし、待ってるよ。仕事が終わったら街に下りて買ってきてやるからな」

「うん。ありがとう」

張り切って胸を叩いた男にケネットはにこりと微笑んだ。

第三章：夕闇に映う色 10

「……すっすごい人ですわね」

前夜祭の熱気知らないハナは、路地にひしめく人の数にひくりと頬を引きつらせた。

どうやったらこんな細い道に、これだけの人数を押し込むことが出来るのだろう。

「ここは外国の商人たちの店が出ているので一際人気なのですよ。あちらの道を通れば多少ましですよ」

ましといってもほんの気持ち程度しか変わらないけれど。

ケイトの微妙な笑みにハナは失敗したかと思った。こっそり様子を見ようどころか、見つけることさえできないのではないか。

門番の「つい先ほど出て行かれましたよ」との言葉に足を速めたものの、もう何処にもセイラたちの姿は見えなかった。

「アリオス中の人間を集めたみたいですよ」

「タナトスにはとてもじゃないけど、入りませんよ」

くすりと笑うケイトにハナは僅かに頬を膨らませた。

こんなにたくさんの人を見たことがないもの

ジニスの住人を全部集めても数百人。

その数百人も一度に集まることなど稀だったのだ。

セイラたちの式には多くの人が集まったけれど、その中に飛び込むことは無かったのていまいち実感は無かった。

「どうですか？」

むくれたハナの前に紙包みが差し出された。

ほこりと温かそうな湯気が立ち甘い香りが広がった。

「心配のし過ぎで朝ごはんもろくに食べていないのでしょうか？　おススメですから、ぜひ」

いつの間にか買ったのか二つの紙包みを持ったケイトがにこりと笑う。思わず受け取ってしまえば、口をつけないわけにもいかず、口に含めばほろりと甘さが溶けていく。

「……おいしいですわ」

「それはよかった」

丁度よい甘さに幸福感がじわりと全身を包む。

「今、セイラ様にも食べさせたいと思っているでしょう？」

凶星だった。

この甘さはセイラが好むものだろうと思っていた最中だ。びっくりと反応するハナにケイトの笑みは深くなる。

「セイラ様のことに關してはハナ殿はとても分かりやすいですね」

「いいのですわ！　セイラ様への気持ちを隠す必要なんてない

のですから。はっ早くセイラ様を見つけましょう!」

なんだか胸の奥がむず痒い。

けほんと咳をしてみても変わりは無かった。

むず痒さから逃れようと意味も無く頭を振ったハナの耳に今までに無かった音が飛び込んできた。

「きゃあ」

小さく幼い悲鳴があがったのだ。

つられて目をやると人がひしめき合って狭いはずの路地の中央にぽんと空間が開け、幼い少年がしりもちをついていた。

寄り添うようにもう一人少年がいる。

少年の着た大きさの合わないだぼだぼの服は擦り切れ、隙間からは肌が露出し、薄汚れた頬の上にある瞳は恐怖に揺れていた。

何一つ庇護を持たない瞳。

ハナには瞬時に彼らの生い立ちが分かった。自分と同じ路地裏の子どもたち。

むず痒さは瞬時に消え、代わりに冷たさが胸の内を満たす。

「まったく、何処見て歩いてんだよ。汚れちまったじゃねえか」

人垣から現れた男はもとより埃を被つていような薄汚いズボンを叩く。

その音に怯え、少年たちは小さな肩を寄せ合って震えてる。

「なあ、どうしてくれるんだよ。ぼつずども」

少年たちは、ちろりと周りを見渡したが、誰とも視線が合わない。誰もが視線が交わる前に逸らしていく。

関わり合いになるなんて面倒だ。周りからはそんな声が聞こえてきそうだった。
助けてと喉まで出かかった言葉は行き場を失い、どこか体の奥底に落ちていった。

「これだけ込み合っていますのよ。ぶつかると言うほうが無理ですわ」

「はあ？」

気がつけば前に出ていた。
ハナの目の前には不快げに歪んだ髭面がある。周りがざわつき、馬鹿なことをしたものだと言顔を逸らしていく。
髭面は耳に心地よくない言葉を放った相手が少女であることを知ると口元を笑みで象った。

「貴方、この混み具合の中で触れるもの皆を小突いて回る気ですの？」

ハナはキツと顔を上げ、遙か上にある相手の顔を見据えた。
小さくなって震えているのは昔の自分だ。

温かい腕が欲しくって、誰か助けてと声にならない悲鳴を上げていた。

「なあ、お嬢ちゃん」

男の笑みは深くなった。

こうやってちつぽけな正義感を振り回してしゃしゃり出てくる奴をやり込めるのが楽しいのだ。相手が女ならなお楽しい。
ずいとい近づけた顔の前に人のよさそうな笑みが広がった。

「せっかくの祭ですよ。騒ぎを起こして白けさすなんて止めにしましょう?」

割って入ったケイトに男は大きく舌打ちをする。

「こっちだつてなあ、せっかく楽しみに来てるのに、服を汚されて腹が立つてんだよ。てめーがあいつらの保護者か?なら詫び代でも出しなよ。ぼうや」

「あ」

ハナは何かが軋むような音を聞いた気がした。

「せっかくの祭ですから、アリオスの牢獄見学もされていけますか? 今なら底冷えのする特別房も用意できますが」

「はあ? 何言つてんだよ。クソガキが」

ぶんと風が鳴る音がした。

太い腕がケイトの頬すれすれを通っていく。

ハナが上げた悲鳴は男の苦悶の声に打ち消された。

「貴方、アリオスの住人では在りませんね。痛くも無い腹を探られるのも、辛い思いをするのも嫌でしょう? 穏便にすませませんか?」

ハナには、その一瞬で何が起こったのかわからなかった。気がついたら男は大きな体を丸めて唸っていたのだ。

「それとも鬱憤晴らしがしたいのならば、うちの連中がお相手しま

すよ」

ケイトを見上げる瞳に憎悪を燃やしていた男は瞬時に色をなくした。周りをぐるりと同じほど体格のいい男たちが取り囲んでいる。彼らの胸についている月と烏の紋章が陽光を浴びてきらりと光った。

「おねーちゃんたちありがとう」

「ありがとう」

ちょこりと近づいてきた子どもたちが頭を下げる。

男には丁重にお帰り頂いた。タナトスの何処で騒ぎを起こそうともすぐに月影が現れるといい含めて。

「御礼をするの」

「の！」

「お礼なんていいですわ」

助けたかったのは少年たちばかりではない。小さく震えていた昔の自分を助けたかったのだ。

微笑むハナに、それは嫌だと少年たちは首を振った。

「おねーちゃんたち、花流しに来たんでしょう？ いい場所を教えてくださいあげる！」

「教えてあげる」

人を探しているの。

そう言う前に少年たちは意気揚々と二人の腕をひっぱった。自分たちにも誰かのために出来る事があることに輝く二人の顔を見てしまえば、ハナにもケイトにも止める事は出来なかった。

「エイナの塔からはすつごく綺麗に見えるんだよ」

エイナの塔とは何処なのか。問うようにケイトの顔を見上げても、分からないと首を振られるだけ。

人の間をすり抜けて狭い路地を渡り、見知らぬ迷路に迷い込む。青い空に、もうじき花流しが始まると誰かの声が溶けていった。

第三章：夕闇に映う色 11

祭のために奇抜な格好をしているものも多く、ジルフォードの姿はさほど目立ってはいなかった。

見事な白に目を奪われた者もいたが、視線はすぐに別へと動いていく。

シルトの花冠を被った歌姫が音を添え、口から火を噴く男が彩りを添える。

前夜祭の熱気が三倍に膨れ上がって弾けたような陽気な空間だった。目をやりたいものばかりだから自然とセイラの歩みは遅くなり、並んでいたはずの距離がすぐに長くなる。

その度に立ち止まって待つてくれるジルフォードに「ありがとう」と言っつのは何度目か。

けれど、そろそろ急がなければ。花流しを見るという目的を果たすために。

「ジンー。道が分かるの？」

器用に人の間を抜け先導して良くジルフォードの歩みは初めて街に来たとは思えないほどよどみが無い。

「上から見てたから」

書庫の屋根の上からずっと見下ろしていたから網の目のように広がる路地の一本一本が何処に繋がっているのか分かるのだと言う。

セイラは感心するようにため息をつくと同時に疑問が浮かんた。

ジルフォードは路地の全てを把握するほど一人きりで見下ろした街にすることにどう思っているのだろう。

「ジンは、街に下りてみたかった？」

書庫の屋根の上がお気に入り場所だとは知っている。
そこから見える風景の中に入りたいと思っていたのだろうか。

「下りてみたいと思ったことは……ないと思う」

城に来たばかりのことはとにかく慣れようと思っていた。

西の離宮に居た頃は、母と自分と世話係が数人。

髪の色や瞳の変化が良く思われていないと知っていたけれど、城ほどあからさまではなかった。

なぜ、それほど嫌うのなら西の離宮から連れてきたのかと疑問に思うほど。

罵られ、追い払われ、そして彼らは一番いい方法を思いついたのだ。
ジルフォードなど此処には居ないかのように振舞えばいいと。

最初こそは外見を変えようと努力した。

子どもの浅知恵で、外見さえ兄と同じようになればきっと認められ、母も悪く言われないと。エスタニアの髪を染める化粧法を試した事もあったが、真白な髪はどうやっても濁ってはくれなかった。

瞳の色を変える方法など、どんな文献をあさっても見つけることは出来なかった。

自室には明かりすらいれにくる者も無く、いつの頃から諦め、こちらも居ないように振舞うことを覚えていった。

真っ暗な世界に浮ぶ温かそうな街の光りを見るのは好きだったけれど、其処に行きたいという願望はなかった。

きつと何処にいても同じだと知っていたから。

幸せそうに笑う住民の表情を凍りつかせたいわけじゃない。

「……そっか」

見上げたジルフォードの表情は眼鏡のためにはつきりとは分からなくて、セイラはギュッと心臓が縮こまるような感覚を覚えた。

心臓が冷え切った手で驚掴みにされたように胸に鋭い痛みが走り、視線を落として胸元を見るけれど変化があるわけじゃない。

トーンの落ちたセイラの声にジルフォードは視線を下げた。

先ほどまで嬉しげに輝いていた瞳は伏せられて、ジルフォードからはセイラの頭のとっぺんしか見ることが出来ない。

垂れた頭はどこか哀しげで、ほんの少しの間に何がセイラの心を曇らせたのかジルフォードにはよく分からなかった。

分かるのは、先ほどと同じように笑っていて欲しいと思っていることだけ。

顔を上げさす気のきいた言葉など思いつかないから、今の心情をそのまま口にする。

「今は下りてきて良かったと思ってる」

顔を上げたセイラの前で

『だから、そんなしよげた顔をしないで』

まるでそう言うかのようにジルフォードの口元を淡い笑みが彩り、つないだ手に力が籠る。

やはり瞳を見ることは敵わなかったけれど、その笑みはしっかりと目に焼きつき、再び心臓が縮こまる。

同じギュっという感じなのに、今のは変な感じだ。

嬉しいような苦しいような。先ほどまでの痛さは無かった。

「よかった！ さあ、ルーファ殿のお勧めの場所に行こう」

互いに、ほっと温かな息を吐き、同じ歩調で歩き始めた。

ルーファが教えてくれたのは裏街にある古ぼけた塔の上だった。

居住区が表街に移り、錆びれ打ち捨てられた一角だったが、陰鬱な

様子は無く、どこかからりとした場所だ。

先ほどまでの熱に浮かされたような陽気さは無く、細い路地には二人の影しかない。

「誰もいないね」

遠くで祭の音がする。

その微かなに響く不明瞭な音がここは全く別の世界なのではないかと思わせた。

塔の中には何一つ生き物の存在を感じさせないが、今しがた掃き清められたかのように綺麗だった。明かりは無かったけれど、壁に開いた隙間から陽光が差し込み行動するのに困らない。

幾筋もの光りの帯が進むべき方向を示しているかのようだ。

さほど広くは無く、すぐに上へと続く階段を見つけることが出来た。階段の壁面に施されたレリーフが目奪う。

「綺麗だねえ。この人、誰だろう」

壁には数人の女性のレリーフが施してあった。

顔の造形や衣装が同じ事から同じ人物を示しているのだと知れる。

順に追っていくと女性は踊っているのだと理解でき、セイラは壁の凹凸に手を這わした。

長年の風雨に耐えたのだろう。

表面はなだらかで、形を留めていない場所もある。

それでも、その女性の周りだけは風さえもその美しさが損なわれるのを嫌ったかのようにのはっきりと形が残っていた。

「エイナだと思う」

アリオスで描かれる女性といえばエイナが一番多い。

しかも舞う姿ならほぼエイナと言って間違いない。

初代王の妻。戦女神。

彼女がアリオスの勝利を願い舞えば必ず勝利を収めたという。

「エイナ？ でも、ちょっと雰囲気が違う気がするな」

城で見たエイナの像はもっと勇ましい姿をしていた。

まさに戦女神、その言葉が似合うような。

けれど目の前にある女性は優雅で美しいエスタニアで描かれる女神のようだった。

伸びやかな手足を装身具で彩って、霞のような薄衣をはためかす。柔らかな微笑みは誰に向けたものだろう。

彼女の視線を追うように頭上を見上げると、光りの入り口が出来ていた。

そこからは眩しい空が覗き、早くおいでと手招きしているようだった。

「こっちだよ」

先ほどからどんどん人気の無い方へと進んでいるような気がしてな

らない。

感謝を満面に表した少年たちを疑う気持ちなどないのだが、じわりと不安がこみ上げてくる。ケイトにも途中から何処に入り込んでしまったのか分からなくなった。

人の住んでいる気配の無い建物から裏街の中でも、かなり奥まで来てしまったということだけが何とか分かる程度だ。

「この辺が君たちの住んでるところ」

「ううん。もつと南のほうだよ。ほら、あれだよ」

少年の指差した場所には塔というには少々不格好でへしゃげかけた円形の建物があった。

その時、街全体が鳴き始めた。

高く低く不思議な音が響いた。

「何？ この音。変な音だ」

つられるように階段を駆け上がった。

視界がぐんと開けると同時に聞こえる音も大きくなる。ジルフォードが外に出ると、ふおんと音が高くなった。

「告げ笛の音だ」

花流しの前に吹かれることは知っていたけれど、ジルフォードも初めて聞く。

春を連れてくる風の音を模したものだといわれているが、陽気さに浮かれた不思議な生き物の鳴き声のようにも聞こえた。

何処から音がするのかと辺りを見渡したセイラの瞳に見知った顔が飛び込んできた。

「ハナ。それにケイトも」

さきほどまで誰もいなかった路地に四つの影が見て取れる。子どもたちは知った顔ではなかったが、あとの二人は間違いようも無くハナとケイトだ。

セイラの声に反応して、黒とオレンジの頭がきょろりと辺りを見渡している。

「上だよ！上」

こんなところでセイラの声を聞くとは思っていなかったハナは頭上を振り仰いで歓喜の声を上げた。

「セイラ様！ジン様！」

「やっぱりハナも花流しに来たかったんだね」

セイラのその言葉にハナは口ごもった。

興味が無かったといえは嘘になるけれど、本来はこっそり二人の無事確かめるためだったのに先に自分たちのほうが見つかってしまったのだ。

一際高く笛の音がした。

それを合図として、表街の一画で、わぁっと花が宙を舞う。

群集から声が上がると、別の一画からも真白な花弁が降り注いだ。セイラたちのいる塔は花流しの中心からは大分それてしまっているが、風に乗って花たちはここまで十分流れてくる。

押し合いへしあいして、窮屈な路地で見上げるよりもずっと快適に楽しむことが出来そうだ。

皆、それぞれの場所で天上の彩を楽しんだ。

まるで優しい吹雪のよう。

花弁が後から後から降ってくる。

甘い香りを纏って視界を白く埋めていく。

容易に落ちてくる花を手にすることは出来たけれど、花弁が多いものを取るうと思うと難しい。

「なかなか見つからないねえ」

何度も手を差し出してみるのだけれど、手に落ちてくるのは5枚の花弁のものばかり。

シルフォードの手のひらに落ちてくるものも同じだった。

止まる事を知らず降り積もる花はハナの髪の上にも舞い落ちる。

豊かな黒髪の上を鮮やかに飾ったシルトはどこか誇らしげにぴんと花弁を開いていた。

「ああ、これ六枚ですよハナ殿」

ハナの耳の辺りに舞い降りたシルトはまさしく6枚の花弁を持っていた。

「本当ですか？」

ハナの視界からは見えず、とって確かめようとするのを押し留めて
ケイトは笑った。

「そのままでしたらどうですか？ 春告げの花に春の女神びったり
でしょう？」

「なっ」

「「似合う」」

少年たちが掴み取ったシルトをハナの髪に乗せていくものだから、
頬に走った熱と共に飛び出しそうだった言葉も何処かに消えてしま
った。

ハナがシルトに埋もれていく様子を上から見つめていたセイラは声
を上げて笑った。

「やっぱりハナが一番適任だよ！ 春乙女もハナがやればよかった
のにね」

同意を求めるようにジルフォードの方を向けば、何時の間にか色眼
鏡は外されていて、瞳には淡い空の色が映えていた。

その瞳が一際美しい白を見つけると、手のひらに受け、隣に居るセ
イラの髪に挿した。
甘い香りが強くなった。

「セイも似合う」

願い事の叶うシルトではないけれど、曇ることの無い白は亜麻色の
髪によく映えた。

「ありがとう」

はにかんだ笑顔に微笑が重なると嬉しさも増えていく。
掬われた一房の髪を耳にかけられるのがくすぐったくてセイラは声を出して笑った。

ジルフォードにもシルトが似合うのではないだろうか。
ふと浮んだ疑問の答えを探ろうと、ジルフォードを見上げれば風に攫われる白い髪がシルトの色に溶けていく。
輪郭が曖昧になり青い空に吸い込まれていくよう。

「ああ、ジンの髪はシルトの色でもあるんだね」

雪の色。花の色。

見惚れるほど美しく、するりとすり抜けていくと知っていても手を伸ばさずにはいられない。

「そんなことを言うのはセイだけだ」

彷徨っていた指先を掴まれる。
自分より少し冷たい熱が伝わる心地よさ。

「それは嬉しいかな？」

「嬉しい？」

ジルフォードの首が傾いだせいで、髪がさらりと揺れた。

「ジンについての発見は私が一番が良いもの。うん。一番がいい！」

ちよつと困り顔。

表情が読めるようになってきたのが嬉しい。

「だから、一緒にいろんな場所に行こうね」

これからの運命など全く知らずに口にした言葉は、小さな頷きになって返ってきた。

あれほど舞っていたシルトの花も最後の一片が静かに地面へと落ちていった。

第三章：夕闇に映う色 12

花が丁度舞い終わる頃、静まり返った廊下には扉を叩く固い音が響いたが応えは返ってこない。

訪ねた相手の中にいることは分かっていたけれど、あまりにも静かな其処からは入ってくるなと無言の圧力が漏れているかのようである。ルルドはそれ以上足を進めることは出来なかった。

彷徨った視線は定まらず、目的もなく廊下を歩き始めた。

今、書庫に行ってもカナン以外は誰も居ないだろう。

花流しなんて女性が好みそうな行事をやっているようだから、きっとセイラもハナも街に出て行ったに違いない。

部屋に戻るのも気が進まず、目に付いた庭へと足を進めてみると、皆同じように刈り上げられた木々が窮屈そうに空を支えていた。

作られた植物の美しさがルルドには理解できなかった。触れてみても、全く自分の知らない物質で構成されているのではないかとさえ思ってしまう。

腰を落着けた一角も何処か座りが悪い。誰も居ないだろうと重いため息を付こうとしたとき、葉がわさりと揺れた。

吸い込んだ空気を吐けぬままその方向を見れば翠の瞳とぶつかった。周りを囲む緑より、直濃い色は驚き、そしてすぐさま普段を取り戻す。

「貴方……」

声を聞いて思い出した、確か王の妹君だ。

名前はテラーナと言っただろうか。

銀の髪をきつちりと結い上げた彼女の後ろには二人の侍女が付き従っており、瞬時に眉を顰めた彼女たちを見て、ルルドはわけも分からず安堵した。

おそらくアレがルルドの思い浮かべていたタハルへの対応なのだ。

「失礼します」

何かを言おうと口を開いたテラーナの前を通り過ぎて廊下に戻る。
この城は、迷うほどに広いくせに砂漠で育ったルルドには閉鎖感が付きまとう。

「また迷ったのか？」

背後から聞こえてきた声は笑いを含んでいた。
からりとした笑いは決して不快ではなかったが、今会いたい相手ではない事は明白だった。
何時もいつも、どうして情けない気分の時に会ってしまうのだろう。

「迷ってなんかない」

振り向きもせずに言えば、ジョゼの笑みは深くなった。
ついと並んで、己より背の低いルルドの顔を覗き込む。

「この前と同じ顔をしてるぞ」

笑われても何故か怒りは湧いてこない。

自分はそんなにも情けない顔を曝しているのだろうかと思いに触れてみた。

頬も指先もどちらも冷たかった。

握ることの出来なかったドアノブもきつと冷たかっただろう。
その反応が拍子抜けだったのか、ジョゼは片方の眉を上げた。

「ナジュール殿がらみか？　ちよつとは自立しろよ」

どうせ気の浮き沈みを左右するのはナジュールなのだろうと当たりをつけてみれば、案の定そうだったようでルルドはふいと視線を逸らした。

「そのナジュール殿はどうした？　嬢ちゃんは居ないだろうから書庫じゃないだろうしな」

外にいるのならば話す機会もあるだろう。

そうなればルルドの扱いに慣れたナジュールがこんな状態で放っておくとは思えない。

「部屋か？」

反応がないのは、それが事実であると思ってもいいのだろう。それにしても珍しい。

今まで昼近くまでナジュールが部屋から出てこなかった事はない。

「何かあつたか？」

「タハルで良くないことが起こったんだ」

夜遅く、サクヤがナジュールの部屋を訪ねた事は知っている。

タハルに変事が起こったに違いない。もしかしたら父に何かあったのかもしれない。

「おいおい、そんな事言ってもいいのかよ」

使用者がぼろりと自国の立場が悪くなっている事を口にするものじゃ

ない。

ジヨゼの言葉には少々手際の悪い弟分をたしなめるような響きがあった。

「隠していたところで、どうせバレルだろう？ それなら今ばれたところで関係ない。もともとタハルの立場はすこぶる悪いのだから」

すねた声は子どもっぽくて、感情が全て面に出るルルドは使者としては優秀とはいえないかもしれないが、自国がどう見られているかの判断は正確だった。

「二の王子ってのはどんな奴だ？」

何故、今二の王子なのだ？

見上げたジヨゼの表情を見て納得した。

タハルの状況が変わればアリオスもどう対処すべきか考えなければならぬのだ。

いつも飄々としているこの男は紛れも無く、この国を支える一つの柱だった。

「ルルダーシエは」

「ルルダーシエ？ お前の名前と似てるんだな？」

「ルルドはタハルで一番多い名だ。砂漠で貴重な水を表す言葉だからな。ルルドに慈しみを表すアーシエを足してルルダーシエだ」

この名はタハル王の第二側室となったルルダーシエの母の苦肉の策だった。

初めの王子には太陽の名を、次の王子には水の名を。

それが、タハル王の願いだった。

最初に王子を産んだ第一側室は誇らしげにナジュールと名づけた。次の王子を産んだ第二側室は、誰でも名乗れるルルドなど名前からして劣ってしまうと、新たな名を考えた。

王の正妃はタハルの主神であるリユオウと決まっているので実質的には存在しない。

その分、側室同士の争いはし烈を極め、慈しむと言う名を貰いながらも、ルルダーシエはナジュールを憎むように教育されていた。

憎むには途方も無く大きな存在だったと気づいたのはいつの頃だろう。

「ルルダーシエは愚かで小さな存在だ。いつも、己の無力を嘆いている」

いつもいつも空回り。

ほんの手助けにもなりはしない。

もし、ほんの少しでも力があつたなら、兄の憂いを腫らす事ができたかもしれないのに。

「己の無力さを知っていることはいいことだぞ」

ジョゼはボンとルルドの頭を一度叩くと、己の聞いた質問の答えなど求めていないかのように背を向けて歩き出した。

眉を寄せてこちらを見ているであろうルルドに振り返らないまま手を振って。

「……良くなんてないさ」

呟いた言葉は、何処にも届くことなく冷たい床の上に落ちていった。

ルルドが居る廊下から少し離れた城の中庭はがやがやと騒がしかった。

各地の商人たちがここでも品物を広げ客を呼び入れているためだ。祭に行くことが出来ない侍女や兵士のために、この日ばかりは許可を貰った商人ならば城に入ることを許されているのだ。

一際人を集めているのはエスタニアから来た商人たちのようだった。

「案外簡単だったね」

ヒイラギは奪った許可証を見つめくすりと笑った。

中庭の隅に品物を並べるふりをしながら、隅々を観察する。兵士たちはいるけれど、さほど警戒すべきものでもない。それよりも、問題は此方のほうだ。

「もうちょつと愛想よくしたら？」

表情を変えないサキに、せっかく寄ってきたお客たちも早々と去っていく。

「それを売るのが目的ではないだろう」

確かに、許可証と一緒に奪った品物を売ってやる必要などないけれど。

ヒイラギは珍しく渋い顔をした。

「君ってさ、楽しもうとか思わないの？ ちょっと商人の真似ごとやってみようかあとかさ。このお城素敵〜とか。……無いみたいだね」

よくもまあ、こんな無表情でとっつきにくい相手と数年も組んだなあと感じた。

未だに分かり合えただなんて幻想を持つこともないし、相棒としての愛情を持つこともない。もともと互いにそういった感情は希薄だと知っているけれど、時々あまりの冷たさにため息をつきたくなる。

「サキってさ、何が目的で生きてんの。あ。ユザの復讐なんて言わないでよ。あれは一族の意思であってサキや僕の目的ではないんだから」

「ただ在ることが必要だ」

「なにそれ。よく分かんないなあ。まあ、いいよ。別にサキの目的なんてどーでもいいし。僕はね夢を見るためだよ。誰かさんが描き損ねたね」

やはり変化に乏しい相棒を放っておいて、ヒイラギは廊下の先に目当ての人を見つけ、口の端を吊り上げた。

「その旦那〜。寄っててくださいよ〜」

ぴよんと飛び跳ねながら手を振るうと老人は近づいてきた。

腰に巻いた毛皮がアリオスの住人ではないことを物語っていた。

瘦躯をキビキビと動かして近づいてくる老人に兵士や侍女たちは頭

を下げ、道を譲り、三人の周りには奇妙な空間が出来上がっていた。これならば話を聞かれることも無い。

「何故、ここにいる？」

冷たく厳しい声も聞きなれてしまえば、身を震わす効果はありはしなかった。

ヒイラギはけろりと笑うと真実を告げる。

「お城の中見てみたくて、来ちゃった。それに、サクヤ殿がルルダ―シエ様を苛めてないか心配だったから」

「人聞きの悪い」

「アナタの愛情は厳しいんだよ。ルルダ―シエ様は傷つきやすいんだから気おつけてもらわないとね。使い物にならなくなったら困るでしょ？」

ふうとため息をついたサクヤにヒイラギはにまりと口元を歪めた。

「それとも、アナタにはその方がいいのかな？」

一瞬だけサクヤの瞳に黒い光りが宿ったが、それはすぐさま消え、何事も無かったかのようにサクヤは二人に背を向けた。

「手塩にかけた王子様。捨てるには惜しくないの？」

揺るがない背中ではヒイラギの問いなど跳ね返して去っていった。

「あゝあせつかく侵入したってのに、もう行っちゃったよサクヤ様。
……凶星だったのかなあ」

仰いだ頭上は真っ青で、同じ空の下の饗宴を思ってヒイラギは小さく笑った。

「セイラに早く会いたいなあ」

第三章：夕闇に映う色 13

空を舞う白がなくなると下から声がかかり、ジルフォードとセイラは階段を下りていく。

外に出てみると感嘆が零れた。

路地一面が白い絨毯を引きつめたように真白だ。

踏んでしまうのは心苦しいと思いつつ、外に足を踏み出せば甘い香りが全身を覆い、足元をふかりとしたものが包み、小さな幸福感で満ちていた。

結局花弁の多いシルトはハナの頭に飾られている一つきり。

ちよつと残念。けれど素敵な一輪を手に入れたこともあり、さっぱりとした諦めがあった。

「あつ、おにーちゃんだ」

立ち話をしていると視界の先をのそりと大きな影が横切っていく。つんと天に向かった髪の毛に、丈の足らない継ぎはぎズボン。

「トツド」

少年たちの声、セイラの呼びかけ、どちらが聞こえたか大きな青年は振り返った。

小さな瞳がぱちりと瞬いて、元気に手を振る三人と訝しげな顔をしている三人を見つけた。

「あれ？ セイラおねーちゃん。知り合いなの？」

「うん」

少年たちの問いに答えつつ、どうしようかと迷っている人物に走り寄る。

蹴りあげられたシルトが足元を舞っていく。

「セイラ」

セイラのことを覚えていたようで、目の前に立つと確認するように名を呼ばれる。

「二日ぶりだね」

トツドの大きな手のひらにはいくつも小さな花が握られていた。

肩にかかった袋の中には零れ落ちそうなほどシルトが詰まっている。その袋はセイラがすっぽりと入ってしまうほど大きい。

「トツド、そんなに取ったの？」

セイラの言葉に頷きながらも、オドオドしているのは見知らぬ人間がいるためだろう。

「ジンとハナとケイトだよ」

ケイトの差し出した手を恐る恐る握り返し、トツドは不器用に口を歪めた。

「おにーちゃん、メイヤーさんのところに行くの？」

二人の少年はトツドの頷きに歓声を上げた。

「おねーちゃんたちも行こうよ。シルトのお菓子食べれるよ」

聞けば、トッドが集めたシルトの花でお菓子を作るのだという。誰にも踏み荒らされていない花を取るために裏街の奥深くまでやってきたのだと。

特に予定も無かったものだから、少年たちに手を引かれるままにトッドの後ろについていった。

路地はぐにやりぐにやりと曲がりくねり、次第に細くなる。

トッドが背負っている大きな荷物のせいで前は見えなかった。

「おにーちゃん！」

「おつきいおにいちゃんが来たよ」

どれほど歩いただろうか。

いつの間にか子どもたちがわりわりと近づいてきて、大きな足に取りすがった。

そのうちに一人がセイラたちに気がついたようだ。

「おねーちゃん！ お話のおねえーちゃんも居る！」

何時の間にかお話のおねーちゃんに認識されているセイラは皆から歓迎を受けた。

一人ずつ挨拶を受け取りながら視線を前方へと移すと、一人の女性が目を見くして此方を見ていた。見覚えのある顔にはっとした。

「サンディアさん」

「セイラ殿？」

思わぬ再会に一人は笑みを浮かべ、もう一人は困惑を露にした。困惑を浮かべたサンディアは視線をどこに定めていいのかわからなくなつた。

眼と鼻の先に訪れてるとは知っていたけれど、まさか会うことになろうとは。

わざと外した視線の端に白が揺れている。

「ジン！ サンディアさんだ」

セイラの声はまざまざと現実を突きつける。

嘘だと思いたかった。

そちらを向いてしまいたかった。

合わせる顔など無いというのに一目見たいと願ってしまったのだ。

長い睫に彩られた瞳がそつと開かれ目の前の青年を見た。

喉が痛いほどひりついて、言葉を発する事ができなかった。

勝手に開閉する口が何を話したいのかサンディア自身にも分からない。

脳裏を焼くような白は昔と変わらない。

けれど己の腰ほども無かった身長は、ぐんと高くなり見上げなければならなくなつた。

瞳はどうだろう。子どもの時のように色を変えるのだろうか。

どちらもぴくりとも動かないのでサンディアから見えるシルフォードの瞳の色は紫から変わることはなかった。

奇妙なほしんとしている。

サンディアの耳には世界が音を消したように何も聞こえては来ない。それは本当に辺りが静かだったのか、それとも極度の緊張のせいかな。

おそらく緊張のせいだろう。
そこ、ここで子供たちがはしゃいでいる。
セイラが何かを話している。
風が駆けた。

それなのに己の内を巡る血の音さえ聞こえてこないのだから。
音が消えたのと同じほど唐突に音が戻ってきた。

「母上」

離れた場所に居るというのに、その声は風に乗ってサンディアの耳まで届いた。
母上と。

記憶の中にあるものより低くなった声がその当時と同じままの響きを口の端に乗せる。
それは、ともしれば己の願望だったかも知れないけれどメイヤーの言葉が背中を押した。
いつでも譲歩をくれるのは子どもたちの方だと。

「母上、お久しぶりです」

最早、願望ではなく現実だった。

「ジルフォード……ごめんなさい。私は」

ちゃんと名を呼んであげたいのに声が掠れて鮮明な音になってくれない。

謝罪も感謝も一緒になって零れ落ちる。

涙の数が増えるほど、口から漏れる音は意味をなさなくなった。

「傍に行つて」

ついと押されてジルフォードは数歩前に出た。
寄り添うには程遠い。

ああ、じれつたい。其処に居るのに。手が届くのに。互いの言葉が届くのに。

背中を押す手に力が籠る。

僅かな抵抗を見せながらジルフォードが視線を下ろす。

無表情に困り果てた子どもの色を覗かせたジルフォードにずっとセイラは笑う。声に出さぬまま「大丈夫」と。

ぽんと再び背を押してやれば、呪縛は解かれ足は向かうべき場所へと進んでいく。

どちらが先に手を伸ばしたのか、離れていた影が重なった。

「ジルフォード、ジルフォード」

名前はすべての意味を持つ。

ごめんさない。

ありがとう。

愛しています。

会えて嬉しいと。

崩れ落ちそうな体を支える手のひらは大きくて温かい。じわりと広がる熱が心地よい。

その様子を見守るセイラがほつと息を吐いた。隣にはぴたりとハナがいる。この再会を見て、セイラが母親を思い出さないはずが無いのだ。

「サンディアさんを泣かすなー！」

しんみりした世界に幼い怒号が響き、小さな手がばかりとジルフォードの足を叩く。

眉を吊り上げた少年はまだ幼く、どんなに精一杯腕を伸ばして叩こうともジルフォードに大打撃を与える事はできない。

けれど、己の怒りの一片でも伝わるようにと何度も何度もジルフォードの足を叩いた。

「サンディアさんはいい人なんだ！ 皆に優しくってお菓子だっくれる。眠るのが怖かったらずーっとずーっとついてくれるし……だから、だから泣かしたらダメなんだ！」

「涙は嬉しくても、幸せでも流れるものですわ。」

困り果てたジルフォードに代わりハナは腰を折り、少年に視線を合わせるのにこりと笑う。

その言葉に「本当に？」という表情を浮かべた少年に更に続けた。

「優しくされると、頭を撫でられると、ずっと眠るまで手を握っていてもらうと嬉しくて胸の中が暖くなるでしょう？ ついでに鼻の奥が痛くなりません？ 怖いぐらいの幸せで」

覚えがあるのか少年は視線を彷徨わせた。

「む……サンディアさんを苦しめたわけではないんだね。なら、許してあげる」

尊大に言いかけた少年はにかつと笑った。

「哀しくて泣かせたらダメだからね！」

小さく頷いたジルフォードの姿に満足したのか少年は腕組みをして
よろしいとふんぞり返った。

それが可笑しくって、やっと涙の収まりかけたサンディアもふと微笑んだ。

目尻が熱を持ち、鼻の奥が痛かったが気にはならない。

ありがたいの意味をこめて柔らかな少年の髪を撫でると口元が緩んでいく。

そこに親しみのこもった笑い声が出た。

「積もる話もあるでしょう。　どうでしょう。　暖かいお茶をお供にするのは」

メイヤーの提案に誰も反対するものはいなかった。

第三章：夕闇に映う色 14

案内された扉をくぐると天井の高い大きな部屋に出た。

入り口の小ささから見ればアンバランスなほど広い空間はどこか清廉で祈りの場のような雰囲気がある。

高い位置にある窓から差し込む光の筋は何処を照らすべきなのか知っているように一体の像を照らし出す。

少女の面影を残したその像は凜とした佇まいで天を見つめていた。

一箇所だけはめ込まれた赤い色ガラスから差し込む一筋は彼女の持つ剣を照らしており、空が変化するたびに赤い光が揺らぎ、炎が踊っているかのようなのだ。

その剣は彼女の身長を越すほど大きい。

それなのに少女の像には今にも駆け出していきそうな躍動感があった。エイナの像とはまた違う。

「リン・オニキスですよ」

不思議そうに像を見上げていたセイラにメイヤーが告げた。

「リン……」

聞いたことのある名前だった。

彼女の話をしてくれたのは姉のユリザだっただろうか。

「初代『陽炎』の將軍……このような像があるなんて知りませんでした」

ケイトは呆然と呟いた。

おそらくマルスに次いで伝説の多い人だったが、像はあまりない。

城の中にさえ一体としてなかったのだ。本人が嫌ったからと言われているが真偽のほどは分からない。

「初代って事は国始めのころの方ですか？」

「いえ、我が軍が『陽炎』『月影』の二軍構成になったのは三百年ほど前のことです。それまでは『アカツキ』と十二将で構成されていたはずですよ。彼女の時代が初めてなんですよ、対の魔剣が揃ったのは」

その禍々しい伝説に、美しさに惹かれ、対の魔剣を手にしたものは多いと聞く。

そして、誰一人使いこなせたものはいないのだと。

二つを離すことでようやく扱えるようになった。

月影はカイ・サーフェイス。陽炎はリン・オニクス。この二人が後の『月影』『陽炎』の初代將軍となったのだ。

「へえ。今、キース將軍が持っている剣だね」

「ええ」

長身のキースが持つても大きく見える剣だ。

どれほど大柄な女性が持つても手に余る。それなのに、像の少女は華奢といっても良かった。

「彼女も戦乱で親を亡くした孤児だったようですよ。彼女の持つ剣はすべてを守るためのものです。子どもたちの守護にはよいでしょう?。」

元は信仰の場所だったのであろう。生活の場が表街に移るにしたが

って打ち捨てられた場所を借りているのだという。

磨り減った像の足にかつての信仰の深さが伝わってくるようだった。

「貴女がハナさんですか？」

ほうと像に見入るハナにメイヤーが声をかけた。

何故己の名前を見知らぬ場所で出会った老人が口にするのか検討もつかないハナは少々まごつきながら頷いた。

「ええ、そうですね。……どこかでお会いしましたかしら？」

「セイラ様と一緒に居られたので、きっとそうではないかと思っていたのですがね。ハナさんのことはクロエに聞いたのですよ」

「クロエ……ああ！」

つい先日、ハナが宣戦布告をしてしまった相手のことだ。

「では……」

クロエの養い親のことは侍女仲間から多少は聞いていた。

昔は名の通った地方貴族だったことや最近では領地を追われ没落したということ。

クロエは美人の上、そつが無い。

そして、少々冷たく見える態度のせい、彼女たちの言葉には少なからずやつかみがいっている事を知っていたので話半分に止めていたのだが、没落したというのは嘘では無さそうだ。

洗いざらしの服は、貴族が好む絢爛豪華なものからは程遠く、節くれだち荒れた手のひらはジニスの男たちのものとよく似ていた。

何もかも貴族からは程遠く見えた。その慈愛に満ちた優しい微笑さ

えも。

「挨拶が遅れましたね。マーク・メイヤーと申します。クロエは私の娘になります」

目の前の老人は娘の名前を告げるとき誇らしげに微笑んだ。ハナは得心した。

これが彼女の守りたいものなのだ。失いたくないと願っているものなのだ。

どんなに口さがない影口を叩かれても完璧な侍女を演じ続けて必死に守っているもの。

分からないなんて完全に言えなくなったしまった。

クロエがハナの気持ちがかかるといったように、ハナにも彼女の心情が手に取るように分かってしまう。

それと同時にもっと話してみればよかったという思いに駆られたのだ。あの時は、威嚇するように己の想いだけを打ちつけた。

「マーク・メイヤー様ですか。あのザクセンの」

隣に居たケイトは驚いて声を上げた。

彼が想像通りのマーク・メイヤーならばリン・オニクスと同じほど有名人ということになる。

メイヤーがザクセンの領主であり、その手腕が今でも語り草になっていることはケイトもよく知っている事だったが、彼が城に顔を出していたのはずいぶん前のことで、ほわりと笑う老人がその人だと実感は出来なかった。

なにしろメイヤーは百戦錬磨でマルスの再来とまで言われた先王に怯む事無く口答えできた数少ない一人なのだ。

もっと苛烈な人物を想像していた。

目の前にいる人物はケイトの故郷にもいる気の良い老人に似ていた。

「もう十年も前の話です」

メイヤーが微笑むと目尻には深い皺がはいる。

「まさかタナトスにお住まいだとは」

ザクセンを追われてからの行方はようとして知れなかった。

メイヤーさんを領主に戻して欲しい。

その嘆願は日々届いてきたし、領主といわないまでも知恵を借りた
いという地方はいくらでもあったのだ。

こんなに近くにひっそりと暮らしていたなんて。

「目的地はたくさんありました。ジオス、タルダン、スーサ。助け
を必要としているところはいくらでも。一番助けの必要な場所は哀
しい事にここなのですよ」

光が強ければ闇もまた強い。

富むものは富み、貧しいものは生きるのさえ困難だ。

入り組んだ街並みの向こうに打ち捨てられた人々がどれほどいるか。

「ルーファ王は賢明です。けれど全てのものに一度に手を差し伸べ
ることは出来ません」

タナトスには国営の孤児院が出来た。

それは画期的ではあったけれど、全てをまかなう事などできないの
だ。

それを聞きつけ地方が流れ込んだ孤児たちが裏街に溢れていく。こ
こにいる子どもたちは孤児院にさえ居場所の無かった子どもたちだ。
場が沈んだところで子どもたちの笑い声が弾けた。

「メイヤーさん！お菓子作ろうよ！」

「早く！ 早く！」

材料がそろったので子どもたちは待ちきれないらしい。

子どもたちを引き止めることが出来なかったトッドは申し訳無さそうに扉の向こうから顔をのぞかせている。

「おにーちゃんもおねーちゃんもサンディアさんも早く〜」

「お茶はお菓子が出来てからにしましょうか」

そのメイヤーの言葉を合図に子どもたちは近くにいたサンディアの手を引き、ハナとケイトを早くと追い立てていく。

「おねーちゃんたちもね」

それだけ言っただけ子どもたちは突風のように去っていった。ぽつんと残された三人の間にメイヤーの笑い声が響く。

「待ちきれなかったようですね」

ずっと楽しみにしていたことだ。無理もない。

笑いをおさめるとメイヤーは二人に向き合い、居住まいを正す。

「申し遅れましたね。ご結婚おめでとございます」

「ありがとう！」

寄り添うように隣に居るのが自然な二人に睚が緩んでいくのが自分でも感じ取る事ができる。すべてうまくいつているように見えた。ルーフア王は賢く、戦を好まない。国は安定し、形だけでもエスタニアの支援を受けることになっている。

一番懸念していたジルフォードにも寄り添うべき相手が見つかり、母親との再会もうまくいった。

一抹の不安はうまく行き過ぎているからだろうか。

安心しきったところで、大波に攫われてしまうのではないかと思っている自分にメイヤーは首を振った。今は目の前の幸せを喜ぼう。

「皆さんを導いてくれたシルトに感謝しなくてはなりませんね」

「クロエにも感謝しなくちゃ」

「クロエにですか？」

「うん。たぶんジンが外に出ようと思ったのは彼女のせいじゃないかな」

メイヤーのところまで行き着いたのはシルトのおかげに違いない。シルトをおって裏街へ。そしてシルトをとりに来たトッドに導かれて此処に着たのだから。

けれど、直接の理由はクロエがザクセンのことを話したから。

「……先王を恨んでいますか」

ジルフォードの口から出たのは静かな声だった。

父と言わずに先王と言ったことに永遠に離れてしまった二人の間には修復される事のない溝が見えるような気がしてメイヤーはきつく瞼を閉じた。

「いいえ」

それは本心だった。

例え貴族がメイヤーを領主から引き摺り下ろそうとしても、

王が諾と言わなければ成立はしないのだ。

先王は処分理由も薄っぺらな紙切れに印を押したのだ。

怒りもあつた。哀しみもあつた。けれど、もう過去の事で恨むなんてことは一度たりとも無かつた。

「あれは彼が出来た最善の策だったのでしょう。対外関係は落ち着いてきたといつてもまだまだ不安定な時期でした。国内でも揉め事は誰もが避けたかつた。街道を整備し、産業を活性化する、国を豊かにするためだと言われれば反対する理由などありません」

そして、まさしくそうなつた。産業が発展し国は豊かになった。

全てが正しかつたとは言えないけれど、エスタニアを交渉の席に引っ張り出すことができるまでの国力はついたのだ。

「クロエに聞きましたか？」

シルフォードの領きにメイヤーは小さく笑つた。

自分がコレほどまでに穏やかでいることが出来るのは代わりにクロエが怒ってくれたせいもあるのだ。

小さな賛同者はいつでもメイヤーの味方だった。今でもそれは変わらない。

「ケネットという青年にザクセンの事を知りたいのならば貴方に会えと聞きました」

あまり耳馴染みの無い名前にメイヤーはふつと目を細めた。
記憶の宮殿からその名を取り出すと納得したように頷く。

「ああ、記録者にお会いになったんですね」

「……記録者？」

「ええ、表向きは保管庫の管理をしていますかね、記録者といった方がよいでしょう。この国の歴史をくまなく知っているのは彼だけでしょうね。過去。現在。全ての記録を飲み込んで、彼等は未来を垣間見るそうですよ。不思議な人物ではありませんでしたか？」

極端に人との関わりが少なかったジルフォードにはケネットが不思議なのかはいまいち分からない。

外見だけならば、あまり見かけるタイプではなさそうだった。少なくとも城には彼と同じ格好をしたものはいなかった。

「……どうだろう。けれど、名を告げると不思議なことを言っていた」

「優しい叶え人」

メイヤーはくすりと笑った。

「叶え人？」

首をかしげたセイラにメイヤーは笑みを浮かべたまま話し始めた。

「願い事を叶えてくれる“ジルフォード”のことですよ。私の知っているのは先代ですがね、彼はその話がとても好きでした。おそらく

く次代にも告げたのだと思ひましてね」

満月の夜に現れる夢幻の話。

闇夜から現れる影のような存在はどんな願いでも叶えてくれる代わりに相応の代償を持つていく。

どこかで擦れた物語は、その存在を唯の恐ろしい魔物へと変えてしまったのだ。

「優しい叶え人。いい呼び方だね。その記憶者さん、会いたいなあ」

「台帳の保管庫にいる」

「そこで働いてるの？」

台帳の保存庫ってどこだっけ。

城の地図を頭のなかで広げているセイラの上に重い声が降ってきた。

「記録者は、あの小さな部屋から出る事が出来ないのですよ。何代も前の王が怖れたのです。未来を読むことのできる一族を。彼等の先祖は一族の命をつなぐ代わりに、あの部屋に縛られ王家のためだけに歴史を編み、未来を読むことになったそうです。」

「ずっと？ 外に出れないの？」

「ええ、記録者に使われてしまうと城より先には出れないと」

そんなのひどい。

あんまりだ。

「私、記録者さんに会いに行く」

頬を膨らませ宣言したセイラにメイヤーはふっと笑いかけた。

「それがいいでしょう。きっと喜ぶますから。」

先代の記録者は偏屈で、いつも憎まれ口をきいたけれど誰かが訪ねてくるのを心待ちにしていた。

最後に会った時、彼は己の跡継ぎを見つけたことをとても後悔していた。

それは石の部屋にその子が次代を見つけるまで閉じ込めると決めるのと同義だからだ。

ああ、そうか。

もう彼はいないのだ。

メイヤーはあつと言う間に過ぎていった10年の重みがずしりと押し掛かってくるような気がするのと同時に、新しい時代が動くのを感じていた。

外には大きな鍋が用意されていた。

シルトと砂糖が入れられぐつぐつと音を立てており、鍋をかき回している年長の子もたちの額には汗が浮いていた。

「ジャムを作るのですか？」

ハナに問いかけられたカーサはふわりと笑った。

「ええ、保存もききますからね。向こうではクッキーに砂糖漬けも作っているのよ。手伝ってくださるかしら」

「もちろん！ さあケイト殿も行きますわよ」

俄然やる気を出したハナは袖を捲り上げた。

菓子作りは可愛らしく見えて中々の重労働なのだ。

子どもたちのお腹を満たすほど作ろうと思えばなお更だ。

日々鍛えている腕を存分に使ってもらおうと子どもたちと一緒にケイトを追い立てる。

「そつ、そんなに押さなくても行きますよ！」

「では、早く歩いてくださいまし」

微笑ましい光景に頬を緩ませているカーサについてサンディアも微笑んだ。

目尻の赤くなっているサンディアに事の成り行きを見て取った聡いカーサは何も言わなかったが、眼差しには暖かさが満ちていた。

何処の手伝いに行こうかと思案しているサンディアの元に一人の少年が駆けてきた。

「サンディアさん」

「どうしました？」

「これね、サンディアさんに渡してって言われたの」

少年が手渡したのは一通の手紙だ。

指先に感じるのは、長らく触っていなかった最高級の紙質だった。
シミひとつないシルトのごとき真白な紙に映える赤い封蝋。

白い花に埋め尽くされた世界にぽつりと異彩を放つ赤が心の奥をざわつかせた。

第三章：夕闇に映う色 15

「何か目を引くものがありますか？」

ルーファは窓際に佇む男に声をかけた。

いつからそこに立っていたのか、用意されたお茶も菓子も手をつけられないまま机の上で冷えきっていた。

せつかくのダリア手製の菓子も装飾以外の意味を持ち合わせていない。

ルーファの声に振り返ったのは、鷹の様に鋭い瞳の男だった。

豪華な衣装に彩られた彫りの深い顔は、未だ若々しく実際の年齢よりも男を若く見せている。

「いや、どこかしこも浮かれてきつていますな」

外の喧騒に耳を澄ませた男は堂々としており、部屋の主めいていた。実際、本人もそう見えるべく装っている。

「年に一度の祭ですから」

アリオスの長い冬が開ける。

それを盛大に祝う気持ちはルーファにはよく分かる。

祭りが華やかであればあるほど、国中に活気が漲っているような気がするのだ。

祭りの期間中ばかりは城内が陽気なのも仕方がない。けれど、目の前の男の意見は違うようだ。

一瞬だけ苦々しげに瞳を細めるとマントを翻して、許可も無く席に着いた。

わざわざお茶の用意された席を外し別の席へと腰を下ろす。

中には王妃自ら入れたお茶など恐れ多いと言う者もいるが、これは全く別の意思表示にも取れた。

「ところで、お話とは？ リグンブル殿」

こんなに忙しいときにわざわざ訪ねてくるのだ。余程の用事でしょ
うね？と笑顔に滲ませながら問いかけた。

笑顔が何時もの二割り増しなのは、リグンブルが失礼な態度でダ
リのお茶を拒絶したためだろう。

レイドス・リグンブル。

アリオスの五大貴族の一つ、リグンブル家の血を引くのもさること
ながら、主要な街道、産業を集約するザクセンを納めているこの男
は非常に厄介な相手だった。

前の領主を半ば引きずり下ろすようにして領主になった男ではあつ
たが、彼の功績を見ると一概に責める事もできない。

もともとアリオスでは武器を作るための金属類は豊富であり、加工
の技術も優れていた。

その技術を応用して日用品の生産を手がけたのだ。

装飾重視のエステニアのものと違い実用性に優、品質のよいザクセ
ンのものはどこの商人もこぞって仕入れに来る。

エステニアも例外ではなく、強力な貴族とのつながりもつくり、今
やアリオスで最も外貨を稼ぐ場所となっている。

もう一つ厄介な事がある。

彼が殊更、見えるように傍らに置いた剣だ。

銀で彩られたその剣にはマルスの紋章が彫られている。

王から下賜された証だ。

紋章の下に彫られた名前はロード。

先王であり、ルーファの父、戦王と名高かった彼の名の記された紋
章を見せれば、未だ誰もが頭を下げる威力があった。

「ルーファ王。今のアリオスの状況が分かっておられるか？」

彼にルーファ王と呼ばれるたびに、問題点が山のように見えてくる気がした。

自分はまだ認められていない。

リグンブルは先王のことを“我が君”と呼んでいた。

実際、今もそうだ。

自分は未だ彼等の王ではない。

リグンブルに認められないということは、少なくとも大貴族の一つに認められていないということだ。

「……どういうことでしょう？」

慎重に言葉を選んだ。

嘆かわしいとため息をつかれると知りながら。

「アリオスは非常に不安定であります。エスタニアと婚姻による和睦を得たといっても、いつ覆されるか分からない。失礼と承知して言いますが、セイラ殿はそれほどエスタニアで重要視されてはいないでしょう。母親など田舎娘と言うではありませんか。なぜ、王妃の娘か、せめて聖母の娘を嫁がせなかったのか不思議で仕方がありません」

本当に失礼だと思いつつも口には出さずに先を促した。

さっさと本題に入ってくれなければ、やることはたくさんあるのだ。

「あんな小娘を寄越したくせに、ジキルドとの関係が悪くなれば、すぐさまわが国に援軍をと言ってくるに違いありません」

「リグンブル殿、手短にお願いしたい」

翠の瞳が煌いた。

鋭いその輝きには先王と同じものがあり、時にはつと息を呑むことがある。

「……タハルの王が倒れたようです」

「なに」

「タハルとの関係は今までどおりと言うわけにはいかなくなるでしょう。未だ国を治めて日の浅い貴方、3人しかいない元帥。その元帥も皆、ご高齢だ。これではこの国は土台から揺らぐ」

言い放たれた言葉は忠告ばかりではなかった。

確かにルーファが王についてから日は浅い。そこに、ことさら元帥の話盛り込むとなると。

「元帥を増やせと？」

ちらほらと出ている意見ではあった。もちろん、国を思つての事ばかりではない。利権や出世、そんなものが絡みつく。

確かに皆年を取った。ハマナ・ローランドなど政に関わるものとしては最高齢だ。

けれど、年月は彼等に経験を与えより強固な支えとなったと信じている。

「そう聞こえたのでしたら、一人良い人物を紹介しましょう」

「良い人材の確保は我々の責務だ」

話は聞こう。

そう態度に出しながらも嫌な予感しかなかった。

「サンディア殿を」

「言っている意味が分かっておられるか」

「ええ、勿論です。不当に奪われた彼女の権利を回復するまたとない機会でもあります。今ならば、彼女が産んだのは恐ろしい化け物だという認識が薄れていますからね」

全身が総毛立ちそうだった。

「ルーファ王もそう思ったから、彼女をやガラへと移したのでしよう」

「私は、彼女を此方の世界に戻す気はない」

壊れていくのは母だけで十分だ。

側室である事をなじられて、王妃より先に妊娠した事で罵られ、王妃がいなくなったその後も、彼女の支援者からの嫌がらせは絶えず、次第に母は体を壊していった。

母は最期の息で言ったのだ。「サンディア様は、さぞや悲しいでしょう。己の子の成長を見守れないなんて」と。

今、サンディアを政に引き込めば、同じ事がおこるに違いなかった。

「そう、ですか。ならば、ジルフォード殿はどうなるのです？いつまでも、いつまでも、王宮に閉じ込められた魔物のように暮らせと？ サンディア様が後見人となれば怖いものなどないでしょうに。」

彼女の血は未だに力を持ち、アリオスにとって有益ですよ」

だからこそ厄介なのだ。

彼女が唯の母親で居ることが出来るのなら、この石の城もさほど冷たくないだろうに。

「ジルフォードについては私も考えがある」

「そうですか。それが、よい策となればよいのですがね」

冷めた笑みでそう言うとりブングルはさっと席を立つ。

「先ほどの話は、覚えておいて頂きたい。サンディア様には打診する予定です。……ああ、それとも一つ。これは忠告です。王妃様に給仕の真似事など止めさせなさい。王家の品位が下がりますぞ」

眉を吊り上げたルーファを一瞥すらせずに部屋を出て行くと、しんと冷えた沈黙が居座った。

ルーファは手をつけられず冷たくなったお茶をこくりと嚥下すると部屋の隅へと呼びかけた。

「それも頂こう」

視線の先では肩を落とすダリアの姿があった。

「すみませんわ。……私のせいでルーファ様の立場が悪くなってしまっなんて」

ルーファにもお茶を用意したのだろう。

道具の一式を持ち申し訳無さそうに顔を伏せるダリアを手招きすると隣に座らせた。
元々華奢なため力なく頭を垂れていると、消えてしまいそうなほど儚く見える。

いつもは光の弾ける金の髪も今では彼女の輪郭を消してしまうかのようだ。

ルーファはダリアを引き寄せると慰めるように頭を撫でる。そうすることで、己の怒りも凪いでいくようだった。

「ダリアのお茶を飲む栄誉を逃すなんて可哀相な人だ。さあ、私も栄光の一杯を入れてもらえないだろうか」

「ええ、もちろん」

金で出来た靴が廊下を弾く。

その甲高い音を合図に侍女たちはさつと端に避け深々と頭を下げ、微動だにしない。

その様子にはつととなった他の者たちも頭を下げたが、リグンブルの視界には入っていないのと同じだった。

己以外誰も動くもののない廊下を闊歩するリブングルの前にさつと影がさした。

マントにも帽子にも誇らしげに光る百合の紋章はこの国では誰もが知る大貴族の血筋を示す。

そして、腰に差した銀で彩られた剣に描かれたマルスの紋章は、そ

れが王より下賜されたことを如実に表していた。
紋章で武装した彼の行く手を阻むものなどこの国には居ないはずだ
った。

僅かばかりの来訪者を除けば。

「これは、これはサクヤ殿」

リグンブルは目の前に現れた細身の老人に声をかけた。

腰に巻かれた毛皮に「なんと野蛮な」と叫びたいところをうまくこ
まかして、微笑んだ。

けれど、サクヤは怪訝な顔をしただけだ。

気安く声をかけてきた人物など記憶に無い。

挨拶に来た貴族たちを逐一覚えているサクヤだが、記憶に無いもの
はどうやったって蘇らせることはできない。

「どちら様ですか」

「ああ、これは失礼。私、リグンブルと申します。先日は挨拶に行
けずすみませんでしたね」

ああ、金杯の。

サクヤの頭の中には目にも眩しい装飾が施された杯の姿が浮んだ。
そして、挨拶を間違えた二人の貴族。

「いいえ、貴方方が忙しいことは承知していますから」

「忙しいのはそちらも同じでしょう？」

意味ありげな言葉にもサクヤは反応を示さない。

それも予想していたのか、リグンブルは口の端を吊り上げて続けた。

「星が落ちたとか」

抽象的な言葉だが、空を読む砂漠の民には十分だった。

星のヒトカケラは誰かの運命。

星が落ちるとは、すなわち誰かの運命が終わったことを示している。互いに探り合う時間は、ほんの一瞬。

先に背を向けたのはリグンブルの方だった。

「では、また」

腹のうちは見せぬまま、何事もなかったかのようにすれ違う。

薄く笑みを貼り付けながらも面倒な相手だと思った。

リグンブルは相手の出方をみるために選んだ手駒のように砂漠の使者たちを軽んじてはいなかった。

戦場での彼等の獰猛さは身にしみて分かっている。どれほどの仲間を奪われたか。豪奢な服に隠れ見えないが、彼の体には残酷な傷口が今も生々しく残っている。

そして彼等は愚かではない。あの苛烈な砂漠を生き抜く強さと知恵を持っている。

それは他者を飲み込むことで手に入れてきたものだ。

気をつけねばあつと言う間にアリオスは飲まれてしまう。

絶対に揺るがない基盤を作る前に己の王は逝ってしまった。

ルーファ王は先王の片鱗を見せながらもまだまだ経験値が少ないのは、先ほど少し痛いところを突いた時の反応でわかる。

少々大人気ないこともした。

反応を見るためとはいえ、何かと話題の王妃の菓子を不意にしたのはもったいないことをしたなと思う。

足早に廊下を渡るリグンブルの耳に楽しげな声が届く。甲高い、その声は若い侍女のものだろう。

ふいに視線をやった先で数人の侍女に囲まれながらナジュールが笑っていた。

「怖いのはあの王子だ」

彼の部屋に父親の凶報が届いたのは昨晚のはずだ。

リグンブルは貼り付けたような完璧な笑みに寒気さえ覚えた。

第三章：夕闇に映う色 16

何処をどう歩いたのか、どれほどの時間が経っているのかルルドには分からなかった。

気がついたら、そこに立っていたのだ。

人が忙しく歩く廊下なので何時間もそこで、ぼうとしていたわけではないのだろうが、全くもって我に返るまでの記憶がない。

ジョゼに会ってから一体どうしたのだろう。

タハルの砂漠では、時に魂が体から抜き出たのではないかと思うような時間を過ごすことがある。

満天の星空に吞まれるときや、暁が砂の山を赤く染める瞬間。けれど、今は目を奪うような光景などありはしなかった。

石の壁ばかり。庭に出たところで同じ事。

そう思いながら、視線を向けた先には目を奪うものがあつた。

先ほど訪ねたときは返事すらしてくれなかった兄の姿だ。

庭の一角に腰を下ろしたナジュールの周りには数人の侍女が円を描いていた。

「タハルってどんなところですか？」

「どんなイメージを？」

逆に問い返された侍女の一人は「んー……」と考える仕草はしたものの具体的なイメージなど殆ど浮ばないのだろう。

辛うじて浮んだのは見放された地という言葉から連想されるもので、そこに住んでいる住人に言うには憚られるものだった。

「砂漠……ですかしら」

とりあえず漠然として良し悪しを含まない内容を口にする。

砂漠といっても貴族育ちの侍女たちには子どもたちが遊ぶ砂場を大きくしたようなイメージしか持てていない。

そこに怪鳥や獣が跋扈するなど夢物語でしかないのだ。

口々に感想を言いながら触れる獣の毛皮も彼女たちから見れば小汚いマントのようなものだ。

「砂漠……確かにタハルの大半は砂が埋め尽くしていますよ。だが、タハルには他にも見所はたくさんあります。例えば満天の星空など、どの国にも負けません」

「まあ、それは見てみたいですわ」

「それならばタハルに招待いたしましょう」

「約束でしてよ」

くすくすと華やかな笑いが場を満たす。

社交辞令であることは互いにきっちり分かっている。

彼女たちは、王子という立場の人間との会話を楽しんでいるだけなのだ。

誰一人、本気でタハルに行きたいなどと思っている娘などいないことをナジュールは理解しつつ、彼女たちが望む笑みを浮かべるのだ。

「そうだわ。ナジュール様」

ずずいと幾人かの侍女が前に出た。その顔には好奇心がたつぷりと含まれている。

今日はせつかくの花流しの日。

それなのに今日休みを取れなかった娘たちの不満は募り、そこに話しやすい話題の人物がいれば饒舌にもある。

それに相手は他国の使者。暇つぶしの相手をしてあげているのよと大義名分もたつ。

その証拠に話に加わってくるものはいても苦言を言いに来るものはいない。

「セイラ様のこと、どう思い？」

「……セイラ殿を？」

互いに顔を見合わせ高い声を上げる娘たちに驚きながら反芻した。

「一緒に街に行かれたのでしょうか？」

意味ありげな目配せをしつつ興味津々だと顔に書いてある。

彼女たちの耳には街に言った事ばかりではなく、広間で抱き合った日が暮れてから共にいたなどの多少歪んだ情報が届いていた。

ルーファとダリアが仲睦まじいのはいつもの事で噂話をしたところでさほど心は躍らない。

セイラとジルフォードも似たようなものだ。それに彼の話をすることとは古参のものが嫌うのであまりすることはできないし、どうせなら他国の王子との禁断の愛に発展させるほうが面白い。

ハナなど牙を剥きそうな話ではあるがあくまでも、ちょっとした暇つぶしだ。

「ええ、案内してもらいましたよ」

結局、早々に離れ離れになって彼女たちの望むような話などなかったのだが、彼女たちの期待には添えたらしい。

黄色い悲鳴を上げた彼女たちは、ルルドが共に居たことも、途中で

ジヨゼが合流した事も知らないのだろう。

その時に、セイラが選んだ腕輪へと視線を落とす。鈍いくすんだ玉が今の己の心情のような気がした。

「セイラ殿はとても素敵な方だと思いますよ」

出てくる言葉は本心であるはずなのに別の誰かが話しているような感覚だった。

「セイラ殿とするヘインズの話は楽しい……」

視線を上げたナジュールに見えた光景はまるでスローモーションのようだった。

向こうから肩を怒らせてやってくるのはルルドだ。

まだ侍女たちは彼の存在には気づいていない。

「ルルド」と名を呼ぶ前に侍女たちが作った輪が崩れ、非難めいた悲鳴は一拍置きにナジュールの耳を打つ。

腕に感じた鈍い痛みがルルドが力任せに腕を引いたからだと気づいたのは、ルルドの手の下でしわくちゃになった服を視界に入れてからだ。

「ルルド？」

声が出たのは更に一拍後だった。

ナジュールの体は侍女の輪を半分抜け出ていた。ルルドの思考と行動は連動などしていなかった。

驚く侍女の顔にも気づいていない。

ナジュールの声さえ耳に入っていなかったに違いない。

ただ掴んだ腕をぐいとひっぱる。

抵抗というよりも戸惑いから歩みの遅いナジュールの腕を叱咤する

ように。

「おい、ルルド？ 一体どうした？」

ダメだ。ダメだ。ダメだ。

この言葉ばかりがルルドをせかす。

ナジュールに宛がわれた部屋の扉を開くと有無を言わずに押し込んだ。

「ルルド！」

流石にナジュールの声にも苛立ちが混じる。

どこか兄の形をしたまがい物を見ているようなざわついた気持ちはおさまってきたが、ルルドは扉の前に陣取って動こうとはしなかった。

何時になく強い眼差しは、ここからナジュールを出してはいけないという使命に燃えているかのようだった。

「あんなの兄上ではありません！」

この国にきて堪えに堪えていた兄上と言う言葉を口に出した。

タハルの話をしたとき、貼り付けた笑みさえずりと落ちたような気がしたのだ。

セイラの話をしたときに、決定的となった。

あれほど好きなヘインズの話しさえ何の意味も持たないような無表情。ルルドにはそう見えた。

「今日の兄上はおかしい！ 何故、隠すのですか！」

「何も隠してなどない。本当にどうしたと言うのだ」

「父上が逝った！　そうでしょう？」

ナジジュールは一瞬驚いたような顔をしたものの、何も言わなかった。

「西の端、リュオウの横にあつた星が落ちた！」

リュオウは砂漠の女神の星。その横で最も気高く光っていた星は力をなくし、ついには闇に吞まれていった。

ルルドに唯一つ、兄より優れたものがあるとしたら星読みの能力だ。無謀だと罵られたがたった一人で砂漠を渡った事もある。

数多の星から運命を読み解く方法は砂漠の端にあつた今にも消えてしまいそんなオアシスで出会った老婆から教わった。

小さな赤い星が流れるのを指差して、今私の運命が流れたと言った老婆は次の日にはもう冷たくなっていった。

ナジジュールでさえ、サクヤの訪問がなければ間違いないと判断できなかったものをルルドは一人で読み解き、抱えていたのだ。

「僕は……頼りない。分かつてる。兄上の支えなど到底なれない！　だけど僕だつてタハルの王子だ！」

先ほどまで黒い瞳の表面を潤していただけの涙は、堪えきれなくなつたのか大粒の雫となつて落ちていく。

ルルドが叫ぶのを止めれば、しんと静まった部屋の床に叩きつける涙の音がしそつた。

タハルの王子と言う立場ならばルルドは完全に失格だった。

次の砂漠の王となる資格を持つものは、いかなる時も人前で弱い姿など見せてはいけない。

それが例え親兄弟であつても。

「あまり泣くな。涸れてしまう」

タハルでは泣く事は弱さの象徴でもあり、砂漠で貴重な水分を己の体から溢れさすなど愚かな行為だとみなされていた。

それなのにこの弟はよく泣くのだ。

唇を噛み締めて、手のひらに爪を立てて。

そこまで我慢したくせに、涙など瞬時に干上がってしまう灼熱の砂の上で、涙さえ凍える夜の闇で一人になってボロボロと泣くのだ。

見つけるたびに涸れてしまつと諭すのだが効果はあまりない。

何度も何度も袖口で拭つても、止まる事を知らない雫はルルドの意思に反して溢れてくる。

水の道をいくつも頼に這わせ、まだ新たに湧いてくる水を溜めながらそれでも視線を逸らさないルルドを見て弟に限っては涸れることなどないのかもしれないと思うときがある。

ルルド自体が水源なのだ。溢れて、溢れて、溢れて。他のものを慈しむ。

誰かが戯れに言った事がある。お前が泣かないからルルダーシェが代わりに泣くのだと。

「ここでは涸れないか」

作り物の表情を完全に取り払ったナジュールは気の抜けたように椅子に腰を下ろした。

柔らかく背中を支える椅子が居心地が悪い。豊かな自然に陽気さ。

有り余る食料に娯楽の数々。水の心配もしなくて良い。

望んでいた世界のはずなのに何も無いタハルが懐かしい。空と砂ばかりの世界。だからこそ、王は絶大だった。父親は一番の支えだった。

じわじわと己のうちに広がっていくのはどうしようもない焦燥感。感情が揺れるのを悟られまいとしていたのに、一番知られたくない

弟に指摘されてしまうとは。

「父上は亡くなられた」

先ほどのルルドの叫びを遅まきながら肯定した。

タハル人の寿命はアリオスやエスタニアに比べれば短い。

医療体制も十分とはいえない。

けれど、タハル王は今や男盛りといって風体で力ではナジュールにさえ引けをとらなかった。

いつからだったか、命の泉が涸れたように力をなくしたのは。日に焼けてたくましかった頬が色を失くしていき、寝付いてからは手足の筋力も一気に落ちた。紫になった唇からは言葉さえも消えていく。それなのに落ち窪んだ眼だけには砂漠を駆けていたときのようにギラギラと火が灯る。

彼が最後に下した決断はナジュールだけが心に秘めた。

「お前の言うとおり、お前はタハルの王子だ。時期が来ればすべて話そうと思った。だが、私が時期を決めるなどおこがましかったようだ」

ナジュールは座るように促した。

これからする話は立って聞くには長すぎる。

第三章：夕闇に映う色17

裏街の一角に夕闇が迫ってくる頃には、大量の菓子が出来上がっていた。

少ない材料のなかでハナが編み出した菓子は殊更人気で尊敬の念を集め、セイラがおはなしのおねーちゃんならば、ハナはおかしのおねーちゃんと呼ばれるようになった。

出来たものの半分は明日子どもたちが売りに行くのだという。

子どもたちの貴重な収入源を少しばかりお土産に貰うと皆に挨拶をして裏街を後にした。

だいぶ奥にまで来てしまったので早く帰らなければ真っ暗になってしまう。

祭りの期間中なので表街では煌煌と明かりが焚かれているが、闇に浸され始めた裏街にはほとんど明かりらしきものが無い。視界の利くうちにと少々名残惜しいながらも「また会いに来るから」と約束して皆と別れた。

「サンディアさん元気そうだったね」

西の離宮に居るときよりもずっと元気そうだった。

別れの際のぎこちない親子の抱擁。

互いにどこまで力をこめていいのか考えあぐねてほんの触れる程度。十分だった。長い月日の埋め合わせはゆっくりとすればいい。

いつでも会うことができるのだから。

ルーファとダリアの対応に感謝しながらセイラもぎゅっと抱きついた。

そのときのことを思い出しながらセイラは、鼻歌を歌いつつくると円を描く。

スカートが広がって、ふんわりと空から落ちてきた花のようだ。

白いはずのスカートには暮れゆく空がプレゼントしてくれた藍と紅の混ざり合った色が映りこむ。

「わっ」

地面に積もったシルトに足をとられバランスを崩したセイラが倒れこんだのはジルフォードの腕の中。

頭を打ちつける前にやわりと抱きとめられた。わざと力を抜いてもたれかかっても変わらず受け止めてくれる。

「ジン。ありがとう」

笑ったセイラはぴょんと立つとまたゆるりと円を描きながら前に進む。

「もう、セイラ様また滑ってしまいますわよ」

「んゝ大丈夫。たぶんこけても痛くないよ」

積もった花びらの上をたたと軽いステップで駆けていく。いったいどういった理屈なのやら。

「いくら花びらの上でも痛いですわよ」

セイラ様ったら！ため息に愚痴を滲ませたハナの前でセイラの動きがしばし止まった。

もちろんハナの諦めきったため息に効果があったわけでも、ケイトのハラハラした視線のせいでもない。

原因は無造作にさしだされた白い手のひら。

「危ないから」

起伏のない声に頬が緩んでいく。

「うん」

セイラも手を伸ばすも後一歩分足りない。

いつもならすぐに飛びつくけれど、かわいいわがママを許してくれるならば、その一歩分はジルフォードがつめて欲しい。

一番星が主張を始めた空の下、ひらりと指先を揺らせば、すぐに暖かな指先が重なった。

「さぁお城に帰ろう。お土産も届けなくちゃね」

門をくぐった所でケイトとは別れ、三人は記録者がいるという保管庫へと向かった。

瞬時に保管庫の場所が記憶の中から蘇らなかったのが何故なのか入り口についてようやくわかった。

小さくて質素。あまりにも地味だ。

指摘されなければ、重要な場所だとは思わない。

けれど、扉を開けると書庫の殊更古い本が並ぶ一画のように独特の匂いがした。

「わあ、王子様！」

視界にジルフォードの姿を認めると、一度目に会った時と同じようにケネットは驚くべき跳躍を見せて本棚の影に半分だけ隠れた。

ちよつとかがみ気味なので、長くもったりした髪の毛は床の上で渦を巻いている。

なんか鳥の巣みたい。

跳躍の驚きから立ち直ったセイラの印象はそんなものだった。

本棚をがっしりと掴んだ青白い指先はガタガタとふるえ、いきなり来たのは良くなかっただろうかと思っていたら、おずと足が出され少しだけ距離が縮まった。

「おっおっ王子様……それに、お姫様も」

声も若干震えている。

三人が中にいる人物に会いたいといえば、外にいた男も大層驚いていた。

シルトのお菓子を届けたいといえば何も言わずに通してくれたけれど。

「君がケネット？」

恐る恐る影から出てきたケネットはぺたりぺたりと足音を立てて近

づいてきた。

その様子を見ながらハナはひくりと口元を振るわせた。
いくらなんでも髪の毛が長すぎる。

どこをどう見ても髪の毛が話しているようにしか見えなかった。
しかも目の前に見えない壁が行く手を阻止している幻想でも見ているのか、細い腕を前に突き出して探り探り近づいてくるので非常に怖い。

なんでセイラはあんなものと普通に会話が出来るのか。
ハナのなかでセイラを尊敬する度合いがぐっと高まった。

「う、ん。オイラはケネットだよ」

これで本日名前を呼ばれたのは二人目だ。
なんだかすごく不思議な気分だ。

石の床を歩いているはずなのに、足元がふわふわしているような気がして、胸の辺りが春の陽光を集めたかのように暖かい。

「私、セイラだよ。よろしくね」

突き出された手のひらにケネットは戸惑った。

お姫様は何がしたいのだろう。

物事を把握するには、五感を働かせる事が大事だとケネットの祖父は言っていた。

なので、ケネットはお姫様の真意を探るためにさし伸ばされた手のひらに顔をぐいと近づけた。

「ひっ！」

短く息を吸い込んだ少女は誰だろう。

黒い大きな瞳が歪んで、顔は強張っている。

きよとりと顔を、もとい髪の毛で覆われた顔を少女のほうに向けると、少女は喉の奥で変な音を出した。
鳥の物真似でもやっているのかしら。

失礼な事を思いつつ首をかしげると、重たげな髪がもてんと揺れる。

「ハナだよ」

壁に張り付いているハナの代わりにセイラが名を告げた。

彼女の着ているものはアリオスではあまり見かけない服だ。その上、可愛らしくいくせに機能性を重視した形。

信頼しきったようにお姫様が名を呼ぶからきつとお姫様の侍女なのだろうと当たりをつけて、一歩分ハナの方に近づいた。

「ケネットだよ」

「よっよろしくお願いしますわ」

明らかにそうとは思っていない顔を向けられてもケネットは嬉しくなつて微笑んだ。

当然、周りから笑っているなど分からないけれど。

ああ、そうだ。お姫様の手。

くりんと体の向きを変えたケネットはじつとセイラの手を眺めた。

「握手だよ。手を握って仲良くしてねって伝える挨拶だよ」

「あくしゅ」

セイラの指先が己の指先に触れるとケネットの体はびくりと揺れたが飛び上がる事はなく、セイラのなすがままになっていた。
握られた手からはじんわりと温もりが伝わってくる。

「よろしくね。ケネット」

「オイラもよろしく！ お姫様」

暖かい手のひらが離れていく時、ちよっぴり寂しさも感じたけれど、握手したほうの手はずっと暖かい気がした。

「きよ、今日はどうしたの？ 調べことなら手伝つよ？」

とつぷりと日も暮れる頃合だけれど大歓迎だ。

「今日はね、お土産もってきたの！」

「おみやげ？」

「ケネットに言われたとおり、メイヤー殿に会ってきた」

人数分の椅子をひこずりながら持ってきたケネットは飛び上がった。今回は驚きではなく嬉しさのせいか、飛び上がる距離は少ない。

「メイヤー様に会ったの！ そう、よかった」

何が良かったかなどケネットにもよく分からない。

けれど、彼の人となりは出会えば何かと学ぶ事は多いと思うのだ。そこで、ふと飛び跳ねるのを止めた。メイヤー様とお土産がどう繋がるのだろう。

「メイヤーさんのところで作ったんだよ。前の記録者が好きだったから君も気に入るのじゃないかって」

セイラが差し出した紙袋を覗き込みケネットはわつと叫んだ。

「シルトのお菓子！」

紙袋に頭から突っ込んでしまいそうなケネットから、恐々袋を受け取ったハナは手早く用意を始めた。

保管庫にろくな茶器があるはずもなく、それを察していたハナは此処を訪れる前にカナンのところへ寄っていたのだ。

菓子にはそれに合った飲み物というものがある。

カナンが選んでくれたお茶をたっぷりといれたポットを取り出して、これまた持参したカップに注いでいく。

何か手伝おうとオロオロするケネットに席についているように頼むと微動だにせずに座っている。

ハナはしゃんと背を伸ばしていても床に着くほど長い髪を結い上げてやりたいという衝動が湧き上がったが、目の前の茶器にだけ集中しようと己に言い聞かせ、ポットの傾きを調整していく。

「さあ、どうぞ」

わさわさと作った髪の隙間からお茶の温度を覚ましているケネットがちよつとばかり、可愛らしく見えてハナは頭を振った。

あんなのが可愛く見えるはずが無い！

きつとカナン特製の茶葉の香りが見せる幻想だ。

けれど、恐怖心を薄らげるには大きな効果があったようだ。

火気厳禁の保管室には調理器具なんてない。

保管庫の上を改造して作ったケネットの部屋にもそんなものはないため、彼が温かいものを口にするということは、ほとんど無かったのだ。

そのため、慎重にお茶を冷ました後、恐る恐る口をつけた。

「いかがです？」

ハナの問いに暫し考えた後、ケネットはぽつんと答えを出した。

「お風呂のお湯みたい」

「あっあなた何て事を言うの！」

すごい剣幕でカップを取り上げられたケネット驚いて椅子から転げ落ちた。

肉の無い尻を打ち付けてなんとも痛かったが、どうして怒らせてしまったかの方が気がかりだ。

「だっ、だつて……温かくて、何だか幸せだから？」

人目を忍ぶように暮らしているのだから、風呂に入るのも一苦労。自分だけが知っている通路を通ってこっそり誰もが寝静まった頃城の風呂に行く事もある。

ケネットにとっては至福のときであり、最高の賛辞を送ったつもりだった。

ちなみに、時折風呂場で見かけられる黒い大きな影は城の七不思議にも数えられていることは本人は知らない。

「あら……そうでしたの」

気まずそうに呟いた後、ハナは元通りカップを戻した。

幸せだと言われれば納得せざるを得ないのだ。

確かにカナンのお茶には幸せになるための成分が入っているに違いないと思うから。

お土産にと持ってきたお菓子は一粒ずつ飽きるほど見回した後、指先でこねくりまわわれてやっと口の中に入っていく。

ハナとしては「止めてください！」と叫んでしまいたかったが、なんだか嬉しそうに髪の毛の束が揺れているので止めておいた。

「こんなに固いのには口に入れるとじわつと溶けちゃうね。これは虫の寄り付かない紙をレスカが発明した時の驚きと同じくらいだ！何十年もほって置かれた本に日焼けもなくて、虫食い一つないときの幸福感！」

独創的な褒め言葉（？）に誰も口を出せないまま、次々に菓子はケネットの口の中に入っていく。

「お菓子って美味しいねえ。初めて食べたよ」

「シルトのお菓子でなくてもよろしいなら、また持ってきますわ」

シルトのお菓子ならば、少なくとも来年まで待たなくてはいけなが、他のものでいいならばいつでももってくる事ができる。

褒められれば悪い気はしない上、セイラに気に入られたのだからもうお茶のみ友達に入れられているはずだ。

「本当？ えへへ。嬉しいなあ。ハナは優しいね」

いきなり呼び捨てにされることも褒められることにも慣れていないハナは不覚にもセイラのカップにお茶を注ぎなおす時に、ポットとカップをぶつけてしまった。

「なっ！ 優しくなんてありませんわ！ 新作の味見をさせようとの魂胆ですわ」

「ハナ……魂胆って」

「新作食べさせてくれるの？　ありがと！」

ハナの混乱振りにセイラもつい口を出したのだが、ケネットだけは嬉しそうだ。

「とつとんでもなく不味くても知りませんからね！」

「お花をこんなに美味しく出来るのだから大丈夫だよ」

何とか言ってくださいと視線でセイラに訴えるのだが、にっこりと笑い、つまんだ菓子を口に入れてケネットに同意するように頷く。

「おいしいよね」というセイラの問いかけにジルフォードまで頷き、ハナには逃げ場所がない。

「いいですわ！　覚悟してくださいまし！」

憤然と言い放ったハナにこくりとケネットは頷いた。

第三章：夕闇に映う色 18

お菓子がすかつり無くなってしまった後もケネットは他愛も無い話を嬉しげに聞いていた。

空の色に、そこに映えるシルトの色。

子供たちの甲高い声。

旅芸人のパフォーマンス。

ケネットが聞き上手なのか、楽しいことがありすぎたのか話は尽きることなく、あふれるように口からついて出ていたのだが、その流れを止めたのもケネットだった。

「王子様たち明日の交遊会に出るんじゃないの？」

何だそれとはセイラもケネットを真似て首を傾げてみると、その横ではっとしたハナは両手を打ちつけた。

パンと響いた音がお楽しみ時間は終わりだと告げているようだった。

「そうでしたわ！ お二人とも夜更かしはいけませんわ。寝不足の顔で出るなんていけませんもの」

ただでさえ街で騒いできたのだから疲労も溜まっている。

セイラなど昨日の夜から、楽しみだとなかなか寝つけていなかった。時間を告げるものが無い部屋では今が何時ごろなのか知ることはいなかったが、訪れた時点で日はとっぷりと暮れていたのだからかなり遅くなってしまっただろう。

自分が居る限りセイラに不調など起こさしてはならないと決意しているハナにとって食事と睡眠の管理は最重要課題なのだ。

部屋に帰りますわよと追い立てるハナを制しながら、意味のわから

なかったケネットの言葉を繰り返す。

「ハナ。交遊会って？」

セイラの言葉を受けて、ハナは重いため息をついた。

「グランさんから聞きませんでしたか。各地から貴族やら有力者が集まって交遊をとという名目でお祭りの騒ぎに便乗しようってことですわ」

「うえ〜」

挨拶の練習をみっちりやらされたのはそのためか。

ハナは手早く持ってきたものをまとめあげ、早々に挨拶を交わすと渋い顔をしたセイラをせつついた。

仕方なくセイラとジルフォードが「おやすみ」を告げようとケネットの方へと向き直ると、ケネットの長い指先がジルフォードを指差した。

ちょうど心臓の辺り。

けして届くような距離ではないと言っのにジルフォードはとんと突かれたような気がした。

「王子様。外に出るといい」

「外？」

ジルフォードの問いにケネット小さく頷いた。

「外って街のこと？」

セイラの問いかけには首を横に振る。

「もっと、もっと大きな外のことだよ」

街なんかでは狭すぎる。

アリオスだつて窮屈だ。

ササン大陸なら釣り合いが取れるだろうか。

瞳の奥にたくさんの色を湛えているのだから、きっと王子様の見える世界は人とは違う。

それは大きな糧となる。

「外に行つて、世界を見るといい」

預言者めいた言葉を言い、ケネットはさよならの代わりに手を振つた。

顔が見えないせいか、もう何も聞くなと閉ざされてしまったようだ。

「おやすみ。ケネット。いい夢を」

おやすみと言ってもらったのはいつぶりだろうか。

夢の中の安寧さえ願ってくれるなんて。

嬉しくって恥ずかしくってシルトのお菓子のように溶けてしまいそうだ。

「王子様もお姫様もハナも。いい夢を見てね」

廊下は静まり返り、三人の足音だけが響いている。

「ジン、明日のこと知ってた？」

考えるとちよつとばかり気が重い。

「兄上に聞いていた」

「そう。ん、ドレス着て慎ましやかにおほほって笑うのは面倒だなあ」

窮屈な衣装はもちろん嫌だ。

と言つてもセイラに合わせてアリーたちが考案してくれたドレスは軽く機能的だ。きらきら、ひろひらが付いてくるけれど。

「口の端をちよつと上げるだけ。大口開けて笑っちゃダメだって」

人差し指を使って口の端をにゅつと上げてみる。

先ほどグランの名を聞いたせいか、頭の奥底に閉じ込めていた記憶が浮かび上がってくる。

大きくはいた息が前髪をふわりと揺らし、それを目で追っていると頭上に手のひらが落ちてきた。

「セイはそのままでもいいと思う」

やさしく頭を撫でるジルフォードの顔には淡い笑みが広がった。

頭を撫でていた指先は頬を掠めて離れていき、その指先の後を追うように頬が熱を持つていく。

どうしてジルフォードは嬉しいことをぼろりと言ってくれるのだろ

う。

「ジンは私を喜ばせすぎだ」

首を傾げるジルフォードの手を取ってぐいぐいと歩き出す。

顔が赤い自信があるから、「また明日」と別れを告げるまで半歩先を歩き続けた。

第三章：夕闇に映う色 19

闇にまぎれてサンディアはそつと馬車に乗り込んだ。

子供たちはすっかり夢の中だ。

年長組みも今日は騒ぎ疲れたのだろう。

早々にベッドの中にもぐりこんでいた。

昼間に受け取った手紙で指定された場所に来てみると、夜の闇に紛れるように一台の馬車が停まっていた。

向こうもサンディアの姿を認めると、音も無く馬車の扉を開けた。乗り込むのを手伝ってくれた親切な従者に行き先を聞いても答えは返ってはず、サンディアが席につくと滑るように走り出した。窓の外には闇が踊っている。

表街ならば煌煌と火が焚かれ明るいに違いなかったが裏街にはその微かな欠片さえなかった。

遠くから聞こえる楽しげな祭りの音は別世界からの音のようで胸のうちが騒ぐ。

夜の寒さと募る不安から身を守るようにサンディアはぎゅっと肩を抱いた。

どれほどの時間は走り続けたのかサンディアにはわからなかったけれど、さほど長い時間ではなかったのだろう。

己を招待した相手への第一声を決めるほどの時間も無かった。

闇に慣れた目には大きな屋敷が窓を外を流れていくのが見えてきた。どこの屋敷も大きく、門の前には火が焚かれ、いかつい男たちが門番をしている。

表街の中でも貴族の屋敷ばかりが立ち並ぶ地区のようだ。

馬車が停まった屋敷は殊更大きく、門には百合の文章が描かれている。封蝋にあった印と同じものだ。

案内された部屋に座っていたのは懐かしいと呼ぶほどには親しくは無いけれど、全く知らぬ顔ではなかった。

「お久しぶりでございますね。サンディア様」

「リグンブル殿」

夫が彼に剣を下賜するとき、サンディアもそこにいた。

そのころと比べれば、彼の生きた年月が如実に体に刻まれていたが鋭い眼光は変わらない。

人を射すくめるように見るこの男がサンディアは、あまり好きではなかった。

「急にお呼びして申し訳ありませんね。しかし、貴女がヤガラから出ているのは好都合だったもので。ヤガラにも何度か足を運んだのですがね、門前払いをくらいましてね」

「権力を纏ってヤガラには入れない。貴方方はよく知っているでしょう」

ヤガラの特番の青年から貴族が何度か訪ねてきたことは聞かされていたが、まさかリグンブル家の者だとは思っていなかった。

しかし、リグンブル家ならば秘密裏に移されたサンディアの行方を知っているのは納得せざるを得ない。

大貴族ともなれば情報網は蜘蛛の巣のごとく緻密に張り巡らされているのだろう。

「貴女も権力をお持ちだ。」

さあお座りくださいと薄い笑みを貼り付けて席を指す。

「例え、貴女が農民の真似事をしようとそれは変わりありません」

もしかしたらヤガラの中にさえ情報網を持っているのかもしれない
と思わせるような声音だった。

「私は、ただのアリオスの民の一人です。それ以上の力など」

サンディアに睨み付けられ、リグンブルはのどの奥でくつと笑う。

「そんなこと誰が認めるのです？ 誰が納得すると言つのです？
特にリディア殿が納得するとは思えません」

サンディアはその名にはつと息を飲んだ。

「伯父は……リディア殿は」

「相変わらずですよ。ルーファ王の戴冠式の前には正当な継承者を
差し置いて何たることかと殴りこみにやってこられましたし、ジル
フォード様の婚約の時には、聖母の娘しか認めないと騒いでおられ
た。あの方は未だ一国の主のつもりでいるのですよ」

サンディアはきつくまぶたを閉じた。

サンディアの故郷はローラ山脈とアリオスの間に合った吹けば飛ぶ
ほどの小国だった。

もともと土地はやせており、少数民族との小競り合いは絶えなかつ
たが何とか生き残っていた国もリディアが王についてから急速に国
力を落としていった。

もともとの浪費癖とあいまって政の能力は無かったのだ。

サンディアがローダの目に留まってからは、さらに浪費は酷くなり、
ついには国は立ち行かなくなった。

ロードの温情でアリオスの一領地として迎えられ、今では盛り返し

てきているが、アリオスでも1、2を争う財政難の土地だ。

「リディア殿も明日の交遊会にはお越しになるでしょう。これまでも幾度と無くジルフォード殿に会わせると言ってきましたからね。今まではジルフォード殿も公の場には出てこなかったために、のりくらしとかわせましたがね、明日はそうもいかないでしょう」

明日の目玉はなんと言っても王弟夫婦。

ここぞとばかりにつかまって何を吹き込まれるか分かったものではない。

「貴女の親族は今でも害を生むのですよ」

ロードの側室であつたシェラが死んだのは、彼ら暗殺したのだという噂も付きまといっている。

サンディアが都から遠ざけられた時から、彼らの発言権は無いに等しかったが、今も返り咲くことを心の底から願っているのだ。

「そんな忠告をするためにわざわざ呼び出したのですか？」

それならば拍子抜けだ。

リディアの脅威ならばルーファ王もわかっているはず、何も出来ないサンディアに話を通すよりもっと有効な手段がありそうな気がするのだが。

「いいえ、全く関係ない話ではありませんが。今宵はサンディア様に五元帥のお一人になって頂こうと思ひまして打診を」

明日は雨になるそうだよ。それぐらいの意味しかないかのように軽く言われた言葉をサンディアはうつかり聞き逃すところだった。

拾い上げた言葉を何度も反芻して、やっと「はあ」と吐息に似た間抜けな音を出すことが出来た。

五元帥とは王と並ぶ国の最高位。現在はハマナ・ローランドを筆頭にモーズ・シエリンとエンの三人しか居ない。

空いたままの2席のうち1つにサンディアを座らせようというのだ。

「貴方、今ご自分で言ったことを理解していなかったの？私の血は災いとなる。そんな私に権力を与えるなんてどうかしています」

「ルーファ王は周りを若い力で固めてしまっている。両將軍しかり。別に若さへの嫉妬ではありませんよ。理想に燃える力は強いでしょう。けれど彼らは追従することも知らず、厄介な相手をつまく手のひらで転がす術も持ち合わせてはいない」

「ハマナ様方は概ねルーファ王指示のようですが」

「確かに彼らは大きな力でしょう。どの有力貴族にも意見が出来るけれど、彼らは公平を期さねばならない地位にいるといつてもいい。また、おいそれと地方貴族が口を出せる相手でもありませんね。つもりに積もった不満はどこへ？うちに溜まっていつか噴出することになるでしょう」

「……」

確かにルーファ王はまだ若い。

彼の父であるロードが王位を継いだのは28の時だ。

しかも先王が健在のとき地盤を固めてから王冠をかぶった。

「そこで貴女の登場なのです。貴女になら不満を言いやすい。元王妃様への挨拶は礼儀ですからねいつ訪問してもおかしいことではあ

りませんし。何しろルーファ王はシェラ殿の息子ですから、貴女は快く思っていないと考えるでしょう。」

リグンブルは笑みを深めた。

「溜まった膿は一気に取り除くほうがいいですからね」

「私の元に不穏分子を集めて一掃を？」

返答は無い。けれど、沈黙がそうだと告げていた。

互いに言葉を発しない時間がしばしば続き、先に動きを見せたのはサンディアの方だった。

首を弱く振ると立ち上がった。

「帰りますわ。帰りも送って下さるのかしら？」

返事も聞かずにサンディアは歩き出した。

ピンと張り詰めた背中では昔のままだ。

いつもぴりりと緊張していた王妃だった頃のサンディアを知っているリブングルは、誰にも気づかれないほど小さくため息をついた。

「ロード様は貴女のことを愛していらした」

故郷に帰さなかったのは、側室よりも先に王子を産まなかったとののしられることを知っていたためだ。

西の離宮に住まいを与えたのはサンディアが、あの場所が好きだと言ったことがあったためだ。

背中にぶつかった言葉は、サンディアを振り向かせる力はなかったが、ほんの少しばかり強張りをなくす効果はあったようだ。

「……知っています。あの人は、気位ばかり高い馬鹿な娘のどんなわがままでも叶えてくれた。けれど、側室をとらないで欲しい。この願いだけは叶えてくれなかったわ」

「それは」

「分かっています。私とて生まれたときから政のそばに居た。必要なことだったのでしょう。あの人は以前と変わらず愛情を注いでくれました。けれど、私は何もなかったの。シエラが、あの人の傷を癒し、暖かく包んでいたときに、私は今までどおりツンとそっぽを向いていた。愛情がシエラに傾いていくのは当然でした」

本当に嫌になるぐらいに可愛げのない娘だった。

「それなのに、すべてあの人のせいにしたの。貴方が悪い。シエラなんてつれてくるからいけないと。それでも許してくれたわ。それが煩わしくて、悲しくて、悔しくて。どんなに大きな愛情で包まれていたか気づいたとき、ごめんなさいもありがとも届かない場所に行ってしまった」

振り返ったサンディアは、ふわりと笑った。
王妃としては見せなかった慈愛に満ちた顔。

「だから、ジルフォードを幸せにするのが唯一私に出来るお返しなのよ。リブングル殿。」

だから先ほどの話は了承は出来ないと告げたサンディアの瞳に揺らぎは無かった。

「私もロードを愛してたわ。同じほどこの国も愛しいと思えるよう

になったの。貴方はどう？」

「ええ、私もアリオスを大切に思っていますよ」

もちろん問われるまでも無いことだ。

主と共に半生を費やして育ててきた国が愛しくないわけがない。

「ならば、月影、陽炎の両將軍を差し置いてロードに右腕と言わしめた貴方の頭脳で最善を考えてください。本当は、私を五元帥になどするつもりはないのでしょうか」

ばかりと間が空いた。

ほんの一瞬だったが、リブングルから薄い笑みが滑り落ち、初めて素を見たような気がした。

「何故です？」

そう問うた時には、リブングルの口元にはいつもの食えない笑みが浮かんでいたが己の考えていることが的外れではないと思えてきた。

「貴方がそうと決めたなら、逃げ道など用意するはずがないもの。周りをじわじわと固めてまっているのです。ちょうどいいタイミングを。そして、それを実行する者を。本当に貴方が私をお飾りの五元帥にしたいのならば、国のためだと言わずシルフォードのためだと言えいい」

シルフォードを取引の材料にされたなら、きっと悩んでしまったに違いない。

ザクセンの領主におさまったのがこの男だと聞いたときから、どこ

か違和感があったのだ。

「送りましょう。風邪でもひかれたら大変ですからね」

話を遮るようにリグンブルは立ち上がると扉を開けた。すれ違いざまにふと視線を上げたサンディアはリグンブルを見つめるとふっと目を細めた。

もう、会うことも無いかもしれない。最後に言いたいことを言うてやろうと思ったのだ。

「私、貴方が嫌いだったわ。ロードはいつも貴方と一緒に。貴方もいつもロードを気にかけてた。今もそうね。こんなことを告げるためにわざわざ危険をおかすなんて、貴方馬鹿よ。」

きつとロードが残してしまった想いを彼は律儀にも届けてくれたのだ。

サンディアは居住まいを正すと流れるような動作で頭を下げた。以前のサンディアならば想像も出来ないことだ。歯をかみ締めて、しゃんと上を向いていることだけが彼女の矜持だった。

廊下に消えていくサンディアを見送りながらリグンブルはポツリと呟いた。

「私も貴女が嫌いでしたよ」

互いに相手を嫌っているのを薄々感じていたから、距離をとりあってきた。

まともに言葉を交わしたのはほんの数回だけ。

それなのに、たった一礼で全てを任せたと帰っていく背中が恨めしい。

「馬鹿呼ばわりとは」

感謝されるよりもしかかもしれないと自嘲気味に笑った。

確かに主の想いを代弁する形にはなったけれど、サンディアの立場を利用しない手はないのだから。

通りから石畳の上を馬車が走り出す音がした。

空は黒を通り越して青みがかってきていた。

休息をとった太陽が世界の端に昇り始めたのだ。

一晩中語り明かしたのはルルドではないというのに、ルルドの喉はからからに干上がっていた。

「それは」

かすれた声はひどく聞き取りにくい。

けれど喉が潤ったところで、何か意味のあることを口に出来そうにはなかった。

ナジユールの語ったのは、壮大な子どもの夢だ。

話は何処までも広がりを見せ、舞台は世界中を巡るのだが、どこか現実味が薄い。

時々、はつとするほど現実を重ねるのだが、次の瞬間ありえないと誰かが否定する。

思考はぐるぐると円を描き、答えは何処にもない。

「信じなくてもいい。私とて信じれなかったさ。だが、父上は倒れた」

己が抱えていたものを吐露したというのに、押し掛かるものは少しも減らない。

そればかりか、己でも持て余すものを弟にも背負わせてしまったという苦悩がずしりとかかってくる。

「いいえ、信じます」

ルルダーシェにとって兄は絶大な存在。

その名が示すとおり天空を支配する太陽と同じほど明確で力強い道しるべ。

否定する気などありはしない。

けれど、蜃気楼のようにとらえどころの無い悪夢が、そっくりそのまま現実だとしたら。

「タハルは……」

「帰るまでは無事だろう。とりあえずタハルを滅ぼすのが目的ではなさそうだ」

安堵にしては重いため息を吐きながら力を無くす弟にグラスを渡す。喉は同じほど干上がっているに違いない。

飲み物を見ると乾きはいよいよ強くなり、ルルダーシェは素直に口をつけた。

つと流れ込んできたのはさわやかな甘みのある液体だった。
とろりと心地よく体内に落ちていくそれにほうと息をつこうとして
鼻腔を擦ったのは酒の香りだった。

「兄上、これ」

カツと胃の腑と頬が熱を持つ。

視界が揺れて、体の奥底から疲労を引っ張り出し重く重く押し掛かる。

瞼が完全に閉じてしまう前に、「ああまただ」と小さく呟いた。
途切れた言葉の向こうには、情けないと続くのだろう。

「これで酔うのか」

ナジュールにとって見れば果汁のようなもの。

喉を潤すことは出来ても酔うことは無い。

悪い夢を見ないほど深く深く眠ってしまえばいい。

ルルダーシエを寝台に移すと、ナジュールも瞼を閉じた。

日が昇りきれば、責務が待っている。

完璧な仮面をかぶるにはもう少し時間が必要だった。

第三章：夕闇に映う色20

耳の痛くなるような静寂を獣の鳴き声が裂いていく。

冷え切った砂の上に群れなして、腹が減ったと恨めしげに此方を見ているのだろう。

凍えるような夜の中、なお冷たい瞳を虚無に向け青年はくすりと笑う。

笑みの浮かぶ頬は月の面のように白い。

冷笑を聞き取ったのは、老人と死者だけ。

老人は白濁して生まれたときから一度も外の世界を映したことの無い眼で青年を睨み付けた。その瞳は未来を見るための眼。

だが今は一秒先の出来事も分かりはしない。

ただ、新月の夜の闇を煮詰めたような底知れぬ影が目の前にいることだけが感じと取れた。

「ねえ、導きの星。そんなものに何の価値がある？ アンタが一晚中そこで通せんぼしている理由があるのかい？ ただのゴミだ」

導きの星と呼ばれた老人は体を強張らせた。

それが怒りからなのか恐怖からなのか己でも判断しかねる。

けれど、青年に占者の最高位の尊称である導きの星と呼ばれた時、背中を駆け抜けたのは羞恥だったに違いない。

この事態は己の力なさが招いたことだ。

青年の赤い瞳は老人の後ろに安置されたものを見ていた。

かさかさ乾いたそれは木の皮のようだ。

触れればぼろりと壊れてしまいそうなその以前の姿を忍ばせるのは巻きつけたようにだらりと全体を覆う複雑な模様で染め抜かれた布と、茶色く変色した表面に残る赤いイレズミ。

タハル王の遺体にはもはや生前の面影は無い。

話すことも考えることもしない。

飢えた獣の腹を満たすこともなく、植物の苗床になることもない。青年には、ただ干からびて縮んでいくその体に何の意味あいも見出せなかった。

「お前さまには慈悲は無いか。愛情もないか」

老人の指先に震えがはしる。

ここは自分ひとりで守り抜かなければ無らない。

せめて、王子たちが帰ってくるまでは王の死をひた隠しにしなければ。

ここまでは順調のはずだった。

王が寝付いてからは自分以外誰も近づけはしなかった。

占者の言うことは絶大。

遺体を安静のためだと偽ってここまで持ってくるのはさほど大変なことではなかった。

すべての手はずが整った後に彼が望んだように新たな王を向かえればいいはずだった。

「そうやって馬鹿みたいに両手を広げて通せんぼするのがアンタの愛情？　王が毒の杯をあおると知っていてとめなかつたくせに？

まあ、心配しなくて良いよ。僕はソレに興味は無い。今のところタハルにも興味は無い。」

滅びようが新たな王が立とうがさして問題ではない。

「別にあんたが望むように王子たちが無事に帰ってきて、王位を継いだって関係ないんだよ」

「では……なぜ」

王を奪ったのだ。

「新しい舞台には新しい主人公が必要でしょ？ソレはちょっと長く玉座にすわり過ぎたってだけの話だよ」

もしも玉座を得て数年ならば。

そうアリオスのルーファ王と同じほど王になってからの期間が短かったならば。

「ねえ、導きの星。愛情ってなあに？」

青年が首をかしげた拍子に白い髪が風に舞い、赤い瞳を隠した。

強烈な怒りを秘めた瞳が見えなければ、まるで迷子になった幼子のように頼りない。

「抜け殻を守ること？ 全部の責任を押し付けて毒杯をあおる事？」

勝てもしない相手の前に両手を広げ、意味のないものを守る行為。

己が死んだ後、王位争いで苦悩するであろうことを知りながら自ら毒を飲む。

どちらも不可解だ。

意味の無い愚かしい行為。

「どちらも愛情から生じた行為です。愛情とは何かを愛しいと思う心です。誰もが持っているものです」

そうであって欲しいとすがるような声に笑い声が重なった。
不吉な月のような赤い瞳が細く弧を描く。

「うふふ。空言を言えば、力を無くしてしまうよ?」

少なくともユザにはそんなものはない。

ひとしきり笑うと青年の瞳からは、老人への興味も消え失せた。後のことは任せてある。

もうこんな砂だらけの場所に居る必要は無い。

さあ、帰ろう。われらの地へ。

見放された地へ。

「なぜ、あのようなことになったかご存知か?」

身のうちに巣くう憎しみの根源を。

憎しみはどこから生まれたのか。

老人は、去り行く背中に必死に問いかけた。

水に沈む間際のようにあえぎ、助けを求めるように。

「理解できなかったんだよ。お互いにお互いをね」

まるで種が違つように。

「ヘインズ リュウ人間と竜のようにな」

第四章：紅い月夜と蝙蝠

「……暇だな」

独り言にしては大きな声は、幸いなことにざわめきに紛れ、誰の耳にも届かなかった。

一部の隙もなく着込まれた漆黒の軍服に真紅の腕章。

片目を覆う眼帯。

いつも腰にある愛剣こそ今は無いが、ジョゼ・アイベリーの存在感は大きい。

同じく風格のある存在感をかもし出すラルド・キースが隣にいるため相乗効果となって人の目を引いた。

けれど、注目度とすれば話題の二人には遠く及ばない。

ジョゼがサボるのを見越して、王直々に出席することを命じられたが、貴族のお相手をすることもなさそうだ。

暇をもてあましたジョゼは、大型の獣がするようにくわりと大きな口をあけてあくびをした。

「その腑抜けた顔をなんとかしろ。」

だらけたジョゼとは対照的なラルドは軍服同様、自身さえも糊付けされたかのようにぴしりと立っている。

高い位置で一本に結んだ髪さえも乱れることなく、直線に背に垂れる。

もう少し暑くなれば、前髪ぱつっんのおかつぱ頭に変わるだろうと思いつながら、主催者側の意見としては最もなラルドの言をきれいさっぱり無視して広間へと視線を巡らせる。

一度でも返事をしようものならば小言が次から次へとびだしてくるのだから相手をしないのが一番だ。

全く、妹にしるケイトにしるどうしてこう小うるさいのが多いのか。

「貴方がしつかりしていれば言わなくてすむんです！」と口を揃えて言いそうだな。あいつら。
まったく面倒な連中だ。

ジヨゼは自分のことは完全に棚に上げて、小さく息を吐いた。

「大丈夫だろう。ジルフォード殿下はうまくやっている」

ジヨゼの視線を辿って、ため息の意味をジルフォードへの心配と取ったラルドは太鼓判を押した。

広間の中央にはジルフォードを中心として人だかりが出来ている。まさか、あの中の会話さえ拾える地獄耳なのかと怖くなったが口にはしなかった。

あっさり「そうだが」なんて言われてしまいそうだ。

ジヨゼには会話どころか、誰がいるのかさえ分からない状態だが、さほど気にはしていなかった。

ルーファが間にいるのだから万が一にも問題は起きないだろう。

「俺が心配なのは嬢ちゃんのほうさ」

「セイラ殿？」

ジヨゼの指先をたどると女性陣に囲まれているセイラの姿が眼に入る。

こちらは慎ましかに皆椅子に座つての談笑だが、ちょっとやさつとでは離さないという気迫が伝わってくる。

交遊会なる馬鹿げた集まりがあると聞いた時、二人を取り巻く空気が不穏なものに代わったら、すぐさま割って入ろうと構えていたの

だが、いかにジョゼといえどもあの女性陣の輪に入っていくことは出来ない。

頼みの綱はダリアなのだが、先ほどから老婦人に捕まっている。話が長いことで有名な老婦人に捕まれば、しばらく放してはくれない。

「嬢ちゃんは温室育ちだからな。いらんことを吹き込まれて、気落ちしないといいが」

今日招待されたのは貴族の中でも位の高いものたちばかり。言葉の端々にたくらみがあり、笑顔の向こうに毒がある。

貴族のいない鉦山の街で守られながら育ってきた少女にとって対峙したことがない相手だ。

今は耳打ちして情報を与えてくれる者も、問いの答えを教えてくれる者もない。

剣の腕も無邪気な笑顔も通用しない。

いくらグランがみつちり教育したとしても、所詮は付け焼刃。

彼女の一番の教え子であるテラーナでさえ窮する相手ににわか仕込みの王女様が太刀打ちできるはずが無い。

あまりにも分の悪い初陣だ。

「……いつか通らねばなるまい」

ラルドの声も苦い。

キース家は大貴族にも数えられる名門一家。

あの華やかな笑みが心からのものではないことぐらい身に沁みて分かっている。

「そつだがな」

ジヨゼの脳裏には、完璧な笑みを浮かべたユリザの顔がふいに浮かんだ。

なんだってあのお姫様は、貴族のあしらい方を可愛い妹に教えなかったのだろう。

口角の角度、視線一つで相手を怯ます方法を。

「あゝ……似合わないか」

「何の話だ？」

「いやいや、嬢ちゃんがご婦人方を手玉にとって、おほほなんて笑ってたら怖いなと思ってな」

怖いというよりも想像が出来ない。

二重三重に悪意から遠ざけられて育ったのだ。

今のままでいて欲しいとも思う。

けれど、今のままで良いとは言ってやる事が出来ない。

彼女はアリオス王弟の妻なのだ。

いつまでも自由奔放な唯の小娘であってもらっては困る。

嫌っているはずの貴族の思考が己の中にも確かにあることを突きつけられ、全身に苦いものが広がった。

玉になった気分だ。

それも磨きこまれてピカピカに光っているキレイな玉じゃない。

長でさえ初めて見た原石。

正体を探ろうと、どのように加工しようかと興味津々の視線が四方から突き刺さる。

いつそのこと玉ならばよかったのに。

頬が痙攣しそうな愛想笑いも、背中を伝う冷や汗もきにしくなくてもいいのだから。

「では、リントン殿はご存知？」

「……いえ」

彼女たちに囲まれてから幾度、同じような質問をされたことが。

エステニアの誰々は知っているか。あの方はどうかと質問攻めにあっているうちにセイラは数十回のため息を押し殺した。

気楽な会だから肩肘を張らなくても良いと言ったのは誰だっただろう。

広間への出入りは自由で嫌になれば退散してもいいと聞いていたのに、貴族の奥様方にお話をしましょうよと椅子に導かれて、かれこれ2時間は同じようなやりとりを続けている。

ジルフォードとも引き離されたままだ。

視界の端にルーファと共に挨拶を受けているジルフォードの姿が入る。

今すぐにも駆けていきたいけれど質問は途切れることが無い。

濃紺の衣装に垂れる真白な髪のコントラストに見入っていれば、ずいとは化粧の濃い顔が近づいた。

「ヤード殿はどうかしら。デナートの領主様なのだけど」

「残念ながらお会いしたことはありません」

「……そう」

残念そうなため息。

グランとの付け焼刃の授業で、デナートがエスタニア随一の芸術の街であり、その領主が強い発言権を持っていることは知識として持つて入るが、親しいかと言われればそんなことは全く無い。

相手はセイラの存在を知っているかさえ危うい状況だ。

何度も何度も質問されるうちに、やっとセイラにも彼女たちの思惑が分かってきた。

セイラ・リユーデリスクリーズ・エスタニアの力はどこまで及ぶのかを知りたいのだ。

どこの誰と繋がりがあるか。

誰に意見を言うことが出来るか。

夫の出世のためにどれだけ利用できるか。

期待のこもった眼差しが落胆に変わり、次第に苛立ちに変化していくのが肌で感じ取れる。

囲まれているのだから非常に居心地が悪い。

後ずさりして少しでも距離をとりたいけれど、後ろはすぐ壁だ。

ユリザとグランの小言を半日聞き続けてもいいから逃げ出したい。

おそらく一日中質問され続けても彼女たちの望む答えなどセイラの口から出るはずも無い。

「セイラ様の髪は綺麗な色よね。お母様に似たのかしら」

話しかけてきたのは、セイラを取り囲む女性陣の中で一番若い女性だ。

おそらく二十歳ぐらいだろう。

胸元のざっくり開いた大胆なドレスが良く似合っている。

「……そうでしょうね。母様も同じ色でした」

話題が変わったことにほっと詰めていた息を吐き出すと、彼女の口角がニイっと上がった。

グランが理想の笑みといった唇の形。

紅で彩ったふつくらとした唇が描き出す上品な笑みなのにぞくりとする冷たさがあった。

「やはりそうなのね。エスタニア王家の方は美しい漆黒の髪と象牙色の肌が特徴と聞きましたもの。ねえ、セイラ様のお母様は、どちらの方？」

前方に座っていた数人がはっと息を呑んだのが伝わってきた。

それがなくてもセイラにはこの質問の意図が分かった。

グランにも散々言われていたことだ。

貴族の中には、セイラの母の出生をよく思っていないものがある。

彼女たちに「どちらの」と聞かれれば、何々家のと答えるのが普通だ。

貴族出身ではないセイラの母を嗤うため質問。

よしんば、何家のと答えたところで、あら存じ上げませんわと言われるのが落ちだ。

「ジニスです」

今までの沈んだ顔を紛れもない笑みに変えたセイラに女性は鼻白む。
どこの血筋で生まれたかなどで母を誇るつもりなど毛頭ない。
ジニスのルカ。それで十分。

「ジニスをご存知ですか？」

「……ええ。もちろん」

労働者ばかりの小さな街だがジニスの玉の加工技術は大陸一。
知らぬと言えば今度は此方が笑われる。

そう頷くより仕方がない。
相手が扇の後ろで悔しげに唇を噛んだことなど知らずに、セイラは
とろりと微笑んだ。

「もう一つ、質問してもいいかしら」

女性の挑むような瞳に更に力を入れた。
見えない口元には牙がちらついているかのよう。
セイラが頷くより先に鋭い言葉が耳朵を打つ。

「なぜ、アナタなの？」

第四章：紅い月夜と蝙蝠2

バルコニーからは庭に降りれるように階段がついている。

そこに座り込んでしまえば、広間からは完全に死角に入る。

庭に咲いているシルトを見ないかというダリアの提案で女性陣は、さざめきながら庭へと消えていった。

一番後ろをついて歩いていたセイラはここまで来ると、ぴたりと足を止め、わざとはぐれたのだ。

広間から漏れるぞわめきも風がかき消してくれる。

青く澄んだ空に向かってセイラは曇ったため息を吐いた。

「……はあ。疲れた」

誰も聞いているものなどいないけれど自然と声は小さくなる。

目に映った真白な靴。

特別にあつらえてもらった靴は足に吸い付くような最高の履き心地。

傷一つ曇りひとつ見当たらない。

ジニスのセイラには過ぎた代物。

『どうしてアナタなの』

反論なんて出来るはずも無く、何か言おうとした時には、長いおしやべりから開放されたダリアが輪の中に入ってきた。

するりと風のように入ってきて「お庭の花をみませんか」と花びらをさらう様にご婦人方を引き連れて行ってしまったのだ。

『どうしてアナタなの』

そんなのこっちが聞きたいくらいだ。

姉はいつか分かると言っただけで、いつになれば分かるのだろう。

愚痴は音になることなく口の中で消えていく。

靴を見つめていると、地面に影がさした。

ご婦人方が帰ってきたのかと思い、はっと顔を上げるとそこには見知った顔があった。

「おや、セイラ殿。アロー」

ナジュールのなめした皮のように皇かな褐色の上のイレズミと、大きな笑みに一瞬張り詰めた空気が、ふしゆりと抜けていく。

彼も、あの空間が嫌になつて出てきたのだろうか。

ちよつとした期待も、余裕のある態度を見れば広間で出されたお茶のようにあつという間に熱を失ってしまう。

子どもみたいに逃げ出したいなんて思ったのは自分だけに違いない。ジルフォードだって、うまく会話をしていた。

内容までは分からないが普段より口数が多いのは見て取れた。

元々、読書量のおかげかさまざまな知識が豊富なのだ。

糸口さえ見つけて話をふれば会話は弾む。

相手が何を求めているのか知りながら、「いいえ」と「すみません」しか口にしていない自分が少々情けない。

「あろー」

力なく上がる両手を見て、ナジュールの片眉がついと上がる。

「元気が無いな。慣れない集まりに出て疲れが出たかい？」

「ん。そうかも」

冷え切つて味も分からないようなお茶ではなくて、カナンの淹れたおいしいお茶が飲みたい。

ハナの焼いたお菓子でお腹を満たして、クッションの山に倒れこみたい。

それが出来るのは、まだ当分先のことだ。

下げた頭をぼんぼんと叩かれる。

視線を上げると氣遣うような小さな笑みを向けられて氣恥ずかしくなって、無理やり話題を探した。

「ナジュール殿が、それ巻いてるの初めてみるよ」

ルルドはいつも頭を隠すように布を巻いていたがナジュールがしているのは初めてだ。

深い黒の髪はすっぽりと覆われてしまっている。

「面倒だが、一応タハルの戦士の正装なのでね」

ナジュールが肩をすくめた拍子に腰に差したナイフが見えた。

小ぶりだが湾曲したそれは美しく存在を主張する。

装飾をそぎ落としたそれは、これから友好と称する場所に行くには実用的だった。

「そのナイフも」

「ん？　まずいかな？　ターバンと毛皮とナイフは一そろいなのだが」

一族の娘が染めた布は神聖とされる頭を守り、腰を覆う毛皮は強さを示し、初めて狩った獣の骨で作ったナイフは勇気の証。

「こいつの骨で作った」

ナジュールは腰の毛皮をぽんと叩く。

凶暴なルーガの骨は強靱でどれほど細く研いでも強度を失わない。

鞘から抜いてみると、薄氷のように薄い。

爪の先で弾けば壊れてしまいそんな繊細さなのに、幾度と無く共に戦場を駆けたが刃こぼれひとつ無い。

「骨で？」

「骨も皮も肉も全部使う。タハルには物資がないからね。生きるためにはどんなものでも利用しなくてはいけない。私たちは楽しみで獣を殺すわけではないよ。やむ終えなく奪ってしまったものだから、全てを活かしてやるのが礼儀だと思わないかい？」

「うん。素敵な考えだ」

セイラにつられて微笑んだナジュールの顔には影があった。

彫りの深さがもたらす陰影でもターバンの作る影でもない。

重い何かがずっしりと押し掛かっているようだ。

先ほどまでの笑みにはなかったものだ。

「ナジュール殿も元気が無いね。何かあった？」

「なぜ」

「ん？」

「なぜセイラ殿には分かっってしまうのだろうか」

もう大丈夫だと思って部屋を出てきた。

今までの会話にもおかしいところは無かったはずなのに、いつもどおりを演じたつもりなのにあっさりと、どこかおかしいと感づかれてしまった。今だって、「そんなことはない」で済ますこともできたのに。

「それはナジュール殿が教えてくれるからだよ」

セイラはハナのように細やかな気配りが出来るわけではない。

相手が何がしかのサインを出していないと気づくことはできないのだ。

「私が？」

まさか人に弱みを見せるなんて。

「そう」

にこりと微笑まれば、驚きは次第に苦笑へと変わる。

無意識に甘えてしまっているのかもしれない。

それなのに、別にいいかと思ってしまうている自分もいる。

認めてしまえば、すんとわだかまっていた想いは落ち着いてく。

告げてしまおう。「また、いつか」があるかなんて分からないのだから。

「前にタハルに誘ったことがあるだろう？」

「うん」

「今もそれは変わらない」

「ん？ 私もいきたいと思ってるよ」

砂ばかりの世界。

見たことの無い生き物たちが生きる場所。

そこで暮らす人々の生活。

どれもじかに見て触れてみたいものばかりだ。

行きたいと言った言葉に嘘はない。

「ではもう一度誘おう。セイラ殿。私の妻となって共にタハルに来て欲しい」

思わず行くよと言いつつになつて何とか持ちこたえた。

今、なんだかおかしな単語が入つてはいなかったか。

……妻！

見上げた顔は冗談なんて言っている様には見えない。

吸い込まれそうなほど深い闇夜色の瞳には、しっかりとセイラを捕らえられており、そこに映るセイラは困惑をあらわにしていた。

ナジュールの瞳に映る己の姿が別人のような気がしながら、言葉を探つたが満足のいくようなものは思い浮かばない。

「なつナジュール殿？ えっと……私は……ジンと結婚しているんだけど……な」

結婚式なんてつい数ヶ月前に挙げたばかりだ。

ナジュールたちはその時に、来る事が出来なかったからという理由で今回アリオスに来たはずではなかったか。

「知ってる」

あえぐように事実を伝えるときっぱりと肯定され言葉が出てこなくなった。
口に出したもののいまいち実感が伴っていないのを指摘されたかのようだ。

「私はセイラ殿がいい。エスタニアの王女でもジニスとの繋ぎ役でもない。セイラ殿だから妻に欲しい」

声が出ない。

広間でも出来事を全て見られてしまったかのようにだ。

「嫌いなドレスも愛想笑いも強要したりしない。共に馬を駆ってヘインズの話がしたい。アリオスは第八王女など嫁がせると不満ならたらのだから別の王女を嫁がせればいい。それともタハルまで攫っていけばいいだろうか」

見たことの無い物騒な笑みがナジュールの顔面に広がった。

戸惑うセイラの頬に手が添えられたかと思うと右頬に暖かなものが触れた。

啄ばむように触れたものが何だったのか考える余裕など全くない。

それがナジュールの唇だと知ったのは、至近距離でニツと笑ったナジュールが「頬への口付けは求婚の印だ」とささやいたからだ。

頬が熱い。真っ赤だなんて想像するまでもない。

「なっんで！」

嫌われてはいなかったと思う。

ちよつと強気になって好意をもたれていたと考えることも出来る。だけど、求婚されるほど何かをした覚えなんてなかった。

「さあ」

「さあって……」

なんだ。やっぱり冗談か。

ほつと息をつこうとした時、再びナジュールの顔が近づいた。

本能的に身を引こうとするけれど、すぐに階段に退路を阻まれる。

セイラの瞳には己の姿しか映っていないことを確かめると全てを呑み込む漆黒が蕩けた。

「たぶん、セイラ殿に初めて会ったときかな」

「は、じめて？」

何があつた。頭の中はフル回転。

何日も前の記憶を巻き戻すが、特別何かをした覚えなど全くないのだ。

初めて会ったのは今日と同じ広間。

たくさんの人が固唾を飲んで見守る中、マント姿の5人が前に進み出る。

ざわめきが起こつて……

「アロー」

「え？」

「私が挨拶をした時、セイラ殿はちゃんと返してくれただろう」

ああ、そうだ。

見よう見まねで挨拶を返した。

こくこくと何度も頷くセイラの目の前に、ナジュールの手の甲が晒される。

しなやかだけれど、ごつごつとした大きな手。

いたるところに着いた細かな傷から戦うことを知っている人だと教えてくれる。

手の甲の中央の文様は太陽の意味。

周りを取り囲むの紋章は、ナジュールの誇る全て。

一目で全てが分かったと言った。

「アロー」

「あなたの前に全てを曝け出しましょう」

「たぶん。その時からだ」

呆然とするセイラを置いてナジュールはゆったりと歩き出した。

第四章：赤い月夜と蝙蝠3

「セイ」

「……うつ？ あっ、ジン」

庭に立ち尽くすセイラを見つけ、何度目かの呼びかけの後、もう手を伸ばせば届く位置に来て、セイラはやっと反応を返した。ジルフォードの姿を見つけ、ほっと詰めていた息を吐く。

「どうしたの？」

「えっ？ ううん。 なったんでもない。 うん。 何でもないよ」

先ほどの出来事は、きっとナジュール殿の悪ふざけだ。

そうに違いない。

そう思えば思うほど触れられた頬が熱を持つ。

何だこれ。 変な感じがいて袖口で力任せに頬をぬぐっていると、やんわりと静止の手が入る。

「頬どうかした？」

親指がこすれて赤くなった部分をすいと撫でる。

触れるか触れないか微妙な力加減。

ジルフォードの白い指先に熱が伝わってしまいそうで、セイラは顔を背けた。

「だっ大丈夫！」

一瞬宙に取り残された指先が一度ぎゅっと握られると再び頬に添えられ、セイラの顔を上に向かせた。思いのほか強い力をかけられ驚いたセイラの視線の先には僅かに眉を寄せたジルフォードの顔があった。白い髪が降りかかり、他のものは何も見えない。白い檻の中にいるようだ。

「どうしたの？」

その問いは頬のことでは無かった。心配の濃くなった声が聞こえると、先ほど熱を持った頬のように胸の奥がじくりと痛む。

告白を受けたばかりの頬が熱を孕むのは当然として、痛むなどおかしなことだ。

その理由に思い至って、セイラは本当に情けなくて泣き出したくなった。

「セイ」

ジルフォードの瞳がゆらと揺れる。

青から深い緑。

一瞬、金が混じったことと思うと耳を飾る紅玉のピアスのように鮮やかな赤になった。

心の奥底まで晒されているようだ。

きつと嘘をついてもすぐにばれてしまう。

思いついた当たり障りの無い言葉を噛み砕いて飲み込み、口を開くまで待つてくれるジルフォードに安堵して、ほうと大きく息を吐いた。

「あのね」

「見つけたわ。ジルフォード！」

セイラの声に被さるようにして高い女性の声がした。

「あつ……」

「あら」

広間から続く階段を駆け下りて、ジルフォードに飛びついてきた女性には覚えがある。

先ほどセイラの母のことを聞いた人だ。

名前は……確か名乗ってはいない。

ダリアたちとシルトのハナを見に行っただけではなさそうだ。

そこに思い至って相手をじっと見てみるとやっとあることに思い至った。

彼女のドレスは穢れのない真白。

祭りの期間中は春乙女だけに許されるシルトの色。

ここで白い衣装の女性はセイラだけのはずだった。

肩を覆うシヨールにこそ薄く色がついてはいたが、優雅に裾の広がったスカートは禁忌の色。

何も知らないものが見たら、ジルフォードに取りすぎる女性をセイラ王女だと間違えたに違いない。

彼女が質問した時に、幾人かが息を呑んだのは、もしかしたら彼女のドレスのせいかもしれないかった。

言葉に窮しているセイラに向かって彼女はにっこりと笑った。

「初めまして。私、キアと申します。ジルフォードとは母方の親戚になるの。よろしく願いしますわ」

広間での出来事など無かったかのように彼女は友好的だ。

親戚の言葉にジルフォードの視線が己に移ったことに気を良くしたのかキアの笑みは深くなる。

対称的にセイラの表情は曇った。

サンディアが幽閉されたとき、彼女の一族からの風当たりはとても厳しかったと聞く。

彼女の私物の一切合財を都から運び出した後は、西の離宮には一度として訪れたこともないとも聞いた。

「……母上の」

「ええ、彼女とはいとこ同士よ」

そう言うキアは一度としてサンディアには会ったことがないだろう。彼女が生まれたときには、サンディアはアリオスの王妃で、その後も一度として故郷の地を踏んでいないのだから。

「お父様がジルフォードに会いたいつてわざわざ来ているのよ。会って頂戴」

答えも聞かず、絡めた腕を引っ張って歩いていくキアの後ろで、セイラは吐き出せなかった言葉の気持ち悪さと、嫌な胸騒ぎを感じていた。

第四章：赤い月夜と蝙蝠4

ヒューロムはローラ山脈とアリオスに挟まれた小さな国だった。

山脈から吹き降ろす厳しい風に晒された土地は荒れ、豊かとは言えなかった。

山岳地帯で何とか育てることが出来るリユイーと呼ばれる動物から取れる毛で紡いだ布を売り外貨を得ていたが、それも僅かばかり。唯一、赤い染料として高く売れていた植物の根も、各国が自国での染料開発に成功してからの需要は全盛期の三分の一にも満たなかった。

キアが生まれた頃には、もう国ではなくアリオスの領地となっていた。

母はいつも恨みのこもった声で言った。

「あの女さえうまくやっていれば、お前は今頃王女だったのに」と。母は王妃になるはずだった。

あの錆付いたガラクタのように意味のない場所の。

名前を呼ぶことさえ忌々しいのか、母はアリオスに嫁いだと言うサンディアのことを頑なに「あの女」と言い続けた。

かつて城と呼ばれた湿っぽくて陰鬱な屋敷には彼女の姿形を語るものは何一つ無い。

ある者は、とても美しい方だったと言い、ある者はとても冷たい方だったと言う。

彼女は一族のどんな要求にも応えなかったそう。

誰々をアリオスの有力者にしろ。タナトスに屋敷をかまえて呼び寄せろ。

応じなかった彼女を母は今でも裏切り者だと詰っている。

キアはサンディアの行動が正しいと思う。
自分も絶対に、全てを捨てて行くだろう。

妄執にとりつかれた母も過去ばかりを懐かしむ馬鹿な父も。
ガラクタの国の王女なんて冗談じゃない。

獣臭い布も赤い汁を垂らす植物も必要じゃない。

欲しいのはたくさんさんの流行のドレスに傷一つない靴。

磨きこまれた床の美しい城に思いのままに動かせる侍女。

ヒューロムでは手に入らない。

今回、新調できたドレスは今着ている一着だけだ。

しかもシルトのように純白のドレスが欲しかったのに、春乙女の色
だからと、気に入らない色を入れられた。

欲しいものを好きなだけ手に入れる。

そのために父に無理やりついてきたのだ。

自分のところで手に入らないのなら、手に入れることの出来る誰か
に取り入れればいいのだから。

だけど、アリオスは少し期待と違う。

ヒューロムよりましには違い無かったけれど、夢物語に出てくるお
城ではないのだ。

真白で皇かで完璧なお城。

エスタニアの白バラと呼ばれる城のように。

そこではたと気づいたのだ。

アリオスでダメならば、エスタニアの貴族に取り入れればいい。
広間にはエスタニアから招待された貴族たちもたくさんいた。

それに、今日会うメインの一人は憧れの国の王女。

彼女を味方につければ怖いものなんてなにもない。

貴族どころか王族だって紹介してもらえるかもしれない。

そう思っていたのに、現れたのは唯の小娘だった。

綺麗なドレス。

傷一つない靴。

特別な玉で作られたピアス。

キアの欲しいものを全て身につけているのは、あきれ返るほど普通の小娘だった。

貴族の一人さえ紹介できない。

嬉しそうに故郷のことを語るけれど、覇臣の貴族や有力者に近づけないなら意味は無い。

せいぜい、噂に高い技術を使って荒稼ぎをするくらいしかできない。

王妃が聖母の娘でないといけないと言った父の言葉がようやく理解できた。

不安顔で後ろからついてくるセイラには利用価値がないのだ。

こうなったら、ジルフォードに頼るしかないだろうか。

キアはちらりとジルフォードを見上げた。

一歩を踏み出すごとに、瞳の色が水の上に張った油のように変わる。確かに気味が悪い。

己の瞳と同じもので出来ているとは信じがたいが関係ない。

利用できるなら魔物だろうが、色なしだろうが受け入れよう。

キアは組んだ腕に力を込めて後ろを振り返るジルフォードを無理やり引っ張った。

第四章：赤い月夜と蝙蝠5

広間に入ると、一際目立つ色彩があった。

金の刺繍が入った赤いマント。

かつては珍重されたヒューロムの赤。

白い花で飾られた空間で何層にも塗りこめたように深い赤は、真白な布の上に滴った血のようでもあった。

それを厭うように周りの人々とも僅かばかり距離がある。

マントの主は小柄だが全身についた肉のせいで存在感を示す男性だった。

撫で付けた髪も口ひげも白くなつてはいるが、眼光は鋭い。

「父様」キアの言葉を受けて振り返った男は相好を崩す。

「おお。ジルフォード！ 久しぶりじゃなあ。息災であつたか？」

キアが離れると、男は肉のついた腕を回しジルフォードを抱きしめた。

久しぶりと言われたが、ジルフォードはこの男に全く見覚えが無い。懸命に記憶を探っては見たが、姿形、声の調子、どれも当てはまる人物がいない。

キアがそばに張り付いているため、彼が彼女の父、ひいては母の伯父にあたるということがかろうじて分かるぐらいだ。

親子でさえ似通ったところを探すのが難しい彼らから、母親や己と血の繋がりを探り出そうとするのは困難だ。

「リディア様。ようこそおいで下さいました」

すばやく間に入ったルーファはやわらかく微笑んだ。

やはり来たかとどれほど彼らの登場を苦々しく思っているにも表情に

も声にも曇りは無い。

「なに、ジルフォードに会うためじゃ。長い道中なぞ苦もないわい」
リディアの視線はルーファの顔を一撫でした後、ルーファの指元に落ちた。

鈍い銀色に光る指輪にはマルスの紋章が彫りこまれており、この持ち主はアリオスを統べるべき者だと告げている。

一瞬強くなった瞳の色はすぐに作り笑いの奥に隠れてしまった。

ジルフォードには彼に歓迎される理由など分らなかった。

責められてしかるべきだというのに。

ジルフォードの誕生はサンディアの立場を、しいてはサンディア一族の立場を悪くしたに違いない。

ジルフォードの存在だけのせいではないが、彼らはもともとかわろうじて国の体裁を保っていたが、今では一領地を治める一族へと格下げされてしまったのだ。

「ジルフォード。リディア殿下だ」

いつのまにか貴族たちは三人を遠巻きにして、今までの楽しげな笑いも引っ込めていた。

静まった広間に楽師団が奏でる明るい音楽が響いている。

愉快的祭の曲だが、場の雰囲気とは全くといって良いほど合っていない。

「お目にかかれて光栄です」

「何を他人行儀な！ お前が生まれた時わしもおったのだぞ」

皆が聞こうと耳を澄ませていた。

ジルフォードが生まれたときの話は暗黙の了解で誰も話さないことになっている。

胸の奥底に沈めた記憶を呼び覚ますように、跳ね回る音とリディアの笑い声ばかりが広間に響く。

「積もる話もあるのでな。部屋に行こうじゃないか。ここではちょっと煩すぎる」

興味津々と耳を澄ます聴衆がいては、どんな話も自由には出来ない。あてがわれた部屋にジルフォードを誘うリディアをルーファが制した。

「ああ、お待ち下さい。リディア殿。もう一人出会わなければならぬ方がいますよ。セイラ殿」

視線が一気に集中して居心地が悪いながら、セイラは彼らのほうへと進む。

なんとか転ばないうちにたどり着けてほっと一息。

「お初にお目にかかります。セイラです」

グランに教えられた通り上品に見えるようにと祈りながら微笑むも、返ってきたのは突き刺すような視線だった。

背の低いリディアはセイラと視線も近いためより眼光が鋭く感じられせつかく上げた口角も力なく下がる。

「セイラ殿はジニスの出身だとか」

「ええ」

何度も聞かれた質問に次の言葉が予想できて、自然と答える声が固くなる。

「ジニスの玉の質の良さと加工技術のすばらしさは聞き及んでおる」

「ありがとうございます！」

思っていなかった賛辞に掛け値なしに浮かんだ笑顔は長くは続かなかった。

「だがそのジニスの全権を持参金にしたとしても、あまりにも不当な扱いだとは思わないかね」

凍りついたような静けさだった。

もはや好奇心旺盛な聴衆はいない。

皆、雪像のように固まって関わりまいと努めていた。

同意でも求められたら身の破滅だ。

幸いなことに扉の近くにいたものはそつと広間から逃げ去り、彼らの話を少しでも多く聞こうと近くに居座ってしまった人々は己の浅はかさを呪い、あらぬ方向へと視線を向けた。

一方のセイラは何を言われたのか分かってはいなかった。

持参金？

一体何のことだ。

不当な扱い？

一体誰が？

「……あの、おっしゃっている意味が」

言葉に被さるようにリディアは酒臭い息を吐いた。

氷のように冷たい瞳は言葉も理解できないのかと蔑んでいるようにも見える。

「そなたはジニスの出身だと聞いたが？」

「……そうです」

同じ質問に何の意味があるのか分からないまま再び肯定のために小さく頷いた。

たまりかねたルーファが間に入ろうとした時、高い声がそれを遮った。

「ダメですわよ。お父様。セイラ様ったら、ちつとも意味が分かっていないみたいだもの。あのね、セイラ様」

キアはねっとり微笑んだ。

「ジルフォードにアナタみたいな小娘似合わないって言っているのよ。ジニスなんて、労働者の街よ。玉の加工がなければ、何の意味も無い街だわ。そんなところの小娘にいったい何の価値があるの？ 聖母の娘でも正妃の娘でもないアナタに全権をくつつけたからって私たちは納得していないの。でも、まあ使えようよね。せつかくだから私たちがうまく使ってあげる」

一息に言ったキアはセイラの耳元を目指して腕を伸ばした。

その指先が大切なピアスを目指していると知って伸びてきた腕から逃げるために一歩分身を引くと、キアは眉を吊り上げた。

冗談じゃない。

本当なら払いのけてしまいたかった。

「何を勘違いしているのか分かりませんが、ジニスは私の付属品ではありません。ジニスのことで私が口出せることなんてひとつもありません」

セイラは決然と言い放った。

これだけは譲れない。

ジニスの皆は誰よりも誇り高い。

同じ想いを共有しあった一族と言ってもいい。

エスタニアの王でさえ彼らの仕事に口は出せない。

彼らは駆け引きの道具じゃない。

「なあに、それ。ますます、役立たずじゃない。アナタ、一体何が出来るの？」

じくじくと頬が痛む。

理由は分かっている。

自分が無力だと知っていたいながら、「そのままでもいい」と言われたことに甘えなくなっただけだからだ。

己の無力は大切な人まで貶める。

何度もグランに忠告されたというのに分かった気になっていただけだ。

ダメだ。頭の中がぐちゃぐちゃだ。

たくさんの絵の具をぶちまけたみたいに鮮やかな色が渦を巻いている。

それなのに視界に映る世界はどんどん色をなくしていく。

キアの嘲りを含んだ声もどんどんと遠くなる。

聞こえるのは耳の奥のほうで聞こえる脈打つ血潮の音だけ。

その音が大きくなるにつけ、のどの奥から何かがせりあがってくる。

それが怒りだったのか嫌悪だったのか、はたまた唯の吐き気だったのか考える間もなく体がぐいと引つ張られ、白い靴を履いた足が己のものではないように勝手に歩き始めた。
世界の端で聞こえた「失礼します」という言葉は今は懐かしい雪の冷たさを含んでいた。

石の床の感触はいつのまにか土へと変わっていた。

一時、体に吹き付けた風も今は木々に遮られて届かない。

庭の一角にある東屋は祭りとは無縁と思われるほど静かだった。

セイラの手を引いてここまで連れてきたジルフォードは振り返った。

セイラは俯いているため結い上げられた髪の毛しか見ることが出来ない。

「セイ」

腕を掴んで自分のほうへ向かせる。

ほんの少し前と同じ体勢。

違うのはセイラの表情だ。

いつもは光を含んだ瞳は暗く、周りの景色を写す鏡としてしか機能していない。

映りこむ空の色がどれほど明るくとも救いになどなるはずもない。

「セイ、こっち見て」

瞳の表面にはジルフォードの姿が映りこんではいるが、セイラ自身がその姿を見ているかは分からなかった。

それほどまでにセイラの顔から表情というものが抜け落ちていた。

これほどまでに表情に無い人をはじめて見た。

今まで、ジルフォードに対峙した人の顔には無関心を装いながらも何かしかの感情が含まれていた。

怒り、嘲りに恐れ。

今ならばセイラの顔に浮かぶのが恐れでさえいいと思った。

どうか、こっちを見て。

「セイ」

胸の奥がじりじりと焦げ付くように痛い。

祈るように何度も名を呼んだ。

キアの言葉をすぐに否定することが出来なかった。

ジルフォードはアリオスとエスタニアがどんな契約を結んだのか知らない。

今まで知ろうとしなかった。

傷つけた。

セイラだけでなく、セイラが何より大切に想っている人たちさえも。

「セイ。ごめん」

小さな肩を抱くとぴくりと揺れる。

「セイ？」

「ジンもユリザねえさまたちの方がよかった？ ルリザねえさまやイベラねえさまみたいに」

美しくて教養も権力もある本当の王女様。

セイラにはエスタニアの聖母のことも王妃のこともよく分からないけれど、彼女たちには誰もが認める価値がある。

そして、どんな質問をされても難なく答えられて、相手の望むものを差し出すことも出来る。

セイラには無いものばかり。

「そんなことはない。私は」

「ジン。……お願いだから今は放っておいて」

開きかけた唇を制して背を向ける。

怒りと悲しさと悔しさと、なんだか分からないものが交じり合った気持ちでは何を言い出すか分からない。

自分から望んだはずなのに、ジルフォードの手が離れると、そこから全身が冷えていく気がした。

第四章：赤い月夜と蝙蝠6

今日は無表情で威圧感をかもし出すサキがないために客足はずいぶんいい。

次第に増えていく銀貨を見ながら、ヒイラギは商人も案外向いているかもしれないと笑みを浮かべた。

いやいや、ダメだ。

今日は良いお客さんに恵まれているけれど、すごく嫌な客が来たら思わず手を出してしまうだろう。

「やっぱり無理、無理」

己の性格を熟知しているヒイラギは、転職の機会を投げ出した。

残りの品物も三分の一ほどになった頃、目の前を一人の少女がずんずんと歩いてくる。

肩を怒らせて、けれども爆発しそうな感情を押し込めようと下を向いたまま歩く少女の髪は亜麻色だ。

元々丁寧に結い上げていたのだから髪は、手櫛で下ろしたのか装飾品を垂らしながら四方へとはねていた。

どう接触しようかと考えをめぐらせていた相手が、自らこっちにやってくる。

なんて好都合。

「お嬢さん」

目の前でひらりと手のひらを揺らせば、潤んだ瞳がヒイラギを見上げる。

きつくかみ締めた唇は、今にもぷつりとさけて血が滲んできそうだ

った。

その表情に驚いたヒイラギを見て、セイラの瞳にも驚きが浮かんだ。

「君は……街であつたよね？」

落つことしてしまったお守りを拾ってくれた青年だ。

人ごみにまぎれてのほんの一瞬の出来事。

互いの全身さえ見えないような窮屈な空間でのことだったが、丁寧に拾ってくれた彼のことはしっかりと覚えていた。

鮮やかな色彩の見かけない服装のせいかもしれないが、今日はアリオスの街の人々とさほど変わらない格好をしている。

目立つといえば、肩口でゆれる小さな三つ編みにピンクのリボンがついていることぐらいだ。

「覚えていてくれたんだ。嬉しいなあ」

底抜けに明るい笑顔に明るいうりボンの色が良く似合っている。

「あの時はありがとう」

「どういたしまして」

おどけてお辞儀をするヒイラギを見て、口元に微かに笑み浮かぶのと目じりが熱を持つのは、ほぼ同時だった。

「あれ。どうどうしたの？ 大丈夫？」

「だいじよ、ぶ」

「そういうことはね、にっこり笑顔で言わないと意味ないんだよ。うん。よし、お嬢さんには気晴らしが必要だ。街に行こう！ 軍資

金もあることだしね」

叩くと景氣の良い音がする皮袋とセイラの腕を掴んでヒイラギは踊るように軽い足取りで歩き出した。

「えっ、ちよつと」

戸惑うセイラなどお構いなし。

店じまいもせずにさつと庭を抜け出した。

「なっ、おまえ」

「あ。おにーさんも一緒に行こうよ」

回廊で出会ったルルドを道ずれに数分後には三人の姿は城の外にあった。

「おい！　一体何を考えているんだ？」

ほてほてと前方を歩くセイラが振り向く気配がないのを確認して、ルルドはヒイラギの胸倉を掴むが、勝手の分からない異国の服装で

は思つように力が入らずに、ヒイラギの服が乱れてしまっただけだった。

ヒイラギは怒りでふるふると震える手をやんわりと外すと「もう、やだなあ」と呟きながら、服を直していく。

「嫌だなあ。ルルダーシエ様、怖い顔しないでくださいよ。お嬢さんには、ちよつとした気晴らしが必要だったんだよ。貴族連中に挨拶。貴族連中と世間話に陰湿な質問攻め。考えただけでぞっとするでしょ？」

「だからって城から連れ出すやつがあるか！」

セイラに気づかれないように小さく怒鳴るルルドを尻目に、屋台の親父に銀貨を一枚渡して、ほこりと湯気の立つパンにかぶりつく。幸せそうに唸ると気楽に一言。

「ばれる前に帰れば平気ですよ」

「何を悠長なことを言っているんだ。もうとつくにはれているかもしれない」

いくら城の中も浮かれきつていても、メインの一人が姿を消せばきづかれないはずもない。

タハルの人間が連れ出したとなれば大問題だ。

ルルドは広間でのやり取りを知らないのだから心底心配しているというのにヒイラギの口調は軽い。

「大丈夫ですって。あんなに広いお城だもん。隠れていたって言えば通りますよ。現に楽に逃げ出せたでしょ」

ルルドはぐつと言葉に詰まった。

確かに拍子抜けするほど問題なく城からは逃げ出すことが出来たのだ。

許可証さえ首からぶら下げておけば、それほど嚴重に調べられるということはなかった。

仮に調べられてもヒイラギの持っている許可証は本物なのだから問題は無い。

目立つルルドの頭の布を解き、逆にセイラの亜麻色を隠すために深い青の布を目深に被らせたがあまり意味は無かったかもしれない。

「……それで、どこまで行くつもりなんだ」

この街は複雑怪奇。

人の多さも考えれば、この取り合わせで街に繰り出すなど無謀とは思えない。

一番ましかと思われるセイラがあの状態ならば城から離れるのは危険だ。

「すぐそこですよ。お城の門が見えるところだから心配いりませんつて。蜂蜜パンの美味しいお店だね。蜂蜜酒も最高なんですよ」

「……今、食べているのもパンだろうが」

「これはこれ、蜂蜜パンは蜂蜜パン。何を言っているんですか、ルルダーシェ様は」

馬鹿なのかしら。そんな哀れみを含んだ視線を向けられてルルドは齒をぎしりと鳴らした。

「それにね、甘いものは疲れにもイライラにも利く万能薬なんです

から！」

お前がいらないほうがイラつかなくてすむ。

そんな言葉をなんとか飲み込んでルルドはそっぽを向いた。

そんな態度をくすりと笑いながら前方行くセイラに声をかける。

「そこだよ！　蜜蜂の看板の店！」

第四章：赤い月夜と蝙蝠7

人の声がしない広間。

楽師団もどこか気もそぞろで、ずれた音がいつまでも取り残される。さざめきが戻ったのは、ものの数秒後だったが、沈黙の瞬間は空気が硬化したかのようだった。

あまり仲のよく無い者同士もこのときばかりは力を合わせ、「庭を拝見しましょうとか」と肩を揃えて去っていく。

酒臭いため息。

眉を吊り上げる隻眼の將軍。

心を痛める義姉。

そして、笑みを深める兄。

それを目にするとテラーナは広間を後にしたが、誰も一人の少女が消えたことなど気づかなかった。

やっと姿を見つけるとジルフォードは一人だった。

彫像のように動きを止めている彼の横にはセイラの姿は無い。

すぐさま声をかけようと思っていたのに、舌が乾き声が出ない。

ゆらゆらと立ち上る陽炎のように目の前に浮かぶ状景に、心の奥がひどくざわついた。

それが怖さからだとは認めたくないテラーナはぎゅっと目を瞑る。

尚、鮮明になった状景の中にいるのはまだ幼い自分とジルフォード。あの時も、動きを止めたジルフォードは何を見ているのか、何を思っているか分からなかった。

テラーナは母との約束を守ろうとした。

「仲良くしてちょうだい」母はそう言った。

血は半分しか繋がっていないといつても兄には変わらない。

幼いテラーナには大人たちが言う『色なし』なんてよく分からなかった。

多少、違った外見ではあるけれど気になど留めてはいなかった。

それどころか、兄の友人たちのように騒がしくなく、いつも難しそうな本をすらすらと読んでいるジルフォードに好意すら抱いていた。だから庭の隅に、ひっそりと隠れるようにあるテラーナのお気に入りのお部屋に彼が現れるようになって、シルトの意匠が施してある大好きな椅子を一日中取られていても、ちっとも怒りは沸いてこなかった。

その日、ジルフォードが持っていた本の表紙はすばらしいものだった。

だから何を読んでいるのか気になったのだ。

しばらく声をかけようかどうかと、もじもじとしていたのだが母の言葉が背中を押した。

小走りで近づいていくと、宙を見ていたジルフォードの瞳が此方に向く。

冴えた紫の瞳。

初めて見る色にテラーナはさつと顔を伏せてしまった。

初めて声をかけるときは緊張するものだ。

手にはじつとり汗をかき、絡まった舌はうまく動かない。

「何を読んでいるの？」その一言が中々でない。

どれほどの時間、そうやっていたのかは今になっては定かではない。覚えているのは冷え切った拒絶の言葉。

「関わるな」

その言葉は、母との約束もテラーナの決意も本のすばらしさも消し飛ばすほどの効力をもっていた。

それ以来、テラーナはジルフォードと関わりあいになることから必

死に逃げてきた。

ダリアにお茶に誘われても、その場にジルフォードがいると知ると無理やり理由を作って断っていた。

兄に困ったように苦笑されるよりも、ダリアの悲しそうな顔を見るよりも、あの言葉をもう一度聞くのが恐ろしい。

忘れてしまいたいの、視界に入ってきては思考力を奪っていく。感嘆さえして見つめていた色が己のコンプレックスを刺激するようになるなんて考えてもみなかった。

そんな相手にどうして自分から関わろうと思っているのだろう。

今すぐにも自室に逃げ込みたいのに、どうして視線を外すことが出来ないのだろう。

どうして、憎らしいほど明るい色の髪が彼の隣にあるはずだと思ってしまうのだろう。

「いつまで、そうしているつもりなの？　これ以上、兄様一人に相手をさせないでちょうだい」

震えそうになる声にうまく怒りを紛らせて、やり過ごす。

それはあまり難しいことではなかった。

兄を嘲るようにいやらしく笑うリディアの顔を思い浮かべれば、怒りなど無尽蔵に沸いてくる。

テラーナに気づいたジルフォードは振り向くと、見まいと思っていた瞳の色を正面から見てしまった。

あの日と同じ冴えた紫。

けれど、その色は風にあおられた炎のようにちろちろと揺れていた。静かな怒りを示すように。

「あなた、怒っているの？」

何故か知りもしないくせに、ジルフォードは怒っているのだと思っ

てしまった。

口に出してはつとしたが、もはや取り消すことは出来ない。

テラーナの言葉を受けてジルフォードは考えた。

体の奥に溜まっていく酷く冷たいものが怒りだというのならそうなのだろう。

否定はしなかった。

分からないとも言わなかった。

ただ、セイラの温かさを忘れてしまいそうなほど、己の内も外もどんどん冷えていく。

怖れも怒りも消えうせて、テラーナの中に生まれたのは紛れも無く呆れだった。

もつと酷い仕打ちをされてきたはずだ。

むりやり母親と引き離され、刺客を送られ、存在さえないものとして扱われた。

そんなときでさえ、変化など見せなかったくせに、駆け引きとも呼べない戯言のせいでぐらついているなんて。

対象が変わるだけで、なんて弱い。

なんて脆い。

なんだか急にジルフォードに恐れを抱いていたなんて、拒絶されることを怖がっていたなんて馬鹿らしくなってきた。

「あの娘なら帰ってきます」

何故、そんなことをわざわざ伝えてやらなければならないのだろうと思った。

他にどこに行くというのだろう。

セイラに故郷があっても、もう気軽に帰ることのできる場所ではない。

彼女はここで生きていくしかないのだ。ほんの少し考えれば分かる

ことだ。

そんなことさえ分らないほど動揺しているのだろうか。
否、そうではない。

ジルフォードもまた怖いのだ。

ここは帰りたい場所ではないと拒絶されてしまうことが。

ああ、なんて馬鹿なんだろう。

私も。彼も。そしてセイラも。

怖がって、傷ついて、傷つけて。

「兄様のところに行つてよく話し合いなさい。あの娘が帰ってきたときにどうしていいか考えておくことね！」

もう少し、うまく言葉が出てきたらいいのに。

テラーナの頬はうつすらと染まった。

「ありがとう」

届いた感謝の言葉に、ふんとそっぽを向いた。

ジルフォードが通り過ぎる時に起こった風がテラーナの髪を揺らす。

大好きなシルトの彫り込まれた椅子。お気に入りの場所。

本当は好きだった色が目の端を過ぎていく。

ゆらゆらと不安定に揺れていた昔の情景はテラーナの前からいつの間にか消え去った。

第四章：赤い月夜と蝙蝠 8

ぐつと引き結ばれた口元のせいで、ラルドの精悍な顔がより引き締まる。

副官として常に共にいたユーリは、ラルドの表情の中に苦々しいものを見つけ、そつと唇を噛んだ。

彼の視線を追うと、苦々しく思っているのは、セイラを蔑むような態度をとったりディアではなく、広間から去った二人のことだと知れた。

確かに二人の行動は正しいとは言えない。言いたい放題言われて、逃げ去ったようなものだ。

かといって言葉を弄して相手を丸め込んでみせたところで同じような顔をするに違いない。ユーリには、どうすれば合格点が貰えるのか分からなかった。

ラルドが貴族の顔を見せるたびに、自分とは途方も無く遠い人なんだと思ってしまう。

キース家は大貴族の一つ。陽炎に入っていないければ、貧しい田舎町から出てきたリースと重なり合うことは無いだろう。

「どうした？ ユーリ」

ジョゼは、自分よりずいぶん背の低いユーリを見下ろしているというのに、どこか覗き込まれているような気がしてくる。

それに不快感が伴わないのは、こちらを労わる気持ちだが、彼の瞳から伝わってくるからだろう。

ラルドが真に安心しきって背中を預けることが出来るのはジョゼなのだろう。

実力の差を痛いほど知っているというのに、そう思うたびに悔しさがこみ上げる。

いつか追いつこう。

肩を並べよう。

硬く決心したはずなのに、こんな場面に出会うつぐらぐらと揺れるのだ。

ラルドの考え一つ分らないで、どうしてそんな大それたことを想ったのだろうと。

答えを促すように首を傾げたジョゼから視線を外し、大きな窓に視線を向ける。

明るい空の色を背景に、白い雲が流れていく。

「とても遠く感じるがありますのです」

あの雲と同じほどに。

「何がだ？」

「……キース將軍」

「私が？」

突拍子もないことを言い出した副官を見るラルドの瞳は驚きに満ち、いつもの2割り増しで大きく開かれている。

穴が開くほど見つめた相手は、ラルドの驚きなど知らずに、ほうと遠くを見ている。

「私なんかが、こんなことを言うのはおこがましいかもしれませんが、さっきのセイラ様の気持ちができる気がします。……自分のせいで誰かが傷つけられるのは悔しくて悲しくて。文句の一つくらいって……どうすれば合格点ですか？ どう対応していればキース將軍は、そんな顔をしていなかったか……私には分かりません」

ジヨゼは納得したように頷き「そうか」とユーリの頭をわさりと撫でた。

髪が引つ張られ少し痛かったがユーリは文句を言わなかった。

底抜けに明るいユーリも悔しくて唇を噛んで涙を流したことがある。そんな時も、彼は頭を撫でてくれた。

ユーリは女だ。

その上、小さくて細い身体では軍服を脱いでしまえば誰も軍人だとは思わないだろう。

そんな彼女が陽炎の副官である飛炎に選ばれた時は非難的だった。選んだのが五大貴族であるキース家の嫡男だったため表面上は波風は少なく見えてはいたけれど。

どれほど頑張っても女だからと陰口を叩かれ、功績をあげれば女のくせにと難癖をつけられる。

時には貧しい出生のことまでネタにされた。

ユーリの家は貧しい地方の田舎町の中でさらに貧しい家だった。

子どもばかり多くていつも空腹を抱えているような家だった。

兄弟の何人かは売られていき、ついにはユーリの番が来た。

がりがりに瘦せた子どもを一人を売ったところで得られる金は少ない。

すぐに妹たちの番が来てしまう。

娼館にいったって己の器量は知れている。

どうにか妹たちが自立できるまで家を支えることはできないだろうか。

思い悩むユーリの前に現れたのは軍の広告だった。

武の国であるアリオスでは常に探している上、給料もなかなかよい男だけという規定は無いが、やはり圧倒的に女は少ない。

彼女が城門をくぐった時から、何日持つかはかっこの賭けの対象だった。

最長でも十日間。それを見事に破った時は拍手さえもらったものだ。泥まみれ、傷まみれ、襷褌のようになりながらも立ち続けることが出来たのは、どうしてなのかユーリ自身にも分からない。

ただ、天を割る赤い刀身に魂の奥までも揺さぶられたことは覚えて
いる。

どんなに蔑まれても、どれほど傷を負っても泣かなかったのに、その時は外聞もなく大きな声で泣いた。

その刀身の分身を任された時の高揚感と不安。

決して互いを裏切らない陽炎と飛炎。

その関係に少しでも近づいているだろうか。

鎌首をもたげた不安は常にユーリの側に居座っている。

「……そうだなあ、俺なら自分の意思で此処に戻ってきたならギリギリ合格だ」

にやりと笑うジョゼの視線を辿れば、入り口にジルフォードの姿が見えた。

もはや広間にリディアは居ない。

誰も彼の足取りを乱すことなく、ルーファの前へと歩み寄った。ほっとしたのもつかの間、隣のいるはずのセイラの姿が無い。

「お？ 嬢ちゃんがないな」

「どうしたのでしょうか」

いつもと違う状況が、さわさわとユーリの不安のもとを撫でていく。

「ちょっと探してきます」

駆けて行くユーリを呼び止めようとして止めた。

そのうち、どちらの少女もけろりとした顔で帰ってくるだろう。

「気にしてるか？」

腹心の部下に遠い存在だと言われてしまったラルドは硬く閉ざしていた口元を開く。

眉間にしつかりと刻まれた皺はここ一番の深さだ。

「してる」

真面目に答えたというのに噴出され、敵ならば一睨みで凍りつかせることの出来る眼光でジヨゼを睨む。

腰を折って笑い転げかねないジヨゼの姿に、ラルドの口角はぐつと下がった。

「何が可笑しい？」

「いやいや、どちらも贅沢な悩みをお持ちのことだ」

「は？」

『どうすれば合格点ですか？』言い換えるならば、ラルドに合格点を出して欲しいということだ。

認めて欲しい。

望むものを差し出したい。

それなのに望むものが分からないと言う。

一方のラルドは認めきっている相手に遠いと言われ、憤り焦っている。

どちらも一途に相手を想ってこうもすれ違ふのだからおかしいものだ。

「大いに悩め」

ラルドの大きな背中を打つ。

意地悪そうな笑みを目にしてラルドは眉間の皺を解いた。

ジヨゼ相手に口論をする労力は無駄だと悟ったのだ。

ユーリとしっかり向き合い、話をすればもやもやとした思いはすぐにでも消えてしまうだろう。

「お？ 何だ。もう止めるのか。つまらん」

「何故、お前は副官を持たないのだ？」

陽炎の将軍に副官がいるように、当然月影の将軍にも副官はいる。

月影の副官には飛炎のように象徴するものがないため歴代の将軍の中で副官を選ばないものもいたが、選ぶ権利はある。

いきなり矛先が自分に向かったことに驚きつつも、ジヨゼは肩をすくめると軽く答えた。

「お守りされるのは好きではないからな」

「私はカイザーを副官にしていると思っていたが」

カイザーはあまり目立つ男ではない。

外見もどちらかと言えば線が細い。

けれど、居て欲しい場所に視線を向けると必ず居る。此方が注文をつける前に必要なものはそろえてある。

剣の腕も悪くない。足裁きに音がしない。気がついたときには急所を押さえている。冷や汗が流れるような静かで恐ろしい剣を使う。

先に目をつけて陽炎に誘えばよかったと何度思ったことか。

「俺は使い勝手の良い奴は距離を置いて使うのが好きなんだ。それにアイツはグラドの一族だ。一族の意に反せば上司だろうと牙をむく。人の副官を心配するよりも自分の副官を心配したらどうだ？」

広間には人もまばら。

馬鹿げた会もこれで解散となるだろう。

將軍が二人もここにいる必要は無い。

笑みを背に受けながら、ラルドは走り去った少女の後を追うように歩き出した。

第四章：赤い月夜と蝙蝠9

店主はヒイラギのことを良く覚えていた。

いくらおいしいからと言って、棒切れのように細いヒイラギが5人前の蜂蜜パンをぺろりと食べたのが印象的だったのだろう。

友達を連れてきたと言うヒイラギの言葉に笑みを浮かべ、店で一番良い席へと案内してくれた。

一番といっても通りが見下ろせる他はほんの少し机が大きいくらいだが、他の席からは距離があり話の邪魔をされることはなさそうだ。注文はもちろん蜂蜜パン。

ついでに蜂蜜酒も人数分頼んでおいた。

ヒイラギと自分の関係をどうセイラに説明しようかと悩んでいたルルドのことなどお構いなしに、ヒイラギは自分がタハルの人間であることをあつさりと話してしまった。

さすがにルルドが二の王子であり、自分がその付き人であることまでは話さなかったけれど、うっかりと話してしまいそうな軽さがルルドの頭を悩ました。

ルルドがため息をついている間に頼んだものは早々にヒイラギの胃袋へとおさまり、蜂蜜酒を飲んだセイラは机の上に、ぐてりと伸びる。

飲んだくれたオヤジのような姿に頭さえ抱えなくなった。

「お前は何を気落ちしているんだ！ 貴族からの陰湿な扱いなど日常茶飯事だろう」

セイラの足がぷらんと揺れる。

反論する気力さえ無いらしい。

「セイラは、エスタニアの小さな街の生まれなんだよ。貴族はいな

いし、彼女の意地悪する人なんていなかった。やっと慣れてきたところで、手痛い仕打ちを仕掛けたのが夫の一族となると悲しいですよ?」

察してあげてよ。そんな視線を受けてルルドはむすく眉をしかめる。

「何でそんなに詳しいんだ。お前は」

タハルに何か伝わってくるとしたらノースの道からしかない。物資だって情報だって手に入るのは極端に遅い。

入ってきたところで自分のところに回ってくるのはずいぶん後のことだ。

エスタニアの王女がアリオスに嫁いだという情報だって、タハルを経つ少し前に聞かされただけだった。

広間に行っていないルルドに、セイラが一番ダメージを与えたのがジルフォードの一族だったなんて知る由も無い。

「僕は盗み聞きが得意なの」

ヒイラギはくすくすと笑って蜂蜜酒を一口飲んだ。

甘い甘い蜜色の飲み物は喉の奥をとろりと落ちていく。

体の中心に落ちるとそこから全身がふおんと緩やかに温かくなって心地がいい。

タハルの地だって嫌いではないけれど、食べ物となると話は別だ。

自国のものが一番だと言い張る可愛らしい主もこの時ばかりは可哀想になる。

いやいや、ルルダーシェの場合、何だかんだといつも可哀想な気がしないでもない。

肩肘を張らずに認めてしまえば楽なのに。

まあ、今大事なのは主よりセイラの方だ。

ジニスに帰りたいなんて言われたら、面倒なことになる。

「セイラはさ、自分が悪かったと思っているのでしょ？ だからそんな顔してる」

「……んー」

一体、どんな顔をしているのだろう。

目じりの熱っぽさから赤くなっていることは予想が出来るけど、他はよく分からない。

でも、きつと情けない顔なのだろう。

「自覚できているならもう少し勉強しなきゃね。いくらセイラとエスタニア王室との関係が希薄だからって、セイラは王女様だって認められて、その看板背負っているんだからね。周りへの影響力を知っておかなくっちゃ」

「影響力？」

身体を伏せたまま視線だけでヒイラギを見上げると、蜂蜜酒を飲むのを止めて、組んだ指の上に顎を乗せて笑っている。

先ほどまでと同じ軽い笑みだというのに、グランと対峙したときのような気持ちになって、セイラは身体を起こした。

「間違っても、格下の国の一臣下に役立たずなんて公衆の面前で言われちゃいけない立場なんだよ。言われたとしても、あら羽虫がうるさいわねぐらいの態度を取らなくちゃ。ばくのお勧めとしては、まあ、あの方頭大丈夫かしらっていう態度だけだね」

うふふとヒイラギの口元が不気味に弧を描く。

「確かに、お前じゃなかったら相手はそんな態度には出なかっただろっ」

セイラの要領を得ない説明と、ヒイラギの言葉だけで状況を察したルルドもどうやらヒイラギと同じ答えを導き出したようだ。

「……そうなの？」

「有利な立場にいるエスタニアが、お土産持たせて王女様を嫁がせる必要なんてないでしょ？ ジニスってカントスやデナートと同じくらい有名な街なんだよ。その権利を気前よくあげちゃう？ そんな寛大なことが出来るなら、聖母の娘をお嫁にくれたよ。三人もいるんだし。だから、ヒューロムの何とかっていう人たちが、セイラの故郷に口出しは出来ないし、アリオスだって同じことなんだ。セイラはそこで、怒っちゃダメだよ。ましてや逃げたりしちゃもつとダメ」

「……はい」

「お前はただ笑って立っただけでよかったんだ。それだけで周りの人間は、あの馬鹿は何を言い出すんだと思ってくれただろう。きつとすぐにアリオス王も口を出したはずだ。それなのに、お前がわめくし、逃げるしでジニスの件は本当なのかと周りが思い始めたら厄介だぞ」

「やっかいって……」

「ジニスの利権が絡んでいるならヒューロムに力を貸そうじゃないかって思う連中も出てくるって事。ヒューロムが力を持つってこと

は、王子様にも関わってくるよね」

セイラは身体をしつかりと起こして慎重に頷いていたと思ったら急に頭を抱えて机に突っ伏し、ルルドとヒイラギを驚かせた。

「ああ、ジンを置いて来ちゃった……心配してくれたのに、ほっとけなんて言っただし、他の王女様がよかったかなんて愚痴を言うし。呆れられたかなあ……嫌われたかも」

「もうすこし、重要な話をしていたはずなんだけどなあ」

「どうしよう!」

政にも関わるような利権の話をしていたはずなのに、いつのまにかお悩み相談と化している。

まあ、いいのだけれど蜂蜜酒をすするヒイラギの横でルルドは半眼になった。

真面目に話を聞いてやったのが馬鹿らしい。

「さっさと帰って、謝るなりなんなりすればいいだろう」

どうして少しでも心配してやったのだろうか。

もしかして唯、空腹で元気が無かっただけなのではないかとさえ思ってしまう。

「そっか。そうだね。帰ったほうがいいよね。うん。帰ろう。そうしよう」

あわただしく帰り支度を始めたセイラの前にヒイラギが人差し指を立てて見せた。

「セイラ！ ついでにもう一つアドバイスしてあげるよ」

「ん？」

「あのね、今日広間に来てた人たちはね、貴族の中でも外交に長けている人たちなんだよ。話し方歩き方からみっちり計算づくの人たち。彼らの一言で戦になりかねないんだから、そりゃあ神経もピリピリしてる。そんな人にさ、ほんの数ヶ月前にお姫様生活を始めたセイラが勝てるわけなんてないんだよ。むしろ勝っちゃったら、あのおじさんたち可哀想だよ」

言われてみればそうなのだ。

グランだって所詮は付け焼刃だが無いよりましだからとセイラの小さな頭に情報を入れ込もうと苦心したのだから。

セイラは、こっくりと頷いた。

疲れきった頭にも身体にも温かく甘い飲み物が効いたのだろう。

素直に言葉が頭の中に入ってくる。

「相手の領地で勝てないなら、勝てるところに誘い込むことを考えなきゃね。自分の分からない話題をふられたら、それに詳しい人間を引っ張り込むとか、うまく話題を摩り替えたりとかね。ユリザ王女はそういうのうまいと思うよ」

「ねえさま？」

姉の有能ぶりはタハルにまで届くほどののか。

今回のセイラの失態を厳しい目つきで見つめるユリザの姿が用意に脳裏に浮かび上がった。

「そ。一度、じっくり観察して真似してみればいいんだけど。ユリザ王女じゃなくても、この人いいかも思ったら真似してごらんよ。さあ、ルルド様も何かアドバイス！」

「なっ何で僕が」

「ついでに？」

何か言いたげに口を開きかけたが、ぎゅっと引き結び、おもむろに耳飾を外すとセイラに向かって転がした。

耳飾の先についていた球体の飾りはセイラがナジュールから貰った物よりは小ぶりだが透かし彫りの細工は緻密で、回転するたびにカラカラと乾いた音がした。

「ルルド？」

「開けてみる」

言われたとおり、小さなつまみを見つけ引つ張ると球体はぱくりと二つに割れた。

中から出てきたのは楕円の粒だった。

茶の地に赤い縞がある。

目の前に翳してもセイラには、これが何なのか分からない。

「何これ？」

「植物の種だ」

つるりとした表面は、ガラスのようで種のようには見えなかった。心もとない小ささなのに、見た目よりも重さがある。

「砂漠に強いもの同士を掛け合わせた。まだ試作段階だが」

「試作段階って、ルルドがやってるの！」

「そうだ」

ルルドはむすつと顔をゆがめたまま頷いた。

セイラから種を受け取ったヒイラギは手のひらの上でそれを転がした。

「すごい！」

「なんて馬鹿なことをやっているのか」

「え？」

「タハルの人間の大半はそう考える。あの地はもう死んでいて植物なんて生えないと。……誰からも好かれるなんて無理は話だ。誰からも理解されるのみな。やれることはやっておけ。それでもダメなら認められることを諦めろ」

「それじゃ、分かんないよ。まったく言葉が足りないんだから。時には自分らしく我を通すことも必要だって言っているんだよ」

「うん。分かった。お礼にルルドにも良いこと教えてあげる。植物のことならカナンに聞くといいかも」

「カナン？」

ルルドより先に反応を示したのはヒイラギの方だった。
大きな目をさらに開いてセイラを見つめている。

「もしかして、カナン・スフィア？」

「あ……ごめん。下の名前は知らないや」

そういえばなんと言うのだろう。

いつもカナンとしか呼ばないから知らなかった。

「その人物がどうかしたのか？」

「嫌だなあ。知らないんですか？ ルルド様。彼は『夜のお茶会事件』の主犯ですよ！」

はて、厳しいタハルの歴史上にそんな可愛らしい名前をつけられた事件があっただろうか。

しかも他国の人物が関わっているととなったら、かなり大きな事件だ
が。

「夜のお茶会事件？」

眉を寄せるルルドの隣でセイラは瞳を輝かせながら身体を乗り出した。
た。

「もう二十数年前の話だけど、タハルがアリオスに奇襲をかけたことがあるんだ。その年は本当に凶作で年が越せるかどうかも分からないほどタハルは弱ってた。どうにか命を繋ぐだけの作物を奪うためにローラ山脈の辺りを荒らしてた。そして当然アリオスが出てくるよね。野営してた彼らの背後から少数精鋭で突っ込むはずだっ

たのに……」

「に？」

「一人の兵士にお茶に誘われちゃったんだ」

「はあ？」

ルルドの眉間の皺は深くなった。

「暗闇に紛れて忍び込んだのを見つけられただけで、もうダメだと思ったのに「お茶しませんか」ってのほんと誘われたらしいよ。ついでに今度の飢饉をしのげるだけの援助をするから戦いをしばらく止めましょうなんて言い出した」

なんだかとってもセイラの知っているカナンっぽい。

「当然、そんなにいい条件なんてありえない、何故だと聞き返したらなんて言ったと思う？」

「なんて言ったの？」

「もうすぐ畑に植えた作物の収穫時期だから、それまでに帰らないとだつて」

ヒイラギはケラケラと声高く笑った。

「確かに、それでアリオスには損は無いんだよ。恩は売れるし、その年は豊作だったし、今まで貯めていたものを考えるとそう難しいことじゃない。軍を出すほどお金はかからないし、彼らにはノース

の道を通つてまでタハルに攻め込む気は無かつたから、どうしたつて荒らされるのは自国でしょ？　その負担を考えると援助のほうがましってこと。最初からそう言われていたらむつとしてただらうけど、作物のためなんて言うから拍子抜けしちゃったんだらうね。彼らは友好条約を結んで今に至るってわけだよ」

「……今？」

「そう友好条約を結んだのは我らがウォーダン王とアリオスの先代のロード王だよ。珍しくタハルとアリオスの関係が友好なのはこの条約があるからだよ。だけど、条約はウォーダン王が在位にある間っている条件があるけどね」

ウォーダン王。タハルの現国王。

その名にルルドは唇を噛み締めた。それを見ないふりをしてヒイラギは笑う。

「名前まで知っている人は少ないかもしれないけど、そういうことがあつたのは事実だよ。良かったら、セイラの知っているカナンに聞いてみてよ」

「うん。そうする！　色々ありがとう。もう帰るよ。ジンに謝りに行かないといけないし」

空は赤みを越えて青くなりつつある。

活気に満ちていた路地は、暖かい灯りに照らされて別の色彩を得てきらきらと輝いている。

遠くに見える城門にも松明が燃え始めていた。

世界が夜の装いへと姿を変える。

「勉強もちゃんとする」

頑張つてと手を振られて、セイラは笑顔になった。
今にも倒れてしまいそうだった青白い顔はどこにもない。

「早く行けよ。こういったもんは時間が経つほど難しいんだからな」

「うん。ありがとね。ルルド」

「！　いいから行けよ！」

怒鳴るように言い放つ、ルルドにもう一度礼を言つて走り出す。
真白な靴には羽が生えているのかと思うほど足取りは軽い。

「うふふ」

顔を真っ赤に染めたルルドをにやにやと見つめると、彼の頬はさらに赤くなった。

「その気味の悪い笑いを止めろ！」

「誰の受け売りですかねえ」

記憶が正しければ、仲直りは時間が経つほど難しいと教えてやったのはヒイラギだ。
ナジュールとたわいも無い喧嘩をして、ぐずぐずと泣いていた幼いルルダーシエに。

「ふん！」

「それにしても品種改良なんてね。最近、こそこそと何かしていることは知ってましたけど」

「言ったところで、馬鹿にするだろう」

「しませんよ。ちなみに、これセリオンとトイをかけました？」

「よくわかったな……なんだ、すでに実験済みか」

ヒイラギの故郷にはすでにある。

だが、何人もの技術者を使ってやっと出来た代物だ。暑さにはとても強いが、予測不可能な寒波には弱い。砂嵐の多い地域では、根付く前に飛ばされてしまう。結局は失敗作だ。

家族を人質に働かされていた技術者たちは、もろとも砂の下で眠っている。

ルルドは落胆するもヒイラギが感嘆したのは事実だ。

「あと、リュオウもかけた」

「リュオウって……リュウの頭に行っただんですか」

タハルの中で一番過酷な地帯。

絶え間ない砂嵐に、そこにだけ棲む獣たちに剣は通じない。

屈強な兵士でも踏み入れることを拒む場所。

そこには小さなオアシスがある。

王が即位するとそこを訪れ楔をするのが慣わしだ。

けれど、何百と護衛を連れて行っても帰ってこなかった王もいる。

リュオウはそのオアシスに生える植物だ。

砂漠の女神リュオウの化身と呼ばれているその植物は、何十メートル

ルも根を伸ばし、砂嵐でも飛ばされない。
柔らかな茎にはたっぷりと水分が含まれており、切れば甘い水が零れ落ちる。

残った茎は繊維を解いて織ることも出来る。

魅力的な植物には違いは無いが、行くまでの労力に見合うかどうかは分からない。

「あそこにいるのはルーガのような可愛い獣ではないんですよ？

ああ、もう本当に馬鹿なんだからルルダーシエ様は！　あまりの馬鹿っぷりに獣も食べるのを止めたのかしら」

「あいつらは香を焚いていたら、襲ってはこない」

「だから、馬鹿だって言ってるの！　確かに香は効くけど、消えてしまったらもうお終い！　ちょっとしたでも風向きが変わったら背中からばくつとやられるんだから」

「風向きが変われば、嵐の合図だ。奴らも己の腹具合より命が大事だろう？」

「はあ、もう知らないよ」

呆れた顔を作りながらも、背中を冷たい何かが撫でていく。

たった一人で砂漠を渡る技術を誰が教えた。

獣が嫌う香の配合は誰に教わった。

星読みの方法は。

ルルダーシエの近くに居たのはヒイラギとサキだけのはずだった。

大事に育てたはずの甘ったれの泣き虫王子が、どこか違う生き物のようにさえ思えてきた。

本当にユザの下した選択は正しかったのだろうか。

狂いのないはずの計画が、とうの昔に破綻しているのではないか。
蜂蜜酒のおかげで温かくなったはずの身体がずっと冷めていくのを
感じながら、どこか面白いと思ってしまっている自分がいることに
ヒラギは気がついた。

第四章：赤い月夜と蝙蝠10

店から出ると冷たい空気が纏わりつきセイラは小さく身震いをした。春と言ってもまだ十分に寒い。日が翳ると寒さもぐっと増してくる。白く煙る息をおって視線を空に向けると、満月には足りない月がぶかりと浮かんでいた。それはひどく赤い。

「お前さんにはどう見える？」

口をきいたのは店と店の間の狭く、じめりとした通路にはまり込むようにして座り込んでいる老婆だ。シルトで飾ったベールの下からはうねった髪がぞろりと流れ地面にまで這っている。

しわくちやの唇を彩る紅は月の色より鮮やかで目を引いた。目深に被ったベールのせいで彼女の表情をうかがい知ることができない。

ただあまりにも鮮やか過ぎる唇が別の生き物のようにもごもごと動くさまが可笑しくて、そればかり見つめていた。目が離せない。

それなのに、見えないはずの頭上の月の姿が脳裏には浮いている。地上の熱気に焦がされた赤い月が、沈んでいく空の色に取り残されていく。

「……哀しそう」

孤独に耐えかねて泣きはらした目のようにもみえる。

その答えを聞いて、老婆は口角を上げた。

しわくちやで節くれだった細い指先が天を指す。

唇と同じ色に染められた爪先は見事に磨がれておりナイフのような

鋭さを持っていた。

「アレは人の想いを吸うのよ。哀しいと想うなら、お前さんの大事な人がそう想っているのかもしれないねえ」

「ジン」

咄嗟に思いついたのは、置き去りにしてきたジルフォードのことだった。

「ジン？ お前さんの想い人のことかね」

ベールの向こう側に爛々と輝く瞳が見えた。

鳥肌がさつと立ったのは、風の冷たさばかりではないだろう。

地面から何本も手が伸びてきて足を掴まれているかのように身動きができない。

蜂蜜酒とヒイラギの言葉のおかげで温かくなった身体は、真冬の湖に落ちたかのように急激に冷めていく。

呼吸すら苦しくなってきた。

それを救ってくれたのは右腕を覆った熱だ。

唯の人肌の温度が熱いとさえ感じるほどセイラの身体は冷えていた。雑踏に紛れ、人を押しのけながら一心不乱にセイラの手を引いている女性は、白いコートの下にここ数ヶ月で見慣れた青い侍女服を着込んでいた。

「クツクロエ？ なんでここに？」

「黙って歩いてください」

押し殺した声で告げるとクロエは歩く速度を上げた。

走っているといつてもいい速度で路地を抜けると一軒の家の前で立ち止まり、突き飛ばすような勢いでセイラを中に押しやり背後にすばやく視線を送ると、自らも身体を滑り込ませた。

先の体験から開放され気が抜けたのか床に座り込んでいるセイラのことなど放置して、鍵をかけ尚且つドアノブをありったけの力で引っ張ったまま、扉の外を透視でもしているのかと想うほどじっと扉を見つめていた。

「どこどこ？」

「私の家です」

そっけないクロエの返答に重なるように足音がした。

「まあまあ、クロエ。大きな音を立ててどうしたの」

部屋に入ってきたのはカーサだ。

床にへたり込んでいるセイラを見つけるといつも笑っているようにみえる垂れた目元がはっと見開かれた。

人の波の中を無理やり渡ってきたセイラは、髪型も服もくちやくちやになってしまっていたが、その顔は見間違えようも無い。

「セイラ様！ まあ、どうなさったの」

駆け寄って無事を確かめるように、荒れた手のひらがセイラの頬を包んでいく。

色をなくした頬のあまりの冷たさにカーサの瞳が曇る。

「母様。ジキルドの術士に会ったの」

クロエの言葉を聞いて、セイラの様子とクロエが外を気にしていることに合点がいったカーサはセイラを暖炉の前へと導くと娘には安心するようにと微笑み、湯気をたてるヤカンを手に取った。

中には数種類の薬草を煮出して作ったお茶が入っており仄かに甘い香りがした。

ヒスイ色のお茶をカップになみなみと注ぎ、砂糖を一カケラ。銀のスプーンで二度円を描くと、セイラへと差し出した。

「お飲みなさい。身体が温かくなりますよ」

言われるがままに一口飲んだセイラの表情が弛んだのを見て、クロエもほっと息をついた。

これで大丈夫。

セイラの心臓は取られてしまわなかった。

「手荒なまねをしてすみませんでした。あそこをすぐに離れる必要があったので」

「どうして？」

「セイラ様が話していたのはギルドの術士です。不思議な術を使って人を惑わし貶める者ですので関わり合いにならないほうがよいのです。名を取られてしまえば相手の意のままに操られてしまうとも言われています」

術士に出会ったら、質問に答えてはいけない。

目を見てはいけない。

名を明かしてはいけない。

名を取られ、身体を自由を奪われてしまうことをアリオスでは心臓が取られたと表現するのだとクロエは告げた。

「こんな街中まで入り込むなんて、何を企んでいるのか」

「クロエおやめなさい。ただ祭りを楽しみに来ただけかもしれないわ。それに彼らは千ノ眼とキキミミを持っているの。めったなことを言うものではないわ」

いつになく厳しいカーサの声にクロエは唇を噛んだ。

「ジキルドには怖いものがいるの？」

「ジキルドは占い師の国でもあるのですよ。それぞれ風読み、月読み、水読みなどのグループに属しているようですよ。その一つの闇読みは人心を操る術がうまいと聞いたことがあります。彼らのことを特に術士と言っているのですよ」

カーサはもう一口と促し、娘のためにもたっぷりとお茶を注いだ。

「けして術が恐ろしいわけではありませんわ。恐ろしくするのは使い手の心です」

さきほど冷えた手で掴まれたように悲鳴を上げていたセイラの心臓の上をカーサがトンと突くと、注ぎすぎたお茶がカップから溢れ机の上を伝うように、何か温かいものがあふれ出し、身体の内側に沿って全身へと巡っていく。

「アリオスの剣も激情のままに振るえばただ人を傷つけるものになりましょう。エスタニアの舞で邪心を持って惑わせば国を傾けさせることもできましょう」

こくりと頷いたセイラを見てカーサは微笑んだ。

甘い液体を口に含み緊張の糸が切れたクロエはやつと重要なことに気がついた。

なぜ、セイラが此処にいる。

路地で亜麻色の髪を見かけても思いもしなかった疑問が湧き上がる。それは喉元をせりあがり、ついには爆発した。

「何故、街にいますか！」

広間へ入ることの許された一部の侍女たちはセイラが姿を消した成り行きをある程度知っている。

マキナが公言するなと命を出していたので大騒ぎになってはいないが、ユーリが探していたこともありクロエの耳にも自然と届いていた。

ハナの耳にも当然入っているだろう。

今頃、可哀想なあの子は半狂乱かもしれない。

「ちょっと……」

「ハナさんはご存知なのですか」

ハナの名を聞いた途端、油の足りないおもちゃの様にセイラの動きはぎこちなくなった。

スカートを見下ろしてしまったと顔を曇らせたセイラにため息一つ。

「あまり心配をかけないで上げてください」

「……いつの間に仲良くなったの」

「仲が良いわけではありません。……ただ彼女の気持ち分かるだ

けです」

ハナとクロエは鏡のようなものだ。
お互いのことは良く見える。
ただそれだけ。

いや、見えすぎるといのは案外厄介なことかもしれない。
自分のことだけで精一杯だというのにハナの不安や焦りが伝染して、
クロエまでため息の数が多くなってしまう。

「クロエはなんで街に？」

「私は……」

クロエはさつと自分の手元を見下ろした。

ない！
いつから。

セイラを見つけるまでは確かに持っていたはずだ。

祈るような気持ちで部屋の中に視線を走らせると、それはドアの近くにちゃんと置かれてあった。

倒れてもいないし、割れてもいない。

ごてごてとし、多少不恰好に見えるピンは暖炉の明かりを受けて鈍く光っている。

「お使いの途中です。リディア様がヒューロムの赤酒をご所望だったか」

酒に詳しくないセイラは、クロエの困った顔に首をひねったが、ヒューロムの赤酒は中々手に入らないのだ。

もともとヒューロムのものは手に入りづらい。

痩せて小さな土地では食物にしる酒にしる自分たちで食べるので精

一杯な量しか作っていない上にアリオスの舌には合わないのか需要が少ないので出回ったりもしない。

その中でも赤酒となれば随分前からヒューロムでさえ造らなくなつた酒だ。

手に入つたのは奇跡に近い。

路地が入り乱れ異界にでも通じているのではないかと思わせる裏街のそのまた奥の酒屋でやっと見つけたのだ。

城に貴族を招く時は、いつも無理難題を押し付けられて侍女たちは四苦八苦するのだが、今回はリディアが一番面倒な相手だ。

リディアは部屋の内装から食事、酒にいたるまで全てヒューロムのものにしろと言いつ出したのだ。

何ヶ月も前から考え抜き見事に整えた部屋のものたちは今頃、喉元まででかかった文句を飲み込んだ侍女たちにより運び出され、代わりにヒューロムの古臭い絨毯が運び込まれていることだろう。

「夕食にジン様を招くそうです」

ジルフォードに母親の故郷の味を。

そう言われればよいお考えですわと微笑むしか他は無い。

「ジンを……」

彼らは一体どんな話をするのだろう。

「セイラ様もです」

「お招きされてないよ？」

それどころか喚いて逃げ出してしまった。

「夫婦ですもの。当然といった顔でいけばよろしいですね。ジン様のことも心配でしょう」

密室ではどんな話を吹き込まれるのか分かったものではない。手回しのいいものでリディアたちは用意だけさせると後の給仕はこちらの侍女がやると侍女の立ち入りさえ禁止したのだ。

「うん」

「では、さっそく城へ帰りましょう」

クロエの心配は杞憂だったのだろう。

誰かがドアをぶち破ることも無く、外の喧騒に変わりはない。カーサの言ったとおり、たまたま居合わせた術士だったのだ。

外が安全だと分かれれば、出来るだけ早く城に辿りついたほうがいい。酔っ払いの横行する夜の街も中々に危険だ。

「母様、ありがとう」

続いて礼を言おうとしたセイラの瞳をカーサがじっと見つめた。

「セイラ様には術士が、どんな姿で見えましたか？」

「……ベールを被ったおばあさん」

花嫁が被るような長いベール。

眩しいような白い衣装から伸びるカサカサの手が、どこか奇妙に見えて赤くぬめった唇が毒々しいほど赤い。

その説明を聞いて眉を寄せたのはクロエだ。

「私には灰色のマントを被った人影にしか見えませんでした」

叩けば埃だ立ちそうなほどボロボロのマント。

路地の陽気さとはかけ離れ、そこだけ陰鬱としていたから余計に眼を引いたのだ。

マントは術士の証。

それを知っていたからクロエはすぐに気づくことが出来た。

きつとセイラが眼にしたような人物を目にしていたら、奇妙だとは思ったかもしれないが、術士だとは気づかなかっただろう。

祭りにはもつと奇抜な格好をしたものがたくさんいるのだから。

「ええ〜！……隣にいたのかなあ？」

周りの情景を思い浮かべようとしてもうまくいかなかった。

赤い月。

白いベール。

洞のようでいて炎のように輝く眼。

「……セイラ様。こちらにおいでください」

セイラはカーサに導かれて別の部屋へと入った。

大きな鏡の前に立つと、肩から赤い布をかけられた。

とろりと光沢を持ったその布は液体と見紛うばかりの滑らかさを持っていた。

指先を差し込めば、とぶんと沈んでしまいそうだ。

体のラインに沿って曲線を描きながら垂れる赤は、形を得て生き物のようにさえ見える。

セイラが体を揺らせば、光が当たる角度が変わり色が少しずつ変化する。

「カーサ？」

そのまま器用に巻きつけられ腰の位置を飾り帯で結ばれ、異国の娘が着る神秘的なドレスのよう。

「ヒューロムの赤です。かつてにはエイナのマントの色でした」

「エイナの。綺麗」

「これはヒューロムがまだ国だった頃のもです。あの頃はまだ……いいえ。ハーディア様をご存命ならば」

カーサの声には懐かしさとどうしようもない哀しみが滲んでいた。

「ハーディア様って？」

「……サンディア様のお父上でございますよ。あの方は、本当にヒューロムを愛していました」

痩せた土地も。

僅かな天の恵みに縋って生きているヒューロムの人々も。

あの小国がアリオスからもエスタニアからも他のどの部族からも攻められる事が無かったのは、一重にヒューロムの赤を創り出したためだ。

身体を巡る命の色に等しい美しい色を。

そこにより重い意味を持たせたのがエイナやエスタニアのユズロス王であったのは間違いないが、ヒューロムの赤は畏れ敬われる色だった。

ヒューロムにはこんこんと湧き上がる命の泉があり、そこで染めているのだと噂され、攻め入り罰を受けるのを畏れ誰も手を出さな

った。

ヒューロムの赤を創ることが許されたのは王族の娘たちだけだった。真冬の冷たい水に手先を沈め、色をなくしていく肌の上を染料が染めていく。幾度真水で濯ごうとも染まったままの指先はヒューロムの誉れと称えられた。

ハーディアはその伝統を守ろうとした。

それこそがヒューロムの存在意義なのだと。

カーサはサンディアから、たった一度だけ命の色に指先を沈めたことがあると聞かされていた。

それは十歳で初めて許される。

真の王族の娘だと認められた瞬間、これからもずっとこの厳かな儀式は続いていくのだと信じて疑わなかったと。

だが、ハーディアは若くして亡くなった。

リディアが王位に就くと、彼らの娘は真白な指先を染めることを嫌った。

ハーディアの心を誰よりも汲んでいたサンディアは心を凍らしたままアリオスへと嫁ぎ、民が見よう見まねで染めた布に他国の人々さえも魅了した色は宿るはずもなく、ヒューロムはただの荒れ果てた場所になった。

「あの方ならば、ジルフォード様の中にヒューロムを見たでしょうに」

残念だとカーサは眼を伏せた。

世の中はままならない。

ほんの数年、数日、誰かの時間が狂っていれば全てがうまくいったのに。

この布はヒューロムの最後の布だ。

サンディアの母が手を浸し、サンディアもまた手を浸した。

それを今、彼女の息子を支える娘が身に纏う。

時が狂っていればと願いつつ、そうではないことの幸福を知りせめぎあう。

ああ、すべてがままならない。

それを諦めを含んだまま飲み込む術も長い年月がカーサに教えてくれた。

「これはどうかセイラ様がお持ちください」

この色は命の色。

悪しきものを遠ざける魔よけの色。

術士は姿を隠すためにマントを被る。

己を隠し、闇の中から相手を見定める。

もし術士が姿を晒したのなら術をかけるべき相手をすでに知っているということだ。

なぜ、今ジキルドの術士がセイラを狙うかなどカーサには知りようも無い。

けれど、上に立つということは標的にされやすい。

嘗ての夫もそうだった。

カーサは術士の恐ろしさを十分に知っている。

だから、己の持てる最高の守りをセイラへと渡したのだ。

「ありがとう」

跳ね回っていた髪を綺麗に梳いてやるとセイラは照れたように笑った。

この瞬間、カーサにはもう一人娘が出来た。

今までに数え切れないほど多くの子どもを持った。

その中のどの子より厳しい道を進むだろう。

亜麻色の髪を一本に結い上げ背中へと垂らし、目じりにそっと赤を添える。

アリオスの女の戦化粧だ。

どんな闇の中でも眼がくもることのないように願いを込めて。

「なんだか強そうだね」

ぴりと全身が引き締まる。

どこか自分ではないようで、ひらひらきらきらとしたお姫様の格好をしていた頃よりずっとしっくりくる。

カーサはふつと微笑んだ。

「さあ、クロエと共にお帰りなさい」

第四章：赤い月夜と蝙蝠11

「いつまでそうしているんだ。返せよ」

セイラが居なくなっただけにより少々気詰まりになった空気を押しやるように、ルルドはヒイラギから耳飾を取り上げる。

乱暴気味だったせいで種が一粒だけヒイラギの手のひらに残された。それはヒイラギの内で湧き上がった疑念と同じくとても小さなものだったけれど、確かな存在を示していた。

これが芽吹けば一体どのようなものになるのだろうか。
ヒイラギには想像もつかなかった。

「ルルド様……ううん。ルルダーシェ様はどんな王になりたいですか？」

「いきなり何を言い出すんだ？」

酔いでもしたのだろうか。

けれど、ヒイラギの頬には赤みがさす事もなく至って真面目な表情だ。

年中ふざけているヒイラギのその様が逆に可笑しくて、やっぱり酔っているのかと疑ってみたが逸らされることの無い視線に折れ、考えてみた。

だが、幾らもしないうちに答えは出た。

「僕は……王になんてなりたくない。王になった兄上の補佐をした
いんだ」

どんな王になりたいかどころか王になろうとさえ思ったことが無い

のではないだろうか。

ルルドの中にある漠然とした王のイメージは父親であり、母や彼女を支える貴族たちの理想に他ならない。

一番心惹かれるのはナジュールの姿だ。

きつとナジュールが王になれば歴代のどの王よりも強い王になる。

容易に想像できるその姿は、ルルドにとって最も理想のタハル王だが、己にはなれない事を重々知っている。

「ナジュール様の補佐ですか」

ヒイラギの声には珍しく笑いを一切含まない非難めいた響きがあった。

それが氣にくわなくて、ルルドは眉をしかめたまま詰め寄った。

「何が不満だ。僕には無理だと言いたいのか？」

この被害妄想めいた考えはどこから来るのだろうか。

ルルドことルルダーシェは自分のことになると過小評価もいいところだ。

ルルダーシェは殊更小さく生まれた。

医療の十分ではないタハルでは生き残ることが出来ないと危ぶまれるほど弱弱しく、母親の嘆きは酷かった。

方々に手を伸ばし何とか命を繋いだ息子に母親は惜しめない愛を注ぐよりも鞭を打つことでルルダーシェの行く末を照らし出した。

お前はナジュールに劣るから倍の時間を勉強に費やしなさい。剣術の稽古もより多くと。

それを実行してもナジュールには敵わない。

誰も教えなかった。

十歳も年の離れたルルダーシェの筋力ではナジュールとは対等に戦えないと。

ルルダーシェの頭脳がよくても10年先を行っているナジュールに追いつくのは容易ではないと。
伝えなかったのは自分も同じかとふうと息が漏れた。

「ねえ、ルルダーシェ様？ 僕もサキもルルダーシェ様が2番目でいいやなんて思ってたじゃないよ。ううん。補佐なんて2番目ですらない。僕たちはルルダーシェ様を王にしたいんだ」

「何を言っているんだ！ 兄上以外にふさわしい者なんていない」

「なぜです？」

「なぜって」

そんな当然のことを今更説明しなければならないのか。
驚愕に開かれた瞳はそう語っていた。

「ナジュール様はそりゃ、剣術も馬の扱いにも長けていますよ。サ
クヤ殿が先生ですからね、頭も悪いわけが無い。だけど、傲慢さは
力ではない」

「お前、兄上を侮辱する気が！」

ルルドが机を叩きつけ立ち上がると鋭い音が店内に木霊し、何事
かと人々の視線が二人へと集中する。

笑顔でなんでもないと周りに伝えながら、ヒイラギは机の下からル
ルドの脛を蹴り上げた。

痛みに小さく声を上げたルルドはヒイラギの目立たないでください
よとのメッセージを受け取りしぶしぶ腰を下ろした。

腹の中で煮えたぎる怒りは出口を探して喉元辺りを行ったり来たり

している。

「別にね、お二人を仲たがいさせたくて言っているわけじゃありませんからね。そこのところ分かっておいてもらわないと」

今更そんなこと言われるまでもない。

ナジジュールを慕いきっているのを一番知っているのはヒイラギだと自覚している。

「そりゃ、仕えている訳だからちよつと甘めの採点だけど、タハルのために思えば次の王はルルダーシェ様が良いと思うんですよ。」

「……何をもつてそんな馬鹿なことを」

「ナジジュール様はタハルを守ろうとしてる。だけど、タハルのことはちつとも信用していない。あつ、口出すのは全部説明が終わってからにしてくださいよ」

手振りでルルドを制したヒイラギは残っていた蜂蜜酒を一口で飲みきった。

「ナジジュール様のやり方は歴代の王のほとんど同じ。力でもって必要なものは他から取ってくる方法。食料にしても人材にしてもね。いい方法だ。取って来る労力だけですむもの。だけど一過性のものだよね。この先、何十年何百年タハルの血肉になるものじゃない」

一粒取り残されていた種を机の上に置いた。

「王様は信じてなきや。この国は死んでないって」

街でのことがぼんやりと思い出された。

死んでいるのと同じだとナジュールは言ったのだ。

「まあ、なりたい。なりたくない。で決まるものではありませんけど。それにしても、この中に入れておいたはずの香は何処へやったんですか」

本来、香がはいっているはずの耳飾には種が入っている。

「ああ、邪魔だったから捨てた」

「……ん？ なんだか空耳が聞こえたけど、気のせいだね？ ねえ、ルルダーシエ様。中身はどこへやったんですか？」

「だから、捨てたと言っている」

「使ったの間違えではなく？ 今なら訂正する時間をあげますよ？」

「捨てたといったら捨てたんだ！ 何が問題なんだ。必要なら直ぐに配合できる」

「ばっか！ あの香がどれだけ高価か！……………今、配合出来ると言いましたか？」

「何なんだ？ いつの間にそんなに耳が遠くなっただ。お前は」

「その中に入っていたのは獣除けの香ではないんですよ？…………ルルダーシエ様に配合が出来る？」

ルルドの苛立ちは頂点に達した。

香の配合も出来ないと嘲っているくせに何が王にだ。

「狂いの香だろう！ 僕にだってそのくらい出来るさ」

獣を追い払うのではなく、逆に引き寄せて意のままに操るための香だ。

獣ごとに微調整が必要だが、獣払いの香と難しさはあまり変わらない。

それなのに出来るはずがないといった響きの声がルルドを突き刺した。

悔しくてキツと睨みつけた先でヒイラギは珍妙なものを見るような顔をしていた。

いつもの三割り増しでしまりの無い顔だ。

もしルーガがいきなり人語を操ったら人はこんな表情になるのかもしれない。

「僕にはできませんよ。ルルダーシェ様。サキにだって……ナジール様、うっん。歴代のどの王にも出来なかったはずです」

「はっ？」

今度、間抜け面を晒すのはルルドの方だった。

ぎゅっと吊り上っていた眉がすとんと落ちる。

その様子を見て少しばかり余裕の出たヒイラギは考えを巡らせた。

この世間知らずの王子様にどこから説明したらいいのだろう。

そして、自分は何を聞き出せばいいのだろう。

「いいですか。タハルで狂いの香の配合が出来るのはドルジュとセイオンの一族だけです。まあ、セイオンはちょっと前に滅びてしまったから関係ないですけど。門外不出の配合率の香は目ん玉飛び出

そうなほど高価ですよ。だけど、他の誰も配合が出来ないから王族だつてドルジュから買わなきゃいけない。ここまではお分かりですか？」

あまり分かっていないような顔だ。

ルルドの表情を見るかぎり、砂漠の水に等しいほど価値のある香の作り方は、厳重に守られている割には簡単に作れるものなのかもしれない。

「強欲なドルジュが教えてくれるわけありませんからね。……誰に教わったんです？」

「リュウの頤に行く手前で会ったサルーという男だが」

その名を聞いて、今日はよくよく驚きを誘う名前が出てくるなと思った。

「知り合いか？」

「知り合いつてほどではありませんが。生きていたことにびっくりです。もうとつくに死んだものだと思っていました。まだ廟を作っていましたか」

「うん」

その男はたった一人で砂漠の真ん中で日干し煉瓦を作り、一つ一つ積み上げては「もう少しだ」と呟いていた。

日干し煉瓦で作られていたのは人が十人ほど入れる大きな建物だった。

丸屋根の質素な祈りの場。

リュオウの慈悲を請う場所。

それが建てられている場所は人の行きかう場所とは離れている。ルルドもたまたま通っただけで普段なら足を向けるところではない。そんなところに何故作っているのかと問えば約束なのだと、真黒な顔でサルーは笑った。

「彼はね禁を犯したんですよ。香の配合率をタハル以外に持ち出そうとした。だからあれは罰なんです」

「罰？」

「砂嵐がもつとも酷い場所に一人で廟を立てリュオウの怒りを鎮めろと。そうすればお前の罪を赦し一族がその責めを負うことはないってね。永遠に終わらない罰です。作っても作っても砂嵐が飛ばしてしまう。近くにオアシスもないでしょう？ とつくの前に死んじやったとばかり」

「約束だと言っていたのはそのことか」

「死んでいたほうが楽だったのに」

ヒイラギは薄く笑った。

「どういうことだ？ サルーは罪を償うために一生懸命なのだぞ」

「彼が作っているのは一族のお墓ですよ。完成したあかつきには一族百数十人の頭蓋骨で埋め尽くされる運命です」

「サルーの一族は免責されるはずだろう？」

「先ほど言ったでしょう？ セイオンは滅びてしまったと。サルーがもし万が一廟を完成させたとして赦されるのは配合率を外に出そうとしたことだけ。セイオンはサルーという男を生み出した咎で皆殺しにされました」

「そんな、馬鹿な！ 誰がそんなことを！」

「誰って……」

ヒイラギはルルドの一番嫌いな顔で笑った。

「ルルダーシエ様の大好きな兄上ですよ。……もしかしたらサルーは知っていたのかもしれませんがね。だから、ルルダーシエ様に香の作り方を教えたのかも」

サルーが笑っている。

太陽に焦がされ真黒になった顔で。

もう、十七つめの廟だと言った。

水を分けてやるとありがたいと拝み、全てリュオウに捧げた。

お礼にと彼は獣を操る香の作り方を教えてくれた。

もう自分には必要ないからと。

第四章：赤い月夜と蝙蝠12

部屋の中からは椅子や机といった調度品が運び出され、厚い絨毯が敷かれた床の上に円を描いて座る。

中央には山と盛られた料理に、リユーイの乳から作った酒が置かれている。

絨毯の鮮やかさに比べれば、料理はどこか色あせて見える。

その光景にうんざりしたキアは一人だけ椅子を窓際に置き、侍女を呼びつけて用意させたエスタニアのぶどう酒を口の中で転がしていた。

なんて馬鹿らしい。

ここにはエスタニア、アリオスの最高級のもがそろっているというのに、なぜ不味い自国のものをわざわざ作れというのか。

思い出しただけで気分が悪くなりそうな赤酒も用意しろと言ったのだ。

内装まで湿っぽいヒューロムのもを持ち出して、キアは父親の馬鹿さ加減にめまいがしそうだった。

アリオスのものを食べなれているジルフォードなどもっと辟易としているのではないか。

先ほどから全くといっていいほど食が進んでいない。

利用するために取り入ろうと思うのなら、少しでも心象を良くしておきたかったけれど、父親と彼の連れてきた取り巻きに囲われているので手出しは出来ない。

仕方ないけれど、横目で様子を探るのがせいぜいだ。

きつとジルフォードは酒が好きではない。

くせの強い乳酒を断ったのは当然としても、エスタニアのぶどう酒さえ遠ざけた。

部屋の中で異彩を放つジルフォードの白は別の世界のもののようにだとうとうと語る父の言葉など、届いているかどうか怪しい。

「のう、ジルフォード。サンディアの、お前の母親のことだが」

伏せていた瞳が上げられ、リディアを見る。

リディアの部屋に招待されてから、かなり酒盃を干し、やっと本題に入る気になったようだ。

正面から視線を受けたリディアは一瞬、ぎくりと身を竦ませたが、酒の力に押されて調子を取り戻す。

いっこうに減らないジルフォードの盃に無理やり酒を注ぎ足すと反応を待った。

「何でしょう」

冷えた声だった。

ジルフォードが広間を後にする時に発した言葉より、さらに冷たく硬い。

明確に線引きされた世界に無遠慮に足を踏み入れた男を拒絶するよな声だ。

酔いの回ったりディアにはその違いなどもはや区別がつかなかったのかも知れないが、キアは咄嗟に鳥肌の立つ腕を擦った。

「哀れだとは思わんか。王妃を務めた人間が寂れた屋敷に取り残されているなどと。サンディアは聡い娘だった。田舎で朽ちるには忍びない」

ジルフォードの西の離宮の思い出は、おぼろげで擦り切れてしまった夢のようだ。

まだ数人の侍女がいてサンディアが笑っている。
遠い遠い暖かな夢。

けれど、その中に先日見たほど嬉しそうな母の姿はあっただろうか。

どれほど鮮明に記憶が甦っても、きつと見当たらない。

哀れだなんてついとも思わない。

一度として尋ねたことも、手紙すら出したことの無い彼らにはサンディアの近況を知る手立ては無い。

リディアも、また彼の取り巻き立ちも彼女がどこにいて、どんな生活を送っているかなど知らないのだ。

「母上は、西の離宮を離れました」

「なに！　では城にいるのか？」

「いえ」

言葉少ななジルフォードに苛立ちが増す。

それに比例するようにリディアの酒で赤くなった頬の色が更に増した。

ゆっくりと間を持たせた深呼吸は深く考え込んでいるように見せかけていたが、キアには怒鳴りつけるのを我慢しているようにしか見えなかった。

「ジルフォード。サンディアを城へ連れ戻せ。お前にはそれが出来るはずだ。今まで無下に扱われていた母親の権利を取り戻すのだ」

傍から見ているとリディアが熱を上げるたびに、ジルフォードは冷めていくような気がした。

「サンディアを五元帥の一人にするのだ。それがこの国のため。お前のためだ」

「そうだ」と相槌が打たれる中、首が振られた。
リディアの言葉に反抗するために。

「なぜだ！」

首をすくませるとりまきたちの横でジルフォードは雪像のように瞬きさえしない。

「母上はそんなことを願ってなどいません」

彼女がやつと手に入れた場所は、ただのサンディアを受け入れてくれる。

背伸びをして、いつもぴんと神経を張り詰めていなくともあるがままを受け入れ、慕ってくれる。

見返りなど求めない愛情の温かさに再び触れることが出来たのだ。
あの幸せな空間を奪うつもりは無い。

そのためには見知らぬ親族を拒絶するのは難しいことではない。

「力が欲しいのは貴方だ」

爆ぜる寸前の果実のような赤い顔がどす黒く濁る。

やりとりを傍観していたキアは、いけないと思った。

此方が怒鳴りつけ、お前になど頼まないといっってしまうば、向こうは嗚呼良かったと手を打つに決まっている。

向こうには憂いが一つなくなり、此方は貴重な金づるを失うことになる。

ジルフォードは馬鹿じゃない。

母親を盾にして傀儡にはなりえない。

父は選択を間違えたのだ。

いいや、目の前の人物をあまりにも軽く見ていたのだ。サンディア

もジルフォードも。

一度怒りに我を忘れた父を止めるのはおこぼれを頂戴しようと張り付いている馬鹿共には無理は話だ。

追隨して怒りを大きくする役にはたつが、冷静さを取り戻すようにやんわりと言葉を挟むことなど出来たためしがない。

「ジルフォード」

本当は新しいドレスで小汚い絨毯の上になど座りたくは無かったけれど、彼らの間に割り込むにはそうするより他は無い。

膝が絨毯の上についたとき嫌悪感がせりあがってきたけれど、ジルフォードの顔を見れば少しばかり和らいでいく。

ジルフォードにはヒューロムを思い出させるものは何も無い。

ちろと向けられた娘の視線にリディアは開きかけていた唇をぎゅつと閉じる。

可愛い一人娘に手を上げるところか怒鳴り声一つ上げることが出来ないことを知っているキアは、その一瞥だけで父を関心から切り離れた。

膝の上の白い手にそつと手を添える。

触れられることに慣れていないのだろう。憎らしいほど皇かな手がびくりと震え、手の下で拳を握る力が強くなった。

この青年は、此方の意のままに操れるほど愚かではない。

けれど、その脅威を完全に跳ね除けることが出来るほど人にも慣れていない。

「ヒューロムがどんなに貧しいか貴方に分かる？ 皆を生かすために少しでも力が欲しいわ」

ヒューロムの貧しさは一夜中語り続けることが出来る。

苦しそうに寄った眉は本物だ。

望むままに生きるために力が欲しいのも本当のことだから自然と声に力が入る。

見上げたジルフォードの無表情が少しばかり乱れた気がして心臓の音がとんと跳ねた。

「私、勉強がしたいの。生きていくためには必要なの。大切なものを守るためにも必要なのよ。ねえ、お願いよ。ジルフォード。ここにはすばらしい教師がたくさんいるのでしょうか？ 私をここにおいて勉強させて」

縋るような視線などお手の物。

貴族たちの間を渡っていく上での知識が圧倒的に足りないのは確かだ。

もともと苦勞することは大嫌いだが、欲しいものを得るための労力を惜しむつもりは無い。

戸惑ったように瞳の色が揺れた。

やはりそうだと表面上は今にも泣きそうな表情を作りながら、心の奥底でくすりと笑う。

助けて欲しいと縋る方がこの可哀想で優しい青年は心が揺らぐのだ。もう一押し。

涙でも流して見せようか。

キアの背後で来訪を告げるため、扉を叩く硬質な音がした。

第四章：赤い月夜と蝙蝠13

扉を叩く音は思いのほか室内に響き、シルフォードの意識も一瞬向こうへと向いてしまった。

そうなれば、今涙を流したところで効果は薄い。

ため息を飲み込んだキアも憤然と扉へと視線を送る。

射るような視線を受け、びくついた侍女が扉を開けると二つの人影が見えた。

手前の女性は深い青色をしたアリオスの侍女服を着ており、少し後ろにいる少女は息を呑むほど美しい赤を纏っていた。

実際その色を目にしたヒューロムの侍女は禁忌の色を見てしまったかのように小さな悲鳴のようなものを上げて目を伏せた。

顔を伏せたままの侍女に代わり、クロエがセイラを中へ入るように促した。

客を前にして何も出来ないなど侍女にあるまじき失態だと僅かに咎めるような視線を送ったがまだ少女のような侍女は気づくことは無かった。

「遅れてしまいましたか」

クロエに導かれて部屋に入ってきたセイラに一同ははっとなった。今日中に再び目の前に現れることは無いだろうという予想を打ち破られたこともあるが、彼らの表情に感嘆が含まれていたのは、きりりとした立ち姿のためだろう。

昼間の甘く柔らかな雰囲気をももし出していた少女は一変して勇ましい。

その姿を見てキアは何故か齒噛みたいほど悔しかった。

自分が捨て去ろうとしているものを身に纏い輝かしいセイラが疎ましい。

振り向いた拍子にジルフォードから離れた手に我知らず力が入る。
握り締め皺の寄ったドレスは自分が望んだものだというのに、急に
価値の無いガラクタになってしまったような気がした。

「赤酒をお持ちいたしました」

差し出されたビンを受け取ったリディアの侍女はうろたえた。

他のものを入れるなという命を受けているが、まさか侍女の身分で
王女に出て行けなど言えるはずが無い。

そろりと主を伺ってもリディアはセイラを見つめて、いや、彼女の
纏う色を見つめたまま指示をする素振りも見せない。

うろたえた侍女が声を上げる頃にはセイラはクロエによってジルフ
オードの傍へと導かれている。

扉が開いた瞬間からジルフォードの視線も思考も完全に奪われたま
まだ。

揺れていた色は、もうセイラしか見ていない。

セイラが微笑めば、ぞくりと震える。

慄いたように。縋るように。

ああ、なんて気にくわない。

キアは立ち上がるとジルフォードの視界を遮るように前に出る。

セイラに詰め寄ってみても昼間の弱さは何処にもない。

キアを見つめる瞳には憤りも怯えもない。

それがまた怒りを生む。

「ちょっと、セイラ様をお呼びしたつもりは無いのだけれど。これ
はヒューロムの一族のための集まりなのよ」

出て行け。

ただの小娘などお呼びではない。

キアの言葉は強く、クロエでさえ不快感で眉が寄る。

「お前もよ。誰も通すなと言っただでしょう！」

飛び上がった侍女は顔を伏せて唇を噛んだ。

彼女の顔にはどうにか失敗を取り戻そうという思いよりも、もうダメだと絶望で色付けがされてる。

クロエの見た限りキアに主を務まらない。

アリオスを足がかりにしようとするならばなお更だ。

アリオスでは女主と侍女は一つの隊に等しい。

侍女に慕われない女主はやっていけない。

どうにかうまく擦り寄ってキアがここで暮らすようになっていってもいくらももたないだろう。

「クロエ。君は帰って」

小さく告げられた言葉に無然とした。

こんな状態で置いていけるわけがない。

そんなクロエの心情を呼んだのか、セイラは頼みたいことがあるのだと微笑んだ。

「ハナにね、心配かけてごめんって伝えといて」

「……わかりました」

大丈夫だろう。

今のセイラにはハナを気遣う余裕もある。

この部屋の中で一番落ち着いているのはセイラだった。ここは彼女の舞台だ。張り合えるものなど誰もいない。

「貴女もよ！ セイラ様」

背後からヒステリックな声がクロエを襲う。

伴って部屋から出て行かなかったことが腹立たしくて仕方がないらしい。

主の言葉は絶対。今ならばセイラの言葉を忠実に実行するのがクロエにとっては正しいことだ。

すばやく部屋を出て、伝言をハナへ。

無駄な動きは一切しないこと。

けれど、クロエは一度だけ後ろを振り返った。

閉じていく扉の向こうでセイラの腰に白い腕が巻きついた。

「セイラは妻です。それでも認めないというのなら、此処にいる必要はない」

そこには心優しい青年の顔は無かった。

「ジルフォード！」

「招かれもしていないのに来てごめんなさい。気に入らないのなら直ぐに出て行きます。だけど、先ほどの非礼に対する謝罪の時間をどうか与えてください」

そついうとセイラは居住まいを正した。

「遠いところをわざわざお越しくださったのに、話も聞かず飛び出してしまい申し訳ありません」

セイラは深々と腰を折った。

「一つだけ訂正をさせていただきたいのです。ジニスが私の持ち物ではないことは事実です。どうかこれだけは知っておいてください。けれど、双方が納得しヒューロムとジニスが手を組むことに否やはありません」

「なに？」

「互いの技術をうまく使って新たな商品を作り出すことには賛成です。けれど、私が出るのは相談の場を設けるだけ。一方的にジニスの誇りを切り売りしろと言われても彼らは納得しないでしょう」

「セイ。今回の和睦にジニスは関係ない」

ルーフアに確かめたのだから間違いは無い。

二国間で交わされたのは婚姻による和睦をはかるということのみ。ジニスを引き合いにだす必要はないと告げたジルフォードを見上げてセイラは微笑んだ。

「そ。だから、これは純粹に商売の話。親族だとか故郷だとか関係なくね。利益が絡んだ複雑な話は私向きではないし、ジニスには優秀な商売人がいっぱいいるから彼らに任すよ」

昼間は一瞬で頭に血が上ってしまったけれど、ジニスの利益になることをセイラがつぶしてしまうのはもつたいない。

「交渉の場を持ちたいという話ならばいつでも伺います」

言いたいことを言い終えた後はさっさと退散することにしよう。

長く居座って彼らの機嫌を損ねたいわけではないのだから。

「では失礼しますね」

どうするかと視線だけでシルフォードに問えば、同じ結論を出したようで無言で頭を下げ退室することを告げる。

怒りに歪んだ顔をしたキアなど視界にも入ってはいない。

差し出された手に己の手のひらを重ね歩き出す。

扉をくぐる寸前、今まで黙っていたリディアが口を開いた。

「それはヒューロムの色だ」

「はい。とても美しい」

リディアが何を想ったのか、きつく引き結んだ口元から読み取ることは出来ない。

部屋から出てしまうのは簡単だった。

二人の足取りを鈍らしたのはキアの焼け付くような視線と、リディアの一言だけだったから。

第四章：赤い月夜と蝙蝠14

「ねえ、ジンったら、ちょっと待ってよ」

セイラの言葉に反応して歩みは次第に遅くなっていく。

狙ったわけでもないのに、そこは昼間に分かれたきりとなっていた東屋の近くだった。

存在を確かめるようにいつもより強く握った手の力を緩め、二人の距離が広がった。

宙ぶらりんの手の先は薄闇の中を彷徨って結局どこにも行きつくことは無かった。

振り向くのが怖い。

セイラの顔に浮かぶのがあの時と同じように無表情だったらどうしたらいいのだろう。

それどころか拒絶の色がそこにあつたとしたら。

全身を巡った冷たい血が心臓を襲う。

冷たささえ通り越し、ぎちぎちと痛かった。

慣れっこになった無関心は、セイラが絡むと何故かうまく使えないのだ。

「ジン」

ジルフォードを呼ぶ声にはいつもどおりの温度があつた。

「ジン、こっち見て」

いつもならこう言えば振り向いてくれるはずなのに、ジルフォードは背中を見せたままだ。

頑なに動かない背中からは、振り向きたい衝動と拒絶される恐怖が

せめぎあっていることなど伝わるはずもなく、セイラは急に不安になった。

やはり、呆れられたのだろうか。我俣ばかりの役立たずで嫌われてしまったのだろうか。

先ほどの決然とした気持ちは、しおしおと沈んでいく。

せめて指先だけでも繋がっていれば、ジルフォードの心情が読めただろうか。

「嫌いにならないでよ」

暗闇を彷徨うように両手を前に突き出した。

セイラの手が伸びきると、ジルフォードが振り向くのとどちらが速かったか。

「セイ。ごめん」

気がついたときには痛いほどに抱きこまれていた。

今までのように触れるか触れないか、羽で包むかのように優しくではない。

背中に回された指の形さえはつきりと分かるほど強く。

鼓動が聞こえる。痛い痛いと呼ぶようにいつもより速い。耳朶に触れる声は悲痛なほど掠れていた。

「ごめん」

「どうしてジンが謝るの。君は何も悪くないじゃない」

「セイに不快な思いをさせた」

今までに無かった状態のせいかバランスを崩して、二人してしりも

ちをつく。

それでも腕が離れることは無い。

長い一日だった。

昨日見たはずの花流しなどもう何年も前のことなのではないかとさえ思ってしまう。

全ての感覚が、今このときに埋め尽くされ、ほかの事はおぼろげになる。

胸に走った痛みも悔しさも。

頬に受けた熱も。

「ねえ、顔をみせて」

その言葉に肩に押し当てられていた頭がおずと動く。

髪が首元を撫でていくのがくすぐったい。

白い頬に手を伸ばせば一瞬の躊躇の後受け入れられた。

伏せられたジルフォードの瞳の色は分からない。

瞼の裏に隠れた瞳はどんな色なのか無性に知りたくなって、瞼にそっと口付ける。

それには絵本の中にいた魔術師の魔法ほど効果があった。

驚いたジルフォードが目を開き、一瞬のうちに瞳の上を数多の色が駆けていく。

「私も謝らなきゃいけないことがある」

「なに？」

謝られることなど無いはずだとジルフォードが首を傾げながら尋ねる。

「私、ジンにやつあたりしたの。他の王女様が良かったかなんて馬

鹿なこと聞いちゃった。ごめんね」

― 選べるはずないものね。

声に出すことが出来ないまま口の中に残った言葉が、誤って入ってしまった砂のようにいつまでも居心地悪く居座った。

そうだと肯定されてしまえば、きっと蜂蜜酒の効果もカーサからもらった温かさも消えてなくなってしまう。

頬に添えたセイラの手のひらをジルフォードの手が覆う。

「私は」

強い強い赤い瞳。

けっしてそらされることは無い。

「セイがいい。セイ以外は知らない」

他の何もかも。

言外の言葉にはつと息を飲む。

セイラがしたように、瞼の上に口付けが落とされた。

目じりに溜まった涙にも。

「……ダメだよ。ジンは大切なものをいっぱい持っているんだよ。

だから大事にして。自分のことも、アリオスのことも。それで、私の手をとって」

きゅつと手を握りこまれると、頬から手が離れてしまう寂しさで、包み込まれる心地よさが同時にやってくる。

「大切なものは一つでいいと思っていた。たくさんあっても守れな

いから」

「大切なものはたくさんあってもいいんだよ。もっと強くなれるから。もっと優しくなれるからってカエデが言ってたよ。」

「私は自分の無力さを思い知らされた」

「あつ。それは、私も同じだな。弱くて矛盾だらけで我侭だっと思
い知らされたよ」

額をあわせたままセイラが笑えばジルフォードにまで柔らかな振動
がくる。

「そうだ！ ジン平気？ どこか変なところはない？」

首をかしげるジルフォードに術士に会ったこと、思わずジンの名前
を出してしまったことを告げたが本人は可笑しなところはないとい
う。

「そっか。それはよかった」

ほうと息をつき倒れこむ。

温かい。

これがあの時の自分と同じほど冷たくなってしまったらと思うとぞ
っとした。

ぐいぐいぐいと頬を寄せる。

ああ、良かった。失わずにすんだのだ。

「術士のことが心配？」

「……ん。ジンに何かあつたら嫌だ」

「私はセイになにかある方が嫌だ。墓守のところに行こう。彼はそういったことに詳しいから」

第四章：赤い月夜と蝙蝠15

「ああ、懐かしい。エイナの色だ」

ほうと零れ落ちたため息には千年の月日で濯いでも一向に薄れることの無い愛情が含まれていた。

濁った眼の上に衣の赤を映し、溶けていく。

今でも昨日のことのように思い出せる。

あれは美しい舞だった。

誰もが畏れ慄き見惚れる戦女神の舞だ。

翻る衣の一つ一つが彼女の血潮のようだった。

金色の光を閉じ込めた瞳は遙か彼方を想っていた。

それはいつなのか。

百年先か千年先か。

それとも今、この時なのか。

目の前の少女は戦女神というには幼すぎる。

それなのに、瞳には同じ色を宿している。

いつも、そんな瞳をするのは女なのだ。

墓守には、それがどうしてなのか分からなかった。

あの人は言った。

女は悠久を編むのだと。

彼女の言うことは分からないことだらけだった。おそらくどんな賢者に聞いたところで一生、頭を悩ますことになるに違いない。

墓守は決して人では出来ないほど長い時間存在し、数多の賢者に出会ったけれど答えを見つけることが出来ていない。

なぜか『色なし』の近くには、そういう瞳のものが多いのだ。

墓守はセイラの瞳の中にエイナには無かったものを見つけた。

「おや、姫さん。術士に会ったね。それも魔女だ。印をつけられている」

「魔女？ 印？」

どこから説明が必要なのかと浮かんだ疑問を飲み込んで、ふむと唸る。

「闇読みのことを術士というのは知っているみたいだね。その中でも女は特別だよ。恐ろしくてとても強い。彼女たちのことを魔女というんだよ。狙いをつけられちゃ、ちょっとやそつとじゃ逃げ出せないよ。お姫さんの目の中には魔女の鎖が見えちまつてる。視線を合わせただろう」

「うん。……なにかまずいことが」

「まずいといえばまずいし、そうでもないと思えばそうでもない」

曖昧な言葉を吐くと墓守は再び唸った。

「セイの身になにか危険なことが？」

墓守はにひよと笑った。

王子様が他の人を心配している。

彼にとって何かを守るのは無関心が一番良いはずだった。ほんの少し前までは。

「魔女も昔に比べ弱くなった。すぐに姫さんをどうこう出来るほどの力はないさ。鎖の契約を結ぶとね姫さんの見たものを向こうも見

ることが出来るのさ。契約の度合いにもよるけどねえ、想いまで伝わっちまうこともある」

本来は怖ろしいものではないのだ。

鎖は絆。血の螺旋。

遠く離れた友に無事だと知らせるためのもの。

長い月日でその意味合いを失い、一部の者のみはその能力を失わなかったために忌避される。

「そつそれって拙いよね。お城の中も見えてるってことでしょ？」

自分たちは秘密の通路を歩いている。

この情報が漏れてしまつては一大事だ。蒼白となるセイラに比べ、墓守は大事だとは思っていない様子だった。

「そうさね。だけど、そんなに悪いものでは無さそうだが。時間が経てば消えてしまふよ」

「本当？ 大丈夫かな？」

「安心おし。それよりも姫さんの友人のことを心配するんだね。可哀想なぼつやを絞め殺しそうな勢いだよ」

「絞めころ……ぼつや？」

そんな物騒な友人をいつのまに持ったのだろう。

それに、ぼつやとは誰だろう。城の中にはセイラより年齢の低いものはそういない。

首を傾げるセイラと反対にジルフォードには心当たりがあつたようで、ちらりと墓守を見るとジルフォードの考えを肯定するように口

元がニイとつりあがった。

「……ハナ殿とケイト殿」

「あっ！」

「早く行つてやったらどうだい？　ぼつやにとつたら、とんだとばつちりだよ？」

秘密の通路を走る足音が二人分。

同じ速度で離れていく。

『ハナ！早まっちゃダメだ！』　そんな言葉が響くのはもう少し後のこと。

第四章：赤い月夜と蝙蝠16

淡く発光しているかのように闇に浮かび上がる数多の棺。

視界の悪い場所を危なげなく歩く影は、棺に刻まれた数字を逆に辿り始まりの場所にたどり着くと足を止めた。

一際大きな棺の表面には装飾文字で1と番号がふられ、太陽を啜えたカラスの紋章が刻まれている。

寄り添うように置かれている一回り小さな棺には雷が彫り込まれている。

それぞれの模様は初代王マルスと、その妻エイナを表している。

けれど、これは捜し求めていたものではない。

「今日はよくよく客の来る日だ。それにしても、お前さんよく来たねえ。」

いつの間にか傍らには己の腰ほどの身長しかない老人が立っていた。咄嗟に腰のナイフを抜き、臨戦態勢に入ったがその行為がさも可笑しいというように老人はヒョヒョと奇妙な声で笑う。

「姫さんの鎖を辿って来たんだねえ」

白濁した瞳がぐわりと大きくなった気がした。

ナイフを構えたまま、逃げの体勢に入りたがる右足を叱咤して老人を睨みつけたが、彼に変化はない。

「お前さん、ローダの棺を探しているんだろう？ 残念だが此処にはないよ。いや、言葉を変えたほうがよさそうだ。ローダの棺なんぞ、どこを探しても見つかりっこないよ」

仮面のように表情の変わらない女の眉がぴくりと動いた。

普段の彼女を知るものからすれば奇跡に近い僅かな変化に墓守は気にも留めていなかった。

「そんなわけが無い」

「そんなことを言っただけで無いものはないんだよ。お前さんが残りの人生をつぎ込んで探したところで見つかるまいよ」

「マルスの血筋から『色なし』が生まれるはずが無い」

墓は無いと言った墓守の声と同じほど女の声にも確固たる自信が伺えた。

そこまで知っているのか。

墓守はすんと鼻を鳴らしながら、体いっぱい空気を感じ込んだ。

「そうだね。マルスの血から『色なし』は生まれない。それにエイナは魔女だ。子はなせない。……おや、これは知らないようだね」

これは削られてしまった記憶。

国始めの英雄の妻はジキルドの魔女だった。

かつての魔女は不思議な舞と共に酩酊状態に入り、未来を垣間見ることを許された。

ただし、己の血を次世代に残すことは出来ない。

「確かに今の王たちはローダの血を引いているよ。マルスの後を継いだのはローダの子どもなんだからね」

墓守が2と刻まれた棺の角を杖で叩くと、一瞬だけ棺が光った。

「お前さんからは魔女のおいがする。タハルの匂いもする。その上、ユザか。どっちつかずの放れもの。身を滅ぼすよ?」

「お前には関係ない」

「そうさね。だけど一つだけ教えておいてやるよ。年長者の言葉に聞いていて損は無い。人の復讐の肩代わりをやっても誰も救われやしないよ。そのくせ、それは復讐ですらないのだから」

墓守はもし、女がナイフを振りかざしたらこの空間から弾き飛ばしてやろうかと思っていた。

魔女と同じく墓守も夢物語の住人になりつつある。

日増しに衰え、力を無くす。

けれど、この場所の支配者は墓守だ。

女をたたき出すのは容易いが、不気味に光っていた刃は音を立てることもなく鞘に収まった。

「ここにもう用はない」

他の棺には目もくれず、女はもときた道を引き返す。

「ローダはユザを愛していた。お前さん古代語は出来るかい? アリオスの意味を? 知らぬなら調べてみるといい」

返答はない。

足音さえも闇に紛れ、墓守だけが取り残された。

「ローダ」

久しぶりに口にした主の名前は、まだ耐え難いほどの哀しみを引き起こした。

「やあ、サキお帰り。用事はすんだの？」

新たに注文した品をばくつきながら、ヒイラギがひらりと手を振った。

ヒイラギとサキは仲間ではあるけれど、馴れ合いはしない。店までやってくるなんて珍しいと思いながらも、いつもの無表情からは何も読み取れはしなかった。

「ルルダーシエ様は帰ったようだな」

街に連れ出しただなんて報告してやしないのにサキには何でもお見通しだ。

「んゝ半べそかきながら帰っちゃったよ。サルーの話をしたら兄上がそんなことするはずが無いって言いかけてね。今日はお月様が赤

いから情緒不安定なのかな？」

赤い月は魔物の眼。

遙か上空から誰に災いを落とそうかと画策しているのだ。

その作り話を幼いルルダーシェに教えたのはヒイラギだけれど、彼は未だにそれを信じている。

そんなところは甘ったれのお馬鹿さんのままだ。

「ヒイラギ。アリオスの意味を知っているか？」

珍しいことがあるものだ。

サキがヒイラギに事実確認ではなく質問をしている。

「んん？ 古代語のお勉強？ うふふ。いいよ。ヒイラギ先生が教えてあげる」

ヒイラギは水の入ったグラスに指先を突っ込み、机の上に水の線を描き出す。

「アリオスは元々二つの単語だよ。『アリート』と『オズ』のね。『アリート』が約束っていう意味でしょ。『オズ』は土地とか場所って訳すよ。つまりアリオスは約束の土地っていう意味だよ」

「約束の地」

「そう。タハルは『タ』がたくさんで、『ハル』が命で、多くの命っていう意味。今の荒涼とした土地からは考えられないけどね。ルルダーシェ様が言うには、もっと緑が多かったはずだって言うけど……点在するオアシスは全部繋がって一つ一つの川だったとか。本当かなあ？ ねえ、聞いている？ ねえ？ サキ？ エスタニアはい

いの？ ジキルドは？」

瞬きさえしない目は消えていく文字を食い入るように見つめていた。せつかく教えてあげているというのに、もう少し反応ぐらい返したらどうなのだと怒り出すヒイラギにサキはもう一つ質問をした。

「ユザは？」

「もう。ユザはそのまんま『ユザ』で力っていう意味だよ。中には畏れと訳す人もいるけどね。それにしても、やっとな古代語に興味もってくれたの？ いい加減面倒くさいんだよねえ。あの長〜い文章を訳していくの。早く覚えて変わってくれと嬉しいんだけど？」

約束の地。

「ん〜地名を足がかりにするのはいい考えかもしれないよ？ カンタスは兄弟って言う意味だし。……都に兄弟か〜ちよつと変わってるね」

兄弟、約束の地。

あの老人は何を伝えたかったのか、頭の隅を過ぎる影はあまりにぼんやりとしていて掴みどころがない。

「あつ知ってる？ 裏街の奥のねエイナの塔がある辺りのことをユザって呼ぶらしいよ」

サキの瞳には未来は映らない。

過去を覗くことも叶わない。

ヒイラギの言葉にどれほどの意味があるのかも分からないままだ。

第四章：赤い月夜と蝙蝠17

高らかに響く竜琴の音。

甲高く眩暈を起こしそうな異国の旋律は、エスタニアの上流階級には下賤だと罵られ、上層街では聞かれることはない。

ましてや、ここはエスタニアの白バラと呼ばれた城だ。

竜琴の存在さえないはずだった。

けれど、稀代の彫刻家、アルシニオンのレリーフに彩られた豪華な扉の向こうからは確かにその旋律が聞こえてきた。

ユリザは、相容れない異国の文化を切って捨てるつもりは無い。たとえそれがジキルドのもんでも。

けれど、扉の向こうの狂宴を思って小さく息を吐いた。

どうして、あの子だけはこうも馬鹿なのかしら

「入りますよ」

扉を開くと、むっと甘い酒の匂いが襲ってきた。

部屋の中央には十人ほどが泳ぐ円形の池があり、匂いの発生源はそこだった。

頬をばら色に染めた娘たちが、ボトルから乳白色の液体を注いでいる。

ボトルに描かれている酒の神ロツトの杯は、その酒が王族御用達の最高級の酒であることを物語っていた。

池の横では露出の多い踊り子が竜琴の音にあわせて身をくねらせている。

「やあ、ユリザねえ」

部屋の前方の一段高くなつた場所に設けられた椅子に腰をかけた青年が、右手をあげた。

肘掛に彫られたレリーフもアルシニオンの作で、子どもの握りこぶしほどもある大きな玉がはめ込まれている。エスタニアで最も豪華な椅子といえ、このイサリの椅子だ。

その名を戴いた青年は、シバ・リユーデリスク「イサリ・エスタニア」。

イサリは特別な名だ。

彼は運命の輪を持つ刻の王。エスタニア神話で唯一神々の仲間入りを果たした人間なのだから。

その名を冠したシバは期待を背負ったエスタニアの第一王子でありながら、エスタニア王家最大の頭痛の種でもある。

乙女さえ嫉妬する艶やかな黒髪に、アルシニオンが彫り上げたのではないかと言われるほど均整のとれた体つき、いつも気だるげな表情が素敵だともてはやされてはいるが、ある悲しい前提が付く。

「ただ椅子に座っていれば」と。

シバは、ある画家に言わしめた「彼は最も額縁が似合う王になる」と。

それは額縁の中のみならば、すばらしい王だということなのかと論争を巻き起こしたが決着は付いていない。

そんな意味不明な言葉を吐いた当人は赤い顔をして床に伸びていた。

「見てくれ！ 本で読んだ酒の池を作ってみた。面白そうだったからな」

その割にはシバの顔は楽しいそうには見えなかった。

それどころか、池の中で笑い続ける若者たちを理解しがたいとばかりに眉を吊り上げた。

「そう。期待通り楽しかったのかしら」

「いいや。臭いし、べたつくし、いいとこなしだね。その前に俺は酒があまり好きではないらしい」

耳を突く笑い声が起こる。

こんな無駄なことに一体いくら継ぎこまれたのだろう。考えるだけで怖ろしい。

シバの体にユリザの魂が入っていれば申し分ない王になるだろうと誰もが言うが、ユリザにしてみればいい迷惑だ。

「で？ 何の用？ もしかしてイベラたちの作戦のこと？」

「イベラたちの作戦？」

僅かに眉を顰めたユリザにシバはしまったと思いつつ、平素を変わらぬ笑みを浮かべたが、ユリザはずいと近づいた。

シバが組んだ指の親指を回すのは隠し事があるときのサインだ。

「どうということなのかしら。説明してもらいましょう」

「ああ、いや……勝手に話すのもなあ」

あの双子は血の繋がった兄でも扱いが難しい。

彼女たちの意向に沿わない行動をしたときの反応を思い出してシバは身を震わせた。

「もう水牢には入りたくもないし」

「あら、肺を満たすのは海水がいいかしら。それともお酒？」

切れ長の瞳が意味ありげに床に出来た池をちろりとみた。

シバは好きな果汁で池を作ればよかったと今更ながらに後悔をした。どうせ沈むなら好きなもののほうが良いに決まっている。どちらにしても苦しいに違いないけれど。

炎が灯る女神の瞳。たかが人間などが敵うはずがないのだ。

哀れな人間は、ほんの少しでも苦痛が後に来るように女神が望むままに口を開いた。

後の災いは二人分だということをすっかり失念していたのだ。

第五章：さよならの代償

窓から差し込む青い光に照らされた部屋には安らかな寝息と暖炉でばちりと爆ぜる薪の音しかしなかった。

炎の上にすえられた鍋からは微かに湯気が立ち上っていた。

朝の匂いがした。

いつからだろうか。

何もかもを洗い流したように澄ましきったこの空気が嫌ではなくなつたのは。

朝は嫌いだった。

空を割って太陽が世界を白々と浮かび上がらせると、他の人とは外れた容姿を覆い隠し、闇と一体化していた安堵感が消え急速に心細さに苛まれる。

厚いカーテンをひいた部屋に閉じこもっても同じこと。

太陽は容赦なく全てを浮き彫りにするのだ。

部屋中を物で満たし、自分だけの隠れ家を作り出し、嘘の闇で身を包んでつかの間の安心を手に入れる。太

陽が最後の足掻きとばかりに空を焦がすとやっと息をつくことができた。

暖かくなるといけない。

闇の領分が少なくなる。

夜明けは早まり、日暮れは遅い。

今、感じるのは暖かな朝の気配。

厭うていたはずのものなのに、逃げ出したい気持ちは起きなかった。それどころか、夜の終わる瞬間の静けさが心地よくさえ感じられた。

暖かさの理由の半分はジルフォードの肩にもたれかかる様にして眠

っているセイラだろう。

いつのまに眠りに落ちたのか昨夜の記憶は曖昧だったけれど、二人は大きな毛布を分け合うようにして眠っていた。

向かいにはハナとケイトの姿があった。

居ないのは部屋の主であるカナンだけだ。

朝の早いカナンはきつと庭の菜園に出かけたのだろう。

身じろぎしたのが悪かったのか、肩で支えていたセイラの体がずり下がってきた。

頭の位置をジルフォードの膝の上に決めるとまた規則正しく吐息を零す。

きゅっと丸めていた体を毛布でつつみなおしてやると体のこわばりが解け、表情が弛む。

額にかかる前髪を避けてやるとその行為が心地よいのか擦り寄るようにして近づいた。

頬を撫でれば、にひやりと笑う。

起きているのかと思えばそうではない。対応に困る。

離れてしまえばむずがる前の幼子のように眉が寄り、不満だと小さな声をあげる。

彷徨った指先はそれを言い訳にして再び頬を撫でる。

無性に名前を呼んで欲しい。もう少しこのままで。

セイラに関しては矛盾する想いをいつも持て余す。

なんて臆病なんだろう。

無表情なセイラを思い出すと心臓が音をたてて縮まった。

机を枕にして眠っているハナの目元は、この薄明かりの中で見えなだけでうつすらと赤い。

セイラのが心配で、セイラの受けた仕打ちが悔しくって泣いて怒って、そして安堵した証だ。

すりなした頬も痛々しいほど赤かった。

カナン特製の薬草を混ぜ込んだ液で冷やしたため腫れは引いているだろう。

セイラの下唇にはぐつと噛んだであろう痕があった。

それをつけさせたのは自分だ。

回避できたはずだった。

少なくとも二度目を招かないためにどうすべきかは分かっている。その覚悟はもう出来た。

ひやりとした空気が頬の上を流れた。

ドアが開いて、かごいっぱいに野菜を詰め込んだカナンが顔をのぞかせる。

朝露を纏ってつやつやと輝く野菜たちはカナンの菜園で育ったものだ。

カナンが動くシルトの仄かな香りがした。

「ああ、ジン様。おはようございます。よく眠れましたか」

「おはよう。うん。大丈夫」

カナンはくすりと笑う。

シルフォードが人前で無防備な寝顔を晒すことはまず無い。

慣れているカナンの前では浅い眠りに落ちることはあるけれど、いつも神経をとがらせていて小さな物音で起きてしまう。

今朝のように部屋の出入りをしても気づかぬことは初めてだった。この良き日にシルフォードに訪れた安らぎに涙腺が弛む。

それを与えた少女に感謝を。

「ユーズ・タラーク・リュウシェン。ジン様」

それは喜びを分け合う言葉。
命の芽吹きに言祝ぎを。

『アナタの幸せを願う』

アリオスに生まれた全てのものへ贈られる言葉。

「……………ユーズ・タラーク・リュウシェン。カナン」

第五章：さよならの代償2

小突かれ倒れこんだ床は少しばかり冷たく、痛みが過ぎ去った後は心地よくすらあった。

けれど、すぐに新たな痛みが襲い掛かってくるなど考えるまでもなく体が知っていて、無意識のうちに痛みを逃がそうと体を小さく折りたたむ。

いつものように瞼をきつくつむり、奥歯を噛み締める。

奴らは手を抜いているものの相手が自分より随分幼いということは綺麗さっぱりと忘れているのだ。

立ち上がってやり返すのは得策じゃない。

痛みを与えられる時間が長くなるだけだ。

右手に痛みが走った後、ルルダーシエは反射的に手を払いのけた。

右手を踏みつけていた少年は無様にしりもちを着き、獣のような奇妙な悲鳴を上げた。

「お前っ！」

怒気で赤く変じた少年の顔には羞恥も混じっていたが、ルルダーシエの怒気に比べれば可愛いものだった。

少年は手の甲に彫られたイレズミを踏んだのだ。

紋章は己の証明。一族の歴史。全てをひっくりくるめた誇り。それを足蹴にされた。

飛び掛って頭突きをした。

ごっんという鈍い音がして頭の中にキンとした痛みが駆け巡ったが、ルルダーシエは止まらなかった。

呻いている少年めがけて拳を突き上げる。

むちゃくちゃに振り回すと次第に少年の呻きには涙が混じる。

呆然と見ていた少年の仲間たちが、やっと正気づきルルダーシエを

後ろから羽交い絞めにしようとしたが、黒い瞳に射すくめられて逃げ去った。

もうやめてくれと顔を覆う少年の手の甲のイレズミ。

同じように踏みつけてやりたかった。

爪先を突きたてて削り取ってやりたかった。

ルルダーシェは手を振りあげて、やめた。

憎らしいのはこの少年だ。

彼らの一族を貶したいわけではない。

激情のままに彼らの一族を汚したら、ひどく惨めな気分になるのは自分だと幼いながらもルルダーシェには分かっていた。

少年はきつと悪夢を見るだろう。

他の一族を貶めることがどれほど卑劣で怖ろしいことが生まれたときから叩き込まれているのだから。

ルルダーシェは王の血を引いている。つた草の紋章は王家の印。

今宵の夢はひどく怖ろしいだろう。それで十分だ。

ぱちぱちぱち

聞こえてきた拍手に視線を巡らせた。

「ルルドよくやった！」

灼熱の太陽を背にした人影は光の世界に突然生じた災いのように黒かった。

闇の色を纏った人影は誰だか語らないが、ここでルルダーシェのことをルルドと呼ぶものはナジュールだけだ。

とんと一つ跳躍して同じ地面に足を落とせば、まごうことなくナジュールの姿があった。

闇色は髪と瞳に集約され、色彩を得た肌は褐色に輝いた。

「なじゅー……」

少年の言葉は最後まで吐き出されることは無かった。滑らかな乳白色の刃が首元に迫る。

切っ先が肌に触れ、ひゅっとか細い息が漏れた。

その刃の切れ味はこの国の誰もが知っている。

一人で獣を狩ったとき、この国ではやっと一人前だと認められる。

一の王子であるナジュールの狩りは早かった。

十歳に成る前には見事に群れの頭であるルーガを仕留め、今握っている刃を作った。

この刃でつい先日、ルーガよりさらに大きく凶暴な獣を狩ったばかりだ。

「お前らが父親の命令で勝手に私にまわりつくのは構わない。尾っぽを振られたくらいでお前たちにやるものもないしな。だが選択を間違えたな」

切っ先は少年の甲に近づいた。

恐怖で小さな体がかたがたを震えた。

「与えられたものと同等を返さなければならぬ。サクヤに厳しく教わった。そうだろう？」

切っ先が滑った。

イレズミを分断するように赤い線が走った。

盛り上がった赤が甲を伝って乾いた砂にこくりと呑みこまれた。

いつもは夜明け前には目が覚めるのに、ルルダーシェが目覚めた時には太陽はもう姿を現していた。

部屋にたどり着いたままの姿で眠ってしまったので寝台の上には頭の被り物が解けて色鮮やかな川を描いている。

癖のない黒髪がその上を這う。

早く起きて身を整えなければ、そう思うのに起き上がるのも億劫で布地を巻き込みながらごろりと転がると、石鹸の泡のようにふわふわと全身を包んでしまふ寝具がいけないのだと言い訳してみたことを考えながら唸った。

子供のころの夢を見るだなんて。

きつと昨夜、サルーのことをナジュールに尋ねることが出来なかったせいだ。

門をくぐるそのときまで、「何を馬鹿なことを言っているのだ」とヒイラギの作り話を笑ってくれると思っていた。

けれど赤い月を見上げて思ったのだ。

「当たり前だろう？」そう笑うナジュールの姿も容易に想像出来ると。

耳を澄ましても隣の部屋からは物音一つしない。
ナジュールにどう接すればいいのか。

考えあぐねた答えは結局見つからなかった。

第五章：さよならの代償3

優しい夢に揺らされてセイラはゆっくり瞼を開けた。

暖かくて心地よい。

頬をすべるのはジルフォード指先だ。

その気持ちよさに瞼がとろりと落ちてくる。

けれど、眠ってしまうのはもったいない。

もう少し。あと、ほんの少しだけ。

夢と現実が交差した曖昧な視界の中でジルフォードが笑う。

淡い。でも、ちゃんとした笑み。

夢と現実どちらが幸福だろう。

「セイ」

選ぶべくもない。

幻は名を呼んではくれない。頬を撫でる指先に熱は無い。見つめる瞳の色はきつと嘘つこだ。

親指が唇をなぞる。なんだか名前を呼んで欲しいと言われた気がした。

「ジン。おはよ」

「とつくに朝ですわよ。セイラ様」

「あつハナ。おはよう」

「はい、おはようございます」

いつのまにジルフォードの膝を枕にして眠ってしまったのだろう。ハナもカナンの部屋も逆さにみえる。

もそもそと起き上げればカナンは朝食を用意し終わったところで、ケイトが申し訳なさ方に頭をかいていた。

起き抜けのぼうとしたセイラの前にカップいっぱいのお茶が運ばれてきた。

「何とか無事に年齢を重ねることができそうです」

そう言いながら笑うケイトの頬には影があった。

無視から始まり、怒鳴られ詰られ、溢れたお茶をかけられ、泣かれたかと思えば、いつのまにかマントを引っ張られていて危うくあの世に旅立ってしまったそうだった昨夜の出来事を思い出せば笑い声も乾いていく。

せめてもの救いは、そんな惨事を引き起こしたハナが少しばかり悪かったと思って余分にケイトの皿に菓子盛ってくれたことだろうか。

セイラが帰って来たことによってお役御免となったケイトだったが、なんだか逃げ出す機会を失って明け方近くまで、お説教を聞く羽目になった。

ケイトとセイラの元気を吸い取ったハナは澁刺として元気だ。

「まったく、いつまで根に持っているのですか？ そんな器の小ささでは出世なんて出来ませんわよ！」

「数時間ぐらい根に持たせてくださいよ」

あの酷い出来事はほんの数時間前のことだ。

固い壁に寄りかかって、少しばかりうつらうつらと夢の世界に片足

を引っ掛けたぐらいでは忘れ去ることは出来ない。

苦笑を浮かべるカナンが入れてくれた濃い目のお茶が有難い。

一口飲めば体が軽くなる。頭がすっきりしてくれば昨夜の記憶は鮮明に甦り、よかったのかは微妙なところだけだ。

「んん〜？ ケイトって今日がお誕生日なの？」

引き金となったセイラも一睡してけろりとしている。

お茶を冷ましながら首を傾げた。

「お誕生日といえますか……今日はトワルなので」

「トワル？」

どうやらエスタニア生まれの二人にはなじみの無い言葉のようだ。助けを求めるようにカナンに視線を向けると、カナンはにっこりと微笑み説明役を買って出た。

「エスタニアでは、季節の四女神のお祭りで、生まれた季節ごとに年をとるのでしょう？」

「そうですね。セイラ様はハナメリーの第一月生まれですから、春雷祭で年をとりますもの」

エスタニアではハナメリーの第一月、第二月、第三月が春とされている。

トウーラ、フープ、ユノーもそれぞれ三月あり、十二月で一年が巡る。それぞれの第一月には各地で盛大な祭りが行われ、そこで皆、年をとる。

アリオスも十二月で一年となるがエスタニアほど季節ははっきりと

せず、夏はほんの数週間だ。

「アリオスではトウルと呼ばれる日、つまりシルトの祭りの中の日に一斉に年をとるのですよ」

「へえーじゃあカナンも今日がお誕生日？」

「ええ正確に言うならば今日、明日のうちですが」

「ジンも？」

「そう」

「ハナさん」

「何でしょう？」

二人はこそそと額を合わせた。

どうしたのでしょうかというケイトの問いにカナンはくすりと笑う。彼女たちの心情は手に取るようにわかる。

「これは、贈り物が必要だとは思いませんか？」

「ええ。思いますとも」

二人はにんまりと笑った。

第五章：さよならの代償4

思い立ったら即実行の二人だが、カナン手製の朝食の誘惑に勝てるわけも無く食後のお茶もたっぷり飲んでから飛ぶような勢いで書庫を後にした。

アリオスではトワルに贈り物をする習慣が無いため、二人の急ぎように頭をひねっていたケイトも仕事があると何度も朝食の礼を言いながら帰っていった。

今、部屋にはカナン一人だ。

少し前にジルフォードも何処へ行くとも告げずにふらりと姿を消した。

何処へ行くのかは見当がついていた。決断を下したのだ。

ジルフォードと幾度、共にトワルを過ごしただろう。

初めて会ったのは、カナンの腰ほどの背も無い幼い子どもだった。瞳を隠すようにいつも下を向いていたから更に小さく見えたものだ。その子どもが今やカナンの背を抜き、自分の道を歩もうとしている。こぼりと湯が沸いた。

もう少ししたら、控えめなノックが部屋の中に響くだろう。

互いに老いた身体を語り、その年月を愛おしむための潤滑油としてこの日のために取っておいた最高の茶葉をふんだんに使ってやろう。勿論、取り寄せた時の代金は相手持ちだけれど。

全ての準備が整い、さあ後は客人が来るだけという段になると、思ったとおり控えめに扉が鳴った。

ジルフォードは前を見据えた。

午前中の透明な光を受けて輝く廊下が長く続いている。

今までならば人通りが無い時を狙って、月の明りを頼りに歩いてい

た廊下。

今でこそ人の姿は見えないけれど、そこ此処で人の気配がして、忙しげに歩き回っている。

ほんの少し歩いていけば、誰かに出会うだろう。

何もかも見ないふり聞こえないふり、月夜に現れる夢幻そのもののように誰にも姿をみせないふりはもう止めた。

正面から向き合えばぎくりと体を軋ませるのは相手のほうで、慌てて視線を逸らしていく。

怖ろしいのだろう。気味が悪いのだろう。

ジルフォード自身も鏡を覗くたびに違う瞳の色が怖ろしかった。

何度もたった一つの色を留めようと努力しては失敗し、絶望した。

本当に魔物のように血を吹いたように真っ赤な瞳ならいいのにと何度思ったか。

その色がどれほど禍々しくとも、ただ一色ならば憂いは半分にもならない。

いつそのこと無ければよかった。

優しい孤独を手に入れるために突いてしまおうか。きっと自ら作り出した暗闇は、シーツに包まって震えて過ぐす夜よりは暖かい。

その誘惑は常にジルフォードに付きまとった。

今でも、夜中にはつと目が覚めた時などは、確かな形となってジルフォードの横に居座った。

部屋の闇に目が慣れてしまう前に、ぎゅっと瞼を閉じれば脳裏に輝くものが走る。

陽光を弾く髪の色。

セイの色。それ以外に思いつく名はなかった。

どうしてセイラは一つの色にたくさんのおくってくれるのだろう。

セイラの付ける色の名は優しくほろほろと心に沁みた。

干からびた瞳を暖かな水がとぷりと沈めたのは一度や二度ではない。

思考を中断したのは重い靴音だった。

「よう、ジルフォード。珍しいな。お前がこちら辺を歩いているなんて」

ここは王の執務室が近い。

ジルフォードに話しかけるジョゼを見かけた幾人かが眉を顰めて通り過ぎる。

立ち話は得策ではない。会釈だけですませようと思ったジルフォードの心情を呼んだように逞しい腕がジルフォードの腕を掴む。

「あんまり気にするんじゃないよ。貴族連中に俺の評判が悪いのは元々だ」

いくら武の国だと言えども、国が安定してきてからは戦果よりも政の中で力を伸ばしてきた貴族も多い。

そんな貴族の中には、昔のアリオスの体質そのものの軍部は力だけの能無しだと思われる節がある。

特にジョゼは貴族上がりではないためにその風当たりは同じ將軍という地位にあるキースよりもずっと強い。

軍部改革と称して、貴族の子息だけで両軍を編成しなおそうという動きもあったそうだが、「これだから頭でっかちの坊ちゃん方は」と失笑と共に立ち消えたそうだ。

もしも実現していたら、アリオスは縮小していったに違いない。

その他もろもろもあって、ジョゼ・アイベリーと一部の貴族とは仲が悪いのだ。

事あるごとにジョゼを將軍から引きずり下ろそうと画策しているらしいが一向に成功しない。

「あいつらが何を言おうとやすやす月影から降りるなんて言えねんだよ。俺を選んだのは月影なんだからな」

ジヨゼの腰の漆黒の剣。

月影、陽炎両軍の将軍を選ぶのは貴族でも、王でもない。

軍の象徴でもある剣そのものが選ぶのだ。扱えなければ将軍には選ばれない。

ふさわしくないものが持つと、その刃によって命を落とすという噂もある。

そして、ふさわしい主を見つけたとき、共鳴したようにキンと高い声で鳴くという。

ジヨゼが月影を受け取ったのは怒号に悲鳴、大地が轟く音に金属がぶつかる音が渦巻いていた戦場だったため、そんな音がしたかどうかは定かではない。

けれど、手にした瞬間に思ったのだ。これは己のものと。

「俺より月影に気に入られるやつがいたら、躊躇なく譲ってやる。だがな、それまでは誰がなんと言おうが俺が月影の持ち主だ。お前が気にすることじゃない」

ジヨゼは細い背中を力強く叩く。

自分の身の振り方は心得ている。やっと殻を抜け出した雛に心配してもらわなければならないほど弱いつもりはない。

「お前、もっと欲張れよ。全部、叶いやしないだろうが、願うのは悪いことじゃない」

ジルフォードが他人のことばかり思って身を引く必要なんて無いのだ。

俯いたままのジルフォードのちょっと強く叩きすぎたかと危惧して

いると、紫色の瞳がジヨゼを見た。

「……たぶん私はジヨゼが思っているより欲張りだ」

正確には欲張りになったというほうが正しい。

以前のジルフォードの願いは、サンディアが生きていることだけだった。

ほんの少し前までは、その願いにカナンが用意した空間が加わっただけ。

それだけで十分だと思っていた。

居心地の良い書庫は、願いすぎだとさえ思っていた。けれど、雪の降る頃から願いはどんどん増えていった。

願うばかりではいけないことも分かっている。

「ここに居て良いと胸の張れるように……努力してみようと思う」

にっとジヨゼの口の端があがる。

「頑張れ」と同じところをはたかれてじんと痛んだ。

ジヨゼと分かれた場所から執務室までは目と鼻の先だ。

ドアの前には数人の貴族が陣取っていた。

見覚えのある兄の取り巻きたちだ。

何処で会ったことがあるのか鮮明に思い出すことが出来るというのに、彼らの名前も役職も全く分からない。

自分の無関心さを改めて知った。

「王に何用です？」

一歩踏み出して問うた鷲鼻の男は、集団の中でいつも真っ先に行動を起す。

ルーファと初めて対面といっても、偶然廊下で出会ってしまったと

きも、誰よりも早く進み出てジルフォードの視界を遮った男だ。今も、扉の前に立ちふさがって執務室に近づけてなるものかと息巻いている。

だが今日は弟としてではなくアリオスの一臣下として扉を叩く。初めてのことだ。

「ジルフォード・アリオスからルーフア王に謁見を申し入れる」

相手はジルフォードを執務室にいれるものと口角から泡を飛ばす。

「ルーフア王は多忙だ。お分かりでしょう？」

「長くはかからない。時間が空くまで待たせてもらいます」

「そんな時間はないと言っているのです！」

「お前たち私を過労死させたいのか？」

「るっルーフア王」

次第に声が大きくなれば、執務室の中にまで聞こえるのは当然のこと。

ルーフアはジルフォードを手招きした。

「私が呼んだのだ。しばらく下がっていてくれ」

「しかし！」

更に言い募る男に満面の笑みを浮かべると、男はしぶしぶ一步下がった。

あの笑みの時は何を言っても無駄なことを知っているのだ。
王に何かあれば、シルフォードを八つ裂きにすると言わんばかりの
厳しい顔の前でびしゃりと扉は閉められた。

「よく来たな。さあ、こちらへおいで」

ルーファが体を伸し、ソファを指し示す。朝から凝り固まった身体
がポキリと音をたてる。

時折、体を動かしてはいるのだが、机仕事ばかりだと体がなまって
くる。

「兄上は仕事のし過ぎです」

「なに、今日は逃げ出すタイミングを見失っただけだよ。外に怖い
連中が張り付いていただろう？ まあ、おかげでお前に会えたけれ
どね。ああ、そうだ。注文の品が出来ているよ」

ルーファが棚に取り出したのは小ぶりの瑠璃色の箱だった。
開けてみれば銀の指輪が入っている。

「セイラ殿は月の女神だからね。マルスと月の紋章にしてみたよ」

この指輪は王族であるという証であり、サインをする時に使うもの
だ。

ルーファの指にもはまっているものは歴代の王に受け継がれている
ものだ。王族それぞれに違う意匠が使われている。

「今日はどうした？ これが目的ではないだろう」

まだ出来上がったとは告げていない。

先ほど届いたばかりで、トワルに間に合ったことにルーファも胸を撫で下ろしていたところだ。

「これを」

手渡されたものをみて驚いた。

そこに連ねられた二人分の名前。

「……これは」

最後に押されたのはジルフォードの印だ。

この間インクをつけた痕さえなかった印章が頭に浮んだ。

これが意味するのはジルフォードが始めてアリオスの王子として決断を下したということだ。

第五章：さよならの代償5

通された部屋の豪華なこと。

ここにある全ての装飾品を持って帰ればどれほどのタハルの民の腹を満たすことが出来るだろう。

そんなことを思いながら、ナジュールは歩を進めた。

朝食をとりながらお話でもと声をかけられたのは、昨日の広間でだ。丁度、セイラたちの一悶着の後あたりのこと。

そのときは、まさか城から出るようになるうとは思っていなかった。今、ナジュールはタナトスの街の貴族の屋敷が立ち並ぶ一画にあるリグンブル家にいるのだ。

薦められた椅子と相手の間にあるテーブルは不必要なほど長く互いを隔てている。

これならば腹を割った話し合いなど出来ないだろうに。

いや、そんな話をする相手ではないからこの装飾なのか。

砂漠の変化を見分ける優れた目をもつタハルの民でなければ相手の眉の僅かな変化、口の端の角度などを逐一気づくことは出来ないだろう。

現に先に席についていた二人はナジュールの辟易した表情には気づいていない。

見たことのある顔だがどうもはつきりしない。

エリオだとかマリオなんて名前だったような気がするのだが、要らぬ災いの種を背負い込むことは無い。軽く会釈するのに留めた。

「さて揃いましたかな」

最後に入ってきた男は口元を僅かにほころばせた。

少しばかり彼の印象を柔らかくすることに成功したが元より厳しさ

を湛えた瞳の角が取れることは無い。

レイドス・リグンブル。前アリオス国王の右腕だと称された男。両国間で小競り合いが耐えない日々にはタハルの戦士も彼には手痛い教訓を与えられた。

ロードの名と並んでタハルでは悪名を轟かせているが、ゆつたりとした普段着で現れた男をナジュールは嫌いではなかった。全身着飾ってこられると此方も構えてしまっし、目も痛い。

「朝から申し訳ありませんね。招きに応じてくれて嬉しく思いますよ」

「いえ、そちらもご多忙でしょう」

お茶を一口飲めばふわりと立ち上る花の香り。

申し分なくおいしいのだが、脳裏に甦ったのはカナンの淹れたお茶のことだった。

自然と口角が上がる。どれほど贅沢な部屋を作ろうともあの空間には敵うまい。笑うと全身から力が抜けた。

「先日、わが父であり、タハルの王であつたウォーダンが亡くなりました」

レイドスは口元まで運んだカップをそのまま下ろした。

ウォーダン王の死は絶対に認めないものだと思っていた。

その事実が両国にもたらす影響を考えれば、少なくとも祭りが終わる使者一同が無事に帰るまでは黙っている方が得策だ。

「それはお気の毒に」

ウォーダンはまだ若かった。

自身の親を亡くし、長年仕えていた王を亡くした経験を持つレイドスの言葉に嘘は無かった。

ナジュールは曖昧に頷き己の腕に視線を落とした。

床についたウォーダンの腕はナジュールの腕の半分ほどの太さしかなかった。いや最期の時には3分の一ほどの細さだったのかもしれない。

日増しにやせ細りひどく苦しそうな呼吸をするようになった。

タハルを出る時に、あの姿をしばらく見なくてすむと安堵感があったのを覚えている。

星が落ちて訃報を知った時、リュオウはウォーダンに慈悲を与えたのだと思った。

無駄な感傷は捨て去ろう。ここは敵の真っ只中、味方は居らず、隠れる場所も無い。

「次の王は貴方でしょうか。ナジュール殿？」

「さて、どうでしょう」

二人の王子の力は拮抗している。

ナジュールは自身の力で支持者を集め、ルルダーシェには強力な母親の一族がついている。

幼い王子を傀儡にすれば自分たちの一族に有利な政をと思う貴族たちはルルダーシェの下へと集まりつつあるという話も聞いている。弟の忌々しげに歪んだ顔が脳裏に浮ぶ。

「我々は、あなたに全面的に協力をしてもいいと思っています」

「見返りは何をお望みで？ サンディア殿の復権でしたか？」

「いいえ、あの件は本人に断られてしまいましたので。今回お願いしたいのはウォーダン王と結んだ同盟の継続を」

『タハル国王ウォーダンの命がある限りローラ山脈より北をタハル、南をアリオスと定めその境界を軍事力によって侵すことのないよう、ここに記す』

「あの同盟を？ タハルにとってはあまり良い条件とは言えないが」

ローラ山脈を越えぬことには、タハルはエスタニアにもジキルドにも手を出すことができない。

天然の檻の中だ。

元々、食糧支援の見返りに結んだ短期の同盟はタハルにとってはあまり面白みのないものだった。

「人材支援もお付けしましょう」

「……なぜ私を？」

アリオスにとってみれば、どちらの王子も条件は同じだ。
たまたま近くにいたナジジュールに声をかけたとは思えない。

「貴方はどうやらアリオスを嫌ってはいないようですね。その原因はセイラ様でしょうか」

「ほう。なぜそう思うのです？」

「貴方の耳飾。どこにいったのでしょうかね」

ナジジュールがセイラに贈ったことを知っていながらほくそ笑んだ。

「貴方が望むならば、あの娘をタハルにやってもいい。そうすればタハルはエスタニアとも繋がりが出来るでしょう？」

「は？」

人好きのする笑みで武装していたナジュールも怪訝な声を抑えることは出来なかった。ついでに目を丸くした。言葉を反芻しようにもどこかに引っかかって上手く飲み込めない。

「わが国が貰い受けるはずの王女の候補は二人だった。その片方がセイラ様。もう一人は第7王女様でしたかな。なぜ彼女が選ばれたのかは単純明解、文句を言う後継者がいないから。けれど、エスタニアは二人とも差し出してもよいと言っていましたからね。かの国もタハルと友好的になりたいと思っているでしょうね」

「話が読めないな。それならばタハルに嫁ぐのは別の王女では」

「真に王女としてそだてられた女性がタハルで暮らしていけると？」

無理に決まっている。

互いに飲み込んだ言葉はきつと同じ言葉だ。

「アリオスにもセイラ殿が必要でしょう」

「セイラ王女はわが国での役目を果たしたのですよ。彼女は思った以上に働いてくれました」

アリオスの王子とエスタニアの王女の婚姻は、表面上、両国が友好

関係にあることにしてくれれば良かったのだ。

今や、長く引きずっていた王家の闇を民衆の前にさらしたばかりか、受け入れられさえしている。

それで十分だ。いや、それ以上かき回されては堪らない。

「本当にそう思っているのならば、私は貴方を過大評価しすぎていたようだ」

射る様な視線を送られてもレイドスには痛くも痒くもない。

薄く笑みを浮かべるとお茶のお代わりを薦めた。

ナジュールは朝食を終えるまで、レイドスの食えない笑みを崩すことは出来なかった。

「城までお送りいたします」

屋敷から出てきたナジュールに向かって馬車の傍らで頭を下げたのは、まだ若いであろう女性だった。

見た目に反して声はひび割れ落ち込んでいた。

「女か。それにタハルの生まれだな」

浅黒く焼けた女の手の甲は覆われていたが、動いた拍子にイレズミの跡が見えた。

タハルを嫌って出て行ったものは初めに、有無を言わず入れられた刺青を消すというけれど抉れた傷跡は尚強くタハルの証を刻み付ける。

あれは誇り以上に枷だ。

タハルの地に、己の一族に、名に繋ぎとめるための鎖に等しい。かつて女を縛った一族の名は、引きつれた傷跡からは知ることはいなかった。

「なぜ、タハルを捨てた」

「タハルが私たちを必要ないと判断したから。ただ一片の慈悲すら無しに」

女の瞳は暗く曇った。

世界を拒絶して、脳裏に浮ぶ世界へと閉じこもる。

「慈悲が無ければお前が生きることがおかしいな。タハルは小娘一人を生かすほど軟くは無い」

「生きていることが慈悲だとしても？」

女は鼻で笑う。

暗かった瞳には怒りを原料に嘲りが宿った。

「さあ無駄話は終わりです。タハルの王子様。はやくお乗りください」

女は背を向け、場所の扉を引いた。

狭苦しい馬車の中は息が詰まる。

「一人で帰れる」

「貴方はいつもそうでした。人のことなどお構いなし。ですが、容認できません。貴方を城へつれて帰るのが私の役目ですから」

まるでお前のことなど全て知っていると云わんばかりの口調にナジユールの眉が上がる。

チリツと米神に走る痛みは不快だ。

「命からがらタハルから去り、アリオスで飼われるか」

「何とでも」

もはや女の顔に怒りも嘲りもない。

己の世界に閉じこもった時のように無表情だ。

ほんの少しの我慢だと自分に言い聞かせて馬車の中へと入る。

一瞬香った、どこか懐かしい匂いは何だったのか誰も答えをくれそうにはなかった。

馬車が動き始めて少し経つと、重心が傾いだ。

目の奥に光が灯り、平衡感覚が掴めない。

車輪が音をたてるたび体が四方に飛び支えていることが出来ない。

「なん、だ」

「ご安心を。毒ではありませんから。元より貴方が毒に強いことは知っていますからね。お父上が倒れてからは他国の毒にも体を慣らしておられたのでしょうか？ それはね、王子様。狂いの香ですよ」

女の笑い声が遠くなる。

「狂いの……」

砂漠の獣を操る狂いの香。

「配合をほんの少し変えるだけで人間にも使えるのよ。王子様」

脳裏に煌く光も急速に迫ってきた暗闇に飲まれていく。
最後の一つが飲まれると同時に女の傷跡の正体を知った。

「セイオンか」

たった一言で消え去った獣使いの一族。
それを知ったところで鉛のように重くなる身体を自由にする術は無かった。

第五章：さよならの代償6

「贈り物を用意するのが良いのですけれど、一体何にするのかが問題ですわ」

「そうだね。何がいいかなあ」

定番のケーキもいいけれど、それでは普段やっていることとそう変わらないからつまらない。

それに厨房は客人の料理をつくるのにてんやわんやで、快くスピースを貸してくれるとは思えなかった。

「うーん」

せっかく贈るのならば今日か明日でなければ意味が半減してしまう。

あまり時間はなさそうだ。ここがジニスならばいいのに。玉の色合いと形を合わせて、たった一人への贈り物を作るのは難しくない。

「そうだ！ お守りはどうかな？ アリオスではどんなものがあるのか分からないけど」

「お守りですか」

「この前、ナジュール殿から貰ったのをジンがずーっと見てたから、欲しいのになって」

銀で作られた透かし彫りが施された球体に嗅ぎなれない異国の香り。

今もセイラの首にかかっているそれに視線を向けながらハナはふうと息を吐いた。

「欲しいわけではないと思いますわ」

「そうなの？　じゃあ珍しいからかなあ」

球体がセイラの手の中でころりと転がった。

「嫉妬ではないですか？」

果たしてジルフォードにその感情があるのかどうかはハナには分からない。

ハナの願望に近いものだが、あながち間違えでもないのではと思えた。

けれどセイラは怪訝な顔だ。

「えっ？　何に対して？　私だけもらっちゃったから？」

セイラのこの鈍感ぶりは何だろう。

ハナの脳裏には一人の男の顔が浮んだ。筋骨逞しい髭面の男。セイラの育ての父親を自負する鉦山の長。

彼が悪い虫など付かないように大切に育てたのだ。鉦山の皆は皆兄妹、家族として育ったからちよつとばかり危機感も薄い。

うふふ。恨みますわよ。ダン！

「違います！　他の方が贈ったものをセイラ様が身につけているからですわ」

「ええ？」

「私だって気に入りません。最近、セイラ様ったら他の方が選んだものばかり」

タハルの髪飾りにヒューロムの赤のドレス。

自分が一番似合うものを提供できるという想いがあるのに。見知らぬ一面を突きつけられてぐっと唇を噛むのもしばしば。

一番辛い時に一緒にいることさえ出来なかった。

さんざんケイトで発散したはずの鬱憤がまたもや体の奥から湧きあがる。

うらやましい。悔しい。哀しい。名前をつけるには複雑すぎる気持ち。

知らんふりするにも飲み下してしまうにも大きすぎる。

おどけて言うはずだったのに、つい拗ねた口調になってしまった。セイラの呆れ顔が眼に入って余計に口元が歪む。

「何年一緒にいると思ってるの？ ハナ以上に私の好みを理解してくれる人は母様しかないよ」

つまりこちらではハナが一番だということだ。

どんなに言ってみてもハナの表情は晴れない。それどころか口を引き結び押し黙ってしまった。

セイラが身に着けているものはセイラの身に馴染んでいるだろう。色も肌触りもセイラの好みどおりのはずだ。見た目の愛らしさにも胸を張れる。

けれど、最近ハナが用意したものといったらいかにセイラの好みに合いながらもアリオスの王弟夫人として相応しい格好になるかと考えたものだ。

どんなに外見を飾り立ててもセイラは傷ついた。

何の役にもたたなかった。

ほっと心を和ますことも、相手に立ち向かう勇気を与えることも出来なかった。

自分の仕事で負けたのだ。

「ハナ？」

「私、ダメダメですわ。私だけ何も出来ていないんですもの」

「ジンもねナジュール殿もそのままでもいいって言うてくれたの。でもね、そのままじゃダメなのは知っているの。だから頑張れって、やらなきゃダメだよってしてくれるハナが必要なんだよ」

頬が熱くなった。

ぐずぐずと泣いてしまいたい。

「甘やかして欲しくって叱っても欲しくって。我侭だよ。でもいいやって思ったの。ハナはずっと私の甘さを諫めてくれるでしょう？」

「勿論ですわ」

それ以外にどんな答えがあるというのだろう。
ぐずりと鼻をすするといやな考えは吹き飛ばす。

「さっきナジュール殿も言いましたよね？ どういうことですか？」

いつの間にそんな話をしたのだ。
セイラが弱っている時にあの不埒な男と一緒に居ただなんて到底

許せることではない。

「あゝ求婚された？ その時にね。そのままでもいいよって」

「はあ？ 求婚？ 何を考えているんですか。あの変態！」

威嚇する猫のように髪を逆立てたハナにセイラは冷や汗を垂らした。

このまま殴りこみにいきかねない気迫だ。

「あつあれはナジュール殿の冗談だと思うよ。ね、だから落ち着こ
う？」

「冗談で求婚などする馬鹿ならば、唯じゃおきません！」

逆効果。火に油。そんな言葉がぐるぐる巡る。

「それにセイラ様」

急にハナの顔から怒りが抜けて、真剣な目がセイラを捕らえた。

「求婚なんて軽々しく口に来ることではありませんわ。ナジュール殿を擁護する気持ちなんてこれっぽっちもありませんが、あの方
冗談でそんなことを言うようには見えません」

「うん？」

「だからセイラ様も真剣に答えを出すべきですの」

どんな答えだって構わない。

きっとナジジュールがそのままのセイラがいいと言ったのは本心だろう。

真綿でくるむように大切にしてどんな害からも遠ざけて、今のセイラのままでいさせてくれるだろう。

「ねえ、セイラ様。何もかも抜きで考えてみてください。アリオスもエスタニアも王女である立場ですよ」

「……うん？」

「今、幸せですか？」

「うん」

「それならいいのです。たとえ茨の道だってセイラ様が幸せだといふのなら私はついて行きますからね」

「茨は嫌だなあ。痛そうだもん。それより街の道を知っている案内人を見つけないきゃね」

落ち着いたハナにほっと一息ついたセイラは名案を思いついたと走り出す。

もつと頬を膨らませながらもハナもその後を追って走り出した。しばらくすると目当ての人物が見つかったようでセイラが声を上げた。

「クロエー」

前方にはいきなり呼び止められ困惑顔のクロエの姿があった。

話を聞いたクロエは二人を街へと案内した。
お守りをつくりたいというセイラの希望に沿う店に心当たりがあったのだ。

「まあ」

通りを馬車が走っていく。

庶民の生活には似合わないような大きな馬車だ。

祭りで混雑する通りにもやはり不釣り合いで迷惑顔が馬車をにらみ付けてはつと目を反らす。

「珍しいですね」

クロエの口から漏れた呟きを拾ってセイラは首を傾げた。

「何が珍しいのです？」

クロエのことを嫌っていたハナも昨夜、彼女がセイラを助けた話を聞いてからは態度を軟化させていた。

セイラのことさえ絡まなければクロエのことは、まるで自分のことのようによく分かる。

「あの馬車の紋様はリブングル家のものです。こんな街中を通らなくてもお屋敷がある辺りから専用の道があります」

戦になれば軍馬がかける。

大型の馬車が余裕ですれ違える大きな道だ。

祭りといえども警備上一般人が入ることは許されない貴族専用の

道。ほんの少し進むたびに立ち往生を強いられることなんてない。

「お祭り見学じゃないかな？」

「あんなに大きな馬車ですか？ 邪魔になるのは分かりきっているのに」

「……そうですね」

不思議顔の三人娘を置いて馬車は雑踏の中に紛れていった。

「まあ、貴族の方の考えることなんて分かりませんわ。時間がないのですからさっさと行きますよ」

クロエの意見に同意した二人は馬車のことなど忘れてクロエの後を追った。

案内されたのはうねうねと入り組んだ裏街の通りにある小さな店だった。

「うっわあ。綺麗」

店先には染物が所狭しとかけられている。

「これを作るのですか」

「いいえ。それは少し時間がかかりますから。こちらなんていかがかと思ひまして」

クロエが差し出したのは色とりどりの紐を編んでつくる飾りだった。手首や足首につけるらしい。

ちょっと頑張れば飾り帯にすることも出来る。

昔は戦地に旅立つ夫や恋人に編んで渡したものが今は装飾品として残っているのだという。

「クロエねえちゃん。いらっしやい」

店主は随分若かった。笑えばもつと幼さが際立った。

イリヤと名乗った彼もメイヤーの孤児院で育った一人だ。

「へえ贈り物。エスタニアにはそんな習慣があるんだ。うちの商品を選んでもらえるなんて嬉しいなあ。完成が明日になってもいいのなら染からやってみる？」

「いいの？」

「もちろん」

瞳を輝かせながら振り返ったセイラにハナは苦笑しながら頷いた。

「セイラ様のお好きなように」

王宮の一角で盛大にため息をついたものがいた。

せつかく美しく整えた爪も一晩でぼろぼろになってしまった。

イラついた時に爪を噛んでしまうのがキアの悪癖だ。

エスタニアのデナート発の流行色も不恰好な爪には似合わない。

どれもこれもみんなセイラのせいだ。思い出しただけでも腹が立つ。

どうにかこの鬱憤を晴らすことが出来ないだろうか。ひとしきり爪を噛むと指先にはじわりと赤が浮いた。

痛みに僅かに細めた視線の先に商人風の青年が立っていた。

ああ、とてもいいことを思いついた。

「ねえ、そのアナタ。頼みがあるのだけれど」

「なんでしょう？」

たくさんの色彩を纏った青年はにっこりと微笑んだ。

第五章：さよならの代償7

贈り物作りは順調に終わり色止めの作業をお願いしてセイラたちが城へと戻ってきたときには太陽が沈みかけていた。

明日の朝一に受け取りに行く手はずとなっている。

鼻歌交じりに意気揚々と街で仕入れたお菓子をお供に書庫への道のりを急ぐ。

「よかったね。素敵なものが出来て」

「そうですわね。本当によかった。クロエに感謝しなくてはいいけませんわ」

「クロエも来ればよかったのに」

書庫に誘ったのだが、クロエは仕事があるからと断ったのだ。

「セイラ様。うれしいからって話してしまっではいけませんよ！明日、渡すのですからね」

「分かってるよ。びっくりさせるんだからね」

そう言いながらも口元から言葉が飛び出してしまいそうだ。案の定、シルフォードの姿を見てしまえば口は自然に開く。

「ジン！ あのね、あのね」

ちろりと痛いハナの視線を受けて、慌てて口を押さえてもふると口角は上を向く。

ああ、言ってしまいたい。うずうずと言葉が喉元からでかかって
もどかしい。

けれど、明日まで我慢。

ぐっと思と共に言葉を飲み込んだセイラの様子にジルフォードは
首を傾げた。

「どうしたの？」

「ううん。明日まで内緒」

「そう」

セイラの行動の意味が分からないのは良くあることだ。

キラキラと光る瞳は嬉しくて仕方がないと語っているのだから良
いことなのだろう。

「明日には教えてくれるの？」

ジルフォードの問いにセイラはぱつと顔をほころばせた。

「うん！ 明日。お昼までにはね！」

「そう。楽しみにしてる」

セイラはぼかんと口を開けてしまった。

手で押さえていなくとも言葉は落ちてこない。

代わりに心臓が高く鳴った。

ジルフォードが浮かべているのはまぎれもなく笑みだ。

錯覚かと思ってしまうほど一瞬のもんでも、初雪のように消え入
りそうなほど淡くもない。

蜜の色の瞳がとけた。

「セイ？」

「……うん。楽しみにしておいて」

ハナもカナンもお茶の準備に忙しくて今の姿を目にしてはいない。嬉しさを共有したくって、けれども独り占めできたという不思議な気分。

分かるのは鼓動がうるさくって頬が熱いこと。これは……

「ハナ」

「何です？」

「私、病気かも」

「ええっ！ 寒かったのですか？ セイラ様。ああ、そう言えば若干、顔が赤いような……」

寝台を差し出すカナンに布団をつくねるハナ。

心配げに覗き込むジルフォードに心臓がまたはねる。

早く、早く明日になればいい。

ジルフォードに頭を撫でられながらセイラはぎゅっと瞳を閉じた。

やはり明日までは待てない。

後回しにすればするほど口に出すことが出来なくなる。

ルルドは意を決して部屋を出た。折りよくサクヤを見つけナジユールの居場所を尋ねれば珍しくサクヤは言葉を濁した。

「今朝、リブングル家に招待されたまま、まだお戻りではないのですよ」

「……そうか」

もう時刻だが話が弾んでいるのだろうか。

宙ぶらりんになってしまった決意をどうしよう。

「サクヤ！」

このままでは気持ち悪い。

「何でしょう?」

「サルーを知っているか?」

頭の中の記憶の箱の中を探るようにサクヤはしばし目を細め、ようやく求めた情報を見つけたようだ。

「セイオンの放蕩息子ですか。懐かしい名を聞きました」

「放蕩……息子？」

ルルドのサルー像からは最もかけ離れた言葉だ。

「ええ、遊ぶ金欲しさに一族の秘儀を他国に売り渡そうとした馬鹿息子ですよ」

「サルーはリュオウの廟を作っているのだろうか？　だが、一族は……」

サクヤの視線を受けてルルドの舌は凍りついた。
何か失敗をしでかした時の視線と同じだった。

「誰にどんな話を聞いたのか知りませんがサルーはとうの昔に死にましたよ」

「え？」

「セイオンは狂いの香の製法のおかげで栄えた一族です。その長の子のサルーは苦労知らずの浪費家で長がそれを諫めるために一切の施しをしなくなったのか事の発端です。告発のため未然に防ぐことができましたが、罪は大きい。廟を一人で作れと命じられたのは本当ですよ。だが、サルーは逃げ出した。行方をくらましそれっきり」

「それでは……」

「どうするべきかは一族に預けることになりました。サルーを見つけて出して連れてくるもよし、一族から追い出すもよし。だがセイオンは全く別の方法をとりました」

「別の方法ってなんだ？」

「一族を滅ぼすこと。皆、永遠に口を閉ざすことを選びました。謝罪も弁明も一切せぬままに。」

「そんな」

脳裏に浮ぶサルーの笑みがぐにやりと歪んだ。

「可笑しなのは、村で皆が事切れていたことが発見された翌日のことです。こんどはサルーがみつかった。がりがりにやせ細った姿で息も絶え絶えの彼は三日三晩うなされながら呟いたそうです。自分はリュオウに会った。砂漠の女神に会ったのだと。リュオウが怒っている。赦しを請うために廟を作らねばと」

「それでサルーはどうなったのだ？」

「そのまま死んでしまいましたよ。もう十年も前のことですよ。それ以来、砂漠にはサルーが現れて夜な夜な廟を作っているという噂話も出来ましたがね」

そのサルーがどうしたのかと聞かれルルドは返答に困った。なんでもないと言ったので精一杯だ。

今の話の中に欲しかった答えがあったのかルルドには分からない

ままだった。

「ごめんよ。今日はもう店じまいなんだ」

薄闇の広がり始めた路地から店に入ってきた気配を感じてイリヤは顔を上げた。

「聞きたいことがあるんだけど、いいかなあ」

「ああ、なんだい？」

祭りの時期になると裏街に迷い込んでしまう観光客は多い。
あまり見かけない恰好なので顔を覗かせた青年もそうなのだろう
と快く答えると、少年はニッと口角を上げた。

「今日セイラが来たでしょう？」

「セイラさんの知り合い？」

「うん。まあね」

少年の含み笑いは、吹き付けてきた風と同じように冷たかった。

第五章：さよならの代償 8

「あれ？ セイラさん一人で来たの？」

店主であるイリヤは目を丸くした。

息を切らしているのは昨日クロエが連れてきた少女だ。

昨日は別にハナと言う少女もいたが、今日は見当たらず思わずあたりを見渡した。

「うん。クロエも一緒なんだけど」

人ごみに紛れて見失ってしまったのだ。

もう少し早くに城を出てくるつもりだったのだが、心配性のハナが中々許可を出してはくれなかった。

原因不明の激しい動悸は今朝には綺麗さっぱりと治っているというのに。

少し遅ければ、通りにはいつの間にか観光客が溢れているという始末。

何とか店までたどり着ければ合流できると思っていたのだが、当のクロエはまだついていなかったようだ。

「まあ、そのうち来るでしょ。 出来上がり見てる？」

「うん」

ぱあと表情を明るくしたセイラを店のほうへ案内する。

「じゃあ、中にドウゾ」

「うん」

染物のカーテンを潜り抜け行き着いた先には少年が立っていた。セイラの姿を認めると、人懐っこい笑みを浮かべた。

「やあ、セイラ」

「ヒイラギ！」

警戒心もなく近づいてくるセイラに苦笑が漏れる。アリオスの連中はもう少しセイラに慎重になれと教えるべきだった。少なくとも微妙な関係にある隣国の人間とは。

「ヒイラギは買い物？」

「ちょっと頼まれごとをしちゃってね」

「へえ」

背後で店主の体が強張った気配が伝わってきた。どうしたのかと振り返りかけたセイラの耳に届いたのは舌足らずで甘いくせに息吹のように冷たい響きを持っていた。

「ヒューロムのお嬢さんからセイラを攫ってちょうだいってね」

目の前いつぱいに広がったヒイラギの笑顔。

細まった瞳に浮ぶのは紛れもない悦で、開きかけたセイラの口を塞いだのは死人のように冷たい手だった。

同時に走った首筋への痛みでセイラは完全に意識を飛ばした。長く尾を引いた悲鳴は外の喧騒に紛れて意味を成さない。

「うるさいよ。君」

先ほどまでとはうって変わって熱を失った瞳が青年を射抜く。
冷や汗に溺れそうになりながらも青年は何とか声を絞り出した。

「ら、乱暴なことはしないって言ったじゃないか！」

情けないほど震えた声。

同じように膝が震える。

「乱暴？ ちょっと眠って貰っただけじゃない。五体満足。なにしろ生きてるよ。人聞きの悪いこと言わないでくれるかなあ」

がちがちと歯がかち合う音がする。

青年の見開いた瞳に涙が盛り上がるのを何か面白い見世物であるかのようにヒイラギはとくと見つめた。

「協力ありがとう。君の妹に乱暴なことはしないであげるよ」

ヒイラギは手近にあった布を引っつかむと器用にセイラの身体を包んで抱えあげる。

「かえせよ！ きよつ協力したら無事に帰すって言ったじゃないか！」

「うん。帰してあげるよ。君と僕との間で無事の概念が同じだとい
いんだけどね」

呆然とする青年にひらりと手を振ってヒイラギは雑踏に消えていく。

そのすぐ後に息を切らしたクロエが店の中へと飛び込んだ。

第五章：さよならの代償9

「なんてこと」

心臓の音がうるさすぎて吐き気がした。

不明瞭な説明を何とか噛み砕き事態を把握した途端に全身から血の気が引いていく。

死人のような顔色のイリヤを見ながらクロエは己の顔色を悟った。

「どうして目を離したの」

ほんの一瞬、雑踏の中にあのマントを見た気がしたのだ。

セイラを掴まえていたマントの主を。

気をやれば、あつという間にセイラの姿は見えなくなった。店まですぐ其処だ。

駆け出した割には心の奥底で大丈夫だという気持ちもあった。

「クロエねえちゃ……どうしよう。おれ……」

恐ろしい人物に妹を人質に取られ、セイラまで浚われてしまった。彼が誰なのか、なんのためにこんなことをしたのかも分からない。昨日の夕刻に突然現れた少年は、協力しなければ妹の命はないよと言ったのだ。

妹のメルはたった一人の肉親だ。

どんなことをしても守らなければと思っていた。なのに、なのに。

「にーや？」

入り口から此方を覗き込んだのはイリヤによく似た女の子だった。床に座り込んでいる兄を心配そうに見つめている。

「……メル？」

「にーや。どうしたの？ お腹痛い？」

とととと足音を立ててメルがやってくる。
どこにも怪我をしたようではない。

「お前、どこに」

震える手が小さな肩を掴む。

ちよっぴり痛くてメルは顔をしかめたが、もつと辛そうな顔をしている兄の頭を、かつて母にしてもらったように優しく撫でた。

「トッドにーやと一緒にメイヤーさんのところに行っていたのよ」

「トッド……」

セイラに名を貰った青年は子どもたちから見れば小山のように大きくて大人気だ。

彼に肩車をしてもらえば空を飛んでいるような心地がするのでわれ先に子どもたちが集まってくる。

「そう。トッドにーやは誰かを追いかけて行っちゃった。セイねーやが居たって言うけどメルには分からなかったの」

メルはしゅんと肩を落とした。

メルは不思議なお話をしてくれるセイねーやも大好きだ。

いっしょに追いかけようとしたのだけれど、イリヤが心配するから帰れと言われれば無理についていくことは出来なかった。

けれどそれはよかったのだ。にーやがボロボロと泣くのだからメルは涙を拭いてあげなければいけないのだ。

メルはぎゅっと抱き込まれて笑った。にーやはいつもお前は子どもだからと言っけれど、これではにーやの方が小さな子みたいだ。

「どうしよう。クロエねえちゃん。俺、セイラさんにひどいこと」

耳鳴りがうるさい。

けれどもクロエの頬には熱が戻ってきた。

「裏街の皆に伝えて！ トッドを探してって」

トッドの姿ならばどこに居ても目に付く。

これから月影軍に知らせよう。情報が多い方がいい。

「わっ、分かった」

「でも、危ないと思ったら身を引いて。無茶だけはしないでって伝えてよ」

「うん！ メル、マサおばさんのところにいつてろ」

「うん。にーやいつてらっしゃい」

背後にメルの声援を受け震える足を懸命に動かしてイリヤは裏街を走った。

第五章：さよならの代償10

ケイトに事情を話し終わった時、クロエの喉はひゅーひゅーと音を立て、かつてないほど酷使した足は震えていた。

初めに出会えたのがケイトでよかった。彼ならばきっと一番良い方法を取ってくれる。

背後に心配げなケイトの声を置き去りにしてクロエは足を引きずるようにして歩き始めた。

汗なのか涙なのかよく分からないものが頬を伝う。

鉄の靴でも履いたかのように足は重かった。

伝えなければ。あの人には自分から伝えなければいけない。

目的地の入り口が内側から開いた時、クロエは崩れ落ちそうになった。

「クロエ？」

「……ジンさま」

言葉が喉に絡む。

「セイラ様が浚われました……申し訳ありません。私のせいで」

耳元を風が掠めた。

白い風が視界を横切っていく。

軽やかな白を引きとめたのは対のような不動の黒だった。

「ちょっと、待ちな」

「……ジョゼ將軍」

自分の声が音になっているのかもはやクロエには分からなかった。

「ジョゼ。離して」

「待てって言うているだろ。状況把握もせずに、どこへ飛び出していくつもりだよ。ケイトに聞いたが嬢ちゃんが浚われたってのは本当か？」

頷いたクロエを見てジョゼは眉間の皺を深くした。

「知り合いの一人が追っているようです。彼を裏街の人間で探してもらっています。少しは足取りが掴めるかとは思いますが……」

それがどれほどの助けになるだろう。

「上出来だ。後は俺たちに任せろ」

「……はい」

力強く言われ少しだけほっとする。

「もう一つ、聞きたいことがあるのだが、ナジュール殿は一緒ではなかったか？」

「……いいえ」

隣国の王子が一体どうしたというのだろう。

「ナジュール殿もいないの？」

「そのようだ」

昨日、リブングル家に招待されたところまでは分かっているのだが、その後のことがようと知れない。

おかしいことにセイラのことが知れ始めてから、ナジュールの姿が見えないことが話題になり始めた。

このままでは浚ったのはナジュールだという噂が流れかねない。

早速、緘口令がでてセイラの行方が分からないことを知っているのはまだ僅かな人数にとどまっている。

それがいつまでもつかは分からない。

城の中には醜聞好きの貴族たちがたくさんいるのだ。

「セイラ様の行方を捜さないのですか」

「おおっぴらにはな」

「そんな」

「街は祭りでわいている。そんな時にこんな話が漏れてみる。酷い騒ぎになるだろうさ」

「それは分かります！　だけど……」

將軍に齒向かっている。

普段ならけっしてそんな怖ろしい行動など取る事は出来ないのだけれど、クロエは詰め寄った。

頭に響く金切り声がまるで自分のものではないように響く。

「幸いなことに、警備のために街中に月影の人間を配備してある。

街を出れば陽炎の連中もつようよしているからな。あんたに知り合
いだっていう奴に情報を貰えば見つけるのはそんなに苦労はしない
だろうよ。俺も今から街へ降りる」

「私も行く」

逆に腕をつかみ返されたジヨゼはしばし声を失い、にやりと笑う。

「よし。行くぞ」

頷きを一つ返したジルフォードはクロエへと視線を向けた。
どくりと心臓が跳ねる。自分の失態が情けなくて顔を上げること
ができなかった。

「クロエは八ナ殿についていて」

頭上から降り注いだ言葉にはつと顔を上げたときには、ジルフォ
ードの後姿はもう小さくなっていた。

おかしい。おかしい。これはおかしい事態だ。

ナジュールがまだ帰ってこない。

連絡も無しに丸一日も姿を消すだなんて賢明なナジュールからは考えられない。

ここがタハルならまだしも友好関係が危うい均衡で保たれているアリオスなのだ。

本当に貴族の屋敷で過ごしているのならば心配をかけないように連絡の一つでも寄越しそうなものだ。

今朝からサクヤの姿もない。

すっかりアリオスの待遇に骨抜きにされた他の付き人たちもサクヤの行方は知らないという。

「なんであんな奴らを連れてきたんだよ！」

残りの二人は家柄が良いが凡庸だ。

侍女たちにタハルなどやめてアリオスで暮らせばいいのと言われ鼻の下を伸ばしその気になってしまっている。

出来損ないのルルドが言うのもなんだが、剣の腕も良いとは言えないだろう。

あくまでもルルドの基準がナジュールなのでそう思ってしまうのかもれないが。

それにしても何故サクヤは残りのメンバーに彼らを選んだのだろ

う。

悪態はそっくりそのまま自分に戻ってきて、ルルドは己を小さく罵った。

誰か二人の行方を知っているものがないだろうかと巡らした視線の先を、弱弱しいところばかり曝してしまい顔を合わせるのが気恥ずかしいと思っていたジヨゼが通り過ぎた。駆けてこそいないが急いでいると分かる速度。

その後をジルフォードが追う。

彼の姿を書庫以外で見かけたのは初めてかもしれない。

いつも壁の向こうにでもいるかのように自分の世界の中にいるジルフォードの顔に浮ぶのは焦りで、そんな表情が出来ることになぜかほっとする。

それもつかの間、彼らが急いでいることにナジュールが関係しているのかもしれない。

ルルドは被り物を脱いだ。

色鮮やかな布を取り払ってしまえば自分に視線を送るものは半減する。

流れる髪をそのままにルルドは砂漠の獣が狩りをする時のように気配を殺し、二人のあとにすばやく続いた。

第五章：さよならの代償 1

耳元に水滴が落ちる音で目が覚めた。

けれど、目を見開いてもあるのは暗闇ばかり。目隠しなどされては居ない。

セイラは本当の闇に一人、取り残されていた。

ひやりとした空気が頬を打つ。

手には湿った石の感触。

時折、水滴の落ちる音がする以外は何も聞こえてはこない。

「どこ？」

セイラの声は細くうねり、暗闇の先まで流れていった。

どこか細く奥行きのある場所だとしか感じ取ることが出来ない。

まるでジニスの坑道のような場所だ。右も左も分らない。

何処へ続いているかも定かではない。

セイラは深く息を吸った。そして、細く吐く。ドキドキと跳ねる心臓をなだめるために。

「暗い。湿った匂い」

自分にいい聞かせるように現在持っている情報を口にする。

次は何か持っていないかかったかと体中を探った。ポケットから飴玉が2つ出てきたきりだった。

何か灯りに出来るものがあればよかったのに。

最後の記憶を呼び覚まそうと目を閉じれば、からからと笑うタハルの青年の顔が思い出された。

「ヒイラギ」

呼ぶも応えはない。

他に生きたものの気配はない。立ち上がって壁に手を這わすと、セイラは瞼を閉じた。

目を開いてもどうせ見えない。それならばいつそ聴覚に頼った方がいい。

右の方からヒューと細い風の音がする。セイラは迷うことなくそちらに足を向けた。

なんとか躓きかけながら、そろそろと進む。

手を這わせた壁は相変わらずごつごつとしている。時折、水滴が落ちてきて小さな悲鳴を上げさせた。

ジニスの歌をちょうど三回歌い終えた時、開けた場所に出た。最後の一音がほうと遠くまで響いたのだ。

目を開けると巨大な空間があった。薄ぼんやりとした青い光が天上から注いでいる。足元は闇のままだ。

「なにあれ？」

「ほ」

小さな吐息は笑いを含んでいた。

背を振るわせたセイラは辺りを見渡したが人影は見当たらない。

「珍しい。こりゃあ、珍しい。こんなところに娘っこがあるわ」

重くひび割れた声。

それなのに面白いとガラガラと空間を無遠慮に揺らす。

懸命に目を凝らせば一際濃い闇の中にそれはいた。

蹲ったそれには確かに手足があった。

岩のように見えていたのはローブを頭から被っていたためだ。ぬ

らりと光る眼球がセイラを食い入るように見つめている。

「……あなたはだれ？」

「ジユドー」

「じゅどー？」

それが名前なのかその存在自体なのか響きから知ることが出来なかった。

「私はセイラだよ。ジユドー」

「この中で名前などあまり重要ではないのだよ。お嬢さん」

そう言いながらもジユドーと呼ばばジユドーの瞳は細まった。

「ここがどこだか教えてくれる？」

「ほ。ほ。亡者の道だよ。お嬢さん。外れれば、死者の国」

脳裏に浮んだのは目の前の闇と同じ色をした一冊の本。

グランが大切そうに抱えていたあの本だ。

一度迷えば死者の国。そう言われたのは、確か……。

「ノースの道？」

「そうぞ。アリオスとタハルを繋ぐ希望の道。一步踏み外せばカトウーディ」

「カトウ？」

「迷路のことさ。お嬢さん。亡者が手招く死国へのね」

笑い声が地を揺する。

地自体が嗤っているかのようだ。

「それは困る！」

「ほっ」

「迷路で遊んでる暇なんてないんだ。早く帰らないと」

「正しい道を全て知っていてもノースの道を越えるには三日三晩かかるのだよ。お嬢さん」

「それも困る！」

三日も留守にすればちょっとした騒ぎでは済むはずがない。

ほんの少し街に下りるだけだったのだ。夕刻までには帰るとハナだっと思っていた。

「どうにかならないかなあ？　ねえジュードー！」

「ほっほっ。お嬢さん、方法があるとして私の言葉を信じるのかい？」

「うん」

「何故？　今あつたばかりの得体の知れないものだよ？」

試すような声に少しむっとして口を尖らせる。

「ジュードーは私に嘘を教えるの？」

「さあて」

「じゃあ、秘密を一つ教えてあげるからジュードーは真実を教えて」

必死な顔にふふと忍び笑いが漏れた。

「いいだろう。お嬢さんがノースの道の真実より重たい秘密をくれるのならね」

「いいよ。さあ、メモの用意はいいですか？　かりん1、オージイ2、蜂蜜1を交ぜると。とっても美味しいー！」

「はっ？」

「メイオンの花びらを加えてもなおよし！　カナンのスペシャルレシピだよ。お茶にまけてもパンに塗っても絶品なんだから」

「……かなん」

ジュードーは喉の奥でぐふりと笑った。

しばらくの沈黙の後、ジュードーが頷く気配がした。

「いいだろう。貴重な秘密をありがとう。お嬢さん。風を頼りに行きなさい。風はタハル側からアリオス側に向けてしか吹かないのだよ。一番あつい風を辿るんだ。最も早く抜けられるからね。それで

も直ぐに出られるとは思わないことだ」

「分かった。ありがとう！」

駆け出して立ち止まる。

振り向けば不思議そうに瞳が此方を見る。

「ジュードも行かない？」

「遠慮しておくよ。お嬢さん。出て行きたくなったら私には足があるのだから大丈夫。闇に飽きたら出て行くさ」

「そう。またね。ジュード」

「また？」

このお嬢さんはまたここへ戻ってくるつもりなのか。

「闇に飽きたら会いに来て。今ねアリオスのお城にいるの。上手くいけば2日後の夜には春乙女の舞を踊ってるんだ」

「ほう。エイナの舞か。2日後は大月だ。それはそれは美しかろう。頑張ったまえ。お嬢さん」

「うん。じゃあね」

風を感じてセイラは走り出す。

暗く開けた空間に残されたジュードがぼつりと零した。

「もうそんな時期か」

外はシルトの花盛りか。

最後に見たエイナの舞はジュドーの娘が舞った時だった。
あの誰よりも強かった王が病に侵される前だった。

「はてさて、ハマナやエンは健在かのう？」

一人だけ元気そうだ。

カナン・スフィア。

「そうか、あの香りはオージイか」

久しぶりに空腹を感じて、ジュドーの薄い腹がぐうと鳴いた。

「厄介な場所に入り込んだものだ」

暮れゆく空を背景にジョゼ・アイベリーは忌々しげに頭を掻き
毛を切った。

ばかりと不吉な闇を広げているのはノースの道への入り口だ。
時折、ひょおおと不気味な音が迫ってくる。

この中は小さな道が入り組んでおり、誰も全容を把握していない。
どれほど人数を裂いてみても全ての道を探せるとは思えなかった。

「仕方ない。目印を付けながら進むしかないな」

將軍の言葉を否定するものはいなかった。

第五章：さよならの代償12

それは見知った闇だった。

湿っぽく冷ややかな風の吹く暗い洞穴の闇だ。

ノースの道。

一度しか通ったことがない道だが、太陽に焦がされた世界から飛び込んだときの衝撃は忘れられない。

じつとりと押し掛かる水気を含んだ空気がまるで亡者を背負っているかのように感じられたものだ。

唯一自由になる瞳だけを開けて状況を把握しようと試みたが僅かな効果も得ることは出来なかった。

深い闇はどこも同じで、ノースの道のどの位置にいるかなど到底わからない。

手足は鎖で繋がれたかのように重く、自由には動かない。まわりつく甘い香りのせいだろう。

愚かな女だ。本当に憎いのならば意識のないうちに首を落とせばよかったのに。

土を踏みしめる音がした。

やっと決心して帰って来たのか。

耳を澄ませばそれは違うと分かった。足の運びに無駄がない。獣のようになやかに。

その足音の主をナジュールは知っていた。オレンジの光が暗闇を切り裂きながら近づいてくる。

松明に照らされた顔はやはり想像通りのものだった。

「……サクヤ」

搾り出した声は己のものとは思えないほど悄然としている。

「ご無事で何より」

ナジュールは笑った。

その笑みは彼には似合わない自嘲じみたものだった。炎がちろりと暴いたナジュールの横顔は急に力を無くしたようだった。

「私も愚かになったものだな」

女一人に浚われて、自由を奪われ動くことも出来ないなんて。女の素性を知った途端、死ぬ理由をちらりとでも考えた。

「ナジュール様。過ちは誰にでもあるものです。ただ、過ちは正さねば」

重たいものが落下する音ともにナジュールの頬に何かが飛び散り、先ほどからあたりに漂っていた死の匂いが急に濃くなり圧し掛かる。力なく垂れた女の手にある抉れた傷跡の下には、狼の紋章があったはずだ。

「セイオンの生き残りがいたとは知らなかった」

一夜にして消え去った獣使いの一族。

村の全員が寢床で眠るように死んでいた。今尚、直接の死因は判明していないがセイオンにだけ伝わる毒薬のせいだろうと言われている。

原因を作ったのはナジュールだ。

秘儀を他国へと持ち出そうとした放蕩息子 of 処分を長に任せた翌朝のことだった。

今思えばその情報として正しいものだったのかは分からない。

真黒に日焼けし、節くれだった指をしたあの青年は本当に放蕩息子だったのか。

息も絶え絶えに砂漠から戻ってきたサルー。女の面差しは彼に似ていたかもしれない。

「サルーの妹かもしれないな」

物言わぬ死体になってしまったては確かめようがない。

「サルーはリュオウに会ったと言っていたな」

砂漠をさ迷い歩き、意識も途切れ途切れながらサルーはリュオウにあつたと語った。

彼女のために廟を作るとも言っていた。

いつのまにか話は変容し、廟を作れと命じたのはナジュールだという噂が広まっているがナジュール自身はそんな無益なことを言うはずがない。

「熱に浮かされた戯言ではありませんか」

「砂漠の女神の髪の色は亜麻色だったと言っていたぞ」

サクヤの頬から色が抜けた気がした。

「リュオウは妹を救ってくれるはずだと」

「悪夢でも見たのでしょうか」

「私は一族の命を差し出せとは言っていない」

「彼らは愚かな判断を自ら下してしまったのです」

サクヤは主を助け起そうと身をかがめた。

その耳元で掠れた笑い声がうねる。

「分かっていたはずなんだ。黒幕はあんただって」

サクヤの瞳が一瞬、細まった。

闇に染まった手の内のナイフに力が入る。

「だけど、夢を見た。サクヤと一緒にならタハルを豊かな国に出来るかもしれないとね」

実際は一つとてまともに行かなかったけれど。

違和感を感じるようになったのいつのことだろう。

ぴたりと沿っていたはずなのに、いつの間にか離れていく。

思い通りにことが運んだと思っても僅かな輝が生じている。

その元を辿ればいつも中心にはサクヤがいる。セイオンのことにしてもそうだ。

やはり愚かになったのだろう。

認めたくなくて目を瞑ろうとしたのだ。そんなことはないと言い聞かせようとしていたのだ。

疑惑が確信に変わったのは、父と最期に顔を合わせたときだ。

ウォーダンがタハルの王としてササン大陸の埋もれた記憶の一片を語ってくれた。

そこから導き出された答えに愕然としながら、怒りも沸いて出た。弟までも巻き込むなんて。

だがそれは杞憂だ。もうルルダーシェは幼い子どもではない。

「ルルドを王につけるか」

「……はい」

ナジュールは目を閉じた。

瞼の向こうには荒涼と広がる砂の世界がある。

一面砂の色。

輝かしいものなど何一つないわが故郷。

身を焦がす熱は此処にはないけれど、いつでも肌がじりりと焦げる
感触を思い出すことが出来る。

「ルルドが王になればタハルは強く優しい国になるだろう」

サクヤの眉間の深い皺は更にきつく刻まれた。

ルルダーシェは傀儡の王。弱く泣き虫のルルダーシェに一体何が出る
来るというのか。

「あれはたった一人であの砂漠を緑に変える気にいるぞ。誰よりも
鮮やかに美しく豊かなタハルの未来図を描いている」

「どれも子どももの戯言です」

「ではお前の目指すものは何だ？ 死人の妄言ではないか。本当に
ユザとやらが復興すると思っているのか？ 寝物語ですら語られな
い忘れ去られた国だ」

「忘れてなどいませんよ。まだこの国は『色なし』を恐れている。
己が犯した罪が目の前に現れることが怖いのですよ」

「恐れているのはお前たちではないのか？ あの女は香の配合を話
はしなかっただろう。セイオンの連中はお前たちに情報を取られる

のを嫌い自ら口を閉じた。サルーでさえ口を嚙んだ。思い通りには
いかない。侮っていれば痛い目を見るぞ」

二人の間には奇妙な空白が生じた。

その一瞬の隙を突いて全身の力を集約してサクヤの喉元に噛み付く
とぶちりと肉が裂ける音がした。

どっと口の中に溢れる血の味に吐き気を覚えながらも更に噛み付く。

「ぐうつ！」

互いに獣のような唸り声を発しつつのたうち回る。

上に下にと視界が回る。

そのうちナジジュールの右腿に激痛が走った。

無理やり引き離して痛む箇所を見下ろせば、ナイフが突き刺さって
いる。

止血を施したが痛みは増すばかり。この足を引きずりながら不慣れ
な洞窟に行く自信は少しばかりぐらついた。

喉元を押さえ蹲ったサクヤは、肺に侵入した血液を追いつと苦し
げにせきこんでいる。

「さよならだ。サクヤ」

どうと仰向けに倒れたサクヤの心臓の上に切っ先が当てられた。

裏切り者を野放しには出来ない。ルルダーシェも彼を慕っている。

きっとナジジュールと同じように煩悶するに違いない。

少しでも憂いを断ち切らなければいけない。

沈む刹那血に染まるサクヤの口元が薄く笑ったような気がした。

風が吹く。

死の匂いを追いやるように。

岩の隙間に入り込んだ風が、ひよおおおと物悲しげな音を立て

る。

身体を縛る香りは薄れたというのに身体の動きは更に鈍くなる。使い慣れたはずのナイフが重い。

もう一度、地に伏してしまえば二度と立ち上がることが出来なくなるような気がした。

縫るように視線をやった先にちらりと光が見えた。

第五章：さよならの代償13

「ありやりや、予想より起きちゃうのが早かったみたい」

ヒイラギの体内時計は正確だ。

こんなあなぐらで過ごすのはもう慣れっこになっているため、外の様子もなんとなく察することが出来た。

青い闇が無慈悲な太陽に貫かれ色を失っていく。夜明けだ。後ろから軽快な足音がする。

暗闇に怯えた様子は微塵も無い。

入り組み、ほとんど光の入らないノースの道は何かを隠すのにはもってこいの場所なのだが、それがセイラとなると別だったようだ。今回は教訓を与えるためにも手加減はしなかった。

丸一日眠っていても可笑しくない力を込めたはずなのにヒイラギのすぐ後ろに迫っているということは、予想の半分の時間で目覚め、なおかつ正確な道をすばやく選んですんできたことになる。

嬉しいのだから悲しむべきか悩むところだ。

セイラが予想以上に出来ることにはぞくぞくする。

鍛え上げればきつとルカに並ぶだろう。

懸念は一つ。その優秀さがあだとなる。

「不味いなあ。鉢合わせしちゃうかな？」

それはほんの少し困るのだ。

任された計画はちゃんとやり遂げなければ意味がない。

今回のセイラの件はほんのおまけだ。

飽きずに商人のふりをして城へ紛れ込めば、一人の娘が声をかけてきた。

それがヒューロムのキアだということは事前にセイラの話聞いて

いたため疑いようがない。

彼女のお願いを聞いて思わず笑ってしまった。

険しい顔をされてすぐに引つ込めたけれど、嘲りは目にも宿る。

馬鹿な娘だ。

与えられたものでは満足できない。

もつともつともつと。

不相応のものを望み続ける愚か者。

もう少し賢ければユザに向いていたかもしれないけれど、間抜けな小娘など寂れた田舎がお似合いだ。

今頃、報酬を求める手紙を受け取って青くなっていることだろう。

ああ、愉快愉快。

「ふふ。……うん？」

セイラの足取りが鈍った。

この辺は一本道が続き、迷う場所など無いのに。

途中には祈りの場と呼ばれる空間が数箇所ある。

どういう仕掛けなのか、そこにだけ外の光が入ってくる場所があるのだ。

その一つには変なものが住みついていることは知っていたが、そこは随分と前に通り過ぎた。

先ほど通り過ぎた祈りの場はノースの道の中で最も開けた空間だ。

そこが山脈に穿たれた道だということなど忘れてしまいそうなほど広い。

そこに夜明けの光が入り込み、その光景に魅入っているのかと思っただがぼそぼそと話し声らしきものがする。

「んん？ まさかサクヤ殿がしくじった？ そんなまさかなあ……
ねえ」

でも、もしも万が一にも情が移ってしまっていたら。

十年以上も共に過ごしてきたのだから絶対にありえないと言えない。ヒイラギだって、役立たずのルルダーシェを押し付けられて辟易していたのに、今では別にいいかなんて思っているのだから。

想像以上に成長した可愛い生徒をサクヤは手にかけることが出来るだろうか。ヒイラギはとんと跳躍し祈りの場へと急いだ。

その場所まではさほど遠くない。

たどり着いた時にヒイラギは思わず奇妙な表情を浮かべてしまった。セイラと話しているのは背がとても高いことを除けば凡庸とした青年だった。話し方もろくてヒイラギは苛立った。

あんなのに街から付けられていて気がつかなかった！

羞恥で頬が熱を持ったのが分かる。

「セイラ。戻ろう。ここは良くない」

「うん」

あんなのにセイラが手を引かれているのを見て苛立ちは頂点に達した。

懷に隠していた鉾が唸った。

目にも見えない速さで打ち出された鉾は青年の腕を傷つける。

次の鉾は足の皮膚を裂いた。

「トッド？」

沈みこむトッドに慌てて声をかければ血の匂いがする。

「どうしたの？」

セイラがもう一つの気配を察して辺りを見回した。
闇の一点と目が合った。

それが見知った青年の姿をとるのに時間はかからない。

天井から降り注ぐ青白い光が不気味に青年を闇から切り離す。

「ヒイラギ……」

「やあ、セイラ」

ヒイラギが進み出れば、顔を歪めたトッドが広い背中へセイラを隠す。

気に入らない。気に入らない。

「君、邪魔だよ」

微かな音と共に無数の鋳が打ち込まれた。

それは、とてもゆっくりに見えた。大きな体が傾いでいく様も、立ち上る砂煙も。

ずんと地が揺れた。

「トッドー」

地に伏した体に力はなく、無数の傷からは血が滲み出している。
鋳の一つはトッドの身体を貫通して背後の壁へと刺さっていた。

「トッド！ 待って、起きてよ。ねえ」

血塊が零れ落ちた。

咽るたびに、大量の血液が全身から噴出した。

いくらきつく押さえようと、セイラの小さな手では限界がある。両手はすぐに真っ赤に染まった。

「セイラあ。無理だよ。」

目の前にヒイラギの足が見えた。

視線を上げていくと、困ったように口の端を上げるヒイラギの姿がある。

「それ、かして!」

「えっ? ちよっ……あゝそれ取られると肌蹴ちゃうんだけど」

油断している間に、腰に巻いていた紐をひったくられる。

その紐で結んでいるだけなので、でろりと衣ははだけてしまふ。返して欲しいと言う前に、それはどっぴり赤に染まっていた。

「そっち持つて!」

「あ、うん」

勢いに押され、差し出された紐の一片を持たされているのだが。可笑しい状態だ。

「あゝセイラあ? あのさ、その人傷つけたの、ボクなんだけど……そんな奴に治療の手伝いさせる?」

「君が怪我させたんだから、君が責任持つのは当たり前だろう!」

「うん」

とんでもなく、正論の気もするのだが、果たしてどうなのだろう。

「ボクさ、こいつ殺そうと思ってたんだけど」

「そう」

なんだかとても馬鹿らしくなってくる。

言われたとおり、引っ張ってやる必要なんかないのだ。

「離したら許さないから」

その言葉にヒイラギの表情が動いた。

にっと口角がつりあがる。

「許さないって、どうすんの？ボクと勝負する？」

「絶交する」

「ふへ？」

「それ離したら、絶交するから。もう一緒に遊ばないし、話もしないし、名前も呼ばない」

「……それは、ちょっと嫌かも」

セイラにヒイラギと呼んでもらうのは好きな気がする。

そばにいるのにちっとも呼んでもらえないとしたら、きつと嫌だ。むむつと唸る。手を放そうか放すまいか。天秤がぐらぐら揺れる。

「でもサキの術使えば、意味無いんだけどね。街で会ったでしょ？術士。セイラにヒイラギ大好きとも言わせることが出来るよ？」

「そうしたい？」

「うん。それも嫌かな？」

サキの術は人心を操れる。

けれど操られた人間はどこか生氣がなく、ガラス玉のような瞳をしているように思う。

セイラはどうでもよいことにコロコロと表情を変えるのが面白いのだ。それが失われるのは良くない。

「ヒイラギ大好き」

「へ？」

「ヒイラギ好きだよ。だから、離さないでよ」

「そんな取ってつけたように言われても」

セイラはヒイラギを見上げもせずに見え続けている。

ヒイラギもほうと感心する手さばきのおかげで噴出していた血は次第に勢いをなくした。

セイラも安心したのだろう。一度トツドの頬を撫でると視線を上げヒイラギを瞳の中に捉える。

「トツドに死んでほしくないし、ヒイラギにトツドを殺した人になつてほしくない」

予想だにしなかった強い視線にたじろいってしまった。
なんだがばつが悪くて下を向く。

「……何言ってるのさ。ボクはずーっとこうやって生きてきたんだよ。今トッドを殺した人にならなくても、きっと何処かでセイラの会ったことのある人殺してるよ?」

嘘だ。

「きつと」ではない。

自分はセイラの大切な人を手にかけてことがある。
そのことを知れば、絶交だなんて可愛らしいことは言えないに違いない。

自分の歩んできた道を嘆くつもりも悔いるつもり全くありはしないのだけれど、このことだけは知られたくないかもしれない。
トッドを殺した人の方が百倍ましだ。

「それでも、嫌だよ」

力を抜こうとしたまさにその時、被さるように告げられた言葉にも
う一度布地を握りこんでしまった。

ああ、なんて馬鹿なんだろう。

またタイミングを失ってしまう。

「わがまま」

「わがままでもいいの!」

「開き直るの? まったくいい性格してるよね。ルカそっくり!」

息を飲む。

それはどちらだっただろう。

「母様を知ってるの？」

ヒイラギの表情が歪んだのはほんの一瞬。まだそこまで教えてあげるつもりは無かったのだけれど、珍しく乱れた感情の性でいらぬことまで口走ってしまった。

光を帯びるセイラの瞳にとぼける気持ちは消えてしまう。

「んゝまあね」

「なんで知っているの？ 会ったことがあるの？ タハルに居たことがあるの？」

「んゝ……」

矢継ぎ早の質問に答えないままできるとじれったそうに身をよじる。話してしまおうか。それともこのまま消えてしまおうか。きつとトッドを置いてまではヒイラギの後を追ってはこないだろう。

そろりと浮かしかけた足を地面へと縫い付けたのはセイラではなかった。

それは白い白い軌跡。

強烈な光の残像でもあり、無慈悲な影そのものでもあった。急に膨れ上がった人の形をした気配にヒイラギの心臓は冷たい鉤爪で握りしめられたように縮む。

伸ばされた腕が向かう先を予想できたのに身体はぴくりとも動かない。

ようやく肺にたまった空気が出口を見つけたのは、ヒイラギの頬に

温かなものが飛び散り、セイラの悲鳴が聞こえてからだった。

「君、何やってるの？」

白い魔物。

天上からの光を受けて真白に輝く髪。

白い頬を彩るのはセイラのおかげで生きながらえていた青年の赤。それより尚鮮烈な赤がヒイラギを睥睨する。

目の前の青年は片手でセイラの髪を掴み、引き倒しているのを除けばあまりにも無防備に立っている。

彼の持つていたであろう剣はトッドの胸に深々と刺さったまま放置されたままだ。

それなのに敵わないと思い知らされる。声さえ出ない。

「いた……」

セイラにはまだ何が起こったのか分かっていない。ぎしぎしと痛む頭に涙が浮く瞳をようやく開けば、白い檻が見えた。

「ジ……」

名を呼ぼうとして凍りつく。

これは誰だ。

もしも髪をつかまれていなければ、すぐさま距離をとったことだろう。

流れる髪は天から注ぐ僅かな光を受けて白く輝いている。それ自体が淡く発光しているのかと見紛うほどだ。

セイラを見下ろす赤い瞳も火でも灯したかのように綺羅と光る。けれど、美しいなどとは少しも思わない。

力任せに引かれて瞳を覗き込まれると魂の奥まで覗かれたようで総

毛立つ。

「うつ、ああ」

痛みで声が漏れる。

「これがセイラ？ ふうん？ ル力に似てる？ どうかなあ」

「なんで……母様を」

「母様……母様ねえ。まるで何も知らないの？ ねえ？」

更に力を込めて引き寄せられれば、全身が引きつるように痛む。食いしばった歯の間からくぐもった悲鳴が漏れる。

引き離そうと伸ばした指先が触れたのは氷のように冷たい手だ。触れてはいけないような気がして慌てて引っ込める。指先から凍ってしまいそうだ。

逃れようと両足に力を込めてみても、すべて上手くいかない。身体が沈んだ分だけ痛みはひどくなる。

何故、足元が滑る。さっきまで平気で歩いていたのに。

滲む瞳で見下ろせば、ゆるりと黒い海が広がっていく。

音もなくじわりじわりとその中にセイラの身体を取り込んで更に己の領域を増やしていく。

彫刻のように不動のヒイラギの方へも。

「……あ」

一声出すのが精一杯だった。ひゅつと喉元がおかしな音をたてる。黒い液体の正体は嗅覚が教えてくれた。

靴を濡らすその温度を震える手が覚えている。

帰ろうと手を引いてくれた、大きな手の温度。

「トッド！」

苦しげな顔は無かった。

薄く開いた瞳に注ぐ光は、その表面を滑るだけだ。眩しいと細められることは無い。

「トッド？ ああ、こいつのこと？」

嫌な音と共に剣が引き抜かれる。

黒い海が揺れる以外の変化は無かった。

「もう死んでるよ」

「離して！」

自分を捕らえている腕に爪を立てた。皮膚が削れる感触があったが、セイラを掴む力が弛むことはない。

「質問には答えなよ」

「知らない！ 君なんて知らない。母様からは何も聞いていない！」

「母様、母様、母様！ まったく嫌になるよ。まるで自分のものみたいに！」

思い切り頭を押し付けられても思いのほか痛くは無い。その代わりに生暖かい液体が全身にべったりと張り付いた。

セイラが押さえ込まれているのはトッドの身体の上だ。確かに先ほどまで上下していた胸は動かず、失った血液のせいですすでに身体の表面が冷たくなりつつあった。

あえぐ口の中にも鼻の中にも死の匂いが入り込んでくる。

セイラは口を引き結び、息を止めた。

認めたくなかったのだ。トッドが死んでしまった事実を全身で拒絶すれば再び息を吹き返すと信じたかった。

頑なに動こうとしないセイラの上から笑い声が降ってきた。

今の怒声が嘘のように凧いだ静かな声だ。

「認めなよ。もうただのごみだって」

「ごみじゃない！」

見開いた瞳から涙が弾ける。揺らぐ視界の向こうでヒイラギが顔を伏せる。

こんなことになるのならば、やはりセイラの言うことなんて聞いてやるのではなかった。

真っ赤に染まり使い物にならなくなった帯は全くの無駄ではないか。ヒイラギはトッドを殺した人にはならなかったが、トッドを殺し損ねて、助け損ねたという立場になってしまう。

もしもヒイラギが手を下していれば、セイラが掴まるのはもう少し先だったのに。

「そんなことどうでもいいのだけねえ。そうだ！セイラ。私は似ているかなあ。君の大好きな『色なし』に。ジルフォードだったかなあ。あの歌を聴いたよ。初雪の色だった？　ねえ私にも歌ってよ」

舌がセイラの頬に張り付いた血を拭う。零れ落ちた涙を巻き込んで瞼の上も通り過ぎる。

「ほら、早く！」

理解が出来ない。

癩癩を起したように怒り始めたと思ったら、諭され、次には子どものように歌を強請る。

まるで幾人もを一度に相手をしているかのようなようだ。

もう一度「離して」と叫ぶと、今度はすんなりと開放された。

血だまりの上に躊躇無く腰を下ろすと拍手をする。

人一人を死に追いやったとは到底思えぬ無邪気な笑顔に心臓が早鐘のように鳴る。

警告音のように脈動がうるさい。

視界の端でヒイラギも同じような顔をしていた。

セイラと。

彼もこの青年を畏れている。仲間を見つけてもちつとも心強くはならない。むしろ不安ばかりが増していく。

「君は誰なの？」

「『色なし』だよ。ほら、ジルフォードと同じ色でしょ。」

「似てない。絶対に似てない。ジンと君は絶対に似ていない。」

ジルフォードを苦しめてきた『色なし』という言葉をなぜこの青年は誇らしげに語るのだろう。

王族の色を持たない『色なし』

瞳の色の定まらない『色なし』

それ以外にどんな意味があるのか。

青年の瞳の色は赤一色だ。生々しい不吉な色。

それがニイツと細まった。

「同じ白だ」

「違う！」

綺麗だなんて少しも思わない。

触れたくない。逃れたい。目を反らしてしまいたい。

目を反らすことが出来ないのは、ありつたけの怒りを視線に込めて
いるせいだ。

彼とジルフォードは似ても似つかない。

それでも指先が伸びてきた時、怒りが僅かに恐れに侵食される。

叫びだしたいのを堪えて、痛むほど唇を噛んだ。

「本当にルカは何も話していないんだね。自分のことも。ユザのこ
とも。『色なし』のことも。そして、セイラ。君のこともね」

「私のこと？」

「ルカはねユザの人間だったんだよ」

「ゆざ？」

薄い唇が耳元でくふりと笑う。

三日月のように弧を描いた唇が触れる刹那、風を裂く音がした。

第五章：さよならの代償14

「これは何の真似なのかな？ ヒイラギ」

今しがた鋏がうなりを上げて青年の頬の横を通り過ぎていった。傷一つついていないものの、白い髪がはらりと揺れる。

赤い瞳が剣呑に光る。

背筋が凍えそうな視線を受けながらヒイラギは盛大に顔を歪めた。

「それは、こっちのセリフですよ。ローダさま！ 今回のことは僕らに任せてくれるって言っただじゃないですか」

自分の良いところは何事も長く続かないことだとヒイラギは理解している。

悪く言えば飽きっぽいのだが、それが感情となればまた別の話だ。恐怖も嫌悪を感じる事が出きるが、持続しないのだ。

先まで引きつっていた顔の筋肉はすでに日常と取り戻し、凍りついた舌は滑らかに動く。

何も危機は去っていないのにヒイラギが抱いた恐怖は跡形も無く溶け、ここにいるはずの無いローダの存在に怒りさえ沸いてきた。

その怒りさえ次第にどうでも良くなってくる。

「何でこんなところにいるんですか？ 余計なお世話ですけど、心配でもしてくれたんですか？ 本来貴方は家にいるはずでしょう？」

「……最期を見届けようかと思ってね。でも、私としたことがすっかり花を持っていくのを忘れてしまったよ。失敗。失敗。まあ、あったところですかからびてしまっただけだね」

「最期って……タハルまで行っただんですか」

「うん。しっかり見てきたよ。ウォーダンが死ぬ前に私のことを化け物と呼んだよ。可哀想に。それ以外に罵る言葉が思いつかなかったんだね」

「ウォーダンってタハルの王様……」

セイラの呟きを聞き取ってローダと呼ばれた青年は楽しげに笑う。

「そっだよ。ウォーダン王。けどもうすぐ前国王って呼ばれるようになるかな？」

ウォーダン王が亡くなった。それでは、ナジュールは父親の死に目に会うことができなかったのか。

セイラはナジュールの様子のおかしかった夜のことを思い出した。彼は何らかの方法でいち早く、ウォーダン王の訃報を知ってしまったのだ。

「王子様のことを思っているの？」

ヒイラギのせいで開いていた距離が一気に縮まる。

「自分のときのように最期に立ち会うことが出来なくて可哀相？」

「え？」

確かにセイラは母の最期に立ち会ってはいない。

ジニスの誰もがあんなにも急に逝ってしまうとは思っていなかっただろう。

いつもの生活が始まるはずだった。

「なんで？」

「私は何でも知ってるよ」

ローダが耳を澄ます。

ヒイラギもそれに習ったが彼の耳には何の音も聞こえては来ない。闇の中を透かしてみようと目を細めたが、あまり効果はなかった。

「面倒ごとがやって来そうだねえ」

ローダの言葉に遅れること数瞬、闇の中から黒い獣が飛び出した。影だと思ったのは流れる黒髪だった。まるで尾のようにざんざんと揺れる。

今の今まで気配など無かった。

正真正銘、獲物を狙う獣のようにしんと息を殺して機をうかがっていたのだ。

乱入者が見知った少年の輪郭を描き出す。

「ルルダーシエ様！？」

「ルルド？」

一瞬、ヒイラギの方が早かった。重なるようにセイラの疑問が続く。いつでも飛びかかれるような姿勢を保ちながらルルドはちらとセイラを見る。

全身が血で塗れているが本人のものではないと分かると、前方を睨みつける。

「お前は何者だ！」

「そういう君は何なのさ。いきなり刃物を突きつけるなんて礼儀知らずだよ」

「ルルダーシエ様です。タハルの二の王子の」

ヒイラギのため息交じりの答えにローダは僅かに目を大きくし、ルルドの上から下までとつくりと視線を巡らせた。

「これが次の王様？ 随分……弱そうだね」

星読みの技術に香の配合、その他諸々の情報を与えれば少しなりとも評価が変わるかもしれないと思ったがあえて報告はしない。

ローダが最も重きを置く「力」においてはルルダーシエは全くの不適合者だ。

「弱そう」それは全く持って相応しい第一印象だった。

「何をわけのわからないことを言っているんだ！」

ルルドの噛み締めた奥歯がぎりと鳴る。

「ふーん。まだ一度も術をかけたことがないんだ。大丈夫かなあ？
大好きな兄上を失ったショックの上に重ねれば大丈夫かなあ」

「兄上に何をした！」

ルルドが振りかざしたナイフはまるで奇術でも見ているかのようにふっと消えた。

ナイフは弾かれ、放物線を描きながら決して手の届かないところま

で飛んで行き、地面に激突する瞬間に儚い音を立てた。

消えたナイフの変わりに現れた剣はルルドの首元に突きつけられた。トッドを刺し貫き赤く染まった刃が更に血を吸おうとルルドの無防備な喉を狙っている。

ごくりとセイラの喉がなる。

今度はルルドが犠牲になるという恐怖ではない。

ロードは弱者をいたぶる様な残酷な笑みを浮かべてはいるが殺気は感じられない。

怖ろしいのは、相手武器を巻き込んで弾き飛ばす剣さばき。

あれはカエデの動きだ。

セイラの剣の師匠であり、ジルフォードの師匠でもある。

何故繋がっていくのだ。

母にカエデに、ロードが。

「ああ、もう。めんどくさくなりそうだから、帰るね。ヒイラギ、ちゃんとしてよね。どうして、皆ばらばらぐちゃぐちゃと勝手に動くのかなあ」

青年は苛立たしげに頭を掻き毟ると、ナイフを構えるルルドなど存在しないかのように無防備に背を向けて歩き出した。

「待て！」

追いつがろうとするルルドの前にヒイラギが立ち塞がり、真剣な顔で首を横に振る。

あれはルルドの太刀打ち出来る相手ではない。

「一体どういことなんだ！ 誰なんだあいつは！ どうしてお前が此処にいるんだ」

ルルドとて慣れない道に闇雲に突っ込んでいくつもりは無い。
けれど分らないことが多すぎる苛立ちから声は次第に熱を帯び、
睨みつける相手はヒイラギへと変わる。

「そういうルルダーシェ様はどうしてここに？」

「城ではセイラがいないとちょっとした騒ぎだ。兄上も姿が無いし
……だから二人の行方を追ってる城の奴らのあとをつけてきたんだ」

「うげげ。ってことは他にもこの中に面倒な人物がいるってことか」

厄介だ。

サクヤと連絡が取れていないことも気にはなるが、あの人がセイラ
に興味を持ってしまったことにも心がざわついた。

長期的に考えれば、此方の方が面倒だ。

さて、力が抜けたように座り込んでいるセイラをどうしようか。

「兄上はどこだ？」

「……ナジュール様のところにはサクヤ様がいると思うけど」

「サクヤが」

ほっと胸を撫で下ろす主に忠告を一つ。これで最後になってしまう
かもしれない。

綻びを一つ見つけられてしまえば、たとえサキの術をうまく使った
としても、この甘ったれの主の下にいることは出来ない。

「あまり安心しない方がいいですよ？」

「どういう意味だ？」

「前に言っただでしょう？　僕はルルダーシエ様を王様にしたいんだって」

ルルドの洪面を見ながらヒイラギは低い声で笑う。

初めて会ったときから図体は確かに年相応に大きくなったのに、眉間に深く皺を刻むこの顔は幼い頃のぐずる時の顔に似ている。

「嬉しいことにサクヤ殿も同じ意見なんだよねえ」

「そんな馬鹿な。サクヤは兄上の付き人じゃないか。兄上の優秀さは国の皆知っている」

「でも……死んでしまったら王様にはなれないですよね」

息を飲むルルドの横でのろのろとセイラが視線をあげる。

まだ大丈夫そうだ。少し心もとないけれど、ルルドに預けて幕引きをしよう。

「どうして、そんな考えを……ユザ」

「知っているなら話は早いや。そう。これははるか昔の復讐劇。僕やサキは裏方で表にはでないのだけど、ちょっと動きすぎちゃったかなあ」

操り人形の王子を作るのが目的だったのだが、一時の放任主義がよかったのか案外遅くなってしまった。

「裏方は幕の内側に引つ込まなきゃ。しばらくお別れですねえ。ル
ルダーシエ様」

「お前の顔なんて二度と見たくない」

「……それは残念」

役者が挨拶をするようにヒイラギが腰を折る。

「待て」と伸ばした腕は空を切る。先ほどまではつきりと見えていたヒイラギの輪郭は急に曖昧となり薄闇に溶けていく。
完全に消えてしまう前にセイラの掠れた声が問う。

「ヒイラギ。さっきの人は誰？」

「うゝん。亡霊……かな」

ヒイラギの影が完全に消える前に、何とか口に出せた問いの答えは
どうにもあやふやで、決して望んでいたような答えではなかった。
薄闇の中に取り残されたのは三人。

一人にはもう息が無い。セイラはトッドの頬を撫でた。
触れた身体はまだ温かい。

ゆるりと冷たさが増していく。

閉じた瞼の下の瞳が夢見た未来は二度と訪れない。

ゆっくりと耳に心地よい声はもう二度と聞けない。

何もかもが一瞬のうちに夢の中を彷徨っているかのようにだ。
唯一現実味を帯びたトッドの死が重い。

「ここにも仕方が無い。いくぞ」

セイラは素直に立ち上がらない。

地面に伏した青年に視線をやったまま微動だにしなかった。

「トツドを置いてはいけないよ」

街から追いかけてきてくれた心優しい青年をこんな暗くて寂しい場所においていけるわけが無かった。

たとえその身体が自分のものよりもだいぶ大きくて、とても運べないとしても諦めようだなんて言えない。

「気持ちは分かるが、つれてはいけない」

一度、この道を通ったことのあるルルドにはこの厳しさが骨身に沁みている。

危険な箇所はたくさんある。大荷物を背負って進むことが出来るはずが無い。

「でも、このままじゃ」

「ここは死者の国へ続くノースの道だ。無事にたどり着ける」

タハルでは死者の国はノースの道を下った地下にあると信じられている。

死者の国の入り口には巨大な門があり、番人がいる。

生前の行いが良ければ、門は開かれるが悪ければ門番は獣に姿を変えその牙で捕らえようと追いかけてくる。

逃げようとむちゃくちゃに走り回れば、迷路にはまり込み永久に出ることができないといわれているのだ。

だから死者には獣避けの香を持たすのが慣わしだ。

ルルドはセイラが首からぶら下げていた香入りの耳飾を手を取った。

覚えのあるナジュールのものだ。

奪うと仰向けにしたトッドの胸の上へと置く。これで無事に死者の国へとたどり着くことが出来る。

セイラを助けようとしていた無垢な青年にきつとリュオウは恩情をくれるだろう。

「こいつの死を無駄にするかどうかはお前次第だ。僕は兄上を助けに行く。それで此処を出て、タハルに帰る。お前は どうする？ 屍にすぎり付いて死んでしまうか？」

死すら糧に。

タハルでは死者への祈りは短い。

それは生者への区切りの言葉。

「どうする？」

「……行く。行くよ」

トッドの最期を皆に伝えなければいけない。

大きなおにいちゃんが好きだった子どもたちは何日も姿を現さないトッドのことをきつと心配しているに違いない。

それにセイラを心配しているであらうハナ。

『色なし』の意味。

膨れ上がった不安は立ち止まることを許してはくれない。

「ごめんね。トッド。ありがとう」

セイラは差し出された手を取り、重い一步を踏み出した。

第五章：さよならの代償15

背後からは弾む呼吸音がする。

ぜいぜいと耳障りな音はしないものの、足取りは最初に比べれば少しずつ遅くなっている。

一切情報を持っていない足場の悪い所なので無理も無い。
むしろ女の身でよくついてくると思う。

悪路を歩きづめでまだ休憩は一度もしていない。

ルルドは歩く速度を次第に落とし最後には立ち止まった。

背後からはどうしたのだろうと此方を伺う気配がする。

やはり無理を強いていたのだろう。息を整える時間をたっぷり取ってから、ようやく「どうしたの？」と質問が来た。

「少し、休もう」

「大丈夫だよ。行こう！」

暗闇で互いの顔は朧にしか見えないが、何となくセイラの表情が予想できた。

疲れているはずだ。

何度が転び打ち付けた身体は痛むはずだ。

歪む表情。

お前が苦しんだってトッドは救われはしない。

喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。

そんなことはセイラだって十分承知だ。その上で罰を受けることを願っている。その苦しみを取り除いてやる術はルルドには無い。

悔しい。

ナジユールなら上手い慰めの言葉をかけることができただろうか。
もし、もしもヒイラギがいたらほんの少しでも心を軽くしてやるこ

とが出来ただろうか。

ルルドは首を振って、むくむくと持ち上がった疑問を遠くに押しやった。

彼らが出来たとしても、ここにはいないのだ。考えても仕方が無い。

「座れ！」

肩に力を込めれば僅かな抵抗の後、すっと身体が沈む。

「靴を脱げ」

「え？」

舌打ちと共にセイラの足をむんずと掴む。無理やり靴を脱がすと押し殺したうめき声がした。

まだ掃き慣れていないものだったのだろう。セイラの踵には靴擦れができ、血が滲んでいた。

もともと皇かな廊下や綺麗に整備された街中を歩くための靴だ。ごつごつとした岩がある洞窟を歩くには適していない。

歩き易さを重視した低めの踵もここでは邪魔者でしかない。

「まったく、どうしてお前たちの靴はこうなんだ」

無駄な装飾に、明らかに足を痛めそうな形。

理解ができんと息を吐くと、セイラの足の裏をぐつと押す。唸り声は聞かないふり。

服の一部にナイフを走らせ刺繍の糸を切る。隙間から取り出した乾燥した葉を地面のくぼみに溜まった水を加えて揉むと靴擦れと足の裏に塗りたくる。

すっと熱が引いていくような心地がした。

「なにこれ？」

「薬草だ。少しは楽になるだろう。しばらく待て」

そう言うところルルドは服の布を裂き始めた。

タハルの服は昼の強烈な日差しと夜の冷え込みから身体を守るためにたくさんの布地が使われているので、少々切り取ったところで困らない。

その上、ルルドの服には刺繍に紛れてさまざまなものが縫い付けられてあった。

さまざまな薬草。ナイフ代わりに使用できるルーガの骨のカケラ。アリオスのディナール金貨も一つある。

めんどくさがりやのくせに器用なヒイラギのアイディアだった。

そんなものはいらないというのに小さなポケットを作っては何かを放りいれ、ルルダーシェ様が困らないようにと、にやにやと笑っていた。

そこまで思い出して、小さな悪態をつく。

あれも何もかもルルダーシェをお飾りの王にするための作戦だったのだ。

かけられた言葉の全てが嘘だった。一喜一憂していた自分が馬鹿らしい。

「ねえ、ルルド」

「……何だ？」

「ルルドはタハルの王子様だったんだ」

「……………そうだ」

いつも胸を張って言えたことは無い。今日は更に口が重かった。

「ユザって何？」

「僕も兄上から聞いた話しか知らないけど……ユザってのは元々は国の名前らしい。兄上も導きの星から聞いたと言っていた」

「知っていることを教えて」

全てが其処に繋がっていく。

早くおいでと真白な手が闇の奥から手招きしたような気がした。

第五章：さよならの代償16

落日が世界を染めている。

空には遮るものは何もなく、ヒューロムの赤酒でも流しこんだかのように街の隅々まで赤い。

しばらくすれば陽は王座を月へと譲り、青く澄んだ夜が来る。

今宵は大月。

春告げの祭りを締めくくるのに相応しい美しく大きな月が、世界の裏側で今か今かと出番を待っている。

路地では店主が空の具合を確かめながら、店じまいをしようか迷っているところだ。

月が天辺に来る頃には街外れの石舞台にいないければいけないのだから。

なんといつても一年に一度の祭りだ。大月は十年に一度。

その上、今年の春乙女はこの間エスタニアから嫁いできたセイラ王女だ。話題に乗らないわけにはいかない。

だがライバル店よりは少しでも多くの売り上げを得なければと互いに火花を散らせつつ、妥協点を探りあう。

それを笑うように急速に宵闇が忍び寄っていた。

城の一角にも赤みを失いつつある光が差し込んでいる。

「話は分かりました」

重く頷いた後、ルーファは固く瞳を閉じた。

考え込むような仕草に2つの人影は不動を貫き通す。

頭を覆う数多の色彩を帯びた布に腰を覆う毛皮。

腰には小ぶりながら殺傷能力を持ったナイフを帯びた彼らが王の執務室に招かれるなど異例のことだった。

彼らはタハルの使者5人のうちの2人だ。

小柄で吊り目の青年はケンフィと名乗り、ひよろりと背の高い細見の青年はゾーイと名乗った。

アリオスの生活にはいち早く慣れ、アリオスの衣装もうまく着こなしていたが一転今日はタハルの正装をしている。

「すぐに屋敷を用意させましょう」

「それには及びません」

ルーファの言葉を遮ったのはケンフィだった。彼らの間には何か取り決めがあるのかもしれない。

いつも発言するのはケンフィだ。

ゾーイは俯き加減で常に黙っている。ただの引つ込み思案なのだろうか。

「我らはナジュール様と共にタハルに帰ります。お心遣い、ありがとうございます」

「それではお話が違つようですが……このままでは貴方方は危険なのでは？」

受け取った手紙には確かにウォーダンのサインがある。

二人の青年をアリオスで暮らさせて欲しいと書いてある。

ケンフィはウォーダンが亡くなった事を包み隠さずに話した。

毒によって徐々に身体が弱り死に至ったことも、その毒を盛っていたのが自分の一族であったことも。

そのことは王の指示であったことも。

王の死が公になれば、いずれ知れ渡ることになるだろう。例えば、王

の指図であつたとしても王族を死に至らしめたことは、重大なる罪であり罰は免れない。

相手が現国王ともなれば、一族滅亡も十分にありえることだ。その前に、若く丈夫な青年を一人ずつアリオスへと逃がす手はずとなっていた。

「罰ならば受けましょう」

ゾーイも身じろぎ一つしなかった。

秘密を抱えたまま他国で生きるほうが苦しい。

ルーファは二人から手元の手紙へと視線を落とす。

国王暗殺の経緯を国王本人の手紙で知らされるなど、前代未聞だ。謀りにかけられているとは思えない。

だが、それに何の意味があるというのか。

「信じる事が出来ませんか？ ですが、アリオスでもまた同じようなことが起きているでしょう？」

「……同じこと？」

ルーファの問いにケンフィはしばし考える仕草をしたが、それが本当だったのかルーファの好奇心を刺激するための間であつたのかは分からない。

だが、長らく平穏を保っていたルーファの心臓が跳ねたのは間違ひではなかった。

「お父上はどのようにして亡くなりましたか」

「なに……」

「誰よりも頼りになる力強い王が急に力を失っていくようなことはありませんでしたか？」

ロード王は急逝した。

それまでは病ひとつしたことが無かった。

だからこそ彼が寝付いた時には、サンディアの呪いではないかと嫌な噂がたったものだ。

「まさか」

口の端に浮んだ笑みは最後までではもたなかった。

ルーファのうちにある考えが浮んだ。

父の墓を暴くという恐ろしい考えが。

もしも、毒により死んだのなら遺体には何かの痕跡が残るはずだ。その考えを打ち消すように、扉の向こうから侍女が呼びかける。

「陛下。そろそろお時間です」

まだ、セイラが見つかったという報告は届いていなかった。

第五章：さよならの代償17

現れた人物にほつとすべきなのか、身構えるべきなのか考えあぐねて、とりあえずナジジュールが困惑顔を浮かべた。

これは正しい判断だったのだらう。顔に似合った問いはすぐさま音となって口から零れ落ちる。

「ジルフォード殿、なぜ、ここに？」

城の中でしか見たことの無い姿。

彼の色は儚い様に見えて、この闇の中でさえ存在を主張する。

「セイを探しています。ご存知ですか？」

「セイラ殿もこの中にいるのか。残念だが一緒ではないよ」

しばらく自由を奪われているうちにどうやらおかしい事態になっているらしい。

この中はさまざまな道が入り組んでいる。

ただ一人を探すのは困難だ。

ジルフォードとナジジュールが出会えたのは、おそらくサクヤが大きな道を選んでくれたおかげなのだらう。

そう考えれば、もとよりサクヤはナジジュールを殺すつもりは無かったのかもしれない。

最期の笑みのわけを探ろうとしてやめた。

どんな理由をつけたところで、サクヤの罪もナジジュールの罪も消えてはなくなるらない。

ここが闇の領分でよかった。

己の罪を陽の元に曝け出されたら、しばらく立ち上がることが出来

ないだろう。

「怪我を」

傍らに膝を着いたジルフォードに血臭の似合わない男だと思った。闇に浸かった足元は赤く染まっているというのに、ナジュールは傷を負った半身どころか口元さえも獲物を仕留めた獣のように血で塗れているというのに、白い面はそんな世界とは無縁だ。

血なまぐさい唾を吐き、口元を拭いたが取り巻く匂いが変わってようには感じられない。

布を裂く音がした。ジルフォードが応急処置を試みているのだ。

「平気だ」

強がりを言ってみても思いのほか深かった傷口が焼け付くように傷む。

傷口を縛られると思わずうめき声がこぼれた。

「止血はしたけれど、早くちゃんとした治療をしたほうがいい。外に出ましよう」

促されて立ち上がれば、足元がふらついて体勢を崩す。

まだ香による戒めが完全には取れていないようだ。

「掴まってください」

淡々とした声には何の感情も滲んではないようなのに、数かな苛立ちを感じ取ったような気がする。いや焦りだったのかもしれない。セイラがこの中にいるのならば当然だろう。

手のかかる厄介者など放り出してさっさと先へと進めばいい。

「置いていけ。ジルフォード殿。私を生かしておいて良いことなどないぞ。生かしておけばいつかアリオスを攻めに来る。私はあの国を救わねばならなん」

撥ね退けようとした腕を逆に絡められ、身体を支えられる。

「そうするといい」

「本気だぞ」

からかわれているのかと思い、ナジュールの声は強くなる。
にらみつけたジルフォードの表情には読み取れるようなものはない。

「こちらも本気で迎え撃とう。……だがナジュール殿は生きて帰らなくてはいけない。あなたを待っている人がいる」

言葉に詰まり、ぐうと唸り声だけが漏れた。

タハルはどうなっているのか。ルルダーシエは無事にいるだろうか。
気がかりは山ほどあるが、思うように動かない身体が厭わしい。

「それに、死ぬなら正式にアリオスを出てからにしてみたい。
このままではセイが泣く。セイと貴方は仲がよいみたいだから」

「……あんたって澄ました顔して、さらっと酷いこと言うな」

最愛の妻が泣くから、何が何でもあと二日は生き抜けという。
皆に送られ城門をくぐった後のことは知ったことではないと。
こんな人物だっただろうか。そういえば、二人きりで話したことなど一度も無かった。

「私は、セイラ殿に求婚したぞ」

「そう」

答えに一瞬の逡巡もなかった。事実確認のためにだけ頷かれた。相手になどならないと言うのか。

こんな状況だというのに、年下相手に腹が立つ。いや、だからこそか。

「随分と余裕なんだな」

「余裕なんてない。セイのことは分からないことだらけだ」

ジルフォードの弱音めいた言葉におやと視線を上げる。

「セイが貴方を選んだとしても、私には止める術も無い」

何一つなしてこなかったツケが回ってきた。

見ないふり。聞かないふり。

傷つくのを恐れ、どうにか言い訳をつけて逃げていたのだ。

手を差し伸べられても、失った後のことを考えてしまい拒絶した。去り行くものを引き止める方法など、浮んでは来ない。

「あんたが王だったよかったのに」

「そうかもしれない」

この言葉には驚かされた。

ジルフォードという人物はおおよそ権力というものに興味がないと

思っていた。

「私が王ならば、ナジュール殿は楽にアリオスに攻め込むことができただろう。兄上を相手にするのは骨が折れる。残念だった」

「はっ！ そうだな。あの御仁の腹を探るのは難しい。物腰の柔らかい人間に見えてなかなかの強情だ。確かに骨が折れそうだ」

ルルダーシエでは、まだ太刀打ちできないだろう。

まだ死ぬわけにはいかない。

香の効果が無くなったのか身体に力が戻ってくる。

「行こう。シルフォード殿。きっとセイラ殿も大きな道にいるはずだ。大きな道は3通りしかない」

暗い坑道を重たい身体を枷に歩くのは、なかなか重労働のはずなのだが、ナジュールの頭は霧が晴れたかのように冴えていた。

「私にも弟が一人いてね、これがまた中々手のかかる奴なんだよ。それだけならよいのだが、周りがどうも煩くてね」

「ルルド殿でしょう」

「知っていたのか」

「イレズミの模様が同じだったから、親類だとは思っていた」

ほんの一瞬の間によく覚えていたものだ。

見せた時は興味のあるそぶりもなかったのに。

「ただの後継者争いならいいのだが、どうもそれだけでは済みそうになくてね。……アリオスは、いやジルフォード殿はユザについて何かを知っているのか」

互いの距離を測る沈黙が続く。

ナジュールの声からは、先に手の内を見せるのは得策ではないと考えているのが感じ取れる。

折れたのはジルフォードの方だった。

「ササン暦224年、幾多の嘆きが染込む地に星落ちて、四つ国が誕生す。大陸の中央に生まれし国をエスタニアという。北の地に生まれし国をタハルという。東の地に生まれしはジキルドという。そして西の地、嘆きの地に生まれし国をユザという」

「年代記の一部が」

失われし、古の年代記。

幻の五王国時代。それを知るのは、ほんの一部の者たちだけだ。

「城の中で見つけたけれど、傷みが激しくて全てを読むことは出来なかった」

「ジルフォード殿は古代文字が読めるのか。タハルにもいくつか文字の刻まれた粘土板があるんだが、如何せん読めるものが少なくてな。こういったことはエスタニアが得意そうだが……わが国とエスタニアは友好とは程遠い」

だからこそ、欲したエスタニアとの繋がりが。

架け橋は亜麻色の髪をした少女。

幻想は突如現れた光源にかき消された。

第五章：さよならの代償 18

遠い昔の話をしよう。

どのくらい昔かって、そりゃあ遙か彼方の大昔さ。

じいさまのじいさまが生きてた頃かだつて？

もっと、もっとずーっと昔のことさ。

なんたつてタハルはまだ無かったのだからね。あのエスタニアもアリオスも。もちろんジキルドだつて存在しなかった。

そんな時代があつたのかつて？

あつたのさ。

ササン大陸がたった一人の王様を戴いて豊かで幸せな時がね。

彼は絶対王。

強く常に正しい王だった。

餓える民はどこにもおらず、貴族連中も今ほど愚かではなかったのさ。

幸せな時間はあつという間に過ぎる。

絶対王も人の子だ。身体は次第に老いていく。

自分が王位を退いた後のことを良く考えるようになった。

彼の子どもは4人、いいや5人いた。

息子が4人に娘が1人だ。

皆、それぞれに聡明だった。

さて、困った。

次の王を誰にしよう。

彼は考えた。

毎朝、毎晩考えた。

貴族に側近、民衆にも誰が相応しいか聞いてみたが、皆それぞれにすばらしいと語るので決まらない。

考えて考えても決まらない。

けれど、いいことを思いついた。

皆を王にすればいい。

ササン大陸は広大だ。

一人の手には余るだろう。

だから王様は大陸を4つに分けてそれぞれに与えることにしたのさ。

ん？

なぜ4つかつて？

子どもは5人いるのに？

そう。

これが問題だった。

末の子どもたちは、なんと双子だったのさ。

今はそんなこと無いけれど、絶対王の時代は双子は禁忌だった。

一つになるべきものが分かれたとね。

片方が善なる魂を持って生まれ片方が悪なる魂を持って生まれたと信じられていたんだ。

どちらがどちらなのか見極めなければいけない。

悪なる魂を持つものは善なるものは何一つもたないため処分しなくてはならないとまで考えられていた。

だがこの考えを古いと一蹴したものがいた。

エスタニアの初代王になるユステイニアスさ。

一つのが二つに分かれたのなら常に共にあればいいということとで、二人は常に共にいることで生きることが許されたのだよ。

だから国を与えられた時も、彼らは二人の王で国を治めることになった。

賢く新しい道に行くことを選んだユステイニアスは、大陸の中央を与えられエスタニアを作った。

思慮深く静けさを好んだリールウは常宵の森を与えられジキルドを作った。

闊達で自然を愛したギルは様々な動植物の溢れる北の地を与えられタハルを作った。

そして件の双子は

最も少なく荒れた土地を与えられユザを作ったのさ。

ユザなんて国は知らない？

そうだろうとも。

ユザは兄弟たちによって滅ぼされてしまったのだからね。

そして

双子の片割れが興した国がアリオスなのさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8358e/>

月神の祝祭～有明の使者～

2011年9月26日00時14分発行